

漂着モノログ 第三章 秋.....	146
九月の巻 .....	146
二人のカウンター.....	146
縁結び（前編）.....	156
縁結び（後編）.....	163
九月の巻 おまけ .....	171
先生を囲む夕べ.....	171
嗚呼青春、十八切符之旅.....	183
巡視船紀行.....	190
気まぐれ？パンケーキ.....	199
comeon/.....	208
名月あっての名案.....	211
十月の巻 .....	219
開会！.....	219
ショーの続きと終わり.....	229
そして正午を過ぎ.....	240
十月の巻（打上げ編）.....	249
課題曲 & 自由曲.....	249
十月の巻 おまけ .....	259
千秋一日.....	259
新しい私.....	269
グリーンマップはブルー.....	279
十一月の巻 .....	289
視野広がる時.....	289
原色または素顔.....	297
十一月の巻 おまけ.....	306
11.11.....	306
四者会談.....	311
Sweeten.....	315
スマイル.....	321

		<b>第3章 秋</b>	
<b>九月の巻</b>			
24. 二人のカウンター			
25. 縁結び（前編）（後編）			
		<b>十月の巻</b>	
<b>九月の巻 おまけ</b>		32. 開会！	
26. 先生を囲む夕べ		33. ショーの続きと終わり	
27. 嗚呼青春、十八切符之旅		34. そして正午を過ぎ	
28. 巡視船記行		35. 課題曲 & 自由曲	
29. 気まぐれ？パンケーキ			
30. comeon/		<b>十一月の巻</b>	
31. 名月あつての名案		39. 視野広がる時	
		40. 原色または素顔	
<b>十月の巻 おまけ</b>			
36. 千秋一日		<b>十一月の巻 おまけ</b>	
37. 新しい私		41. 11.11	
38. グリーンマップはブルー		42. 四者会談	
		43. Sweeten	
		44. スマイル	

## 九月の巻

### 二人のカウンター

誰かさんのようにクールとは言えないが、気候的には少しずつ、秋の涼やかさが同居し始めてきた。九月最初の日曜日は、暑さも和らぎ、穏やかな曇天。時々晴れ間がのぞく感じで、日焼けがどうのというのももう気にせず済みそうである。

八月下旬から、higata@のやりとりも活発になってきた。弥生、蒼葉の自己紹介メールに続き、文花からは掃部先生かもんの講座案内を兼ねた自己紹介が流れ、これでリスト参加者全員の紹介が完了。互いに面識がない組合せが一部に残るが、概ねの素性がわかれば、議論もしやすくなるというもの。八月最終週は専ら、十月最初の日曜日を一般参加可とするかどうかの件で、それは九月二日の様子を見てから決めてはどうか、手順や分担は講座の時に集まったメンバーで軽く話し合って、別途打合せ日を設けては、といった感じで話は進んでいた。

そんなこんなでご機嫌な管理人だが、今日は櫻との再会も控えているので、さらに快調。装備の準備・点検に一層精を出している。欠席の連絡があったのは、文花からだけだったので、higata@メンバーで集まるのは自身を含め、男性三人に女性四人。これに石島姉妹が加わり、八広の彼女、弥生の弟君も参加する見通しなので、総勢実に十一名となる。過去

最多という大げさに聞こえるが、あの干潟の大きさからすればこれは十分な人数である。軍手と袋の予備はその人数を見越したものだ。色違いの袋は、今回から導入予定の廃プラ専用回収袋だとか。バケツ、デジカメ、マイカップの三点は常備品だが、さらに、火バサミ（トング）、長靴を加えることにした。<sup>くだん</sup>件の四メートル級の増水によって、現場はとんでもないことになっているはずなので、いつも以上に入念である。南実からの潮汐情報により、今日の開始時間は前月と同じく十時半。余裕があったはずだが、気が付くとすでに十時を回っている。いつものマイバッグの他に、長靴などを詰めた大きめのレジ袋を持って、いざ出発！である。

人数が多くなりそうなことは櫻も承知していて、袋類を多めに、そして自由研究の日に使ったレジャーシートを今回は用意していた。それに、カウンタ、クリップボード（用紙付き）、マイカップ。同じく三点セットである。十時を回った時点で、橋を渡っているところ。蒼葉と違い、視力には自信がないので、干潟の惨状はよくわからない。

「大水の状況からして、きっとスゴイことになってんだろな。それにしても、この眼鏡、そろそろ替えないとダメかしら．．．」

橋を降り、左へ折れてしばらく進む。すると、どこかで見たノロノロの自転車が。夏休みの初めと終わりに、同じようなシーンに出くわすとは、である。デジャヴのような錯覚の中、櫻は速度を上げる。前カゴに長靴袋を載せ、肩からはおなじみのバッグ。ちょっと三枚目な感じだが、彼のこういうところが気に入っているらしい。

「千歳さん、Bon jour! Comment allez vous?」

妹君ならこのようにフランス語で来ても驚かないが、姉君もこう来るとはビックリである。返答に詰まった彼は、<sup>コマンタ</sup>Comment allez~のダジャレか「困ったねえ、プー」とか云って彼女を笑わせている。秋の風が心地良く二人を通り過ぎる。

「櫻さん、ここ久しぶりでしょ」

「そうなんです。でも、自転車で走る千さん見てたら、自由研究デーも同じだったなあって。つい昨日のことみたい」

集合時間まではまだあるので、自転車を押しながらゆっくり歩く。

「あ、今日は蒼葉来ませんから」

出だしから妹のことを聞かれるのも面映いので、姉は自分から切り出す。

「そう言えば．．．」

「ま、夏の疲れが出たんでしょうね。画家だけに繊細なところもあるんで、ね」

姉を想っての気苦労なんかもあったかも知れない。千歳はちょっと申し訳ない気分になる。櫻が浮かぬ顔をしているのがわかると、千歳は18きっぷの旅について話を振った。

「荒川上流方面だと、やっぱり八高線でしょうかね。ルート、考えてみます」彼の趣味は、かつてはDTM（Desktop Music）、今はwebいじりといったところだが、その他に「探訪」があった。ブラリ旅とでも云おうか、結構あちこち出没しているらしい。六月君ほどではないが、この線に乗ると何処そこへ行けるというのは概ね把握しているとのこと。どんな旅を思い描いているのやら、である。

干潟を見下ろす場所には、本日一番乗りが到着済み。業平君である。八月三本目のモ

ノログ記事を見て、増水時の状況について予習はしていたものの、現場が発するメッセージは予習や予想の域を超えていた。また随分ととんでもないことになったもんだ、と慨嘆する業平。だが、何故かニヤリとしている。「榎戸さん、ここ来たら納得するだろな」とな。秋は出会いの季節。また新たなメンバーが加わることになりそうだ。

河原桜からは夏を惜しむかのような蝉の声。グランド脇の草むらでは、すでに秋の虫達の声が鳴り渡る。夏と秋の共存、即ち季節の変わり目、なのである。草の匂いの変化はすぐにわかった。川の匂いはどうだろう。どことなくだるそうで、どことなく凜とした匂い。模糊もことしているが、漂ってくる感じはある。

「過ぎやすくなりましたねっ」

「クリーンアップ日和、かな」

そんな二人の前を行くは、弥生と六月の姉弟。弥生は増水とゴミ漂流をこの目で見て、「今日は外せない」と意気込んでいて、六月の方はすでに上出来の自由研究をさらにブラッシュアップすべく乗り込んできた。年は離れていても、きょうだいとは斯くあるもの。息はピッタリである。

十時半になった。現地には、今のところ五人。そこへ石島姉妹が自転車で乗り付けてきた。

「小梅さん、先週はありがとね」

「宿題だいたい終わってたし、塾の帰りに寄るだけだったから。充実の夏休み、でした」にこやかな妹に対し、姉の方は干潟近景を見て、暗い顔をしている。

「水位が下がったら、こうですかあ。親父、知ってんのかな」

「え、親父って？」

石島姉妹と石島監督の件は、櫻と弥生には話してあったが、業平は初耳。小梅から話を聞いて、「今日はその親父さん、いらっしゃらないの？」

「お姉ちゃんには頭上がらないんだ。クリーンアップする日は試合もやらないと思う」

「小梅はいいから！ その話はまた後で」

顔色を窺う妹。姉は、西の空を気にかけている。スカッと晴れば、機嫌も良くなるんだらうけど、心なしか憂色うれしが浮かぶ。

晴れ間が出にくくなっているのは、自称雨女さんが接近しているからか。八広と舞恵は今日は自転車で現地をめざしている。

「ちょっと、八クン速いよお」

「あ、对不起dui bu qi（すみません）！」

「中国関係は顔だけにして」

二人が停車した辺りの先では、一人のマダム、いやセレブ、ともかくいい具合に年齢を重ねた女性が早足で歩いていた。ある姉妹をスクーターで尾行していたが、堤防上の道路に入るところで見事に引っかけたしまい、徒歩を余儀なくされている。バイク&スクーターの乗入を遮るゲートの手前で、とにかく姉妹が干潟方向に向かうのを見届けてから、橋下の駐車場に廻り、再び堤防へ。自転車の二人はその女性を抜き去って行った。

「何かあの人、こっち向かってない？」

「さあ、河原に来るには場違いな感じがしなくもないけど。競歩じゃない？」

「まったくあの子たちったら、書き置きだけで伊勢に行っちゃうし。今日だって二人でコソコソと」 親の心配をよそに、快活な姉妹はすでに現地で軍手を着用中。水位がさらに下がるのを待ちわびているところである。

二台の自転車は坂を下り、グラウンドを<sup>かす</sup>掠めて行く。その先にはちょっとした人だかり。「とにかく行ってみましょ」 そのご衣装からは想像し難い、なかなかの健脚ぶりで、歩く歩く。

自転車カップルが合流した。銀行にいる時とは印象は異なるものの、櫻はしかと覚えていた。舞恵の方は、千歳と話す中ですでに感じていたので、それほど驚きはなかったが、

「キャー、やっぱり。奥宮さん、でしょ！」

と櫻が騒ぐものだから、つい乗せられてしまった。

「やっぱりいらしてたんですね。千住 櫻さん」

手を取り合って再会を喜んでいる。

「ここってある意味、出会い系？」 と業平が訝れば、

「あなたが宝木さん？ あの方は？」 と弥生のツッコミが始まる。

メーリングリストに入っていない石島姉妹は、カップル二人についての情報が全くない。何が起こったのかわからないご様子でキョトンとしている。こうなると千歳がフォローするしかない。

「えっと、この後、小松南実さんがいらっしゃる予定です。全員そろってから自己紹介、じゃ遅いか・・・」 そこへリーダーが割って入る。

「ごめんなさい。こちら、奥宮、えっと」

「舞恵です。名前書く紙、ないんスか？」

受付用紙とペンを差し出す。名簿筆頭は舞恵、続いて八広、弥生、六月と名前が埋まっていく。石島姉妹にペンが渡った時、「初音ちゃん、小梅ちゃん」 娘の名を呼ぶ声とともに、先の女性が現われた。

「あちゃー」

「な、何で？」

石島母である。「あ、あの皆さんは？」

「石島姉妹のお母様ですか？ お世話になってます。皆、ここをクリーンアップしている仲間です。私は、千住 櫻と申します」

「はあ、クリーンアップ？」

「ホラ、お母さん、ここ見てよ」

次女が指差す一帯は、ヨシとともに打ち寄せられた大きく太い名無し草の束と、それに絡まるように散らばるゴミの山、山。流木や木片もゴロゴロしているし、大きな袋類ものさばっている。三月の衝撃を彷彿とさせる漂着&散乱の極み。これに二人の娘は挑もうとしているのか。初音が記名し、小梅もいつもの達筆でスラスラ綴る。

「じゃ、お母様もせっかくなので、ここにご署名ください」

「あ、はい」

干潟の有様にも<sup>びっくり</sup>吃驚だったが、小梅の字が上手なのにも驚かされた。子のことを案外わかっていないのが親である。

「きょうさん？ それとも」 六月が首を突っ込んできた。

「『みやこ』って読むのよ」

「へえ、そんな読み方があったんだ」

駅名に強い六月でもこの読み方は意外だったようだ。「石島 京」の次に「千住 櫻」が来たところで、三十男二人分の欄がなくなってしまった。

「じゃ、『二枚目』にどうぞ。お二人さん」

「二枚目だってさ」

「業平君は自称三枚目だろ」

こうして、場の空気は何となく和み、母親もひとまず胸をなで下ろすのであった。

「ところで蒼葉ちゃんて、今日来ないんだっけ？」

和んでいたところ、弥生が不用意な一言を発する。「あ、いけない．．．」 後の祭りである。

「え、蒼葉さん、来るの？」

「今日はね、アトリエで作業するんだって、ごめんね」

さすがに夏バテという訳にも行かないから、もっともらしい説明になる。少年は「なあんだ」である。不用意は姉弟間で連鎖する。そんな六月の一喜一憂は、小梅お姉さんがしっかり見ていた。何か起きなきゃいいけれど。

(蛇足ながら、空気が読めても読めなくても、略せばK.Y.である。桑川弥生をそのままの順でイニシャル化すると、ズバリK.Y.になる。余計なお世話か。)

弥生がバツ悪そうにしていると、場の空気を変える人々がやって来た。これで総勢十二名になる。時刻は十時四十五分を回ったところ。惨状を前にしつつ、なかなかクリーンアップに着手できないご一团である。

「遅くなりました」

「すみません。案内してもらったので、彼女の到着遅らせちゃって」

仕立てのいいジーンズに、多ポケットベストを着用。レンズ交換式サングラスとやらを額に当てている。どことなく高級感を感じさせるこの人こそが、

「榎戸冬木さん、ですね」

「あ、『えのきど』じゃなくて、『えど』でいいんです」

どうやら業平の知り合いのようである。二人並ぶと、業平がちょっと高いくらい。つまり長身な人物である。スポーツ刈りという辺りがまたイケてる。左手薬指には新しめの指輪が光る。石島母を除くと、クリーンアップメンバーでは初となる「既婚者」である。(ちなみに掃部先生も既婚者のはずだが、お子さんはいらっしやらないようなことを言ってたし、ある時「今は、し(ひ)とり身」とかこぼしていたので、とりあえず違うということにしておこう。)



「本多さんとは、アフィリエイトがご縁で知り合いました、今日は自分の仕事を兼ねて下見というか、体験させてもらおうと思い．．．」

石島母に続くサプライズに加え、アフィリエイトという用語に面食らうことになる面々。六月を除く男性諸氏と、弥生、舞恵はある程度わかっているが、十代を含むその他の女性五人は、言葉は聞いたことがあるかな？程度。六月は受付名簿とペンを手に、南実と冬木のもとへ。

「ま、難しい話はあとにして、お名前どうぞ！」

少年はすっかり遅くなって、この通り。千歳の下には南実の名前が続き、締めは冬木。

「小松さんからだいたいの事情は聞きました。名前とお顔はこれで一致させればいいんですね」 冬木は名簿をしばらく眺めつつ、

「『漂着モノログ』の隅田さん、あと『さくらブログ』の櫻さん．．．」

アフィリエイトをやるだけのことはあって、なかなかのweb通である。まるで点呼をとられているようだったが、

「当クリーンアップの発起人、こちらが隅田さん。私は進行係の千住です。よろしくお願ひします」

櫻が気丈に応じた。だが、

「あのお、宝木さんて、イニシャルは？」

リーダーの挨拶もそっちのけで、勝手に話を進めている。この調子じゃ一向に作業に入れない。

「ああ、Y.T.ですよ。八月のモノログの投稿、読みましたよ」

筆力のある八広が書いた一編を転載した甲斐あってか、モノログのアクセスは確かに増えている。それはそれで結構なこと。だが、管理人（ここではブロガー）は千歳である。投稿者の方をまず持ち上げるといっても失礼な話である。

そんなお騒がせさんを招聘したのは業平である。立場上さすがにマズイと思ったが、

「榎戸さん、そういう話は終わってから、ってことで」

空気を変える、どころではなかった。巷に云うKYなヤツとは、こういう人間のことを指すようだ。千歳はカチンと来たまま、固まっている。

千歳と連動しているつもりはなかったが、南実の登場もあって、櫻も何となく強張った感じになっている。とても本調子とは言えない。「じゃ、皆さんそろったところで始めますか。と言っても、初めてのの方がいらっしゃるから．．．」 さすがのリーダーも手こずっている。実施手順とか注意書きとか．．． すぐに配れるものを用意するとか、大きく掲示したものがあってもいい。そんな必要性を認識する場面であった。

「見ての通り、先だっけの増水で大量の漂流・漂着があって、この有様です。今日はちよっと違う方法を試してみましょ。ね、櫻さん？」

櫻の機転が利けば、初めてでもそうでなくてもできる手法を思いつくと踏んだ千歳である。

「あ、あの横倒しになっている草をまず除けないと、ですよ。男性の皆さん、お願いします。で、引き揚げた後に残ったものを女性チームでとにかく袋に入れましょ。数えるのはこの草がないところで」 千歳が思い描いていたのと同じような方法論がちゃん

と出てきた。これぞ以心伝心である。いつもなら干潟上で仕分けたり、数えたりできるのだが、名無し草が跋扈している以上、干潟では困難。陸揚げ&陸上作業、いざトライアルである。干潟と陸を結ぶ通路は、冠水した割にはしっかり確保されていて、むしろ通りやすくなっていた。通行アクセシビリティとでも言おうか。これは作業要諦の一つである。

千歳が予備の軍手を配る間、櫻はレジャーシートを広げ、回収用の袋は女性がそれぞれ手にして行く。京は娘の安全を気にかけて、一緒に干潟に下りる覚悟だったが、思わぬ異臭に足が止まる。「ソウギョっていつか、ハクレンですね。腐乱しちゃって．．．」南実は平然としているが、他の女性メンバーはさすがに硬直している。今回は五十糎超の大物。白身が露出していて、ハエがたかっている。「文花さん、ご欠席で良かったあ」櫻は一大リスクを回避できたことの方が大きかったようで、ハエもハクレンも眼中になかった。調子が戻って来たところで、すかさず指示を飛ばす。「さて、通路を確保するにはこれ何とかしたいですね。魚馴れしているお二人さん、お願いします！」

六月の回でソウギョと対面した経験が買われ、千歳と業平が出動。八広は舞恵の前に出て、彼女をかばうようにしているが、ちょっと腰が引けている。その後ろでさらにビビっているのは、先刻まで威勢の良かった冬木である。現場を知ること、人は謙虚になっていく。これで少しは言うことを聞くようになるだろうか。

増水で流れ着いたらしい、長めの枝を一つずつ手に取る。二人で魚の頭と尾の方に枝を添え、「せーの」で押し出す。川に還して差し上げよう、ということなのだが、

「身が崩れそうだ」

「ここから先はR25指定かな」

舞恵は規制年齢ではなかったが、八広ともども背を向けている。八広以下、五人の男女は目を伏せる。冬木はビクビクやりながらも「これも取材のため」と薄目で様子を見守る。

かくして、六月の回の四人がこのハクレンの川送りに立ち会うこととなった。枝で静かに押し出したつもりだったが、思いがけず腐敗が進んでいて、身も骨もバラバラになってしまい、跡形なし。ただ、蛋白源として重宝されただけのことはあって、その肉の厚みは目を見張るものがあった。清に詳細報告をする手前、デジカメをスタンバイモードで片手に持っていた千歳は、川に還っていくその体躯を克明に収めることに成功した。

「では、皆さん合掌！」業平がかけたそのひと声は、憂愁を誘いつつも、心に静かに響くものだった。小梅に続き、初音も合掌。桑川姉弟は黙禱の構え。冬木は己が名の如く、ただ立ち尽くしている。京はレジャーシートに腰を下ろし、姉妹の厳肅かつ真摯な様子を見つめる。「あの子たちったら．．．」この干潟で何がなされ、なぜ子どもたちがここに来るのか、母は悟ったようである。

草と水の匂いが辺りを包む。いつになく肅々としたムードの中、現場慣れした(または、してきた)十人が動き始める。今回の実質的スタートは十一時過ぎ。文花が初めて当地に訪れた時のような、どこことなくフェミニンなファッションの石島母には作業をお願いするに忍びない。シート上でそのまま荷物番をお願いすることにした。冬木は一応、草運び班だが、軍手をしたまま、まだ呆然としている。「さ、榎戸さん、情報誌やるからには何事も体験ですぜ」業平が誘導し、何とか配置につく。千歳と八広のコンビは、早くも三束目を搬出中。着手してわかったことは、この名無し草の塊が幾層にも横たわっていて、た



っぶり水分を含んでいる、ということ。これじゃ干潟の浄化作用も何もあったものじゃない。とにかく早く除去して、干潟の呼吸を回復させると同時に、クリーンアップするためのフィールドを確保しなければいけない。こいつがのさばっている間は、ペットボトルなんかをポイポイやる訳にも行かないのである。櫻の作戦、今のところ順調である。だが、

「それにしても、長いし、重いし、土木作業みたいスね」

「ま、エクササイズだと思って、励むんですな」

「クリーンアップって、やっぱ体育会系？」

と来れば、強肩のあの人の出番。早速、硬球やテニスボールなんかをビュンビュン放り投げている。京は頭上を遥かに飛んでいくボールを見ながら、「まあ、あのお嬢さん、スゴいわねえ」と、感心中。受付名簿を見ながら、顔と名前を確かめ、「小松さんか。野球とかやるのかしら？」てな調子で、悠長にやっている。監督の妻らしいご発言だが、スカウト担当ではない。ただ、惚れ惚れしているだけのようだ。

そんな南実と距離を置いていた櫻だったが、男性陣が往復している隙を縫って、通路よりも上流側、その強肩女性がいる一角にやって来た。夏休み初日が初戦とすると、夏休み最終日にして決戦となる。ここで決着させよう、ということか。

「小松さん、higata@ではいろいろと．．．」

「私、お二人の反応を試してたんですけど、まあうまく交わされたというか、二人とも大人だなあって」

流し気味の球を櫻が放ったとすると、南実の投球は実に対照的。またしても直球で応えてきた。これはキャッチボールと云えるのかどうか。

「この間は言いそびれちゃったけど、千歳さんとはそういう仲です」

「そういう、か。わかってますよ。両想い、なんでしょ。私のは花火みたいなものだから、いいんです。暑さ過ぎれば何とやら、とも言うし」

「小松さん．．．」

キャッチボールの手が止まったような感じになった。「両想い」、それが確認できたのは、今思えば南実が焚き付けてくれたおかげ、なのではないか。

「さ、リーダー、あっちで若手女性陣がまごついてるみたいだから、行って差し上げたら？」

「あ、ハイ。行ってきます！」 南実の誠実さが身に染みてきた。川から吹く風もまた染み入るよう。干潟を洗う波は今日は至って穏やかである。

引き返す途中、六月とすれ違う。少年は、草束を運び出す途中でこぼれ落ちる小ゴミを集める特命を担当していた。袋に入れては、陸上の草のないところにパサパサ落とし、また搬出路に向かう、の繰り返し。「やるわね」「えへへ」 お互い眼鏡越したが、目元が笑っているのがわかる。

男衆四人はピッチが上がってきて、厄介そうな分については搬出を終えた感じ。今は草束を干す作業に勤しんでいる。乾いてほぐれてきたら、何かが出てきそう。その時は勿論、「あー、早く粒々やりたい」と呟いている人の登板となる。櫻が少し手分けして持って行ったものの、上流側のゴミは彼女が一手に片付けていたので、四十五リットル袋は満杯す

前。それでも肩が強いただけあって、重さは感じていない模様。体力あっての研究者、ということか。

一方の若手女性四人衆は、下流の方から徐々に干潟中央部に歩を進めていたものの、手持ちの袋が何となく重みを増して、ペースが落ちている。よくよく見ると、弁当やら空き缶を詰め合わせたレジ袋だったり、雑誌をヒモで括ったものだったり、重量級のものが入っている。これじゃ仕方ない。舞恵に至っては、スプレー缶のコレクション。名無し草とは別のエリアですでにこれだけの収穫である。草が除かれつつある干潟の中央(湾奥)の方も、埋没ゴミが露見してきて、見本市状態になっている。

「皆さん、一旦、陸揚げしましょう。袋から出して、また拾う、その往復ってことで。重そうなのは男性チームに任せますかね」

舞恵はハツとする。「なあんだ、千住さんてしっかり者じゃん」

**そんな**彼女の足元には、なぜか鉄筋らしき棒が数十糎程度、突き出て刺さっていたのだが、それには気付かず、代わりにある物体が目にとまる。その黒っぽさ故、目立たなかったが、潮が退いて存在が明るみに出た。

「なんじゃこりゃ？ あら、お財布！」

拾い上げてひっくり返したところ、小銭を入れる口に詰まっていた砂の塊が落ちてきて、スニーカーにべっちょり。前回と違って、サンダル履きじゃなくてまだよかった。が、不運は続く。うっかりその場に置いてしまった袋には、いい角度で鉄筋棒が刺さり、持ち上げたが最後、穴は開くは、スプレー缶が出てくるは、散々になってしまった。

一連の顛末を見ていた櫻は、「奥宮さんて意外とおっちょこちょい？」と苦笑しつつ、首を捻る。第一印象というのは当てにならない。印象のカウンター、いやクロスオーバーが生じた瞬間である。

彼氏に HELP を求めるまでもなく、石島姉妹がさっさとフォローしている。初音は吹き出すのをこらえながら問いかける。

「大丈夫すか？ 奥宮さん」

「いいのよ。財布に大金入ってたから」

姉妹が覗き込もうとすると、「んな訳、なーいじゃん」と来た。前回のような無愛想な顔をチラつかせるも、次の瞬間には高笑いである。天候に応じて機嫌が変わる初音もいい勝負だが、この突飛なお姉さんの表情の変化には敵わない。今回は幾分チャラチャラが減った感じのルフロンだが、初音としては十分、ファッションリーダー的存在に映る。そんな見た目のインパクトもさることながら、人を惹きつける何か、つまり、より内面的な部分に関心は移っていった。「空気の動きが天気になる。てことは、心の動きは表情、とか…」

十一時半になった。段取りが奏功したか、草の塊は完全に除かれ、重量ゴミも概ね引き揚げられた。干潟の表面、つまり砂地が現われてきたのは好かったが、まだまだ散乱ゴミが残る。草の下敷きになっていた、という点では埋没ゴミだが、もともとは増水時の漂流ゴミ。同じゴミでも表現が変わるものである。

春先と違い、紙皿や紙コップは見当たらなかったが、調味料のプラボトル、レトルトの袋、カップ味噌なんか転がっているのを見るにつけ、夏のバーベキュー大会の名残というのは容易に察しがつく。バーベキュー広場での実態調査を想起しつつ、一つ一つ丹

念に撮影していく千歳。それにしても、弁当屋のごはん容器はまだわかるが、ミニ納豆の容器が落ちているというのはちょっとなあ。バーベキューと言えば、高カロリー食が中心だろうから、少しは健康を配慮してのことなのか。それなら最初から食材を考えればいいのに．．． 撮影係の手は止まったまま。その傍らで進行係は、撮影を終えた分からテキパキと袋に放り込みながらも、特に少年と少女から目を離さないようにしている。拾っている最中に大波が来たら、と思うと気が気でない。進行も大事だが、それ以上に欠かせないのは、注意・監視である。

京を除く十一人、総がかりで漂流&散乱ゴミを拾い集めた結果、干潟表面はほぼ更地になった。残るは、業平と八広の手で前回築かれた防流堤よりも奥である。例の草に覆われていたのがよかったか、はたまたその堤に加勢するように板や丸太状の流木がうまい具合に横付けされたのがよかったか、草と木が絶妙に絡まり、より強固な堤になっている。(これを、自然による自然な工事、というかどうかは定かではない。) その強化された防流堤は、巧みにゴミをキャッチし、思惑通りの役目を果たしていた。だが、その役目の万全さが裏目となり、参加者の溜息を誘うこととなる。

「いやはや、まだまだあるねえ」 と業平が嘆き節を漏らせば、

「何かいい装置ないんですか。大口吸引機とか」 と弥生がいつものツッコミ。

「実機は得意だけど、資金がないことにはねえ」

世にはそうした吸引装置というか、吸引車なるものがあるが、何でもかんでも吸ってしまえ、というのも乱暴な話。今の業平が作るとしたら、生態や環境に配慮したタイプか。  
**ま、**期待せずに待つとしよう。

タイムキーパー役を思い出した櫻がここで合図する。

「今回はあの板というか壁というか、その奥は見送ることにしましょう。また増水することがあったら面目ないですが、とにかくブロックしてくれることを信じて、ということで」

時は十一時四十五分。いつもより押している感じはあるが、次に控えるは分類とカウントである。量が量だけに気が遠くなりそうだったが、何と六月君が気を利かせてくれていた。皆が往復している間、ここでコツコツと大まかな仕分けを済ませていたのである。あとは今持ち寄った各自の袋にあるものを再度分ければいい。

「やるじゃん」

「グッジョブって言ってよ」

小梅は少年をちょっと見直したようだ。娘二人を憂う必要がなくなったためか、いつしかうたた寝気味だった石島母は、皆がワイワイやり出したので、目が覚めた。

「あ、ママ。こっち来て見てみい」

長女に促されるまま、干潟が見下ろせる場所へ。

「まあ！」

ここからではゴミゴミした湾奥は見えないので、今はとりあえず見違えるような光景が広がる。ここだけ見る限りは正にプチビーチである。母の気が干潟に行っている間、娘たちは経験者らしく、要領よく飲料容器の分類を進める。冬木はプラスチック製と発泡スチ

レン製の別がつかないらしく、南実に教えを請いながら静々と作業している。分類が終わったところから、櫻と舞恵が手分けして計数を始める。櫻はおなじみのカウンタでカチカチやっているが、相方は目をパチパチ、である。さすがのルフロンも今回の目計算にはご苦労されているようで、そのパチパチは数えるための筈だが、お疲れの<sup>まばた</sup>瞬きも混ざっているようだ。

「奥宮さん、人差し指なしで数えられるの？」

「ええ、カウンター業務なんで」

「何だかなあ。それ言うなら、計算係の counter でしょ。あ、でも窓口にいて、会計もやってたら、ダブルカウンターか」

「counter @ counter ね」

こういうやりとりをカウンターの応酬と言うらしい？

### 縁結び（前編）

仕事でもカウンター係のお二人さんのまとめによると、ワースト1：プラスチックの袋・破片／八十二、ワースト2：食品の包装・容器類／八十、ワースト3：フタ・キャップ／六十九、ワースト4：発泡スチロール破片／四十二、ワースト5：ペットボトル／三十一、とのこと。他には、雑貨、履物、木片、配線被覆（ホース）、紙製容器、ピン、缶、硬質のプラスチック容器や破片などなど。ワースト5 圏外ながら数量が多い品目が続出。大小様々な袋類もかさばる要因だった。ロックアイスの袋、お米の袋、園芸用肥料の袋... ゴミ袋として再利用してもよさそうである。

データ送信は、弥生が一手に担当する。テンプレートをバージョンアップしたとかで、その試行も兼ねて、というのがポイントの一。データカード既定以外の頻出品目（ホース、木片など）を予め候補登録しておいたというのがポイントの二。そして、今回からはこの結果が higata@ に流れることになっている。ポイントその三である。

冬木は業平が操作するのを横から見ている。ゴミを捨てるだけでなく、それを調べて、しかもケータイで結果を共有し合う... 入力画面にも感嘆していたが、その一連の流れ、その意義に感服の度を深めたようだ。<sup>企業の社会的責任</sup> CSR レポートに出てくる社会貢献活動では、せいぜい「拾ってキレイにして」とどまり。いわゆる美化清掃レベルである。調査して、それを次に活かす、といった取り組みをしている企業はあったらどうか。少なくとも自分が担当している中ではなかった気がする。冬木は七月に所属が変わり、CSR 担当から情報誌担当に。仰せつかったのが荒川流域の「大人のための」フリーマガジンだとか。聞けば長くなりそうだが、その辺の経緯については追々本人から話が出るだろう。

前回は無念のバッテリー切れで試し損なった八広は、ここぞとばかりにデータ入力画面を試用中。開発者の弥生から直々の指導を仰げる、というのはせめてものお慰みである。そんな彼氏を見て彼女はご機嫌斜め？ いやいや、櫻とのおしゃべりに夢中でそれどころではないようだ。

南実もケータイ所持者だが、ここは本業が優先。名無し草の束が乾いて来たのを見届けるや、早速粒々の研究に着手する。もともと孤高なところがあるが、これをやっている時はその傾向が強くなる。<sup>みやこ</sup>京が傍で見学しているのも気付かない没頭ぶり。こぼれ落ちた粒

や欠片<sup>かけら</sup>を掬っては、千歳が持ってきた空のバケツに移す。水はあとで注ぐようだ。

「その緑色の細長いのは、人工芝？」

「ああ、京さん．．． ええ、劣化すると、この有様です。河川敷のスポーツ施設で使われているものが発生源としては大きいんでしょうけど、百元ショップで売ってるのがありますよね。あれがそのまま河原にポイ捨てされることもあって、そういうのも混ざってくるんだと思います。質がいいとは言えないからすぐとれちゃうんでしょうね」

かくして、小松先生の小講座が始まった。「この粒々はアイロンを当てると溶けるので、動物クッキーを作る時の型なんかを使えば．．．」 レジンペレットで工作ができることを知った京は、その色のついた粒々のいくつかを譲り受けることとなった。これぞリサイクル（再利用）、と言いたいところだが、レジンペレットはあくまで原料なので、工作で使われた時点で初めて製品化される。今回はリサイクルではない。妙な話である。

もう一人のケータイ所持者、初音嬢は携帯電話本来の機能を使っている。

「あ、店長、今日は午後一時からでいいですか？ はい。昼食．．． あ、ありがとうございます」 通話が終わると、今度は天気情報サイトにアクセス。自身の観天望気と照合したりしている。

その傍らには、集まったフタの銘柄チェック&選別に余念がない六月がいる。夏休み最後の日、想定通り、これでさらなる磨きがかかることになる。こうした熱心さは姉直伝のようにも見える。

この間、千歳と小梅は洗い場で仲良く(?)作業していた。

「隅田さん、櫻さんのどこが好き？」

思わず手が滑り、洗っていたペットボトルを落としてしまった。水が撥ねる。

「な、なんと?!」

「櫻さんには先週センターで聞いたんだ」

「何て言ってました？」

「だから、答えてくれれば教える」

「そうだねえ．．． 機転が利くところ、ひたむきなところ、それでいてお茶目で、あとは．．．」 ひと呼吸おいて、

「笑顔、かな」

「フーン、そうなんだあ」

当人は誰かさんみたいにクシャミーつ。

「あら、千住さん、大丈夫？ 花粉症だったりして」

「私、ウワサが絶えなくて、ホホホ」

三十男は、少女にいじられている。

「小梅さま、お約束の教えてよ」

「へへへ、ご本人からどうぞ！」

「クーッ！」

すでに正午近く。再資源化に供するペットボトル、食品トレイ、ビン、缶は定番品だが、今回は新たに「廃プラ」も洗ってみた。専用袋はこれで満杯である。小梅は収集品である

プラスチックバットとゴムボールもひと洗いして、持って行く。向こうからは、バケツを持った南実、フタを盛ったカップめん容器を抱えた六月がやって来る。避けていた訳ではないが、今日は南実と話をしていない千歳。何となくうしろめたかったが、すれ違いざま、南実がウインクするものだから、益々ドキリである。「見透かされた？」

少女はそんな千歳をからかう楽しさを知ってしまったようで、容赦ない。

「そうそう、櫻さんて眼鏡外すとスゴイ美人なんですよ。知ってました？」

「眼鏡美人だとは思ってたけど．．．」

「楽しみが増えましたね。エヘヘ」

中学二年生ともなると、これくらいのことは言っただけなのか、それとも姉がいると自ずとおませさんになるのか、**本人に尋ねたところで教えてはくれないだろうし．．．**

「初音さん、天気はこの後、どう？」

「パツとしないスね。でも、持ちそうです。ちなみに只今の気温は．．．」

千歳にはおなじみのデジタル温度計が出てきた。

「ありゃ、三十 ？」

折りよく陽射しも強くなってきた。これで**資源系**が乾くのも早まりそうだ。三十度というのを聞いて、グッタリしている三十男が若干名いるが、それはご愛嬌。ここらで再びタイムキーパーの出番である。

「では、乾かす必要がないゴミは不燃と可燃に分けて、袋詰めします。それが済んだら解散にしましょう」

千歳は袋詰めされる前に、スクープ系の続きを撮る。枕、<sup>すだれ</sup>簾、懐中電灯、ぬいぐるみなど、干潟に漂着している現場<sup>げんじょう</sup>を押さえたものが多かったが、この臨時集積所で新たに、洗剤とデッキブラシ、チリトリ、卓球ラケット、冷却マットを見つけた。スクープというよりも掘り出し物である。

業平は何を思ったか、廃プラの中から [ プラ ] の識別表示が付いている容器包装類をピックアップし出した。まだ乾ききっていなかったが、構わず別のレジ袋に入れている。「ちょっとね。実験用に頂戴します」 この手のプラ包装は、ケミカルリサイクルで油に戻せる訳だが、原料化（**油化**）される前にまだお役に立つなら、[ プラ ] としても本望だろう。彼の実験では、バーコード部分がカギになるが、変形してたり破れてたり、イレギュラーな方がスキヤナの試し甲斐があるとのこと。冬木は「おそれいりました」と一言。一同同感である。

前回は缶を叩いていたルフロンは、今回はペットボトルに着目。乾燥中の何本かを拾い、その辺に転がっていた細長い木片を手にとると、即興で叩き出した。缶と違って、大した音階は作れないものの、弾力のある乾いた音が鳴り響く。相変わらずリズム感はバッチリである。

「これで打楽器作っちゃおっか。ねえ？」

フタを洗って戻って来た六月は頷きながら、別のボトルどうしをぶつけ合って、ポンポンやっている。何とも長閑<sup>のどか</sup>なひとときである。

自由研究デーの時はそれほどでもなかったが、初音はお姉さん方に興味が沸いて来た。櫻、南実、弥生の三人については、興味も然りだが謝意の方が強いのかも知れない。だが、



この舞恵姉さんは、初対面ということもあるが、何とも摩訶不思議でとらえどころがない。言葉遣いが多少乱暴なところは、初音にも通じるところはある。だが、ノリがいい割には愛想が良くないってのは、どう考えればいいのか。

そんなこんなで、袋に詰め込む作業に従事しているのは、櫻を筆頭に、八広、冬木、小梅、途中から千歳、初音、そして「じゃ、わたくしも」千歳から軍手を受け取り、最後に京が加わった。南実はまだ洗い場において微細系の浮沈検証を続けている。京に渡すレジソプレットを選び分ける手間が加わっている分、時間がかかる。

「季節柄、花火とか出てくるかと思ったけど、見当たらなんだねえ」とは八広。

「花火ねえ．．．」南実のセリフを櫻は思い出している。

「八月は夜もずっと暑かったからさ、花火どころじゃなかったんよ」舞恵が返す。

「ところで、この草の束はどうするんですか？」冬木が口を挟む。

「このままでいいんじゃないでしょうか、ね？石島さん」千歳は、母と長女に振る。

「そうですね。一応、伝えておきます」母、いや妻が答える。

このまま乾燥させて軽くなれば、処分しやすくはなるだろうが、今回の量からして、そこまでは手が回らない。再資源化分を除き、詰め込んだ袋の数は、可燃が一に対し、不燃は四つ。廃プラを別枠にした上、防流堤より奥のゴミを見送ってもこの数である。人数が多いと収集数も比例して増える、ということか。

こういう状況になった時、いつものなら櫻が「ジャン」とかやりそうだが、今日は特に「いいもの」の用意はなかったようだ。「八八、どうしたものか．．．」しかし、いいものは誰が持って来るかわからないものである。おもむろにセミショルダーをガサゴソやっていた初音は、

「このシールを貼るのだ！」

取り出したのは、河川事務所お墨付きのステッカーである。これには母、妹も含め、「おお！」である。

「この間の増水の時、建設省の古看板が流れ着いたんだけど、回収できなくてそのままお流れになっちゃったんすよ。そのお詫びも兼ねて、って」

これを貼って所定の場所に出しておけば、「いつでもゴミ拾い」対象物と見なされ、河川事務所で引き取ってくれるんだそう。これはありがたい！

本来ならここで解散、となるのだが、発起人さんが「待った」をかけた。撮影しながら干潟をウロウロしている時に気になっていたことがあって、それを確認するんだとか。持って来ていた長靴に履き換え、洗い上げたペットボトル一つ手に、干潟へ下りて行く。よく見ると、川面には油膜のようなものが襞状に広がり、照り返している。ハクレンから出た脂という訳ではなさそう。とにかくこれが何かを検証するため、サンプル採水しようとの試みである。だが、長靴を履き慣れていない千歳は、着水したところでバランスを崩しかけ、「おとっと」周囲をあわてさせる。干潟には、姉妹、櫻、そして南実もいつしか下りていたが、このヒヤリを見て、業平と八広が駆け寄る。

「隅田さん、まず水になじませてから」南実のアドバイスにより、掬った水を振り混ぜ「同化」させる。「天然性の油分だとは思いますが．．．」無事採水し、南実にペ

ットボトルを渡そうとした時、不意に波が襲ってきた。今度は近くにいた姉妹が「おっと」となり、上から見ていた母は「気を付けてえ」と叫ぶ。水の事故というのはいつどんな形で起こるかわからない。だが、そんな母の心配を他所に、姉妹は打ち寄せる波を見てはしゃいでいる。

「ママは心配性、いや過保護なのよ」

親の想い、子知らず、である。

波が収まり、水位もぐっと下がってきた。干潟の全貌がこれで明らかになる。「待った」のおかげである。掃部先生の予想通り、大水による土砂の堆積が少なからずあったようで、幾分肥沃になった気がする。川も、そして干潟も、正にこの時を生きているのである。生きた教材は、自らの生き様を雄弁に語りかける。

土木作業担当の二人は、思うところあって、防流堤の更なる強化に乗り出した。これがどんな働きを示すのか、来月の一大クリーンアップでの見どころがまた増えた。

各自ケータイで撮ったり、デジカメで記念撮影をしたり、今の干潟はこの上ない人気スポットである。集合時間からすでに二時間超が経過。振り返りつつも一行は、ようやく干潟を後にする。

ボラかスズキか、魚が跳ねる音が聞こえる。歓送の挨拶代わりらしい。

ゴミ袋は手分けして、自転車に積んだり、手に持ったりしながら、十二人で大挙して移動開始。グランドの詰所脇には、不燃の四つを預けた。スーパー行きも一旦ここに保管。可燃ゴミはいつものように千歳が引き取ることにし、廃プラは隣市に運ばれる。

今日はなかなか散会とならない。石島姉妹、六月、櫻の四人は、拾ったボールとバットで投打に興じる。業平と弥生はボケとツッコミのような会話の最中。当人達は真面目に議論しているつもりだろうけど、傍から聞いていると漫才である。高級感という点で共通する京と冬木は、思いがけない接点が判明し、会話が弾んでいる。

「...その本部のCSRを担当してたんで、あそこの複合型店舗にも行ったことはあります」

「あら、以前わたくし、衣料品部門で働いてましたのよ」

八広と舞恵は聞き耳を立てている。

「小松さん、八月七日ってお誕生日だったんですって？」

ようやく南実と話をする千歳であった。

「発信源は文花さんでしょ。たく、お節介なんだから」

「おめでとうございます、と言いたいところですが、遅いですよね？」

「当日ちゃんとお祝いしてもらいましたから。その節はありがとうございました」  
やけに淡々としているのがかえって気になる。南実は続けて、

「八月は暑かったから、どうかしてたんですよ。ま、一時的な熱中症、てことで」

何とも意味深である。八月七日とはまた違う動揺を感じる千歳。策士南実は、動揺ならぬ「陽動作戦」に打って出た。櫻も千歳も術中に飲りかけているのだが、そうとは気付いていない。

初音が店入りする時間が近づいてきた。櫻は今度こそ締めに入る。

「皆さん、今日はおつかれ様でした。今回の集計結果はメーリングリストに流れますが、これまでの成果をまとめたものも別途クイズ形式でお流しします。どうぞお楽しみに」

冬木は業平に小声で尋ねる。「メーリングリストって？」 対する返事、「まあ、それも後ほど」。人の話は最後まで聞くものです。

「あと、これも higata@でご案内済みですが、明後日は夜、センターにいらしてくださいね。掃部先生との座談会がメインですが、千歳さんがさっき掬った水も調べようと思いますんで」 一同礼、そして、異口同音に「ありがとうございました！」

「それじゃ、弥生ちゃん、また火曜日に」

センターが扱う情報のカギを握る、例のwebプログラム、いよいよ大詰めを迎えている。千歳にもできるだけ早く来てもらうことになっている。

「千さん、お手柔らかに、ね」

「そんな、僕は誰かさんみたいに鋭くないですから。それはこっちのセリフ」

弥生、六月、小梅とその母。四人おそろいで、そろそろと会場を離れる。そこを初音の  
リバーサイドバイク  
R S B が、いつもの調子でバタバタとすり抜けて行った。母はレジンペレットが入った小袋を片手にお手上げのポーズ。そのお隣では、

「六月君、蒼葉さんのこと好き？」

「え、おばさんて？ 八八（笑ってごまかす）」

「ヤレヤレ」 小梅もお手上げである。

アンテナは高いが、空気が読めない(?)弥生嬢がここで揺さぶりをかける。「そうだ、蒼葉ちゃんに電話してみよ」

聡明な少年は、空気を読んで我慢の子と化す。不用意な反応は辛うじて封印。姉君も意地悪なものである。

ほとぼりが冷めたか、若い二人はまた仲良く会話を始める。

「小学校、最後の夏休み、どうだった？」

「ここに来たおかげで、チョー充実してました」

「でも、そのフタどうすんの？」

「とにかく提出、あとは先生と相談... そっか、明日から学校かぁ」

「ひ、永代先生によろしくね」

永代と書いて「ひさよ」。今は六月の担任の堀之内先生のことである。口にはしなかったが、二人の想いは同じ。「いつか先生をこの干潟に連れて来よう」 何を企んでいるのやら？

残った**オーバー** 25メンバー七人は名刺交換を始めていた。名前と顔はだいたいわかったが、どこの何者かが冬木はよくわかっていなかったのも、名刺というのは好都合だった。八広はフリーターの要素が強いものの、一応自作名刺は持っている。仕事を得やすくするための便法である。舞恵は、行員としての名刺ではなく、八広に作ってもらったという別

の顔の名刺を配っている。「え、『自称 アーティスト』って、なーに？」 櫻は不思議がっているが、「ま、それはまた後でね」 やはり摩訶不思議な女性である。

出だしよりはおとなしくなったものの、冬木にはどこか曲者な印象がつかまとう。南実と名刺を交換したところで、一方的に話し込んでいる。口説くという聞こえが悪いが、どうも彼女に気があるような口ぶりである。既婚者というのはハッキリしているので、南実も真に受けてはいないようだが、これで独身だったら考え物。当地は出会い系的な側面は確かにあるが、環境貢献の場というのが第一義であって、出会いを求めて来る場ではない。冬木の動機がいま一つ掴めない。本当に仕事絡みなのか。

メーリングリストの話題になったところをうまく遮り、南実は千歳にひと声。さすがに辟易してきたようだ。

「隅田さん、榎戸さんもメーリスに入れてもらえるのかしら？」

「そうですねえ。一応ルールがあって、それに同意していただければ可能ですけど。榎戸さんて、仕事上、荒川とどんなご関係があるんですって？」

先の非礼に対する仕返しをするつもりはないが、リスクを未然に防ぐのが管理人の役目だとすると、ある程度の敷居は設けなければいけない。名刺を交換し、彼が流域情報誌の発刊にあたって情報収集していることを改めて確認する。中堅広告代理店、社会的起業部門のご所属とな。

「地域というか足元から社会を見つめ直す、そんなビジネスモデルを探るのが仕事ですが、もうちょっと緩やかな感じで情報誌が作れないかって。今日はその手応えを得ました」

御礼の言葉までは出なかったが、頭は下げてくれたので、まあここは信じるに足るか、と千歳は思う。

「了解しました。ちょっとお時間いただくかも知れませんが、いずれ流れると思います。アドレスは名刺に記載してあるのでもいいですよ」

「あ、よろしくお願いします」

「業平とのアフィリエイトのお話とか、情報誌の詳細とか、お差し支えなければメーリングリスト宛に送ってくださいね」

千歳もかつては一介の企業人だけだけに、こういう時の会話はそれなりにビジネスライクだったりする。そうとは知らない冬木が恐縮するのも無理はない。南実はひと息つきながら独り言。「隅田さん、やっぱり似てる」 誰に？ 何が？ またしても意味深発言である。

この七人のうち、断煙中の業平をカウントから外すとすると、喫煙者は今二人。人数比的にはそんなところだろうか。一人はルフロン。もう一人が新参の冬木である。どちらともなく一服し始める。吸わない四人はちょっとギョツとするが、ここは干潟ではなく詰所の脇。ご丁寧に吸殻入れが置かれてあるんだから、仕方なからう。だが、リーダーは何となく牽制球を放る。

「奥宮さんて吸う人だったんだ」

「ええ、吸う人が多い職場だから、自分で免疫作んなきゃいけないって、その．．．」  
ちょっと気まずそうだったが、ベースは無愛想なまま。

「そっか。大変なのねえ。ま、せめて干潟にいる時は呼吸器をリフレッシュしてあげてね」

冬木はちょっとギクっとなっている。眼鏡の女性に対する恐怖症、という訳ではないだろうけど、櫻は手強い、という印象を持っているようである。これで櫻が眼鏡を外していたら、どういうアクションを起こしていただろう。千歳はドギマギするやら、ホッとするやら．．． 予防という意味では、クリーンアップデーにおいても、八広と舞恵のように親密さをアピールした方がいいのだろうか。悩めるアラウンドサーティーなのであった。

午後一時をとくに過ぎ、各々空腹感から、ようやく九月の回の終了を悟るメンバーである。男女七人何とやらと云うが、この手の人物の組み合わせは、ついつい時の経つのを忘れさせるようだ。

「では、皆さん、今回は十月七日ですね。集合時間は．．．」

「九時がベストでしょうけど、十時で大丈夫」 南実がフォローする。

「ありがとう、小松さん。そういうことで！ あ、あと、明後日も」

櫻と南実のこのやりとりを見て、千歳が胸をなで下ろしたのは言うまでもない。

南実は、面倒なことになる前にと、そそくさと電動自転車で退散。見事に交わされた冬木は、「せっかくなんで水辺を散歩しながら商業施設まで行って帰ります」と言い残し、トボトボと下流側へ。三十代半ばならではの哀感が漂う、そんな後姿である。だが、頭の中はフリーマガジンのことはいっぱい。九月号（準備号）は先月中に出ているが、次の十月号は現在編集集中。何かを載せるには、ギリギリだがまだ間に合う。今回のクリーンアップの報告は勿論載せるつもりだが、次回予告も出せるのではないか．．．

いつもならここでまた一服と行くところだが、多ポケッツの一つに手が伸びたところで止まった。「リフレッシュ、か」

カフェめし組は、業平、千歳、櫻、舞恵、八広の五人。全員自転車なので、すぐにでも着きそうだが、千歳が先導なのでそうは行かない。八広がしびれを切らして先を急ごうとする。二十代半ばの後姿に哀感はなく、ただせっかちな感じ。櫻はそれを見て、ビビッと来た。

「あ、思い出したあ！」

その声に反応した訳ではないが、千歳はブレーキをかけ、

「じゃ、これ置いてから行くんで。櫻さんの分も預かりますね」

「ダメよ。袋片手じゃ危ないわ。私も行く！」

行き方がわかっていないのに八広は突っ走っていて、今頃急ブレーキ。戻ろうとしたら、業平が先を示す。千歳と櫻は堤防から下りて行った。

「あの二人は後で来っから。橋に出たら左折ね」

R S Bが先導車となってからは、ピッチが上がる。前に行きたい舞恵なのだが、ティアードのロングスカートでは思うようにスピードが出せない。「たく、二人とも速いよお！」無愛想なのは変わらないが、ちょっと愉しそうである。

## 縁結び（後編）

初音は少々待ちくたびれた様子で、曇り顔のまま。雨女さんが来た割には、好天に恵ま

れたこの日、今のお天気からしてもご機嫌であってほしいものだが、乙女心と秋の空云々と云うように、そうもいかないようである。

「せっかく熱々のパンケーキ出そうと思ったのになぁ」

辛うじて湯気立ち上るその一品をレンジに運ぼうとした時、先着のお三方が現われた。

「初音ちゃん、ここで働いてたんだぁ」

「奥宮さん！」

店員はすっかり上機嫌に。表情を一変させる術をこうして会得していく十七歳なのであった。

注文品が出てくるまでの間のつなぎとして、三人は試食品（お通しと言ってもいい）のパンケーキを頬張っている。そこへ千と櫻のカップルが到着。シロップとクリームの甘い香りが櫻を誘う。

「あー、パンケーキ食べてる。ズルイ！」

「千住さんも隅田さんも、ご試食済み、ですよね」

「そんなぁ。あっ、奥宮さん、さ、最後の一枚、キープしといて」

「あら、隅田さんの分はいいの？」

「ちゃんと分けますよーだ」

初音は可笑しくてたまらない。ちゃんと二人の分はとっておいてあるのだ。只今、レンジで加熱中。電子音が鳴ると、

「そうはさせませんよ。ハイ！」

「初音さん、たら」

日曜日の昼下がりに。やや遅めのランチをとりながら、五人のトークショーが始まる。司会進行役はいないが、それぞれが分相応に出たり引っ込んだりしているので、円滑である。

「それにしても今日のはまた凄まじかったスね」

「バーベキュー系が目立ったのは想定内だけど、流木とか農業関係の袋類とか、上流側から流れ着いたらしいのがまた多かったからね」

「ま、この間のモノログに出てた通り、ふだんは流れ出さないようなのが増水で運ばれてきたってのが証明された訳だ」

「でも、履物や生活雑貨って、そんなに棄てられたりするもの？ 前も拾ったけど歯ブラシとか試供品のヒゲソリとか、あと枕？ バーベキュー関係だけとは思えない」

「いわゆるホームレスのお宅から、とか？ あ、<sup>すみか</sup>住処があるからホームレスじゃないか」  
トボけた調子ではあったが、この舞恵のホームレス説は、実は的を射たものだった。干潟付近にはそういうお宅が見当たらないだけで、対岸の橋の下とか、バーベキュー公園のもっと上流側とか、発生源リサーチをしていないスポットはまだあるのだ。スローフードをいただいている割には、話題がシリアスな感じがしなくもない。だが、環境に対する関心層であるが故に成り立つのがスローである。別にあの食品が健康にいいとか、子どもにはこの製品が無害とか、そういう話ばかりがスローな訳ではない。多様でいいのである。

「で、今回のモルポ書くかい？」

「え、いいんすか？」



「先に画像アップしとくから、それにコメント入れてもらうってのもよければ。ま、コラボってヤツだね」

「今日ので意を強くしたことがあるんですよ。それを書かせてもらえるなら」

アイス烏龍茶を啜<sup>すす</sup>る八広。千歳と櫻はいつものカップにアイスコーヒー。カップを置くと、二人そろって、「それって？」

「ゴミ箱ってのは言い得て妙だけど、今回の廃プラ然り、資源に戻せる可能性がある限り、ゴミとは言い難い。ゴミだって思うからつい捨てちゃったり、いい加減に扱うんだと思うんすよ。言葉を変えることで、意識を変えることもできるんじゃないかなって。あ、これ六月の講座で先生も言ってましたね」

「成る程ね。自分でもどこかで意識してたのか、モノログはあくまで『物』だし、蒼葉さんの絵の時も『漂着静物』って表現にしてる。ゴミってのは前面には出さないようにしてきた気がする。でも、小松さんに言わせるとやっぱり『川ゴミ』『海ゴミ』。被害が甚大なところはそうも言ってもらえない、ってことらしい」

「言い方はともかく、社会の縮図ってことは確かよね。ゴミから世相が見えるって言うか」

「あ、それ同感！ 八月の回は八クンにただついて来ただけだったけど、何が落ちてるか興味が出てきて、今回は私、ちゃんと早起きしたんです」

今はツンデレ姉さんではない。銀行窓口にいる時のようなハキハキした感じ。初音は聞くともなしに耳を傾けている。

「増水はまた別格として、日常的にこういうゴミが散乱したり漂流したりするってのは、そもそも何が原因なんだろうね？」

ホットコーヒーを手に業平が呟く。ルポで慣らす八広は、自分が書きたいことが明瞭な分、即答が出る。

「大げさかも知れないですけど、今の社会構造って『競争』と『消費』で成り立ってると思うんですよ。不毛な過当競争が激化して、消費を煽らないとやっていけなくなった。昔からそうだったのかも知れないですけど、近年は特にその傾向が露骨になってきたんじゃないかって。消費する側も、消費行為を通して、欲求を満たすのが条件反射のようになってしまった。でもそんなじゃ充足感が得られないから『もっと、もっと』ってなる。悪循環スよね」

「つまり、消費する行為そのもの＝目的、になるから、物が大事にされない、ってこと？」

「あとは、使い捨てを助長するような安易なモノがあふれるってのも一因でしょうね」

当店でドリンクの容器は、持ち帰り客用のものと兼ねて、厚手の紙製になっている。千歳のように使い回し可能なマイカップも販売しているが、残念ながら利用客はそれほど多くはない。業平はその一次性の容器を眺めている。

「競争競争で消費者に受け容れやすい、いや楽に扱えるモノを出し続けるのが既定路線になった。安易なモノが増えたのはそのせいってことか。消費者にも問題あるね。オレもマイカップ派で行くかな」

舞恵は、ワンプレートランチに付くスープがあったので、ドリンクは注文していなかったが、これを聞いて初音のもとへ。

「初音嬢、このカップくださいな」

「ありがとうございます。今日は何になさいますか？」

「あら、午前中と言葉遣いが違うじゃない。干潟友達でしょ」

「いえ、お客様ですから」

淡々と対応しているが、内心は嬉しくて仕方ない。これで舞恵姉さんも常連客、いやそれ以前に友達、そう言ってもらえたのが何よりの喜びだった。

「ここタバコ吸えないじゃん。気が退けてたんだけど、これ買ったからには元とるまで来ないとね」

カップは六百円。割引額は一回二十円。つまり三十回来れば元が取れる計算になる。だが、初回はワンドリンク（一杯二百円～）がサービスなので、

「アイ스티ー、ストレートね」

これで差引四百円となり、二十回ご来店いただくことになる。回数はさておき、人をつなくサービスでもあることは間違いない。

「『イケイケ、ドンドン』て言うじゃん。あのノリって、今の団塊世代がオレたちぐらいの時の話だよ」

「社会の風潮ってあるからね。いろいろ大変だったと思うけど、上げ潮の時好き勝手ができたって点では大違いだよね」

ここで再び八広の講話が始まる。

「団塊の皆さんが作った構造ってのは、作り放しであとは知らない、みたいなおとこありますよね。インフラを整えたってのは確かに一大事だったけど、それをどう維持・再生するかってのはあまり考えてなかった。会社にしても、若い世代がちゃんと伸びるような仕掛けにはして来なかったんじゃないか。代わりに、自分たちの高給を維持して、安穩と退職時期が来るのを待てばいいようなシステムにはなってる。今、三十代前半ぐらいの男性社員は、その辺のツケを背負ってるんだと思います。それに続く世代も然り。隅田さん、本多さんも苦労はあったと思うけど、自分なんかも割を食ってるなあ、て感じるんすよ」

井にしろ、デニッシュにしろ、日曜日のカフェめしは程々の温度で提供されているのだが、こうもトーク中心だと、その温度あつての味わい、というのが楽しめなくなってしまう。女性二人はそこそこ食べ進んでいるのでいいとして、男性陣、特に八広については、最初からデリなりサラダなり、温度を問わないメニューの方がいいようだ。今日はパンケーキがあったからまだよかったようなものである。

シェフの気まぐれのようなオムレツ丼（オムライスではない）をつつきながら、ひと休み。櫻がここで問いかける。

「宝木さんの年代って、やっぱり就職難で定職に就けなかったってこと？」

彼の箸がふと止まる。

「それもありますけど、何かツケを負わされる中で働くのってどうかなって疑問が大きくて。いわゆるフリーターって、働く意思がどうのってよく云われますけど、競争を強いられたり、消費を煽ったりっていう、会社の姿勢についていけなくて回避してる可能性も大きいんすよ。不安定なのは正社員だって同じでしょ。それなら自分で都度、仕事を選べる方がまだいいんじゃないかな、と」

あわて者なところはあがあるが、これだけ自分の見識を語れる若手というのもそうそういな

いのではないか。そんな彼がフリーターという世の中である。ニートという時事用語は少々影を潜めた観はあるが、同じような理由が考えられなくもない。人それぞれの生き方というのがもっと尊重されていい筈なのである。

「ま、ハクンがこんな風に強弁でいられるのは、この奥宮さんがついてるからなんだけどね」

「いやあ、八八八」

ヒゲをこすりながら、テレ笑い一つ。たまに息抜きしないと、どこまでもヒートアップしそうなので、彼女がこうしてコントロールする訳である。いい組み合わせだ。

「そうよね。イケイケじゃなくて良くなったんだから、今度は一人ひとりのペースってのをベースにした社会であってほしいわね」

「非正社員を減らそうってのは、従来型発想の延長なんだろうね。当人が働き方の多様性を求めた結果だとしたら、それはそれで尊重しないと、社会全体がかえって苦しむことになる」

千歳にしても、今更どこかの正社員になろうとは思わない。だが、正社員としてしっかり働いている人もいる。

「舞恵の場合、お気楽な職場だから何とかなってるんだろな。でも金融ってこれまで好き放題やってたところがあるから、世間が見る目はキビシイっすよ。あ、それもツケかあ」

「とにかく、競争とか消費が好きな人は、その人達の間でやってほしいんスよね。そうじゃない人を巻き込んでほしくない。あのゴミだって、競争と消費の産物だとしたら、その手の当事者の中で完結してもらいたいって思います。いい意味での競争、持続可能な消費が行われる世界ではおそらくゴミは総じて資源として回るんじゃないかってね」

「持続可能もあるけど、選択可能な社会ってのも重要ね」

櫻がさりげなく話をまとめる。選択可能性、これは千歳が持論とするスローダウンにも通じるところがある。彼のノロノロはそれを具現化したものと言えなくもない、か。

業平はさっきから「ウーン」と唸っている。いつもの光景ではあるが、またちょっと違うことを考えているようだ。二杯目のコーヒーは深煎りだったようで、自ずと考え事も深くなる。

ルフロンはハクンの弁舌もお気に入りだが、コピーライティングのセンスから考えて、そればかりではなさそうだ。お互いのどこに惹かれたのか、そもそも二人の馴れ初めは何だったのか、そろそろ聞いてみたい気もする。千歳が干潟のことを伝えなかったのと同様、八広も舞恵のことは話していなかった。お互い様ではあるが、こらで教えてもらって悪いことはなからう。

「ところで、八広君。奥宮さんとはどこで知り合ったの？」

「あれ？ 言ってませんでしたっけ」

「名前は覚えてないけど、どこぞの環境NGOが主催する『社会を変えるお金の使い道講座』とかが春先にあって、そこで」

「ほら、隅田さんから指令受けて、取材して来たあれスよ」

「でも、聴講するだけの講座だったっしょ。ワークショップ形式とかならわかるけど、何でまた？」

「ああ、宝木氏ったら例のケータイ、マナーモードにしてなかったんですよ。パネルディスカッション中に着信音が鳴って、大あわて。でもその時の着信音がね、知る人ぞ知るのフレーズだったもんで」

「あのドラムソロの不思議な曲？」

「ルフロンがそれを知ってたてえのがまた奇遇というか。休憩時間に意気投合しちゃいまして。へへ」

「宝木さんを派遣したって意味じゃ、千歳さんが縁結び役ね」

ここぞ、というところで場を盛り上げる櫻。だが、この発言が思わぬ余波を起こす。縁結び役と言えば、そう、目の前にいる舞恵、そして、その隣の八広も該当するのである。

「ケータイが鳴らなかったら、というのはありますけど、確かにそうスね。でも、千住さんと隅田さんの方はどうなんですか？ ルフロンから聞いたけど、カードが取り持つご縁だったとか．．．」

「あ、そうなのよ。カード、エへへ」

「奥宮さんがちゃんと連絡してくれたから、ですよ」

「いえいえ、私のはあくまで仕事ですから。隅田さんが届け出てくれたのが大きいと思いますよ。川辺で拾ったってのを聞いた時は驚きましたが」

三月のあの日のことが懐かしく思い出される。名前は確認しなかったが、対応してくれたその女性行員さんは、最初は無愛想だった。第一印象というのは残るものである。今は小愛想な舞恵を前にして、「フロントにいれば、正にルフロンさん」とかシャレを思いついて、薄笑いする千歳であった。

「でも、千歳さん、私がなぜカードを落としちゃったかって覚えてます？」

「ええ、そりゃあもう。暴走自転車でしょ」

「ねえ、宝木さん、三月二十三日の金曜日の夕方って、自転車乗ってました？」

「確か隅田さんから頼まれた調べ物しに、センターに急いでたような．．．」

「やっぱりね！ 今日、後姿見て思い出したんだあ。彼ですよ。その暴走車！」

黙考していた業平もさすがにこれには面食らったようで、「え、なになに」と来た。

「つまり、八くんがそのタイミングで自転車を爆走させなかったら、カードを落とすこともなく、お二人が会うこともなかったってこと？」

「こっちとしては御礼を言うべきなのか、それとも謝ってもらうべきなのか、悩ましいわあ」

ドリンクのお代わりサービスが来た。面白そうな話なので輪に加わりたかった、というものもある。

「え？ 宝木さんが爆走って、何ですか？」

「暴走も何だけど、爆走ってのもなあ。危険人物みたいだ」

「店員さんはいいの。お仕事なんですよ？」

「奥宮さんの意地悪う。カップ持って来ても割引しませんよあ」

「でも、隅田さんの指令があったから、自分が動いた訳で。つまり、カードを拾得した人が発端てことじゃないスか？」

「何だかなあ。それじゃまるで仕組んだみたいだ」

「千さんのトリックに引っかかっちゃったんだ、私」

「櫻さんまでえ」

何とも不思議な縁結びなのであった。和気藹々のカップル二組の間で、ちょっと居心地が悪そうな独り身の業平君は、三杯目のコーヒーに手が伸びる。これだけ飲み足してくれれば、紙容器としても本望だろう、か。

「話戻るけどさ。特に団塊の皆さんは競争するのが当たり前だったから、それが体質的に染み付いちゃって、てのはないだろか？」

唸っていたのは、この件だったか。

「そうさね。事情というか、言い分はいろいろあるだろうね。ま、こっちが批判する以上に、ご年配世代も何かと『今の若者はどうこう』ってやる傾向があるから、話を聞く以前の問題のような気もする」

「お互いにまず話をすればいいってことかしら？」

「なかなかそうもいかないんだよね。年配の男性どうしてのも、その競争体質のせいがよくわからないけど、罵り合うばかりてのをよく聞くし」

ここで再び八広君が一席。

「NGO/NPOの世界でもそれは顕著スね。目的とかやりたいことは同じなのに、似たような団体があちこちにできて。切磋琢磨するとか、相互補完するとか、そのためかと思うとそうでもなかったり．．．張り合うのが目的化してるのかも知れない。だとしたら、もったいない気がします」

今度は千歳が一旦引き取る。

「ま、団塊世代ということなら、やはりその年代の方に話を聞くのが早道っしょ。親を見てればわかるようなところもあるけど、忌憚のない話ということでは、身内じゃない方が、ね」

明後日の座談会のゲストスピーカーにこの件でもお話を伺おう、というつもりらしい。激論になる予感もあるが、はてさてどうなることやら？

五人が店にやって来て、すでに一時間余り。トークショーはいつしか雑談会になっていた。

「Le Front はわかったわ。八 (ba) クン、て呼ぶのはどうして？」

「何かあ、風貌が中国人みたいでしょ。八チって呼ぶよりは中国語で ba って言った方が親しみがこもってていいじゃん、て」

「八って中国じゃ重用されるでしょ。向こうでも Mr.Ba で通せそうだから、いっかなくて」

止せばいいのに業平がウケ狙いに行く。

「八広に宝木か、略すと八宝じゃん。縁起いいねえ」

「業平君は、発泡スチロールを発砲させちゃう人だから、八宝菜を変換する時は気を付けないとね」

男性三人がしょーもない会話をしてる最中、舞恵は櫻に耳打ちする。

「あゝ見えても彼って詩人なんスよ。語らせてもあの調子だし、ルポも説得力あんだけど、詩というか散文というか、そっち系ですね。ある日ケータイメールで一節届いて、す

っかりクラって来ちゃって。私、ガサツに見られますけど、結構そういうのに弱かったりして．．．」 そうだったのか。

「何かロマンチックねえ。年上の女性を射止めちゃう程の文才があるってことは、作詞させるとまたスゴイのかしら」

「曲にもよると思いますけど、イイ線行くんじゃないスカ。詞が書けてタイコ叩けりゃ、残るは作曲。でも音感はあるみないみたいだから、ドラマーライター止まり．．． 何か変なの」

かくいうルフロンさんも打楽器がお得意。その一面はすでに現場で見せてもらっている。ドラムとパーカッションの組み合わせ。共通する趣味（特技？）があるというのはまたいいものである。

「そういや、今日のあのエドさんて、何で『届けたい．．．』が櫻さんのブログだって、わかったんだろ？」

「あら、ハクン気付かなかったの？ 一番下に小さくだけど sakura.s って入れてあるのよ。それを見たんじゃないの。でも、いきなりブログのこと言って来るのも何よねえ」

「いやぁ皆さん、榎戸さんの件では失礼しました。何しろ彼のブログに、うちのバナー貼ってもらったら、何か照会とか注文が増えてきてね。一応恩人みたいなのところがあるから、強く言えなくてさ」

「そういうことか。その場でその話されてたら、余計に鼻についたかもね。ま、メーリングリスト上でも同じかな」

千歳はまだカチンが収まっていなかったようだ。それでも、影響力あるブログの主ということにはわかったので、とにかく higata@に入ってもらって様子を見よう、と心を静めることにした。

「あ、隅田さん、そのメーリングリスト、舞恵も入りたい！」

「そうそう、八広君から連絡待ってたけど、来なかったもんだから、ついそのまま」

「え？ 送ったと思ったんすけど．．．」

「フィルターではじいちゃったか。それとも、入力ミス？」

あわてん坊のハクンは、タイトルを入れ忘れていたようだ。

「いわゆる、無題(No Subject)メールはブロックしちゃうんだよねえ」

「そいつぁ、失礼しやした」

「じゃ、改めて、あの名刺に書いてあるアドレスでお願いします」

という訳で、higata@には、ルフロン奥宮(lefrent@)さんとエド冬木(edy@)さんが新たに加わることとなった。

今日の初音は午後からモードなので、まだ店にいる。三時になり、ティータイムメニュー客がチラホラやって来て、ちょっといそがしそう。

「では、今日のモノログは合作ってことで行きますか？」

「アクセス数アップに貢献、スね」

「そだね。ちょっと小籠<sup>コシコシ</sup>だけど」

「んじゃ、初音嬢、またねっ！」

「あ、ども」



ケーキでも食べながらさらにゆっくり、というのもアリだったが、ウエイティング客を作ってしまったのは申し訳ない。弁えある五人は再び空の下へ。いつの間にかすっかり晴れ上がっている。

「千住さんて、もしかしてハレ女？」

「そういえば、四月の回からずっと雨に降られたことなかったような。先月は私お休みしちゃったから何だけど．．． そっか、終わってから土砂降りだったんだっけ」

「へへ、それはね、舞恵が雨女だからざんすよ。でも今日はハレ女に軍配ね」

「私、休めないじゃん」

「隅田さん、前回淋しそうだったから、やっぱ櫻さん来ないと」

「これ、ハチ！」

客の流れは小休止中。店員は五人が談笑しているのを眺めている。声は聞こえないが、楽しそう。

「友達って、同じ年代だけじゃないもんね」

青空と連動するように、にこやかに語る初音。お兄さん三人にお姉さん二人。彼女にとっては実に頼もしく、そして気の置けない人々である。

## 九月の巻 おまけ

### 先生を囲む夕べ

蝉時雨はまだ続く。幾分しのぎやすくなったとは言え、余熱残る九月の黄昏時である。夏休みが終わり、センターにも日常が戻り、ちょっとアンニュイな午後六時。

「あ、いらっしやいましたよ」

「よーし、今度こそ」

千歳が来ると接客係が不在、というのがずっと続いている。

「矢ノ倉さん、桑川さん、こんにちは。櫻さんはどうせ．．． あれ？」

カウンターを覗き込んでいた彼の背後に、小悪魔さんがやって来た。忍び寄る影．．．

「ワッ！」

「ナヌ？」

振り向くと、櫻が大笑いしている。

「櫻さん、あのねえ。僕が小心者なの知ってるっしょ？」

「へへ、三度目の正直ナノだ」

「チーフ、接客担当者がこれでいいんですか？」

千歳は苦笑いしつつも、責任者に注意を促す。

「ああ、千住さんは今日六時上がりだから、別にいいのよ。いいじゃない、モテモテで六時上がりとは言っても、ここからがまたひと仕事。櫻はボランティアな扱いで構わないと言う。「その方が気兼ねないしね。さ、始めるとしますか」

カウンターには、文花が座る。今は眼鏡をかけているので、どこかの公共施設の受付係のよう。結構お似合いだったりする。webプログラムの詰めは、いつもの円卓で行われる。ある程度準備しておいた弥生は早速ブラウザを開いて見せる。

「仮のIDとパスワードで、管理者メニューに入ります。メンテしたい団体は、一覧表

から選びます」

「団体名の一部を入れて検索、とかつてののではないんだね」

「あれって、手間がかかる割にはそれほど使われなかったりするじゃないですか。今回はパスです」

ピシャリとやられてしまった。櫻はだいたいの構成は頭に入っているので、今は流している。二人のやりとりを見ている方が楽しい。

「で、基礎情報のメンテ画面がこれ。千さんがビシッと整えてくれたから、比較的楽でした。一応、公開する・しない、というのを項目ごとに編集できるようになってます」

「おお。感動的 . . . 」

「これって、各団体でその都度更新してもらえるようになると、こっちは楽だけど、なかなかうまくいかないのよね」

「まあ、一つの方法としては、団体ごとの画面のURLをメールするか、画面コピーをそのままFAXするかして、定期的にメンテのお願いを配信する、ってのが考えられますね。直すところが特になければ返信無用でいいし、あればこっちが代わりに直せばいい。掲載中断ってところが出てきたら、それもその時まとめて対応すればいい訳で」

「なーるほど。でも時期的には？」

「市民団体の場合、異動時期とかあまり関係ないんだらうけど、目安としては、年度が終わった後、つまり四月に案内して、五月いっぱいなのが基本でしょうね。あとは、七月八月いっぱい、一月 二月いっぱい、とか。でも、これができた時点で一回案内出さないといけませんね」

基礎情報はこれでいいとして、課題はイベントやトピックスなど、頻度が高い情報をどこがどうメンテするか、である。

「櫻さんと相談して考えたのが、掲示板機能を応用した仕掛けです。IDとパスワードは特に設けず、誰でも好きなように書き込めるんですが、記入者指定のアドレスに確認メールが届くようにして、そのメール文中にある確認画面のURLを開いてもらうプロセスを付けました。この確認画面でOKを押した時に、初めてwebに反映される、てな具合です」

「ベリファイ方式って言ったっけ。ま、そのひと手間を加えることで、ジャンク情報とかを防ごうって訳だ。さすがだねえ。でも、確認し損なったりして、webに載る手前で宙に浮いちゃう情報って出てくるでしょ。それはどうなるの？」

「ここがちょっと手間取ったんですけど、サーバ上の時計で120時間以内にOKが出なかった場合は、自動消去するようにしました。イベント情報の場合は、終了年月日を読み込んで、日付が変わるところでやっぱり消去、になります」

「ま、サーバ容量まだあるから、多少はログを残してもいいけど。案外、過去情報を欲しがるとかもあると思うから」

「はあ、千さんもさすがだわ。櫻さんが惚れ込むのわかるわあ」

弥生を小突く櫻。業平と弥生のコンビも笑わしてくれるが、「櫻と弥生」ってのも大いに有り得る。コンビ名は春らしく、おめでたい感じに限る？

三人で歓談しながら、ひととおりの画面操作を繰り返す。この調子だと十月には堂々オープンできそうだ。と、階下から足音が響いてきた。環境課の課長さんの御成りである。

「これはこれは須崎さん、ようこそ」

チーフが招いていたらしい。webプログラムの件を見越して、この時間に来てもらったようだ。いつもながら手回しがいい。

「あ、千歳さん、初めてですよ。紹介します。かつての上司、須崎課長です」

円卓に現われたのは長身で細身、眼鏡が似合う紳士然としたお方である。指輪をしてないところを見ると独身だろうか。だが、年齢はそこそこ行ってそうである。

「三人娘から話は聞いてます。いろいろとお手伝いいただいているそうで。どうも初めまして」

「僕も櫻さんから地域振興課時代の話、聞きました。何でも恩人だとか」

名刺交換をするも、千歳がちょっと見上げる感じになる。

「しかし、三人娘とはまたうまいこと言いますね」

「いやあ、何だか名物になって来たみたいで。隠れファンもいたりして、ね」

「え、櫻さん、本当？」

「ま、一番人気は千住 櫻さんで、あとの二人はおまけ・・・」

今度は弥生が櫻を突付いている。愉快的な光景だが、千歳は笑ってもいられない。櫻の一番のファンは今ここにいる、とでも言いたげな素振り。**焦りすら見られる。**

「あ、課長、例のプログラム、できてきましたよ。プログラマーさん、お願いします」

「エ？ グラマーさんて？ 何ちゃってね」

弥生は黙っている限りはチャーミング、そして体型的にはグラマーの部類だったりする。課長の言う通りなのだが、この言動、セクハラコードに多少引っかかりそうである。結婚できないのはそのせいかな。

プログラマーだが、弥生は時としてインストラクターでもある。ケータイ画面操作時同様、流暢に説明を進めていた。が、**課長殿**が途中、

「これ実際に動かすとすると、サーバの契約関係とかどうすればいいかね」

と公務員らしい、ごもったもな質問を投げかけてきた。インストラクターとしては想定外。

「前いた機関では、どんな形態でも見積書と請求書だけとって済ませちゃってましたけど、役所だとそうは行きませんか？」 チーフがちょっと心配そうに答える。

「隅田さんの名刺見ると、個人事業みたいだけど、そういうのって出せますか？」

「ええ、どんな様式でも」

「矢ノ倉さん、いわゆる意思決定する会、そう理事会とかって、来月だよ」

「今、定款案作りながら、何となく人選を考えてるところですけど」

「了解。役所はあくまでオブザーバーってことで、原則、会の決定を尊重するから、変なツッコミを受ける前に、様式そろえて通しちゃう」

なかなか話のわかる課長である。櫻を救った、いやうまく抜擢しただけのことはある。それはそれでよしとするも、千歳には他にも懸案があった。

「情報サイトのURLに、何か指定はありますか？」

「詳しくはよくわかんないけど、商用サイトだって見方さえされなきゃいいと思うよ」

「.com じゃないから、平気ですね」

窓の外は、夕闇が拡がり始めていた。そろそろ座談会の時間である。会場をセッティングする必要は特にないのだが、今回はプロジェクトが必須アイテム。千歳が投影チェックをしていると、十九時前、お約束の人物が少女に連れられてやってきた。

「清先生、ご到着っ」

「おう、須崎氏。それに、ああ来てるね。隅田君」

それぞれ会釈で応える折り、少々遅れて、八広が駆け込んできた。彼にしては定刻キープの方である。

「あっ、宝木八広って言います。先生、ヨロシクです」

「や、やつしろ？ また言いにくい名前だな、そりゃ」

「師匠、それじゃ熊本県の八代ですよ」

「しょうがねえだろ。いや、今日はしがたねえ、だな」

毎度のことだが、掃部節は全開になるのが早い。

「では、センセ、何から始めます？」

今夜のテーマは、紙燈籠の検証、水位低下後干潟の考察、干潟水面に漂っていた油膜の実態把握、そして時間があればだが、世代間対話が予定されている。

「まずは、しがたの話だろな」

「じゃ、ここに映しますんで、ご覧ください」

「ホォー」

千歳は、予め用意しておいた画像をスライドショー形式で送れるようにセットしておいた。「櫻と弥生」には増水翌朝にここで一度見せているが、その漂流ゴミの画像を手始めに、一昨日の干潟の一部始終をつなぎ、ひとまとめにしたもの。選別はしたものの五十枚はある。某研究員ほどではないが、多少はプレゼン慣れしている千歳にとって、画像を送って話すだけ、というのは至って平易。だが、中学生にもわかるように、となると勝手に違うか。小梅は、父と姉から別々に話を聞いて、それなりに衝撃を受けていたが、聞くと見るとでは大違い。プレゼンの難易には関係なく、目を丸くしている。百聞は一見に、いや小梅としては、すでに百見は一実感に如かず、というのを心得ていたので、「やっば、何かあったら足運ばないと」と思いを新たにするのであった。

そんな現場主義と来れば、ズバリこの人、小松南実さんである。彼女の甲高い靴音が聞こえてきたが、それと重なるように、もう一人分の音が交わる。そのまま階段を上がってくるものと思いきや、その音は途中で止まってしまった。プロジェクトからは、増水後の水没干潟と一昨日の復活干潟を上下に並べた編集画像が映された状態。プレゼンは一時保留となる。

「あれ？ 確かこの二階だったはずだけど」

出入口のドアは半開き、センター内の照明は暗め、行く先を間違えたか、と南実が中段で立ち止まったところで、蒼葉が追いついてきた、というのが足音の経緯である。

「あ、どうぞ。座談会にいらしたんですね」

「ええ。あなたはここの方？」

「いえ、こちらの職員の妹です」

higata@で、名前は見ていたが、まさかこの見目麗しい女性があのだ...

「もしかして、千住さんの？」

「蒼葉と言います」

このお二人、これまでずっと入れ違いが続いていたが、ここへ来てやっところさのご対面である。

南実をあえて名乗らなかったが、中に入るや、それも虚しく、

「あっ、小松さん、いらっしやい。あら、蒼葉ちゃんも一緒？」

弥生が気付いて声をかける。一昨日に続き、またしても場の空気を乱すことになるとは。だが、本人に全く悪気はない。

「小松さん？ あなたが！」

姉の恋敵、覚悟！とやりそうな勢いだったが、南実は涼しい顔で、

「モノログの静物画、見ましたよ。今度またスケッチして見せてくださいな」

早々と懐柔策を打ち出す。蒼葉は思う。「こりゃ手強そう．．．」

「蒼葉さん、もう平気なの？」

「何が、ですか？」

「その、夏バ．．．」

姉はあわてて遮るも、妹は何の気後れもなく「私、この通り華奢なもんで。この間はちょっと眩暈がしましてね、アハハ」と軽口であしらう。眩暈と言え、誰かさんと同じだが、ちょっと意味合い、重みが違う。姉妹の眩暈、なんて洒落は通じないのである。南実「あの姉にして、この妹かぁ」と心の中で溜息をついていた。姉想いの妹、というのは最も手を焼きそうな存在である。

「さ、美人さんがそろったところで、続き続き」

干潟のピフォーアフターを見ながら、先生が話を継ぐ。

「いいかい、ここまで水嵩が増して、しかも濁流轟々と来たら、ただの崖地だったら崩れちゃうんだ。このヨシ群生が根を張ってたおかげで、この通りさ。地形を保つ仕組みは山林と一緒に訳よ」

「でも先生、六月君が引っこ抜いたら崩れちゃったよ」

弥生は少々恥ずかしげ。「小梅ちゃん、フォローになってないよぉ」 俯いたままである。

「あれはね、古いヨシだった、てのと、根元が弱ってたせいか、元々土がえぐれてて、崩れるのが目に見えてたんだな。でも、この下の写真見ると、上流から土が運ばれたか、元に戻ってんだろ。再生ってのはこういうのを言うんだろな」

続いては、漂着ゴミの見本市。これでもかと映し出される。随分と真面目に撮っていたものである。その撮影係がここで質問。

「そうだ清さん。この生活用品の類って、川に来た人が棄ててたって思えないんですけど、実際どうなんでしょ？」

「増水で、野宿さん家がやられて流れ出ちまったってのもあんだろね。幸い犠牲者が出るには至らなんだが、タイミングが悪かったりすると、ご遺体が打ち上がるってことだっ

であるんだ。おっと、口が滑っちゃった」

時すでに遅し。女性聴講者は全員、男性三氏も固まってしまった。

「お師匠さん、やっちまいましたね」

「ま、あそこは大丈夫さ。皆の善意であふれてっから」

とは言っても、大魚が打ち上がるのは既知の事実。文花シフトで、ハクレンの遺骸写真は外しておいたので、この後「キャー」とかならなくて済んだのがせめてもの救いである。

「ゴミを出させないのが先決なんでしょうけど、漂流する前に防ぐ手立てってのはどうなんですかね？」

千歳が何とか通常モードに持ち込む。

「看板とか設置しても、望み薄だし、某建設省みたいに警告看板を流しちまうこともあっからなあ。よその川では、お地蔵さんだか、注連縄しめなわ付けた丸石だかを置いて、天罰をほのめかすようなことやってるって聞くけど、根本的な解決策とは言いにくい。まあ、今みたいにコツコツ調べて、ゴミの元が特定できればその会社に話を持ちかけるってのが現実的だろな」

一昨日不参加だった蒼葉と文花、漂流漂着ゴミの現実を初めて見せ付けられた辰巳、この三人は固唾を呑んで、スクープ系のクローズアップ写真を見つめている。他の六人はおさらい中。

「パンダのぬいぐるみだ。でもクロクマみたい」 と小梅が反応すれば、

「あ、奥宮さんが拾った、いや落としたスプレー缶．．．」 弥生も辛口を発する。

観衆の生の声を活かすべく、千歳はナレーションなしで、淡々とスライドを送っている。このままゴミの紹介で終わってしまうと淀んだ空気になってしまうところだが、そこは隅田プレゼンター。「で、皆さんのお力で、ここまで復活した訳です。めでたしめでたし」

美観を取り戻した干潟が大写しに現われ、拍手が起こる。先生もこれには絶賛である。

「ところで、隅田君さ、川面が変な光り方してたよな。油でも浮いてたか？」

「さすが先生、実はこの続きがありまして。ただ、ここに映し出すのはちょっとどうかなって．．．」

「皆さんもう免疫できてるから大丈夫よ。ね？」

「じゃ、リーダーのお言葉に甘えて。行きます」

「あ、あの時の油膜．．．」 南実が声を上げる。

「で、これがその時に掬った水です」 千歳はペットボトルをかざして見せる。

「そうか、近くに動物の亡骸とかなかったかい」

「着いた時は大きな．．．」

「ハクレンが打ち上がってました」 再び南実の声。蒼葉はやや冷めた目で隣人を見る。

「あとは、あの草の束かもな。どっちにしても天然成分さ。火が点いたらお立会い！」

「あら、センセ。今、ちゃんと火って」

「火曜日の奇跡ってヤツさ。シシシ」 奇跡は一度だけ。ヒヒヒとはならない。

すっかり場がほぐれたところで、まずはその油脂成分のCODを調べてみることにした。五本一セットのパックテストを持ってきた文花がまず手本を示す。

「この後、燈籠も調べるから、ここでは二本ね」

ピンを抜き、チューブを折り曲げて空気を抜くと、ミニカップに注ぎ替えておいた油水



の中に手際よく突っ込む。野菜を扱う人だけに手先は器用と見た。吸い込み口に油分が詰まりそうだったが、水は何とかチューブに吸い込まれ、化学反応が始まった。

「ま、五分待てば、わかるでしょう。これと比べてみてね」

標準色見本とやらが出てきた。これで白衣でも着用していれば、正しく研究員である。櫻はそんなチーフがちょっと眩しかった。

待ってる間にもう一本、ということになり、小梅助手がトライする。

「あ、石島さん、逆流させないようにね」

「ウヒョ、結構力要りますネ」

座談会のはずが、急遽水質調査大会になってしまった。主任と助手に注目が集まる。似たような関係で師匠と弟子というのがあるが、その清と辰巳については、傍観しながら雑談中。環境課に移ったからにはちゃんと見ておいた方が良さそうだが。

「あくまで参考値なんだけど、この紫色付近だから、四から五 mg/l ってところかしら。そこそこ汚れてるわね」

「何の油かってのはわかんないんスね？」 ルフロンがいないと調子が上がらないのか、物静かな八広だったが、ようやく口を開いた。

「ま、匂いとか、あとは味覚？ 何ちゃって」

「あーあ、また始まったワ。八さん、チーフの言うこと信じちゃダメよ」

「櫻さんはいいから。隅田さんと燈籠の準備！」

「二人ともふだんそんなノリでしたっけ？」

眼鏡の女性どうしがやり合ってる、てのが八広にはまた可笑しかったらしい。小梅はもっと掛け合いが続くものと思っていたのでちょっと拍子抜け。兎も角、辰巳が「名物三人娘」と称したくなるのがよくわかるくだりである。これに弥生が加わるとどうなるか、その答えは自明？（これ即ち、トリオ漫才?!）

スチロール箱ともども、紙燈籠が運ばれてきた。発見から一カ月が経ち、程よくくたびれた感じになっている。何とか原型をとどめているのは、日の当たる窓辺に置いといてもらったおかげ。

「そうそう、これだよこれ。俺、捜してたんだ」

まるでレアな記念切符をゲットした時の某少年(?)のように色めき立っている。

「まあ、調べるまでもないかも知れないけど、一応ね」

文花は、本体から分離してしまった一片をピンセットで取り出し、大きめの食品トレイに移すと、水道水を足し、攪拌してみせた。さながら理科の実験のようである。先の要領で、今度は弥生と八広が挑戦。だが、

「ありゃ、吸い込む量、少なかったりして・・・」

「こっちは手に付いちゃったスよ」

「ヤレヤレ、二人とも見かけによらずブキねえ。もう一本残しといてよかったワ」

かつての助手が指名され、サラリと扱ってみせる。

「小松さん、さすがねえ」

「粒々を分けるのよりは簡単ですから」

櫻が南実と普通に会話してるのがどうにも腑に落ちない蒼葉であった。「一昨日、何か

違う展開でもあったのかな？」 パックテストのように人の心理もパッと見で調べられる器材があれば、てなことを考えたりしている。

このように活きたデータも扱ってこそ、環境情報センターである。測定値は案の定、「八、超えちゃったわねえ」 八広は「八」と聞いて一瞬動揺するが、標準色見本を見て、納得である。「八八、確かに」 低濃度用のパックテストでは薄緑を示したら、そこまで。八 mg/l 以上の値は詳しくは測れない。

「でも、これっぽちでそんなに汚れるものなんスか？」

「ホラ、印刷した部分でインクの油が残ってるでしょ。多分それでだと思おう」

八つながりか、時刻はちょうど八時。座談会というよりは、報告会、いや検証会、まあ一同にとってはいい勉強会になった。先生は気を利かしてか、

「こいつは俺が預かるよ。専門機関に知り合いがいっから、タダで調べてもらうわ。よろしか？」

「あら、それはそれは」

と、ここでお開きとなるはずだったが、断続的に強い雨が降ってきた。

「あちゃー、また増水したらどーすんだあ」 帰途の心配よりも川の心配が先に立つ八広である。

「そしたらせっせと復元するのみ。エクササイズ、好きっしょ？」 千歳は余裕のご発言。雨が一段落するまでは皆さん動きがとれないだろうからと、再びプロジェクタを操作し始める。「ここからは余興です。ご覧になった方も多いでしょうけど、『漂着モノログ』、どうぞご鑑賞ください」

今となっては懐かしい四月のスcoop系に始まり、五月の回、そして掃部公を見かけた予備調査の様子．．． ブラウザでブログを出し、それをプロジェクタに投影するだけ。使い勝手がいいものである。

「おっ、この絵は何だい？ 鬼気迫るものを感じるなあ」

「蒼葉画伯の作品です」

「八八、お恥ずかしい」 画家は首をすぼめる。

「へえ、正に才色兼備、ってか」

「あ、そうそう。先生、これ落とされませんでした？」

蒼葉の手には、一本の上物筆<sup>じょうもの</sup>。持ち主の手に戻る、その瞬間が来た。捨得してから、実に五ヶ月余り。

「おやおや。確か三月**だったな**。ここより上流の方、散歩しててさ。何かの弾みで落としちゃって、そのままだったんだ。でも、何でまたお嬢さんが？」

名前というのはちゃんと刻んでおくものである。K.K.は正に「Kiyoshi Kamon」その人の物だった。

「四月一日に姉からもらったんですけど、エイプリルフル土産だとか言って、ちゃんと教えてくれなくて」 櫻は「へへ、恐縮です」と小声でつなく。姉を一瞥、いや目配せし、「問い詰めたら、干潟で拾ったって、白状したんです」と明かす妹。筆をめぐるそんな一幕があったとは．．．

蒼葉の言動には強さがある。八月五日の一件で千歳はそれを承知済み。詰問となれば、

櫻もタジタジだっただろう。姉の彼氏は、ちょっと複雑な思いであった。

「でも、この筆、さっきの絵、描くのに使ってしまいました。．．．」 正直に話すも、さすがに川の水で絵の具を溶いて、ということまでは言えなかった。

「はは、俺が使うと花粉をくっつけられたり、泥を拭かされたりすっから、筆としては画家に使ってもらうのが本望だと思うよ。大事に使ってやって頂戴」

「あ、ありがとうございます！」

こうした展開を呼ぶとなると、モノログの存在意義、大したものである。ここで八広のコメント。「何かドラマチックな話スねえ。筆の一件だけで短篇モノですよ。これは！」  
弥生と小梅は、スクリーンを眺めながらも和やかに談話中。辰巳は豪雨が気になるようで、立ったり座ったり。長身なので目立つ目立つ。

八月の回の八広ルポが反響を呼んだのは周知の通りだが、昨晚載ったばかりの最新ルポの方はどうだろう。ブラウザ上では字が小さめで読みにくい面があるが、今は拡大表示されているので、著述家の目にもハッキリと読み取れる。

「こりゃ随分と大仰に出たもんだなあ。ゴミじゃなくて資源てえのはごもっともだけどさ、社会構造云々てのは、しゃ、もとい、飛躍し過ぎじゃねえか」

「いえ、ゴミってのは負の連鎖の産物だと思うんスよ。その連鎖の元をたどると、団塊の皆さんのイケイケ路線だったり、いわゆる大量生産・大量消費、それに大量リサイクルを是とする精神性だったり、その辺が組織的・構造的に固着しちゃってんじゃないかって。ゴミを片付けてると、社会の歪み？ みたいの感じます」

「宝木君さ、君の義憤はよくわかるよ。でも、このままだと主張が前面に出過ぎててさ、共感が得られねえんじゃ．．． 著述てのはよ、書き手と読み手の対話の場を提供することなんさ」

八広は、激論になるのを覚悟で論破したつもりだったが、何枚も上手の先生には到底敵わない。著述の観点からさらりと受け流されてしまった。確かにその通りと受け止め、口を噤む。

千歳、辰巳、南実はこの緊迫した場面に居合わせていたが、「管理人としては不用意だったか」「さすがは師匠、そう切り返したか」「これが掃部流の真骨頂？」と各々感想を抱くも、言葉は胸中に収めている。社会科学的考察としても良さそうな題材だったが、弥生は「文系の議論は難しそうだわ」といった調子で遠巻きにしていた。時は静かに流れ、雨の音がこだましてくる。

文花は、延長戦に備え、ご自慢の珈琲を淹れ始める。櫻はと言えば、小梅がそろそろ退席するというので、前々から暖めていた計画の一端をここで切り出す。

「小梅さん、これちょっと読んでみてくれる」

「グリーンマップ？ あ、このシール、何かカワイイ」

差し出されたそのパンフレットには、綴じ込みで「アイコンシール」なるものが付いていた。

「もっと涼しくなったらさ、一緒に街歩きしてみない？ マップ描きながら、このシール貼ってくるの。シールは自分で作ってもいいんだ。どう？」

「蒼葉さんは？」

「いいけど、どうして？」

「お絵描き、習いたいなって思ったの」

「じゃ、四姉妹でやるっか」

こうして櫻の「いいもの」(番外編)が動き出す。小梅は下の図書館で引き続き雨宿り。雨が小康状態になったのを見計らい、程なく須崎課長も退場した。

八人分の珈琲が運ばれてきた。有意義だが、モノだけに物議も醸すモノログは、九月の回が映し出されたまま。照明が暗めとは言っても、プロジェクタの消費電力は馬鹿にならない。ここは一旦、電気を切り替え、コーヒブレイクと行きたい。

「いやあ、このコーシー、いいねえ。昔を思い出すよ」

「え、先生、昔って？」

櫻は何の気なしに、聞いたつもりだったが、

「そうさな、家内に淹れてもらってた頃だから、十年以上前、かな」

「ヤダ、センセ。もらってたって。今もいらっしゃるんじゃ？ まさか．．．」

「熟年離婚とかじゃねえぞ。その、な？」

これ以上お訊きするのは憚られたが、しとり身の先生は実のところ話し相手が欲しくて仕方ないご境遇。自分からポツリポツリ話を始めた。

「さっきの話じゃないけどよ、昔イケイケだったのは仰せの通り。でも団塊ってヤツはよ、その名の通り、団子になって競争するようなもんだから、否が応でもそうなっちまう。俺なんかも多分に漏れず、その一翼を担ってた。事もあろうにゼネコン、いや中堅だったから小ゼネコンか。まあとにかく壊しちゃ造っちゃの繰り返しよ」 ようやく座談会、いやこうなると独演会か。円卓を中心にしつつも、いつしか先生を囲むような配置で席が取り巻いていた。

「清さんにその辺の話をお聞きしようと思ってたんですよ。八広君はああ言うけど、団塊世代の方もご苦労があって、何らかの言い分もあるんじゃないかって」 モノログが引き起こした波紋の責を負うべく、管理人が取り次ぐ。

「いやあ、好き勝手やって来たってことに関しちゃ、弁解しようがないさ。でも、こんな俺でも分別があったらしくて、バブルの最中にこりゃマズイと思って飛び出した。それまでも疑問には感じてたんだが、家内の具合が悪くなってきてよ。いよいよ潮時だなんて」

このままだとコーシーが冷めてしまいそうだったが、この際、関係ない。話は続く。

「ありきたりかも知れねえが、がむしゃらに働いてたら、そのシワ寄せが身内に来ちまったってヤツさ。それを悔いて、そのイケイケとやらを是正できないかって考えた。カッコつけて云やあコンサルだあな。手近なとこで荒川とかその支流に関係するところを当たって、工場が閉鎖になったら、その跡地に在来の生態系を戻す、三面張りとか暗渠とかの工事がされかけたら、とにかく自然地形に直させる．．． さんざ歩き回ってたら、蟹股になっちまった訳さ。バブル後はゼネコンも苦しかったから、この手の公共工事は落とせない。役所は役所で既定路線を変更しながらないのが常軌だろ？ 艱難かんなんの極みだったがよ、『長い目で見りゃ禍根を残すぞ』って説得して回ったんだ。でもな．．．」

掃部公は、目をしばつかせて、ひと呼吸おく。

「これも結局はイケイケ体質の為せる業だったんだ。かえって家内の面倒が見れなくな

っちまって、それで．．．」

「先生．．．」 七人の二十・三十代諸君は、言葉が出なかった。辛うじて南実が口を開く。

「著作を始められたのは、いつ頃からだったんですか？」

「ああ、バブルが明けたくらいかな。長考の末に一本書き上げたんだが、家内にはあんまり芳しくなかった。『怒りじゃ人は動かない。共感が得られるものを書かないと。』てさ。で、言うこと聞いて、<sup>かいふく</sup>恢復祈願も兼ねて、自然再生論を次に書いたら、『そうそう』って、泪まで流してさ。汚い字の原稿だったけど、一応最後までまとまっていたのが救いだっただな。発刊を待たずに逝っちゃった．．．」

女性陣は目が赤くなっている。詩人の八広はその感受性の高さ故、感極まって声が出そうになっていたが、何とか堪えた。今夜の雨は、涙雨だったということらしい。

「おいおい、皆の衆、今日は通夜じゃないよ。実の子ってのもあいにくいねえ身の上だが、俺には皆がいる。俺ら世代のツケは回させねえ。これからも一緒に手伝わせてくれよ、な？」

気付けば笑顔を交し合っている八人がいる。雨は上がり、時は九時。世代間対話、いや先生を囲む夕べは、こうして一幕となった。

南実は何か吹っ切れたような面持ちで蒼葉に声をかける。

「ねえ、蒼葉さんて、通販カタログに出てる人？」

これには蒼葉も相好を崩すしかなかった。

「どうしてわかったんですか？」

「先月の．．． 晩夏特集だったかな。その時に出てたのと似た服だったから、ふと」  
今度は櫻が不思議そうに二人を見ている。「あれれ？」

カウンター付近には、帰ろうとする先生とそれを引き止めるチーフがいた。元気付けて差し上げたいという想いもあってのことのようなのだが、会話内容がちと怪しげ。

「センセ、折り入ってご相談したいことがあるんですが、今月中、そう火曜日の夜、いらしていただけますか？」

「こりゃまたゾクとするねえ。いいけど、何だい？ 魚の調理法ならお易い御用だぜ」

「紙燈籠の結果とあわせて、でいいです。ま、とにかくその時に」

文花はこれで結構、掃部キラーだったりする。センターの十月以降の進境にこれで一つ布石が打たれた。

プロジェクタを片付ける千歳の姿を見つけると、思い出したように清が近寄ってきた。

「そうだ、隅田君よ。さっきのあれ、何だっけ？」

「ブログのことですか？」

まだ何となく放心状態の彼だったが、ちょっと考えてから真顔になる。

「今、ブログのこと聞きました？」

「俺にもできるのかい、その付録、いやブログ？」

「清さん、パソコンはお持ちですか？」

「今は何とか使えるようにはなった。原稿書くのに、し、ひ、必須だかな」(必須の

度合いがよくわかるセリフ回しである。)

ノートPCの方はまだOFFにしてなかったので、そのまま要領なんかを概説する千歳。清に息子がいたら、こんな絵図も有り得たかも知れない。弁舌が立つ点で共通する八広と弥生だが、今はしんみりしつつ、そんな二人を見守っている。

「問題はインターネットがちゃんと俺の言うこと聞いてくれるか、だな」

いつもの高笑いが戻ったところで、自分では入門したと思っている弟子のお嬢さんがやって来た。

「掃部先生、今日持って来たんです。さっきの名著」

「ほほう、小松あん。それはまた殊勝なことだ」

「サインしてください！」

「俺のサイン、高いぞ」

とか言いながらも目尻が下がっている。好々爺というのはまだ早いかも知れないが、かつては闘士だったというのはとても信じ難い、著者、掃部清澄であった。

「ありがとうございます。後生大事にします」

「いやいや、ボロボロになるまで読み込んで頂戴よ。その方が家内の供養にも... いけね、また余計なこと、八八」

首を振る南実。彼女はそのまま寄り添うように、先生とセンターを後にした。師弟でもいいが、これまた父と娘のような趣である。

「先生帰ったら、何か寂しくなっちゃったわね」

「何を仰いますやら、文花さんらしくない。これから、ですよ！」

ここからが第二幕。長丁場に臨む六人は、文花、千歳、櫻、蒼葉、八広、弥生の選抜メンバーである。清の話聞き、皆一様に<sup>いちよう</sup>勇氣と力を得た気がしていた。次回のクリーンアップに向け、協議に熱が入る。珈琲が冷めていようが構わない。

higata@メンバーの集合は九時半、開始時刻は十時。当日の役割分担は、文花が各種器材・備品の搬入(クルマ乗り付け)、千歳はその器材のセットと撮影諸々、櫻がいつものコーディネーター(兼 受付)をやれば、蒼葉は櫻のフォローと参加者お世話係、八広は主に監視役、弥生は自ずと分別・集計の元締、ここにいる六人については概ねそんな役回りということで一致した。

「荷物番はどうしましょうか？」

「また魚と遭遇すると皆さんにご迷惑かけるでしょうから、私が」

「まだダメなんですかあ？」 弥生のツッコミが入った、ということは...

「だって、この間はハクレンが上がったんでしょ。聞いただけでもう」

ホワイトボードの傍らで両手を挙げてみせるチーフ。櫻はペンを取り上げると、ボードにハクレンと書き綴り、

「じゃ、皆さん大きな声でどうぞ！」

「キャー」

「櫻さん、また逆襲されても知りませんよお」

「平気よ。千歳さんがついてるもん」

名物三人娘のショートコトはこんな塩梅である。

他メンバーの分担、実施手順のまとめ、注意書きの文案、そして参加者の募集の仕方等々、これらは引き続きメーリングリストで議論し、下見を兼ねた打合せ日についても同時に調整することにした。

「毎月やってるから、改めて下見することもないんでしょうけど、何度やっても損がないのが下見だって言うのよね」

「あ、自分、ヒマさえあればいつでも行こうって、今日思い改めました」

「先生も前に『地元の大自然、荒川へ』って仰ってたし、ね」

櫻のこのまとめを以って、今日は終幕。時計は十時を指している。雨音に代わり、秋の虫の音が静かに、そして深く響いていた。魂を鎮めるが如く...

### 嗚呼青春、十八切符之旅

台風一過、九月九日は、この上ない上天気となった。青春18きっぷというのは、二人以上で使う時は、同一行程で動くのがルールなので、出発駅が異なる場合は、どちらかの駅に合わせないといけないのがネックであり、メリットでもある。「これも千歳さんのトリックかしら」とか言いながらも、櫻は軽やかに自転車を飛ばしていた。待合せの駅へは徒歩で行けなくもないが、これまで数度、彼のマンションのゴミステーションに同行しているため、勝手知ったる何とやら、自転車を内緒で駐めさせてもらうつもりでこうして走っているのである。(弁当を用意するのに手こずって出発が遅れた、というのが元々の理由ではある。) 橋を渡っているとどうしても干潟に目が行ってしまう。「一昨日の台風、それに増水、どうだったんだろ？」 グランドに溜まった水がまだ退けてないこと、枝の束がグランド脇などに積まれていること、など大まかなところはわかるが、眼鏡の具合があまりよろしくないらしく、干潟が再水没して、ゴミがまた大量漂着(いや沈着か)したことまでは、どう凝視してもつかめないのがあった。兎にも角にも、今日のところはクリーンアップの件は二の次。三十路であっても青春気分(?)に浸れる十八切符の旅、これが本題である。

よくよく考えると、朝の待合せは早くても九時台というのがこれまでの二人。今日は新宿を九時六分に出る「ホリデー快速」に間に合うように動いているため、正しく「おはようございます！」の時間に顔を合わせている。六月君から仕入れた情報によると、「人気があるようなので、出発二十分前には着いてないと」となり、余計に早くなっている。

かくして、その二階建て車両の二階席に無事落ち着き、出発を待つことになる。この列車、山梨方面に行くのがウリなので、小淵沢まで行って、小海線のハイブリッド車両「こうみ」に乗ってみる、という選択肢もあったのだが、「それだと、清里とか野辺山とかに行き返ってくるだけですもんね」ということで、当初予定通り、荒川の上流とか中流とか、何でもいからぐるっと廻って戻ってくるルート、で落ち着いた。

九時十九分に三鷹を出ると、下り列車は高架線を走る。東京西郊はふだんご縁がないので二人して、「ありゃ、いつの間に？」となる。新たに見渡せるようになった南側の風景は、二階席ということもあり、より広がりを感じさせる。この方角は山らしい山もない。「ビューやまなし号」とはよく言ったものである。



higata@の方は、lefront@さんと、edy@さんが加わって、何となく賑やかになり、下見を兼ねた打合せの件も思いがけない提案から、より盛大なものになりそうだった。

「私、荒川の船下り、初めてなの。千歳さんは？」

「隅田川を走る水上バスには乗ったことあるけど、荒川はないねえ」

二人の眼下には、台風増水に見舞われた後の浅川が流れている。川を見ていると、どうしても地元の話題になってしまうのだが、降車駅が近づいてきた。

「なっーんだ、四十分弱で着いちゃうの。ホリデー快速だから、のんびり走るのかと思ってたのに」

ツッコミどころではあったが、千歳は「なるほどねえ」とか言っちゃってのんびりしている。

「弥生ちゃんのツッコミ、見習ったら？」

「ビューっていうくらいだから、速いんだよ」

ワンテンポずれている千歳だったが、下車するのは早かった。これぞビュー状態(?)である。九時四十四分、八王子着。ここから荒川上流方面をめざす訳だが、ローカル線の旅はビューとはいかない。

「はぁ、乗換、三十分。駅前、散歩しますか？」

探訪が趣味の千歳、地域のネタ探しがお好きな櫻。趣向が共通していると、こういう時、バタバタなくて済む。それにしてもよく晴れたものだ。

「櫻さんて、やっぱりハレ女？」

「そういう千歳さんは？ ハレ男、いや、ハレ王子かな」

確かにここは八王子だけど．．． いつもながら、舌好調の彼女である。

次は十時十五分発、川越行きに乗る。

「あら？ ドア閉まってる」

「どうぞ、櫻姫」

千歳はドア横のボタンを押して、乗車を勧める。ドアの開閉はセルフ式。八高線ではこういうエスコートができるのがポイントである。

箱根ヶ崎～金子～東飯能と北へ向かう車窓の眺めは、森や緑が目立つ。先刻までは雑談中だったが、今は黙々と景色を楽しむ二人。入間川に差し掛かった。悠長にも犬を水浴びさせている一行がいる。

「ここも増水したんでしょうね。今また水が来たらどうするのかしら？」

「漂流犬になっちゃうのがオチ．．．」

「笑えないんですけどぉ」

小宮～拝島間では多摩川を渡っていたのだが、うっかり見過ごしてしまった。その分、この入間川に注目が集まった訳だが、犬に話題をさらわれているようではまだまだである。

さて、時刻表(ケータイではなく、あくまで冊子)で、ある程度の乗換なり接続なりを調べておいた千歳は、高麗川から先へ乗り継ぐまでの空き時間を見越して、

「じゃ、このまま武蔵高萩へ」

「あら、ここで乗り換えるんじゃ．．．」

「次の高崎行きまで、四十分空くからね。一駅行ってまた戻って、てのはどうかなと」

「高麗川で曼珠沙華<sup>まんじゆしゃげ</sup>が見頃って聞いたけど、ここじゃないの？」

「その巾着田<sup>きんちやくた</sup>までは、徒歩で片道四十分なんだって」

「まあ、よくお調べで」

という訳で、列車主体の旅は続くのであった。千歳としては曼珠沙華も悪くはなかったが、「この天気、この気温じゃあね」というのもあった。帽子を被っていない櫻が、このカンカン照りの中、外を出歩くとどうなるか。まして、お顔が日焼けすることにでもなったら。

「櫻さん、日焼けすると、眼鏡の跡とかってつきませんか？」

「現場出るときは一応帽子被ってますからね。この間はルフロンのおかげで曇り気味だったから、被らなくて済んだけど」

眼鏡が気になる千歳である。彼女は彼氏の前ではまだ、眼鏡を外していない。

かつてはローカル色豊かな小駅だった武蔵高萩。今はちょっと立派な駅舎になっている。

「北があさひ口、南は『さくら口』！」

お誂<sup>あつら</sup>え向きの「さくら口」を出ると、小さな駅前通りが伸びていて、両脇には桜らしき並木が青々と葉を揺らしていた。

「千歳さんたら、ここに連れて来たかった、てこと？」

「いえいえ、偶然ですよ。むしろ櫻さんに招かれた感じ」

「正直ねえ。こういう時は多少見栄張ってもいいのに」

そうは言っても嬉しそうな櫻は、「プロマイド写真、お願いします！」と来た。題して「桜の木の下の櫻さん」。これはまた絵になる。

「拡大プリントして貼ろっかな」

「じゃ、出演料頂戴っ」

並木道を往復すると、ちょうどいい時間。十一時三十八分発の川越線で再び高麗川へ。そしてここからが本日のメイン行程となる。ディーゼル列車に揺られての旅、時間にして百分である。

ディーゼル列車は、対面式の二人席が設けてある。夏休みが終わり、行楽客も少なめのように、難なくその一席を得た二人。「向きは交代交代で行きますか」 これまたカップル向きの設定である。八高線の評価は上々となる。

十二時二分、明覚<sup>みょうかく</sup>で席を交代したら、お弁当の時間である。このクロスシートの欠点は、折り畳みテーブルとかがないこと。だが、櫻手製のデリランチにテーブルは要らない。数種類のパテナタをパンに乗っけて頬張るだけ。副菜の豆サラダは別の器に小分けしてある。

「お昼、すっかりお任せしちゃって、すみません」

「いやいや。18きっぷ代を考えれば安いものです」

「じゃ遠慮なく、いただきまーす」

車窓を流れるのは、より傾斜のある丘陵、より深い森林。時には竹林、あるいは、暑さにうだるヒマワリ畑。二人の会話もゆったりと流れていく。折原に着く頃にはお昼は食べ終え、再び座席交代。この後、通り過ぎる荒川を撮影するには、この進行方向席ならバッチリである。

十二時二十五分。ここは荒川の中流か上流か。多少徐行しながら列車は橋を渡る。程よ

い蛇行、白々とした中州、濁りが残っている観はあるが、総じて清らかな流れである。サギがウロウロしているのは川魚が居る証しか。

「台風の時ってどうだったんでしょ？」

「九月七日の朝四時とか五時とか、四メートル近くあったんだそうで」

「じゃ、あの河原とかも水没？」

「蛇行してるどこじゃないでしょうから、川幅全部使って、ゴーッと、ね」

話はそのまま地元の増水状況に。

「河川事務所の情報だと、七日の夜から八日の早朝にかけて、五メートル前後にまで増水してたみたい」

「エーッ、そんなあ。じゃ、干潟は？」

「八日の朝に一応見に行ったんだけど．．． モノログに載せるのはちょっとどうなかって」

「皆、ガッカリするからってこと？」

「干潟の方は水位が下がった後じゃないとわからないけど、とにかくグラウンドの脇とかにも漂着ゴミが散らばってて、その．．．」

寄居を過ぎ、今はのどかな田園風景の中を走るディーゼル車。言葉少なな千歳に対し、櫻はエールを送ってみる。「現地情報は皆で共有しなきゃ、ね？」

後日、視察しに行つて、グラウンドと干潟と、とにかく増水後のあるがままをモノログに載せる、ということで話はまとまった。会話は通常モード(?)に戻る。

「それにしても、『用土』って、どうよ？」

ここは彼女に一本か。いやいや、彼も負けてはいられない。

「土用が丑なら、用土はウマ？」

「マイナス1,000点てとこスね。せっかく今日で20,000点だったのに、あーあ」

あと二十分弱で終着。県境を流れる川を越える。

「これって利根川？」

「<sup>かなながわ</sup>神流川、だそうです」

「川の神様に会える場所、かな？」

短冊に込めた願いを再び思い出す櫻。心の中で「ありがとうございます」と呟く。そんな彼女の想いも乗せて、列車は快走する。そして百分後きっかり、十三時五分、高崎に到着。ローカル線の旅は続いているのだが、急にあわただしくなる。

「同じホームの四番線て何スカ？」

「とにかく急ぐべし。乗換時間二分です」

「エッ！ ホームの端から端？ マジ？」

何とか信越本線に乗り換える。めざすは横川である。

「いっそのこと、高麗川から横川まで直通運転にすればいいのに」

「いや、高崎までは非電化だから」

「あれ？ これって電車？」

「せっかく電化されてるんだから、電車走らせないと、ね」

停車本数は少なかつたかも知れないが、かつては特急列車も停まった安中や磯部。何と

なく陰翳漂う佇まいながら、JRの本線駅としての威風のようなものが感じられる。特急が通らなくなって久しいが、駅も線路も健在。今日も堂々と電車は走る。普通列車ベースの路線はいい意味でスローに通ず。横川までは三十分余り。この程々な感じがまたいい。

十三時四十分、横川に着く。降りる客はまばら。折り返しに乗り込む客もまたまばら。客が少なければ、なおのこと。ましてやここはローカル線。だが、しかし、である。釜めしを大事そうに抱えた見慣れた少年が近づいて来るではないか。

「やあ、六さんじゃございませんか！」

「あれれ、千さんと櫻さんだあ」

「どったの、六月君。18きっぷツアーって夏休み中にしなかったの？」

「へへ、江戸東京博物館の『大鉄道博覧会』を優先することにしたんで。あと、八月って皆考えること同じだから、結構混むんですよ。だからずらしたんだけど・・・」

六月としてお二人さんがここにいることの方がずっと不思議だった。

「そっか、先週ホリデー快速がどうのって、千さんがおかしなこと聞くから何だろうって思ってたんだ。デートだったんだあ」

「千さんがね、どうしても私と八高線乗りたいって言うから」

千歳も六月もこれにはお手上げ。

「八八、ま、そういうことです。でも、この後はどこ行くの？」

「特命ですよ、特命。両毛線乗って、さらに烏山線・・・」

「じゃ、特命ついで。一枚撮ってくださいな」

櫻は六月が掲げていた釜めしを預かると、代わりに千歳のデジカメを手渡す。そして、

「あ、千歳さん、こっちこっち」横川の駅名標を見つけて並んでみる。ただの標示板ではない。峠越えの眼鏡橋を背景に「横川」と書かれた幻想的な一枚。さすが、目の付け所が違う。

「じゃ撮りますよ」

少年が構えた時、櫻は突如、眼鏡を外した。

「え？ あれが櫻さん？」

手がブレそうになったが、何とか撮影（特命）成功。隣の彼氏が異変に気付いた時にはすでにいつもの櫻に戻っていた。鈍さ加減は相変わらずである。

「六月君も証拠写真撮っておかないとね」撮影係を申し出た櫻は、峠の釜めし屋の前に少年を立たせる。文花はまた別かも知れないが、蒼葉と舞恵には確実に憧憬感情を持っているこの少年。ここに来てまた新たな対象が現われたことで、どうもぎこちなくなっている。

「ホラ、肩の力抜いて、そうそう」釜めしの重量に任せて、手をダラリ。ちょっと冴えないが、自然な感じで撮れたようだ。

発車時刻が近づいてきた。「じゃ今度は十七日、ね？」

「は、はい」硬さがとれていない。いつもの六月と様子が違うので、千歳が正気付けてみる。

「そうそう、六月先生。高崎線でオススメの駅ってどっかありますか？」

「神保原じんぼはらのホームに面白いものありますよ」

そう告げたところで、ドアが閉まった。「神保原、てか？」

普通電車は少年を乗せて高崎へ。車内で釜めしを食べる予定だったんだろうけど、青空に映える妙義山なんかを眺めながらボーッとしている。お熱いうちにどうぞ、と言いたいところだが、外も暑いから仕方ないか。この日この時、実に三十度超である。

横川に来たからには、碓氷峠鉄道文化むらに行かない手はない。展示館、資料館と気の向くままに見ていたら、二時間近く経っていた。十五時五十四分、横川を発つ。嗚呼青春の鉄道旅行は、ここから帰路となる。

十六時半。千歳と櫻は高崎を出発。六月は同時刻、小山を出たところである。高崎から宇都宮まで直通する列車を選ぶあたりはさすがだが、鉄道文化むらに少々ハマってしまったのが誤算だったようで、もう一つの特命の方がギリギリになってしまっていた。

「この大金駅での三分間が勝負！」 はてさて小梅嬢は彼に何を頼んだのだろうか？

朝方のビューのようにはいかないが、今二人が乗っているのも一応快速列車。ただ、熊谷までは各駅停車なので、スローな感じである。このまま乗って上京してもいいのだが、六月からまた耳寄りな情報を得たからには、そうはいかない。

十六時四十五分、目的駅に到着。早速、ホームの物色を始める。

「あっ！」 程なく二人が見つけたもの、それは七福神だった。大黒天様から毘沙門天様まできれいに並んでいる。神保原の神は、この福の神に通じるということか。

「それじゃ私は、ご縁がありますよーに、で五円玉。千さんは当然、千円札ね」

「またあ。七福神さんだから、七円かな」

額面とかその根拠はさておき、何事もご縁は大事にしたい。ここで遇ったが何とやら、である。「いい旅でした。感謝感謝．．．」 櫻がお辞儀をしている後方で、千歳はある赤い花とにらめっこしていた。「上里町の花『サルビア』!?」 夏は過ぎしも、誰かさんの燃える思いはまだ続いているのだろうか。今日の暑さもあってか、さすがに瑞々しさはないものの、その赤はやはり強烈。南実のことが頭をよぎる千歳である。これもご縁のうち、と心したい。

「そうだ、千歳さん、写真撮らせて」

「どしたの急に」

「七福神の皆様と一緒に。いいでしょ？」

「はいはい。八番目ね」

十分後、普通列車が入線してきた。四人掛けのクロスシートに横並びで座る二人。ちょっとした打合せにはもってこいである。デートと言えども、この話題がないとやはりしくり来ないようだ。櫻は、先週のうちにまとめておいたという実施手順と注意書きのラフ案を取り出す。「千歳さん、赤入れお得意でしょ。よろしく」

公務員というだけのことはあって、なかなか高度な文書に仕上がっている。「とすると、あとはフローチャートか」 より視覚的に手順がわかるようになっていれば、さらに完成度が上がると踏むマネージャーであった。傍らで櫻は、安心したような穏やかな表情でスヤスヤと眠っている。カーブが少ない高崎線、その適度な揺れ心地が良かったようである。

熊谷から先もひたひたと各駅に停まって行く。荒川の流速は電車には及ばないだろうけど、各駅くらいのスピードの方が荒川と並行して走っている実感も得られるというものだろう。熊谷辺りから荒川との並走が始まる。川と線路は近接している訳ではないが、感覚的にはそう言い得る。熊谷近辺でも七日の早朝は五メートル超の水位を記録したと言う。平静を取り戻した荒川は今、西日を集めながら、ゆっくりと流れていく。櫻の夢の中でも、同じように川の流れが映っていた。列車は大宮の手前辺り。そろそろ夢から覚める頃合い。

同じ頃、六月君は烏山線の大金駅おおがねで特命を遂行中だった。十七時五十五分、無事同駅に着くも、その三分後には、烏山から来た上り列車に乗り換えなければならない。制限時間は三分、その間に、大金ほうしゃくじ⇄宝積寺の硬券切符をゲットしようという離れ業である。「八八八、間に合ったあ」縁起モノを入手するのは大変ではあるが、労苦を伴うからこそありがたみも増し、然るべき報いも出て来るのである。特命を完遂し、こちらもスヤスヤ。だが、この上り列車は残念ながら宇都宮止まり。六月の乗換はまだまだ続くのであった。

十八時過ぎ、高崎線組は大宮に到着。新宿を出てから、十時間近くが経過。日は落ちて、秋の空気がホームを満たす。

「私、四十分も寝てたんだ。デート中だったのに、ねえ．．．」

「僕が連れ回して、おつかれモードにしちゃったから、かな？」

「今ね、おぼろげだけど川の夢、見てたの。何か癒される感じだったなあ。なんで、別におつかれじゃないですよ」

二人が出逢って、五ヶ月余り。お昼を一緒に、というのは何度かあっても、夕飯については何と今回が初。記念すべき一大事だと思うのだが、両者ともに素っ気ない。エキナカというのは、その駅の地域性とは無関係かつ無個性だったりするものだが、今日のところはその利便性を享受すべく、カレーで済ますことと相成った。

彼女曰く、「彼氏とカレー、なのだ」ツッコミどころをまたしても逸してしまうところだったが、「櫻さんはサフランライスがお好き？」何とか応酬する彼氏。これじゃ二人ともボケ役である。

「例の曲、その後どうですか？」

「ええ、ポチポチ。明るめの方は、マスターしました。もう一つのダンサブルな方は、つい聴き入っちゃって、まだ途中です。へへ」

「まず一曲、どこかで鍵盤叩いてもらって、PCに取り込むのやってみたいですね。メロディラインをデータ化するとどうなるのか、楽しみです」

「タイトルは付けました。サビの歌詞も少々」

と言っておきながら、それはまたのお楽しみ、とはぐらかす。

「千歳さん、来月お誕生日でしょ。その時にお披露目ってことでいかが？」

七夕の時もそうだったが、これが櫻ならではの発想&演出なのである。決して甘口なカレーを食べている訳ではないのだが、気分的にはすっかりマイルドになっている千歳なのであった。

さて、お二人の利用駅が異なる場合、18きっぷというのは使い勝手が悪くなる。千歳

は櫻サイドに従うつもりでいたが、「いえ、私が．．．」と来られては、返す言葉がない。

ドキリとするも、あえて理由は聞かなかった。櫻は自転車に乗って帰らないといけな  
い。だが、それは彼の知るところに非ず。

「櫻さん、夜道を歩いて帰るのって、ちょっと．．．」

「え？ 送ってくださるの？」

「いやその．．．」

拙宅にお招きする、というのはまだどうもなあ、と彼氏は大いに躊躇う。櫻もその辺は  
十分察知していたが、自分からは言い出せない。ここは一つ正直に、

「実は自転車で来てまして。ドキドキさせちゃって、すみません。でも．．．」ここ  
からがまた実直な気持ち。「いつかご招待くださいネ」

彼氏はいろんな意味でへなへなになっている。彼女はさらに仕掛けてみる。

「千歳さん、今日は楽しかったです！ また何処か．．．」

仕掛けたものの思わず言葉に詰まる。こうなるとあとは勢い。櫻は両手で彼の手を握る。

「櫻さん．．．」

七月七日、九月九日、数字並びの日にドラマが深まる感じである。となると、次は十一  
月十一日。何かが起こりそう？ いや、それがわからないからドラマは成り立つのである。

十九時四十六分。快速に乗ってきたとは言え、この時間である。少年はやっとの思いで  
大宮に着く。18きっぷは明日まで。この日、きっぷを無事消化できてホッとした旅行者  
は他にも大勢いる筈だが、六月君の思いはまた格別だろう。「高崎・信越・両毛・烏山・  
宇都宮．．．」ぐるっと廻って、ミッションをこなし、証拠写真まで撮ってもらった。  
彼のリュックには、空っぽの釜めし容器が入っている。空でもズシとしたその感覚は更  
なる充実感を掻き立てて、止まない。

### 巡視船紀行

下見と打合せ、それだけでもちょっとした場になるが、higata@の面々にはさらに前座が  
用意されていた。その名もズバリ「巡視船で行く荒川下流の旅」、オプションツアー企  
画である。前座がオプションというのも変なら、ツアーの方が本日のメインイベント要素  
が強いというのもまた妙である。九月十七日は祝日だが月曜日。環境情報センターはも  
ともと月曜定休。千歳も同じく定休日。祝日が月曜の場合、休日が減るのと同じになる  
ので、割を食う訳だが、今回の企画はその変則性が幸いした。予約が可能なのは平日のみ。  
ただし、臨時貸切となると、月～金で祝日に当たる日なら可とのこと。これには、河川事務  
所の課長さんが一役買ってくれた。

「敬老にちなみ、<sup>かもん</sup>掃部先生への祝意、干潟再生に向けた皆さんのご尽力への敬意、そし  
て、娘どもがお世話になってますことへの謝意とを兼ねまして．．．」干潟に程近い場  
所にあるリバーステーションにて、まずは開会の辞を述べられる。当の娘二人は満更でも  
なさそうだが、特に声援を送る訳でもない。父親は照れながらも苦々しい表情を浮かべる。  
そこそこ拍手があったのが救いだった。

ツアーの意図が今述べたようなことだと、公私混同然としてしまうので、表向きは環境



情報センターの主催（但し、参加者限定）ということにしてある。チーフは予め、来るべきセンター運営団体の法人化に際し、役員候補（現・世話人）の方々にもお集まりいただいていた。この中には櫻の顔なじみもポツポツいらっしゃるが、今日はせいぜい会釈する程度。人選はまだまだ先だし、代表理事になるべき人物の意向とか、会員制に移行した際にそのまま会員として協力いただく方々の動向によっては、また顔ぶれが変わる可能性がある、というのがその理由。今のところは適度な距離を置かないといけないのである。気疲れしそうな場面ではあるが、「ま、気楽に行きましょう。その辺は千歳さんに倣<sup>なら</sup>って、ね」視線を送った先の彼は、八広と雑談中。

「じゃ今日は休日出勤？」

「期末はいそがしいんだそうで。来週も返上みたいスよ」

雨女ルフロンさんが来ない、となると．．． 確かに快晴だし、気温上昇も著しい。初音予報士はデジタル温度計をかざし、「おお、早くも三十 突破?!」 現在時刻、午前十時前である。

珍しく（いや姉妹そろっての登場は今回が初！）、櫻と一緒に来ていた蒼葉は、その予報士の仕草を眺めつつ、「何かチャキツとした感じ。昔の櫻姉に似てたりして．．．」 得意の人物評を考えている。傍には蒼葉ファンを自認する少年がニコニコしながら立っている。

「あれれ、六月君、お姉さんは？」

「エ？ お姉さんてたくさんいるけど、誰のこと？」

「アハハ、弥生ちゃんが手を焼く訳だ」

プログラムの目処は立ったし、後期授業も始まったため、センターでのインターン作業はひと区切り。小遣い稼ぎは、またバイトの方に力点を移しているとのこと。

「そっか、楽器店でね。ちょっとは上達したのかなあ？」

案外謎が多い弥生嬢。彼女のブログだか<sup>ソーシャル・ネットワーキング・サービス</sup> S N S だかに関しても higata@メンバーは存じ上げていなかったりする。何の楽器の練習中か、ということも知っているのは蒼葉くらいか。

肝心の先生は、「いやあ、船は遠慮しとくは。自分で漕ぐならまだしも、な」とのこと、やむなく辞退。だが、明晩はお待ちかね(?)の文花との対談がある。二日続けてご対面、というのを避けたフシはある。業平は次の実機試験に向けた研究に没頭中。冬木は情報誌発行大詰めで出勤中。十月の定例クリーンアップ予告の扱いについて、今日の打合せ結果を待つ必要上、致し方なく、というのも休日ご出社の背景にある。放っておくとフライングしそうな<sup>おそ</sup>慣れもあるが、そこは文花がクギを刺すことになっている。そういう使い方ならケータイとしても本望だろう。

巡視船には、河川事務所職員も数名乗り込む。石島親子以下、干潟の衆は、Ms.サルビアさんが来るのを待つ。出航時刻をちょっと過ぎた頃、「わあ、待ってえ！」 いつもとノリが違うお嬢さんがいつもの自転車を飛ばしてステーションに駆け込んできた。

「駆け込み乗車はおやめ．．．」 六月がアナウンスするも、それを遮るように、

「駆け込み乗船ネ」 櫻が笑う。

「ごめんなさい、皆さん。道路のコンディションがあまり良なくて」

ゴミの回収代行に続き、今日の巡視船貸切と、ここへ来て父権というか、面目を回復しつつあったのだが、南実のこの一言で忽ちトーンダウンである。「親父、ダメじゃん」長女からダメ出しを食らう石島課長であった。台風増水に伴い、河川敷道路は所々泥が浸かり、電動アシスト車でも苦戦した模様。だが、この件で課長を責めるのは酷というもの。それは娘もわかっていたし、一同も重々承知。言葉遣いは乱暴だが、他意も他愛もない、初音ならではの表現なのである。

その初音嬢は、初めて見る長身の女性が気になって仕方ない。タンクトップの上にフリルブラウス、そしてクロップドパンツ。「何かモデルさんみたい」船に乗り込む途中、そのモデルさんがふと立ち止まったところで、後ろにいた初音が接触。「あ、ごめんなさい」その柔らかな一声に、蒼葉は振り返る。どこかで聞き覚えがあったのである。「いえいえ。こちらこそ」その聞き覚えの件は、後で姉妹と会話する中でハッキリすることになる。

六月、八広、櫻、千歳と続き、先輩・後輩コンビ、最後に課長が乗り込んで、いざ出航。時間の都合もあり、めざすは総武線鉄橋辺り、と少々曖昧な設定である。石島シスターズはすっかり有名だが、石島父はまだマイナー。「あの娘にして、あの父？」という点で興味津々なのが女性陣。南実は今更ながら「やっぱりねえ」と文花とコソコソやっている。千住姉妹も初めてお目にかかる。前に立っていると、必然的に注目が集まる訳だが、娘にやられることが多い手前、若い女性に対しては<sup>きょうきょう</sup>どうも競々となってしまう。モデルさんと目が合おうものなら、尚更である。

「エー、改めまして。皆さん、本日はようこそお越しくございました。小職、石島湊と申します」あがっているせいか、所属と職掌を言い忘れている。掃部先生がいらっしやらないので、余裕の構えでいたが、いざ話を始めるとこんなものである。チーフの招待客ご一行の席も少々ざわついていて、何はともあれ、十七日にちなんでか、ちょうど十七人の客を乗せ、川下りが始まった。

「時速は約四十キロ出ます。リバーステーションを交通拠点にすれば、下流各所を結ぶ足になると思いますが、これは巡視船なもので．．．」課長のトークが続く。仰せの通り、結構な速度がすでに出ている。荒川沿いを走る鉄道等がないことを考えると、水上交通の意義は大きく、相応の速度で結ばれるなら、交通手段として十分成り立つと思われる。荒川・新河岸川・隅田川を結ぶ水上バスは一応あるが、観光要素が強く、週末中心。生活の足としては考え難い。荒川に定期的な水上便が通れば、南実だって自転車ではるばる遊ってくる労を節約できる訳である。

それにしても、川における四十 km/h というのは本当に速い。水門だ、干潟だ、と見つかるもそれも束の間、すぐ後方に流れて行ってしまふ。干潟チームの九人は、下流に向かって左側に固まって着席している。その一団先頭の文花は、「あら、都市農業公園だわ。寄り道したいけど、ムリよね」隣の南実は、「ステーションがあればいいんでしょうけど。ああ、反対側ですね。残念」早くも<sup>しんてん</sup>新田を通過するところである。

巡視船の概要、下流の概況などに続き、ちょっとした観光案内が入る。苦手な先生が不在の分、徐々に調子が上がってきた石島課長である。

「この辺一帯は、足立桜堤ですね。で、見えてきたあの橋、高速道路の上下線が二階建てになっているのが特徴です。<sup>ごしき</sup>五色桜大橋と言います」

「なんか、桜、桜ってどうなってるの？ 名前呼ばれてるみたい」

「そりゃ、櫻さんあつての荒川ですからねえ」

「まあ、千さんたら」

何故か課長は乗船名簿をチェックし出して、「今日は櫻さんがいらっしやいますね」

「あ、ハイ」

千歳の隣で手を挙げる女性。本当に名前を呼ばれるとは。「あぁ、<sup>あなた</sup>貴女でしたか。結構なお名前で」

櫻を知る別の一団の方が何だか騒がしい。そこそこウケているようである。だが、当の課長さんは、千歳に然るべき連れがいることがわかり、ちょっと曇り顔になる。

そのお二人の前には、六と八の数字コンビが並んでいた。「あつ、日暮里・<sup>とねり</sup>舎人ライナーだ！」 さすがは鉄道少年。まだ開業していない路線も一発で当ててみせる。「八広さん、撮ってよ」 頼りないケータイをさっきから構えてはいたが、どうも<sup>おぼつか</sup>覚束ない。「隅田さんがちゃんと撮ってくれるよ」

後方では、撮影係がバタバタやっていた。「え？ あれ撮るの？」 すでにその新線は後ろに行ってしまった。「へへ。また、後でってことで」

振り向くと、姉妹と通路を挟んで蒼葉がニコニコしている。「ね、千さんて、スローでしょ？」

配られた地図を見つつ、解説を聞きながら、写真を撮り、メモを取り、である。決してスローだから、という訳ではない。

「そういうところがいいんじゃない。ねえ、千歳さん？」

「まあまあ。船の中でもノロけられちゃ、やってられないわ。船酔いしそう」

櫻は斜め後ろを向くと、

「どれどれ。はぁ、確かに顔が蒼白してるわねえ。下船した方がいいんじゃない？」

「私のは美白。姉さんと違って灼けてないもん」

石島姉妹は千住姉妹のこうしたやりとりを聞き、姉妹のあり方を参考にしているようだったが、<sup>おか</sup>可笑しくて仕方ないらしく、ヒーヒーやっている。父はそんな娘たちを微笑ましく見ている。

扇大橋を過ぎたところで、再び課長がマイクを取る。波が護岸を浸食するのを防ぐための通航ルールと標識についての話になった。この辺りのヨシ原は「自然保護区域」に重なる。ヨシ自体、ある程度の消波効果を持っているものの、船舶が大波を立てて通ると、さすがに効かず、水際が浸食されてしまうことになる。そのため、減速と「引き波禁止」の指定になっているんだとか。

「橋みたいな記号に赤で斜めに引いてあるのって、そういう意味だったんだあ」

「橋の下は通航禁止とかだと思ってたけど、あれって波だったんだね」

「石島さん、あれじゃ波だってわからない、って意見が．．．」

櫻が課長にツッコミを入れている。「あ、いやあ、そればかりは．．．」

先生<sup>ご</sup>不在でもこれじゃ先が思いやられる。

「あの、いつもの干潟のところも、指定してもらってことってできるんですか？」

今度は南実が発言する。かつて、大波にしてやられた経験あってこそその貴重な声である。

同行の職員とヒソヒソやってから、「いただいたご意見は一旦お預かりして、また改めて．．．」 だんだんアウェイな雰囲気になってきた。娘がいる手前、冷や汗もひとしおである。

早くも小菅<sup>こすげ</sup>を過ぎる。排水機場、水再生センターなどに続いて、京成線の橋梁が見えてきた。六月がまた声を上げる。

「おお、スカイライナーだ。千さん！」

「今度は大丈夫。グッジョブ？」

「スカイライナーかぁ。空飛ぶ特急って感じね」

これには六月も感心する。斜め後ろを振り向くと、櫻と目が合った。いつも通り、眼鏡越しでアイコンタクトをとるも、横川駅で素顔を知ってしまったからは、ついソワソワしてしまう。少年の心はスカイライナーの如く空を舞う．．． ちょっと大げさか。

櫻の素顔については、この人も知るころではある。ただ、しっかり拡大プリントでもしない限りはわからない、ということに今はなっている。

「千歳さん、私のプロマイド写真で、どうしました？」

「肖像代、払わないといけなからまだプリントしてないです。へへ」

「六月君に撮ってもらった方は？」

「眼鏡外した櫻さん見るの、ちょっとおっかなびっくりで」

「そっかぁ。私ね、本当は素顔をお見せしたくてずっとウズウズしてたんです。でも、ね．．．」

何かを察した蒼葉が斜め後ろから声をかける。

「櫻姉、ホラあれ！ ハープ橋だって」

「あら、本当ね。爪弾くと鳴るのかしら？」

「ちょっと、千さん、何とか言ってやってよ。姉さん、ここんとかおかしいのよ」

「そういうところがいいんだよ。ね、櫻さん？」

「もう、二人してえ」

十代姉妹は笑い転げている。時刻は十一時過ぎ。そろそろ折り返し地点である。

「では、ここ平井大橋で引き返します。どっかの学者先生が発音すると、白井大橋．．．いや失敬。今日先生いらっしゃらないから、つい口が」

「こらぁ、真面目にやれえ！」 笑っていた余勢に乗って、長女が野次を飛ばす。憎まれ口ではないことは誰が聞いても明らか。ほのぼのしたワンシーンである。

「あっ、今度は成田エクスプレスだっ」

巡視船が総武線鉄橋と並行する位置合いになった時、下りの空港行き特急が音を立てて走り抜けて行った。少年は感無量である。撮影係は、デジカメの電池残量が少々気になってきた。「ムム、鉄道をとるか、漂流ゴミをとるか．．．」 究極(?)の選択を迫られていたが、こういう時こそ、彼女に頼らないといけない。

「あ、私、カメラ持って来てたんだ」

「おお、神様、櫻様．．．」

「？」

櫻は六月にカメラを預け、千歳は本来の撮影対象に専念することになる。

「そういうことは早く言ってくれなきゃ」

「ハイ、櫻姫」

平素は的確な指示をよこす職人肌の千歳が、櫻と相対している時はちょっと冴えない一面を見せることが八広には滑稽ならしく、当人の斜め前で「クク」とかやっている。

隣の少年は車掌の如く、「次は八広<sup>やひろ</sup>お。八広を出ますと、曳舟、押上．．．」といい調子。八広はハッとして、船窓の外を見る。上り・下り双方の京成電車が走っていく。

「そっか、ここが。漂着ゴミとか凄そうだね」

「自分の名前と同じところは、やっぱ自分で何とかしないとね」

「まいったなあ」

今は千歳が笑いをこらえている。櫻は一人で「やしるお、しきふねえ」と悪ノリ中。何かと話題のその先生の新弟子さんも同じようなことを思いついている。

「先生きっと、ヒヌマって発音できないかも」

課長の話では、八広付近に生息する絶滅危惧種「ヒヌマイトンボ」に配慮しながら慎重に、京成押上線の架橋（架け替え）工事は行われたんだそう。

「そのトンボの話、先生の著書にも出てたわね。南実ちゃん、覚えてる？」

「発見されると、どんな大がかりな工事も止めざるを得なくなる、とか」

higata@に加わった冬木からは、情報誌に載せる予定の開催予告（十月七日）の文案と一緒に、他の実施予定会場の情報が流れてきていた。手元の地図を見ながら、その会場の位置をチェックする千歳。だが、会場選定の基準が今ひとつ掴みきれていない様子。こうして船から眺めていると、漂流・漂着ゴミがどのような状態になっていて、どこに溜まりやすいか、といったこともハッキリするのだが、必ずしもそうした視点とは一致しない場所で展開されているようである。

「おそらく、行きやすい場所かどうかとか、洗い場やお手洗いが近くにあるかどうか、足場は安定しているかどうか、いろいろあるんだと思う」 手順や諸注意の案をまとめただけのことではあって、櫻はもっともな見解を述べる。参加者の利便性や安全性を優先せざるを得ないのはわかる。だが、クリーンアップに力点を置くとするなら、船で横付けするなどして重点的にゴミを集めるという選択も有り得るのではないか。

船は北上を続ける。上流に向かって左側の景色が移ろっていく。鐘ヶ淵を過ぎると、

「あら、隅田水門ですって」

「水門の両脇、何だか草<sup>ぼうぼう</sup>々だねえ」

「自分の名前のところは．．． フフ」

「草刈り機、先生から借りるかな」

水門左岸はオオブタクサ、右岸はアレチウリ。いずれも外来植物で、その繁茂ぶりは目を覆うばかり。ここで課長が問題提起を入れる。

「まあ、自然てのはどこまで放っておいていいのか、逆にどこまで手を入れたらいいのか、悩ましい限りです。小職はどちらかと言うと放任主義ですが」

「だってさ」

「親父は家のこととなると、本当に放ったらかしだもんね」

「でも、あの干潟は何か手を入れたいみたいなこと言ってたよ」

姉妹は何やら聞き捨てならない話をしている。それは何となく千住姉妹の耳にも入っていた。

文花と南実は何やら金八先生の話で盛り上がっている。

「『贈る言葉』『人として』どっちも名曲よねえ」

「て、先輩おいくつでしたっけ？ 私、どっちも知らないけど」

「やーねえ、卒業式で覚えたのよ。初代金八先生やってた頃は、まだ未就学児童よ。ホホ」

就学中だが、小学校ご卒業まであと半年の六月君は、トレインビューに夢中。東武伊勢崎線に続き、つくばエクスプレス・JR常磐・東京メトロ千代田の三線連続の鉄道橋に息を呑んでいる。時刻は十一時四十分頃、東武線を下り特急が通れば、常磐線は下り「フレッシュひたち」、つくばエクスプレスも下り快速列車が並走する。櫻のデジカメを懸命に操るも、この際、どうでもいい。

「ああ、オイラ幸せー」

すっかり感極まっている。タイミングを見計らったかのような演出だが、あくまで偶然である。先だつての特命の報奨といったところだろう。

往路では反対側だったため、よく見えなかった自然再生地付近に差し掛かってきた。水際に根を下ろすヨシが群落を形成し、その前には粗朶そだを組んだ工作物が並んでいる。その隙間から干潟らしきものが見え隠れするがよくわからない。引き波を立てないよう、船はゆっくり川面をすべる。

「石島さん、波を消すものを配置するのが自然再生になるんですか？」

「ヨシ原を保護しよう、ということです」

「あの仕掛け自体も環境配慮型なんですか？」

「ええ、流木や廃材を細かくしたものです」

湊は千歳の思わぬ質疑に驚くも、何とかボ口を出さずに済み、ホッとしている。ところが、河川敷沿道をよく知る南実が黙ってはいなかった。

「ここ、千住桜木ですね。自然再生工事だかつて看板出てましたけど、あんな重機とか入れて、本当に自然再生になるんですか？」

「河岸の再生工事だったと思うんだけど」

「明らかに河川敷の緑地を削るような感じで現場設営してましたよ」

さすが、お弟子さんだけのことはあって、ツッコミどころが掃部流である。仰る通り、自然保護区域に対して、再生工事というのはわかりにくいし、そんな荒らしのような設営が為されたとあっちゃ...

「小松さん、この件はまた個別に...」

「いえ、そのうち先生を交えて」

タジタジになっている父を見て、小気味いいようなそうでないような、今は些か複雑な感懐を抱く娘二人であった。

今度は本名がそのまま出てきたので、櫻は目をパチクリやっている。

「つまり、ギを取ったら、私の名前そのままなんじゃん」

「千住桜木って、バス停もあったような... バスで訪ねて、この辺のこと調べてみ



ますか？」

「よかったね、櫻姉」

「エヘヘ」

とまあ暢気にやっていたら、すでに小<sup>おだい</sup>台付近を通過中。

「あ、いけねっ」

船窓からは、ペットボトル、レジ袋、カップ容器等々、漂流系のゴミが下流に向かって流れていくのが見える。川の流れ加減によるのか、蛇行の角度によるのか、一時的にゴミの放出が増えただけなのか。ここに来て、急に漂流ゴミが目立つようになった。エリアが局地的なのが何とも不可解である。電池切れ覚悟で何枚も撮影を試みては、その都度、目を凝らす。

再び日暮里・舎人ライナーの下へやって来た。まだ辛うじて残量があったので、今度はしっかり撮影。漂流ゴミと一緒に、というのが千歳流である。

「六さん、ちゃんと撮れた？」

「あわてて撮ったら、隣の電器屋さんが真ん中になっちゃった」

「じゃ、また弥生お姉さんに送っとくよ」

「やったあ。そんじゃ、櫻さんのカメラで撮った分も一緒にお願いしまーす」

江北橋から北へ、船はなお進むも、迎え撃つように漂流ゴミも続く。

「ねえ先輩、この船にニューストンネットくっつけて走ったら、やっぱりいろいろ捕れるんでしょかねえ？」

「あれだけ浮いてたらすぐいっぱいになっちゃいそうだけど．．．」

もともとはプランクトンや魚卵を採取する用のネットだが、プラスチック系微細ゴミの調査にも使われる。荒川で実践するとどうなるか、興味深いところだが、今左岸（正しくは下流右岸）を漂う品々を見る限り、文花の言う通り、すぐに大漁になってしまうだろう。その後も、水面清掃船がどうのとか研究員らしい会話がしばし交わされる。

千歳は撮影を休止して、某所干潟を眺める。今日のところは彼等のフィールドを船から眺めることはないが、他所<sup>よそ</sup>であっても川から見る干潟というのは大いに参考になる。寄居近辺では遠くにサギを見たが、下流域にも似たようなサギはいるもので、その干潟でひと休みしている。クリーンアップをしている最中は、人がガヤガヤいるので、サギが近寄れないだけなのか。人がいない時はゴミ箱干潟にも出没しているのだろうか。思いは廻る。ゴミの多寡はともかく、サギが出るということは、干潟が餌場として健全に機能していることを示していると言えそうだ。

干潟には「ゴミキャッチャー」（フィルター）としての役割もある。下流のあちこちに干潟があることがわかり、千歳は心強く思うものの、干潟があるから安泰と言ってしまつては<sup>いけ</sup>不可ない。自然力による本来の再生という点では、まず干潟が自然に形成されることが第一義。そして、その干潟からいかにゴミを除去するかが、人為による自然再生の優先テーマだろう。ゴミを掬う（または救う）という干潟の機能に頼りつつも、人ができることは進んで行おう。捨てるのも人、拾うのも人である。干潟に漂着したゴミについては、放任主義という訳にはいかない。サギ、カニ、ハゼ．．．干潟を生息地とする多種多様な生き物のためにも、ここは人の出番なのである。

櫻は櫻で、やはり川からの視点というものを心に強く刻んでいた。「まち」や「みち」



を歩く中でその地域の良さを見出すのは、足あっての話。足が及ばないところからの視点というのはまた違う良さが見えてくる。干潟にしてもヨシ原にしても、人が踏み入れないところにある故に息づく何かがある。少なくともそこに何かがあるかをマップに落とし込むだけでも、地域の人達の見方は変わる筈。ゴミが漂着してちょっとした惨状を呈することになっても、そこにゴミがある、という情報を上手く伝えられれば、良くも悪くも地域を見直すきっかけになるだろう。決して悲観することはないのである。

「漂着ゴミで地域再発見」 櫻は一つのテーマを見出そうとしていた。そして「陸の視点がグリーンマップなら、川の視点はブルーマップ、かな？」と思いつく。地域や流域の「いいもの」を探し、共有する。緑と青のコラボレーションといったところか。

千歳の「漂着モノログ」には干潟の機能論（ゴミが集まる 人が片付ける 生き物が集まる）が、櫻の「届けたい．．．」には、川の視点論が、後日それぞれ掲載されることになる。トークでは不発な面もあった石島課長だが、オプションルツアーそのものは上々  
と  
言  
っ  
て  
い  
い  
だ  
ら  
う。

櫻は、斜め後ろを振り返り、少女に話しかける。

「小梅さん、今日見た中でどこが印象的だった？」

「やっぱ、千住桜木じゃないですか」

「八八、そう来ましたか。じゃ皆で行って、地図作るっか、ね？」

当初は四姉妹企画の予定だったが、この話も大きくなってきたようだ。二人で出かける  
っ  
て  
の  
も  
選  
択  
肢  
だ  
っ  
た  
が  
．．． どうなることやら？

さて、石島姉と千住妹の対面がこの日実現した訳だが、お互いに聞いていた情報を交わすうちにある接点が見つかった。

「じゃあ、あの橋を渡って、お店に」

「六月のいつだったか、晴れた日曜、朝早かったことがあるんよ」

「自転車かすで掠って行ったの、初音ちゃんだったのね。『ごめんなさい』って一言がね、聞き覚えあって」

「へえ、お姉ちゃんが。何気に礼儀正しいじゃん」

「ちっとは見直したか、ん？」

小梅の初音評は「時にはコワイけど、本当は優しいお姉さん」に、最近はなってきた。お手本になりそうなお姉さんが増えたことで、気持ちに余裕が出てきた、というのがその初音評のもとになっているようだ。そして、今日は蒼葉と知り合うことができた。天気同様、上機嫌の初音である。

「名残惜しうございますが、船の旅はここまで、とさせていただきます。またのご乗船、職員一同、心よりお待ち申し上げます。本日はありがとうございました」

終わりよければ全てよし、か。どこまでが衷心かは不明だが、締め挨拶はなかなかの出来である。娘を含め、全員から大きな拍手が送られた。正午過ぎ、前座イベントは無事終了。

## 気まぐれ？パンケーキ

湊は、六月と小梅を連れ、荒川の資料館に行くと言う。文花の招待客は「船で帰りたい」などという輩もいたが、三々五々帰って行った。「ま、今日の催しのレポート書いてもらうことになってるから、それでどの程度、環境とか地域のこと考えてるか、わかるってもんだわ」 掃部先生が一目置くだけのことはある。チーフはなかなかのやり手である。

それはいいのだが、一人だけ徒歩、というのがちと冴えない。「えーっ、私、走るのイヤ」

そこは先輩思いの後輩。

「はいはい。これ貸しますから」

「ラッキー！ これ乗ってみたかったんだあ」

「先輩、壊しそうだからなあ」

「それ、出発っ！」

やり手かも知れないが、茶目っ気もあったりする。これも櫻の影響だろうか。

電動アシスト車の文花、<sup>リバーサイドバイク</sup>R S B の初音、酷使の跡が窺える自転車は八広。あとは普通の自転車が三台。アスリートの南実は「そのお店まで、1 km ないでしょ？ 楽勝、楽勝」と軽快に駆け出す。七人が向かう先はいつものカフェめし店。だが、ちょっと待てよ。

「干潟の下見、先にしましょう」 櫻リーダーからもっともな提案がなされる。少々遠回りになるも、とにかく下見！なのである。

各人各所、干潟を巡視した直後だけあって、思いもひとしお。彼等にとってのフィールドである干潟がどれ程のものか、すぐにでも見たいという気持ちが高まる。が、同時に、増水禍を見るのが怖い、という気持ちも。いやいや、来るべき一般参加型クリーンアップに向け、ここは入念にチェックしなければ。

同じ<sup>おそ</sup>慣れでも、この人の場合はちょっと違う。「八八、魚が打ち上がってたら、どうしよう．．．」 別の心配が先に立っている。今はただ、陸から一望するばかり。水際に近寄らなければいいのである。

「思ったよりもマシじゃない？」

「文花さん、それがそうでもないですよ。ホラ、あっち」

「あちゃー」

干潟面は事も無げだが、その崖上だったり周辺だったり、つまり「上陸ゴミ」が只ならぬ様相を呈しているのである。目立つものでは、大小様々なベニヤ板、灯油容器、給水用のウォーターサーバ、簡易打上げ式花火のセットが入っていたらしき大きな円筒缶、そしてどこかのスーパーの店内用カゴ．．． 干潟ではこれまでお見かけしなかった珍品のオンパレードである。斜面のヨシ群も上の方から横倒しになっていて、増水時の水位を身を以って示している。そこには<sup>ひし</sup>拉げたビニール傘が挟まっていたり、各種プラ袋が絡まっていたり、よく見ると枯れ枝の束も横たわっていて、さらにはいつもの常連ゴミの姿も。時折、ガサガサと音を立て、存在を誇示してくる。プラスチック系が目立つが、己の軽さに反比例して、その雑音は重く、叫びのようにも聞こえる。一同、沈黙考の図となるも、それぞれに思いを深めるにはいい機会となった。

南実はそろそろと干潟へ下りていく。

「今ちょうど退いてきた時間ね」

「小松さん、それ何ですか？」

初音は研究員の所持する手帳が気になる。

「潮時表っていうの。荒川標準てのはないけど、東京港の干満時刻がわかれば、だいたい察しがつく訳」

「こういうのも気象要素の一つスよね？」

「そうなのよね。ふだんはあまり意識しないけど」

現場では本当に学ぶことが多い。天気と気温は基本だが、川の汚れ具合、水位、そして干満。これらを総合することで、気象の因果、大気と川の関係性、さらには流域環境予報のようなものが導けるような気がしていた。初音の社会勉強は深みを増しつつある。

思索家の八広、画家の蒼葉、この二人は表現者として何かを思い描いているようである。彷徨しては立ち止まり、というのを繰り返す。

「こりゃ、人数要るわぁ」

「一般参加、解禁ですね」

「榎戸さんの情報誌にも載せてもらいますか」

文花、櫻、千歳の三十代トリオはすでに協議モードに入っている。続きは皆でカフェめしをいただきながら、と。

「あ、写真撮らなきゃ」

「私もバックアップしまーす」

そんな二人の撮影係を見ながらチーフは呟く。

「やっばいいわね、あの二人。週一度なら、職場仲間ってのも許される、かな？」

策士文花は確実に何かを企んでいる。お節介ともとれそうだが、あくまでセンターのことを<sup>おもんばか</sup>慮<sup>り</sup>っての一計のようだ。と、その時、

「先輩、これ見て」

後輩がケータイで撮った何物かをお目にかける。

「きゃー！」

それは潮が退く途中の干潟水面に出現したコイ(?)の雄姿であった。大きな魚はまだまだ苦手のご様子。

「それって、先輩イジメじゃないスか」

「こうやって慣れてもらわないと、本番の時困るでしょ。先輩想いって言ってよね」

南実としては、下見、即ちリハーサル、ということらしい。

十三時近く、七人の団体様がカフェめし店にやって来た。いつもは店員を務める初音も今日は非番なのでお客様扱い。それでも大事なお客様は自分で接遇しようということで、レジに回る。満席に近い状態だったので、他の店員はバタバタ気味。「いらっしやいませ。ご注文をどうぞ！」店員初音はここぞとばかりにお姉さん方にアピールする。晴天も手伝って、その接客態度は実にしなやかで良好。ここでは別人(こっちが素性?)になる、ということ存ぜぬ文花、南実、蒼葉はキョトンである。櫻、千歳、八広は勝手知ったる何ぞやでさっさとお気に入りメニューを頼んで、奥の円テーブル席へ。打合せ場所として

事前に予約しておいた訳だが、来店人数は乗船人数から数人引く程度という初音の読みはピッタリ。七人が囲むテーブルとしてはちょうどいい大きさである。

迷える女性三人は、店員から説明を受けながらようやくメニューを決め、すぐに食べられる状態あり、番号札あり、と各々異なるトレーを持って席に着く。七番目の客は、自分の気まぐれプレートとともに、大皿のサラダを持って来た。

「ご予約のお客様向け、サービスです。お召し上がりくださいーい」

夏野菜をはじめ、色とりどりでイイ感じ。六人は歓声を上げつつ「いただきまーす！」といいご発声。

「初音嬢、ここのお野菜って有機？」

「ええ。できるだけ地場に近い農園から買い付けてるって聞いてます」

「持ち込み野菜ってアリかなあ。うちのもそれなりに気は遣ってるんだけど」

「貸切で何かやる時とかなら．．．」

文花は、また何かを思いついたらしく、野菜を頬張りながら頷いている。櫻がそこで絡む。

「文花さん家の野菜って、大雨とか台風とかでどうかなっちゃったんじゃ？」

「手塩かけてますからね。そう易々とはダメになりませんことよ」

「手塩って言うか、お節介なだけなんじゃないですかあ？」

「お節介くらいでちょうどいいのよ。ねえ？」

と周囲を見渡すも、どうも同調する空気が感じられない。

「いいわよ。持って来ても食べさせてあげないから」

お時間をいただくメニューが来るまでのつなぎにしてはゴージャスな一皿である。自然と笑みがこぼれるが、文花と櫻の漫談は皆の笑気をさらに高じさせて止まない。サラダに「華」を添える二人である。

ピザトーストが運ばれてきた。大きなトマトの輪切りが乗ってたりして、ヘルシー感あふれる一品。「このメニュー変わってて、つい目移りしちゃったけど、私的にはこれアタリ」 南実の分がそろったところで、ポツポツ打合せに入る。こういう時の進行役は、年長のチーフに委ねる。

ふ「募集をかけるのはいいいとして、あんまり人数多くなっちゃってもねえ」

八「増えた時点で会場を分けるってのはどうスか？」

さ「それなら最初から振り分けた方がいいかもね」

ち「どこでどう分けるか．．．」

ふ「干潟チームと陸上チーム？」

あ「何かの競技みたい」

み「ああ、いつもの干潟の下流側にもプチ干潟ありますよ」

ふ「じゃ、そっちを第二会場にして、『情報誌見た』組にしようか」

初音も打合せに加わってはいるが、本来のお客様の飲み物のお代わりだなんだで気を回しているため、落ち着かない。

さ「情報誌って、持ち物も載せる形になってましたよね」

八「軍手、レジ袋、濡れてもいい靴、帽子、飲み物．．． あと、何だっけ？」

あ「筆記用具は？」

ふ「センターの備品、出しましょうか。でも、ケータイで直接打っちゃう、かな？」

さ「一応、データカードとクリップボードはあった方がいいでしょ。ボールペンは記念品として渡してもいい訳だし。備えあれば何とやら」

情報誌担当者は今頃スタンバイモードの筈なので、とにかくどう載せてもらうか、の議論を先行させる。

ち「読者層から考えて、お子さんばかりってことはないだろうけど、家族で参加する人もいるだろうから、持ち物の他に注意事項もしっかり載せた方がいいかもね」

ふ「未就学児童ご遠慮とか、お子さんだけの参加はNGとか、ってこと？」

八「一応、監視役しますけど．．．」

さ「水の事故って有り得ますね。監視はもちろん大事だけど、いかに事故を防ぐか、でしょう」

ふ「今日下見した限りでは、何とか無事そうだったけど、南実ちゃんどうだった？」

み「下りちゃえば平気だけど、途中の斜面ていうか、段差ですよ。下りる時に誰かついてればOKかなって感じ。小学生以上なら．．．」

ここで初音がようやく入ってくる。

「その役、私やります。子どもに近いって意味でも」

「それはごもっとも。初音さんなら、安心ね。まあ、蒼葉もまだ子どもみたいなおこあるけど」

「あら、私はずっと青葉さんですからね。若々しくていいでしょ。誰かさんみたいに散ったりしないもん」

「言ったなあ！」

という訳で、受付は二手に分け、情報誌組は、専ら大人中心。家族連れの場合は、基本的には親御さんに安全上の注意をしてもらうも、八広が監視なりフォローに入る。人数にもよるが、プチ干潟の方も視野に入れ、その第二会場には千歳がリーダー、冬木はサブリーダーと仮に決めておくことにした。いつもの干潟の方は、小学生以上を受け付けるも、初参加の方は干潟面にはあまり誘導せず、主に陸上をやってもらうという案がまとまった。ただ、活ける教材である干潟を紹介しない手はないので、安全の確認がとれたら、降り立ってもらう、というオプションも設定する。何だかんだで十四時。文花はここで席を外し、情報誌担当に連絡を入れに行く。引っ込み思案でも何でもなし、堂々たる物腰。「そんじや、ピシッと話してくるわね」

「魚が出てきても、あの調子だったらいいんですけどね」

そんな文花が食べていたのは、週替りの「サーモンマリネ丼」である。

「はい。Edy です」

「あ、榎戸さん。higata@ではお世話様。矢ノ倉です。お話するの初めて、ですかね」  
さっき話し合ったことをざっと伝えるものの、どうも相手の反応が思わしくない。

「え？　すでに流れちゃった、ですって？　フライングじゃないの！」

「いえ。詳しくはホームページで、ってしてあるので、先ほどのお話はそこで」

「だって、誌面は誌面でしょ。当日参加OKってことになってるんだったら、尚更ちゃ

んと書かなきゃ」

「いやぁ、こっちも切羽詰まってるもんで。あとでまた**メーリス**に最終形、お渡ししますんで」

「最終形って何よ。ちょっと！」

この間、初音は厨房へ。残った五人は、店の出入口の方を気にかけるも、距離があるので様子はわからない。「いやぁ、やられたわ」 ヤレヤレ顔で戻って来た文花に千歳が問う。

「榎戸さん、何ですって？」

「たく、何が**エディ**よ。どっかの電子マネーじゃあるまいし」

話が見えないが、何か良からぬことが起きていることはわかった。誰かがうまく聞き出さないと、文花だけに「噴火」しそうな勢いである。この時、厨房では、

「ありゃ、パンケーキはじけちゃった。これが本当の『パン』ケーキ、かな？」

何かを暗示するようなプチアクシデント。だが、決して笑えない。

さ「フライング、ですかぁ」

ふ「やっぱ、広告代理店系ってダメねえ。自己都合で走っちゃうんだから」

み「まぁ、今回は掲載不可って話じゃないんだし……」

ふ「不可って話になってたら、どうするのよ！ これは信用問題。あぁ、頭来ちゃう」

ち「メーリングリストでそこそこ詰めてたから、大丈夫だと踏んだんでしょ。ま、その最終形とやらを拝見して、こりゃあんまり、ってことだったら、今後は願い下げ、って**ん**でどうです？」

さ「あとはとにかく、そのホームページ情報の方をしっかりフォローするのと、当日受付を強化するのと、ま、こっちでできることを考えましょうよ」

八「そうすね。どんな案内が出るにせよ、物を言うのは『現場力』。それが試されるいい機会だと思えば…… 経験者豊富なんだから、大丈夫っしょ」

ふ「現場力かぁ。いいこと言うじゃん」

年長者ゆえの責任感か、激しい一面を見せた文花だったが、櫻がうまく取り持ち、この八広のまとめにより、一件は収束に向かう。

「皆さん、お待たせしました。ちょっと早いけど、おやつ時間ですよ」

男性二人は井、千住姉妹はデニッシュプレートを食べ終えていたが、文花の井、南実のトーストはまだ少々残っていた。議論に熱が入ると食事がそっちのけになる、というのは研究機関関係者の特性なんだろうか。ゆっくり食べるというよりも、単なる食べそびれ。おやつが出てきたところで、あわただしくパクパクやっている。これはスローフードとは言えない。

「それじゃお先に」

「いただきまーす！」

櫻と蒼葉が唱和する。この辺の呼吸の良さは姉妹ならでは、か。大皿には七枚のパンケーキ。ハチミツ、ジャム、ホイップクリームが別に添えられ、好きなように試せる。

「あ、飲み物、お代わりお持ちしますね」

「まあまあ、初音さん。お熱いうちにどうぞ！でしょ？」

客は一樣に美味しそうに食べている。それだけで満足だったが、自分でも同じシチュエーションで食べてみないことには、である。

「ヤバイ。美味しいかも」

ここでのヤバイの意味は、アラウンドサーティーまではわかっていたが、年長さんには理解できないようだった。

「え、どっちなの？」

「文花さん、それって天然？」

「天然？ パンケーキのこと？」

「ダメだ。本当に天然ボケだわ」

和やかな時間が流れていく。パンケーキはその名の通り、場をパン！と盛り上げるのに一役買ったようだ。

同じ頃、資料館をひと通り見学した若いお二人さんは、ロビーで休憩中。六月は、リュックからある品を取り出す。

「あの一、これ」

釜めし店の袋に入っていたのは、釜めしの容器。ご丁寧に購入時同様、ヒモで結わえてある。

「へへ。これ欲しかったんだ。ありがとう」

「でも、何に使うの？」

「お姉ちゃんここで、釜めし作ってもらおうと思って」

「釜めし？ カフェめしじゃなかったっけ？」

「あ、もう一つのミッションは？」

「忘れてもうた」

周到な六月君に限って、そういうことはない。小梅は首を傾げるも「ま、これ重いのに持って来てくれたんだもんね」と満足そう。川の流水模型を試しながら唸っていた湊だが、同様に満足げな顔で戻って来た。

十五時、父と次女は家路につく。少年は再び上階へ。流域の大地図を見つつ、今日の巡視ルートを確認している。「千住桜木、オイラも行こつと」 六月にとっての秋はやっぱり行楽のようである。

さて、残る議題は、天候判断、タイムテーブル、より詳細な役割分担、といったところ。結構ロングラン状態になっているが、まだまだこれから、である。

「弥生さんにショートメール入れます。八時にモノログ掲示板に載ればセーフ、スよね？」

「万一、雨天の時は翌週、それとも翌日？」 ハレ女さんが心配する。

「いろいろ準備したものがすぐシフトできるって意味じゃ、翌日の方がいいんじゃない？ センターも休みだし」

「じゃ、その辺も開催予告に載せときましょう」

実施手順は higata@ 上の議論で練ってあるので、あとはそれを時間軸に落とし込むだけ。だが、



「ま、あんまりスケジュール固め過ぎちゃっても何だから、あくまで目安ですね」

当日はコーディネート役だが、タイムキーパーも兼ねる都合上、櫻としては余念がない方が安心なのだが、あえて緩やかに設定した方が身動きがとりやすい、という経験上の判断が働いた。会場設営の案が今日まとまったことを受け、次はタイムテーブルの素案作り。役割分担もそこに盛り込もうというのが櫻の発意である。

船で配られた流域地図の裏が白紙だったので、そこに線を引き、ワイワイガヤガヤと時間割を埋めていく。参加者数にもよるが、レクチャーをどこまで充実させるか、が論点となる。

「タイムテーブルと注意事項は、模造紙大にでもして掲げるとわかりやすいでしょうね。その説明は私がするとして、あとは『ゴミと生き物』とか『漂着ゴミの実状と課題』とか、『なぜ』の部分．．．」

「僭越ながら、小松南実が担当するのはどうです？ 解説用のフリップもあるんで」

何だかすっかり頼り甲斐のある好人物になっている南実嬢。千住姉妹が警戒心を解くのも尤もである。

「時間があれば、実地研究？」

「いえ、手が空いたらゴミの相談係しながら、手伝いますよ」

higata@メンバーで今のところ出欠不明なのは、業平と舞恵。分担もまだ決まっていない。

「Go Hey 君は実機のテストもあるからきっと来るでしょう。少々頼りないけど、粗大ゴミ専任でとこでしょうかね？」

「ルフロンにはあとで聞いときます」

「え、何？ フロン？」 文花の天然が始まりそうだったので、ここは蒼葉がフォローする。舞恵からは自己紹介メールが流れてはいたが、あっさりしたもので、当然呼び名についての説明なんてなかったものだから、疑問に思うのも無理はない。

「『まえ』で le front ねえ。彼女のメアドの理由がわかったわ。私もそういうカッコいい呼び名考えよっかな」

「やっぱり『ふみふみ』でしょう」

「先輩、昔は『おふみさん』で」

「生きていたとは、知らぬ仏の『おふみさん』てか」

「八広氏、何でそんな懐メロ知ってんの？」

当人は正に知らぬ某で冷めた珈琲を啜っている。「いいわよ。隅田さんも『おすみさん』にしちゃうから」

文花は何だかんだで人気者である。笑いを誘っておきながら、すまし顔。そのさりげなさが人気の秘密のようである。

「そうだ、いいもの持って来てたんだ」

一同の衆目が集まる。ここからは余興である。

「おすみさん、手伝って」

「櫻さん、あのねえ」

「いいからいいから。こっち半分、隠しといて」

画用紙を丸めたものを取り出すと、左半分が見えないように、さっき使った白紙で隠すよう指示が出る。

「では、皆さんに問題です。こっちに書かれたこの数字、実は五月から九月までのクリーンアップで調べたゴミの集計数だったりします。干潟ゴミ ワースト10。わかるかな？」

ワースト10：五十三、9：七十六、8：八十三、7：八十七、6：九十六、5：百四十七、4：百七十、3：二百二十七、2：三百四十一、ワースト1に至っては何と四百八！

「データカード対象外品目が二つ入ってます。あと、レジンペレットは別枠です」

「櫻さん、上位十品目でこんな数字になってるってことは、全体だといったい？」

「確か二千二百くらいだったかな」

「チリも積もれば、じゃないけど、要するにその数、数えたってことよね」

「これも皆さんのご協力のおかげ。その成果を分かち合おうって企画です」

選択肢がないと難しいところではあるが、下から順に当ててもらうことにし、何とか、紙パック飲料、缶、ホース（被覆）類が出た。カード対象外品目二つがネックだったが、見慣れているせいか、案外すんなり出たので出題者は拍子抜け。だが、難しいのはここからである。

「あとは目に付くのを言っていけば当たるんでしょうけど、せっかくランキング形式にした訳ですから。では、蒼葉くん、第七位どうぞ」

「雑貨じゃないの？」

「残念でした。それは十一位。おふみさん、わかりますか？」

「当たったら何かもらえるの？」

「ハズレたら罰ゲーム！」

「何よそれ」

こんな調子じゃいつまで経っても終わらない。とにかく、タバコの吸殻、レジ袋系、と出て、残すはワースト五品目。

「ここからは、すでに名前が挙がったものもあるので、皆さんお手持ちの紙に書いて当ててみてください。制限時間は二分、かな？ ご参考までにデータカードの見本、回しまーす」

「なぁーんだ。早く出してよ。櫻姉！」

「頭のトレーニングよ。これがあるとかえって迷うでしょうし」

十六時近くになり、正解が発表される。

「ピタリ賞はいませんでしたねえ。惜しかったのは小松さん？」

「ペットボトルが四番目だったんですね。発泡スチロール片の方が多いと思ったけど」

「いや、隠れてる分もちゃんと数えると変わるかも知れないです。ワースト1から3が合ってれば、大したもんだと思いますよ」

「でも海ゴミとは微妙に違うのね。より生活感があるっていうか」

概ね好評だったので、十月七日当日は、アトランクションとしてこのクイズもやることになった。選択肢を用意して、ワースト7を当ててもらう、そんなイメージである。

ふと八広が疑問を投げかける。

「二回やってみて思ったんすけど、その起源別ってイマイチ伝わりにくい感じしませ

ん？」

「これが世界共通らしいから、とりあえずそのままだったんだけど、言われてみると確かにね」

「他には、可燃・不燃・資源の別、素材別、品名の五十音順、いろいろアプローチはあるみたいだけど」 情報源さんが応じる。

「いずれにしても、子どもにとっては難しい面もあるだろうね。形状別 素材別だと、わかりやすいかな？」 これは千歳の発案。

「データカードも併用するんだったら、そのモノのイラストをちょこっと入れると直感的に把握できるようになるかも。破片が悩ましいけど」

「とりあえず当日はケータイ画面をメインで使って、カードは予備かな。品目の配列については、またじっくり higata@で議論 . . . 」 と言いかけたところで、櫻は初音に目を向ける。

「初音さんもメーリングリストに入ってもらえればいいんだけど . . . 受験生に負担かける訳にいかないもんね」

「弥生さんと適宜やりとりしてますから、大丈夫ですよ。受験が落ち着いたら、ぜひ！」

こうして午後の部は終わりを迎えた。文花と南実は居心地がいいからとか言って、二人席に移って珈琲タイムを続けている。当店はカフェなので、カフェオレの他、カフェラテ、カフェモカなどもあるが、お代わり可能なのは、普通のコーヒー (Hot or Ice) とティーのみ。長居を想定して、アイスとホットのコーヒーを頼んでいた二人は、お代わりしながら交互に飲み比べをしている。研究者というのは何事も研究熱心なものである。

「すっかり長居しちゃって。でも助かりました」 初音に一礼する千歳。

「いえいえ。今日はパンケーキの試食会も兼ねてましたから。モニターさんにはサービスしないと」

「じゃ初音さん、あれメニューになるの？」

「週末のティータイム限定で、枚数も限定。でも、ネーミングが . . . 」

ネーミングと来れば、この人。

「『初姉の気まぐれパンケーキ』ってのはどう？」

八広案の採否は不明だが、十月からは新たなデザートメニューが加わることはほぼ確実 (いや、それこそ気まぐれ?)、乞うご期待である。

日中は暑かったが、この時間になるとさすがに風は秋の涼気を含む。八広は商業施設の送迎バスルートに沿って帰って行った。千歳は姉妹としばらく並走していたが、途中で折れる。「では、櫻姫、蒼葉姫、また！」 妹がいる手前とは言え、秋風のようにクールな彼であった。

橋に出るまでの坂道を、自転車を押して歩く姉妹がいる。

「千さん、帰っちゃったけどいいの？」

「いずれ、お招きいただくことになってるから、今日のところはいいんだな」

「それはそれは。ところで姉さん、眼鏡だけどさ . . . 」

「まだ外しちゃダメってか？」

「今日はハラハラしちゃったわ」  
「千歳さん、どんな顔するかなあって」  
「そういうお楽しみはとっておかなきゃ」

眼鏡をかけているのは、近視の他にも何か理由がありそうである。

もう一方の姉妹は、釜めし容器を前にしてちょっと盛り上がっている。

「六月クンたら、切符がどうのって自分から言っというて、忘れてもうた、だって」  
初音はぼやく小梅をなだめつつ、ヒモを解く。

「あれ？」

「あ、何これ？」

小梅が取り出したのは、硬券切符二枚。

「大金⇄宝積寺だって。どこだろ？」

「メモが付いてんじゃん。『お姉さんと分けてください』だって。いい子だねえ」

「合格祈願とはちょっと違うけど、縁起良さそうだからいっか」

なかなか手が込んだことをする小学六年男子なのであった。勿論、自分と実姉の分も忘れてはいない。ちゃっかりしている、といった方がいいか。

comeon/

翌日はいろいろなことが動き出すことになる。「漂着モノログ」には、巡視船ツアーの話題とともに、十月七日の開催予告が晴れて掲載され、higata@には、冬木のお詫びの一文と問題の情報誌掲載稿が流れた。どうやら予告の掲載を断られたとしても、自分で別会場を用意するつもりだったようで、「情報誌読者専用受付にお越しく下さい」との一文が付されていた。何とも無謀というか突飛というか、仕事柄、イベント慣れしている、ということなんだろうか。どっちにしても、受付はしっかり設営した方が良さそうである。

十八日、十八時。終業時間になったが、櫻はここからがひと作業である。皆で下書きした素案をもとにPC上で、タイムテーブル(兼 分担表)案を打っている。「いつ・どこに・誰が」配置されているかが一目でわかる、というのはこの手の催しでは要目となる。この辺りを会得できたのは、18きっぷツアー中、千歳マネージャーに赤入れを頼んだのが利いた。短時間であっても、プロセスを「見える」ようにする。それは心得の一つである。「櫻さんとの恋の行方とかも考えてるのかしらねえ...」と彼女はちょっと違うことを考えながらも、軽やかにカタカタとやっている。

そんな折り、軽やかとはいかないが、<sup>はつらつ</sup>澀刺とした足音が近づいてきた。

「あら、センセ。お早いお着きで」

「おう、矢ノ倉女史に、千住の櫻さん。今日も華があって結構結構。何か落ち着かなくてさ」

早速、紙燈籠の分析結果から。

「エーッ、あの灯籠一つで、CODが十二グラム、BODが六グラムちょっと、ですって」

「まあ、何だかそれなりに負荷がかかってるって話だな。実験でドロドロにされちゃっ

たから、今はこのザマ．．．」

手にしたのは二重三重にパッキングされた透明袋。ゲル状の怪しげな物体がへばりついている。

「これじゃあんまり供養にならない、かも知れませんね」

「て訳でさ、こういうニュースを自分のブロック、もといブログで発信できりゃいいんだけどさ。隅田君にここで見てもらいながらじゃないと、何だぁな」

「今ちょうど助手がいますから、呼んで来ますよ」

誰の助手なんだかよくわからないまま、とりあえず眼鏡の女性がやって来た。助手と言われれば、確かにそれっぽいが、はて？

「センスのブログって、さくらブログと同じ理屈でしょ？ レクチャーしていただけると嬉しいんだけど」

「千歳さんから、何か受け取ってます？」

「あ、説明書預かってたんだ。失敬」

「さすが、知らぬ仏のおふみさん！」

先生がいよいよがいまいが、毎度この調子。「おふみさん、てか。今度からそう呼ばせてもらうよ」 櫻もお節介になったものである。

センター備品のデジカメで、ドロドロになった元燈籠（これが本当の紙ドーロー？）を撮り、メモリカードをPCのスロットへ。

「左側の『新規記事』を選ぶと、入力画面が右に出てきます。タイトルと本文が最低限入っていれば、すぐ掲載できますが、今撮った写真もせっかくなので」

画像選択ボタンを押して、ファイルを参照させたところで保留。先生には記事本文をその場で打ってもらう。

「画面下の『保存』を押すと、確認画面が表示されます。ここで切っちゃうと水の泡になっちゃうんでご注意を。最後にもう一回『公開』を押して、完了です」

「完了って、これでホームページに載るってか？」

「ええ、ホラ」

櫻のブログは末尾が” todoketai/ ” だが、掃部先生のは、その名もズバリ” comeon/ ” になっている。俄か助手は苦笑しながらURLを打って、掃部ブログをその場で披露する。

「いろんな人に見てもらうための工夫とか、記事に対しての反響を集める仕掛けとか、レイアウトも変えられますし、ちょっとしたお遊びみたいなのも載せられます。自由自在なんですよ」

「いやぁ、こりゃ参ったな。本にしなくても、これがあれば言いたいこと言えるって、か」

「ブログで書きためといて、あとで本にするのもいいんじゃないかって。ブログの設計者さんは言ってました。先生、次の新作に向けて、いかがです？」

「あんまり書き過ぎると、ネタばらしになっちゃうよな。でも、早く伝えたい場合はそれもいいか」

櫻と入れ替わりにカウンターに着いていたチーフが戻って来た。

「センス、相乗効果ってのもあるんですって。ブログで小出しにしといて、本で堂々と全容を公開。本が出たら今度はブログでこぼれ話とか追加情報とか。どうです？」

この日は、Comeon! ブログのリリース日にもなった。だが、今日先生に来てもらったのは他でもない。別に大事なお話が控えている。

「櫻さん、ありがとね。時間外つけといてもらうか、明日、シフトしてもらうか、お好みで」

「文花さん、先生とお話あるんでしょ。私、カウンター入ります。でも、仕事っていうか、昨日の続きやってるんで、別に手当とかはいいですよ」

「わかった。おすみさんとのデート権、てのどう？」

「じゃどっかでデート休暇、ください！」

こんな感じで今のところは勤務形態も緩やかだが、法人化された暁にはそうもいなくなるかも知れない。そうした点も含め、代表理事の意向というのを固めておきたいところ。今日はその前段となる相談事である。

「当センターの運営団体を法人化するにあたり、役員を決める必要があります。掃部さん、ここは一つ一理事として、いえ、代表理事を前提に役員の就任をお願いしたく」

「ハハア、そういうことか。他の役員さんは？」

「これまで関わっていただいた方がそのまま、という訳にもいかないんで、ちょっとした内規を作って、選考過程を経てもらおうかな、と。今、その途中です。他にも役員候補者を募って、代表理事はそこから互選することになりますが、ある程度、この方！というのを想定しておかないと、定款とかも作りにくいんで。その・・・」

「おふみさんのお願いとあっちゃな。例のし瀉の皆さんと一緒に何かできるんなら、喜んで・・・」 が、しかし、

「と、言いたいところだけど、もうちょっと考えさせてくれねえかな。まだ平気だろ？」

「ええ。とにかく役所関係と渡り合えるって言うか、市民主導のセンターにしたいんですよ。官製の特設非営利活動法人とか、そういうのにしたくないんです。で、何と言っても、地域への愛着というか愛情を共有できるような、そんな場所に・・・」

文花は思いが溢れて、言葉が出なくなるも、先生はウンウンと首を振って得心しているご様子。

「次の片付けはいつだっけか？」

「あ、来月七日、十時集合です」

「じゃ、そんな時に返事するよ」

「どっちにしても、終わった後にお時間くださいネ」

十九時を回った。櫻はまだカタカタやっていたが、あることに気が付いた。

「誘導係って決めてなかった、かも」

文花は、今ひとつスカッとしていないものの、少しは手応えを得て、ホッとしている。

「あとは他のNPO法人に倣うというか、できれば失敗例とかがわかるといいんだけど」かくして、二人は同時に声をかけ合うことになる。が、ここは年長優先。

「隅田さんて、ジャーナリスティックなところあるけど、NGO/NPOのことって、詳しいかしら？」

「情報にはいろいろ接していると思いますけど、フットワークという点では宝木さんの方が上でしょうかね」

「ここは一つ higata@かな？」  
「じゃ、私も相談メール打とうっと」  
「あ、そっか、何の話だっけ？」  
「今度のクリーンアップ、公開参加型だから、会場誘導の係が要るなあって思って」  
「昨日の打合せで、ルフロンさんが未定って言ってたけど、彼女は？」  
「舞恵さんだけに、前で張っててもらおうって？ うまい！」  
「どっちみち、案を流すんでしょ。その時に確認、ね？」

higata@への発信は、職場からもできるようにしてもらっていた。タイムテーブル(兼 分担表)案は、出来立ての状態で配信される。より早く確定できる、という点でこうした設定は重要。だが、つい気が回って、「注意書きとタイムテーブル、手書きで行くか拡大コピーするか、ムム」など、新たな悩みが生じることにもなる。「も一回、追伸メール、発信！」 メーリングリストというのは便利なものだが、職場で使える、というのは時に考え物かも知れない。いっそ、クリーンアップ活動をセンター主催にってしまう、という手も... いやいや、ONとOFFの区別がつけにくい、それでいいのである。緩やかな状況にあってこそ、その人の持ち味が活かせる、そう心得たい。

十九時半を過ぎ、櫻はセンターを出る。「しまった！ 蒼葉に連絡してなかった」 妹は食卓で待ちぼうけ。クリーンアップ関係の作業は、帰宅後(OFF扱い)の方がよろしいようで。

### 名月あつての名案

一週間後は、中秋の名月デーである。  
「櫻さん、また帰らないと妹さんに怒られるんじゃない？」  
「大丈夫です。千歳さんと会うから、って言ってあるんで」  
「だって今日は一応、仕事絡みよ」  
「そうっておけば、おとなしく認めてくれるんで」  
「よくできた妹さんだこと」  
「姉譲りですワ」

名月は東の空から徐々に高度を上げつつある。十九時にしてすでに辺りは暗い。いつしかそんな時候になった。

フットワークの軽い八広がまず現われた。文花がご自慢の珈琲を淹れに行っている間に、千歳が到着。帰宅しているはずの接客係がいたものだから、「ワッ」とかやらなくても、十分不意打ちになっている。

「あれ、櫻さん」  
「いらっしゃいませ！」  
「早番じゃなかったっけ？」  
「そんな、せっかくお待ち申し上げてたのに。いない方がようござんしたか？」  
「滅相もございません。またドッキリネタかと思い...」  
「何か、いいスね」 八広が短評を入れる。  
「あら、宝木&奥宮ほどではございませんわよ」



四人分の珈琲を持って、チーフは先に円卓へ。

「今日は窓際でやりますか」

男性二人は円卓を移動させ、準備完了。いや、まだ出し物があった。文花は珈琲を置くと、今度は自分の机上から小皿を二つ運んで来た。よく見ると、大ききの揃った球状のものがそれぞれ複数...

「そっか、お月見スね」

「じゃ、これ食べたら帰ろっか」

「千さん、たらあ」

「文花よりダンゴって？ そうはさせないわよ」

お彼岸で向島方面に行った際、わざわざ買っていたらしたとのこと。

「草餅か、桜もちか、団子か、悩んだけど、月見ですからね」

「白とアズキってのは色でわかるけど、この黄色っぽいのは何ですか？」

「味噌餡ですって。お試しあれ」

「コーヒーと味噌って不思議... あら、美味しい」

女性二人は何だかんだ言っても、団子好きである。このまま本当にお月見で終わってしまいそうだったが、文花はちゃんと憶えている。

「それでね、いわゆるNPO法人の役員体制ってのにこう、ひな型みたいなものがあるのかまずお伺いしたくて」

「活動の実績とか内容によるでしょうね。その活動を支えてくださった方々に対して会員参加のお願いをしつつ、これまで事務方や意思決定をしてきた方からは役員候補を選んでいく。その辺りは共通だと思いますが」

「役員の選び方や人数なんかはその会の定款で決めればいいことですから、これが型なのは特にないかも知れないっスねえ。まあ、代表、副代表、理事複数、あと監事？」

「八広君に云わせると、あくまでその団体の実情に応じて、身の丈に合わせて、というか、とにかく多様でいいって」

「最近、NGOとNPOとNPO法人の違いも随分曖昧になってきて、NPO法人=会社って思う人も増えてるみたいスね。もっとも、その法人を興す人達が、役所関係だったり、企業関係だったりだと、いくら表向き非営利でも、関わる人の体質上、組織色が強くなりますから、会社と見紛うのも仕方ないでしょうけど。要するに、多様といっても、そういう官製とか会社製とかまで含めていいかどうか、てのはあります」

文花は思うところと一致するらしく、フンフンと相槌を打っていたが、ここで質問を挟む。

「NPOはより概念が広くて、市民活動全般てのはわかるけど、それに法人がつくととなると、やっぱり法人としての制約を受けるってことになるの？」

「法人格を取るかどうか、選択肢の一つスよね。いろいろな市民団体取材しましたけど、しっかりした体制が組んであれば格なんて要らない、ってところがあれば、格を取らないと仕事にならないから、なんてところも。ただ、非営利云々よりも法人という括りが優先されちゃう感じスね。法人格てのは、公的なルールに乗せるための役所の便法みたいな側面があるのも事実です。制約、即ち公的な縛り、と言えるかも知れません」

千歳も聞き知るところを口にする。

「法人実務ってのが出てきますから、それをこなせるだけの人員というか、組織の体力が必要になりますね。でも、格を維持するために本来の非営利活動がおろそかになってしまっただけは意味ないでしょうから、そこが判断の分かれ目というか．．．」

「何故、法人格？てのは正直あるわね。最初から既定路線になっていた、というか。でも役所から委託を受けて運営する手前、要ることになってるのよね」

「何となく官製な感じがしなくもないですけど、矢ノ倉さんにある程度、裁量権があるなら、いい方ですね」

「いえ、単に今の準備会役員の方々がうるさくないだけで、ちゃんと公募がかかったらどうなることか」

「選考方法とかは委ねられてないんですか？」

「そこなのよ。だから今日お二人に来ていただいた次第．．．」

「委託主からは特に？」

「地域振興から環境に担当部署が移ったのと同時にね、担当課長も異動になったの。気心知れてるってのもあるだろうけど、もしかすると委託先を入札方式にする可能性もあるから、お手並み拝見ってことなのかも。あーあ」

「まあまあ。人選も裁量のうち、ということなら、チーフのお好みでいいんじゃないですか？」

「あとでね、説明責任だっけ、選考過程を開示しろなんて話になったら、そういう訳にもいかないでしょ。何となくそれっぽいことは考えてはいるんだけど、ね」

想定代表理事を立てて、書類選考をその人をお願いしつつ、自らも理事候補に名乗り出てもらうこと、これまでの役員さんには選考をってもらうこと、関係筋を中心に公募をかけて課題論文などを通して新たに選ぶこと、そんなプランを語る文花。

「今の役員さん？は自分が代表に、とか言ってこないんですか？」

「櫻さんと顔なじみの人が多いから、安心感があるのか、あまり関心示さないみたい、ね？」

「ま、センターにいらっしゃればお話聞いて差し上げてるんで．．．」

運営に不満があったり、<sup>とかく</sup>兎角主張好きだったり、単に己の虚栄心を満たしたいだけだったり、出たがる人には相応のタイプがある。そんな方が<sup>たまたま</sup>偶々いらっしゃらなかなただけかも知れないが、櫻の接客術ないしは人となりによって抑えられている可能性は否めない。

「代表理事候補の方にはすでに打診されてるんですか？」

「ええ、まあね。お返事はまだけど」

さっきからすっかりインタビューア－調で千歳の質問が続いていたが、ここでブレイク。八広が体験談を持ち出す。

「この間の話じゃないですけど、退職後NPOだとか息巻いて、イケイケの方が代表理事に就いたりすると、ね。運営に馬力が要る場合はともかく、市民活動の性格上、ちょっとどうかな、って思う事例は結構．．．」

理事が偉そうにスタッフをこき使う例、役職や肩書きがお目当ての輩ばかりで機能停止している例、もっとタチが悪いのは人の上に立ちたい人ばかりが集まって覇権争いが生じている例．．． どこでどう情報を稼いだのか、その事情通ぶりには目を見張るものがある。イケイケ路線に懐疑的な割には、自身はいい意味でイケイケな八広である。何はとも

あれ、生来のフットワークと、時代背景から来る<sup>しくじ</sup>たる想いが彼を駆り立てるのだろう。現場で得た生の声の蓄積、その場数の豊富さ、これは強みでもある。斯く斯く然々を経て、役員体制を考えるにあたっては、候補者をしっかり見極めることが重要、というのが八広の話から導かれる。

「そうは言っても、所詮は人が関わることなんで、何がどう転ぶかはわかりません。そこで事務局長の役割が大事になってくる、そんな話も聞きます」

千歳が取り次ぐ。

「権限が集中するからって、事務局長は理事を兼任できない、てな規定を設けるところもあるみたいですね。でも、仮に他の理事が暴走したりする局面があったら、それを止めるのはやっぱり事務局長なんですよ。その時、同じ理事という立場でないと、ってなる訳です。勿論負担感は大きくなりますし、自制心も求められますけど、懸ける想いが人一倍強い方なら問題ないでしょう。兼任してでも、だと思えます」

黙って聞いていた櫻だが、ここでいいことを言う。

「ひな型どうこう、というよりも、自分たちがこうしたい、というのに応じて定款とか体制とかを考えていけばいい、ってことでしょ？ 私、文花さんには是非、兼任で切り盛りしてほしいです」

「あら、ありがと。でも、櫻さんがいれば、暴走する人は出ないと思うけど？」

「いえいえそんな．．．」

何かいいシーンである。だが、今は余韻に浸るよりも、話を深めたい櫻である。

「でもよく考えると、文花さんが理事になるのに、選考過程って要るのかな？」

「匿名で課題論文を出し合って、候補者相互でポイントを付け合うってのは一つの手ですね。でも、選考委員がいるなら、その人に一存かな？」

「公募でどれだけ候補者が出てくるか、もありますね。多ければ論文選考もいいけど、少なければ会員による投票でもいいかも知れない」

「会員って、まだ制度化してないわぁ」

「でも、募集かければ早晚集まるんじゃないですかぁ？ マメに情報送ってることだし」

「そうねえ。いや、忘れちゃいけない。名物三人娘効果の方が期待できるわよ」

「じゃ、おふみさんコースとさくらさんコースとか？」

「ファンクラブじゃあるまいし。だいたいおふみさんて何よぉ」

女性二人が掛け合いをやっている間、男性二人は、高度と輝度を増す名月を見ながら、団子を賞味する。

「ミスマッチかと思ったけど．．．」

「ミソマッチ、スかね？」

月も呆れる軽いギャグ。これでも八広は詩人である。

「味噌餡団子の黄色とお月様の黄色、どっちもいい味出してる．．．」

**これぞ名句。**おそれいりました。

定款に盛り込む前提で、仮の会員制度を設定してみても、という話に落ち着く。関係者の裾野というか層を厚くしておいて損はない。

「設立総会時ですかね、その会員の皆さんによって定款と役員が承認されて．．． そ

れで初めて動き出す部分もあると思いますよ」

千歳としても、ワークシェアリング事例として、NPO法人関係者に話を聞くことはあるので、イロハ的なことは承知している。文花は今夜のゲスト二人に改めて感心しつつも、ふと疑問が沸く。

「それにしても、隅田さんも宝木さんも、お詳しいのねえ。私、まだまだ勉強不足だったワ。何か特別な思い出でも？」

「前に先生を囲んでお話ししたことに通じますけど、NGO/NPOって、社会を見つめ直したり、歪みを戻したり、そのためにあるのかなって思うんすよ。行政や企業の補完的な役割がどうかって言われることもありますけど、むしろ、行政や企業のドライブにブレーキをかける方に意義が見出せる気がします。一度決めたことが固定化して、そのまま行ってしまうこと、自分はそれをドライブって言ってます」

「あと彼とよく話すのは、競争と消費の原理に疲弊した人、疑問を持つ人等々の居場所として市民社会はあるんじゃないか、ってことですね。補完ではなく、より積極的な意味を持つ訳です。生き方の選択肢を多様化させる、と言ってもいい」

「隅田さんも自分も、そういう想いを抱かせる境遇にあって、思い出も強くなって、それで実態を知りたいってなって、それが動機だと思います」

法人格の有無を問わず、NPOを標榜する以上は「何とかしたい」という想いは欠かせない。その想いの集合体がO=Organizationを形成することになる。はじめに組織体ありきではない。まして、組織の維持が目的化するようなら本末転倒だろう。想いが共有できなくなったら、解散。それもまたNPOだからこそできる特性である。

「そっか、Oって組織だもんね。するとNPO法人って言い方、何か変ねえ」 と文花が少々脱線すると、

「非営利活動をそのまま訳せば、NPA (Non Profit Action) 法人ですかね？」 仕方なく櫻がフォローする。

「本当は市民活動法人で良かったのにねえ」

千歳が蘊蓄のような不可思議なことを言ったところで、NPO談議は幕引きとなる。「市民」という表現は意図的に除かれ、代わりに「特定非営利」になった経緯があるそうだが、要は「何を為すべきか」であり「どんな名称か」ではない。それを暗に言いたかったようである。

談議が熱さを増す傍らで、コーヒーの方はホットではなくなっていた。飲みかけのコーヒーを片手にチーフは、「何か違う飲み物、お持ちしましょうか？」

「麦茶がまだあったから、持ってきますよ」 代わりに櫻が席を立つ。

「ところでおふみさん、理事会はまあ見えてきたとして、実行部隊というか、運営委員とか、部会とかってのは何か考えてます？」

「理事が決まってからかなあって思ってたけど、遅い？ あ、今、おふみさんて言ったわねえ！ おすみさん」

しばし、歓談モードになるも、

「代表理事候補の方と事務局長の間である程度、決めておいた方が議論しやすいかも知れないスね」 八広が戻す。そして、

「せっかくだから、今いる四人でざっくばらんに．．．」 文花はホワイトボードを引きずってくる。

「組織志向ではないとは言っても、対外的に説明しやすくする上で、やはり組織図って要るんですよね。NPOいやNPA法人の場合、頂点には会員、その周りにいわゆるステイクホルダー（利害関係者）、会員の下に総会、代表理事、理事会．．． かなあ」

千歳が話をふくらますと、文花はそれをせっせと転記し始める。戻って来た櫻はその様子が可笑しかったらしく、「おふみさん、そんなにあわてて書かなくても。ペンがヒーヒー言ってますよ」とからかってみたが、「センスだったら、シーシーね」 あっさり交わされてしまった。

そして文花はペンを止め、想いを廻らせる。そのセンスが代表理事に就いてくれれば．．．この図式も変わってくるかも知れない。

ち「で、部会の位置づけですよ。理事会の下に枝分かれさせると、理事が部会を担当するって形態を示すことができますと思います」

ふ「ほあ。担当理事制ってこと？」

八「と言っても、センターが何をしたいか、がまず先かも知れないスね」

さ「今のところは、情報提供、普及啓発、調査研究が柱だけど．．．」

ち「その柱に対して理事、置きますか？」

ふ「理事が先で部会が後って、確かに決めにくい気がする。ある程度、想定できる人材を募らないといけない、ってことかあ」

ち「部会は必須って訳じゃないですから。集まってから全体をデザインしてもいいと思いますよ」

ふ「そうそうこの間、現場力の話、出たじゃない？ 調査研究をふくらませて、現場密着型の、つまり現場力を鍛える部会ってのが一つあってもいいと思ったんだけど、どうかな」

さ「現場って、干潟とか？」

ふ「そうねえ、仮にセンスが承知してくれたら、担当理事に就いてもらって、櫻さんご担当とか？」

さ「クリーンアップを業務に組み込むってことですかあ？」

ふ「その方が動きやすくない？ そっか、発起人次第か．．．」

ち「リーダー次第でしょう」

リーダーはしばし考え込む。

「私、現場担当ってことなら、地域探訪とかもやりたいな」

「何か見えてきたんじゃないスか？ 地域・現場部会ってのはアリかも．．．」

干潟作業を業務化するかどうかはさておき、現場を持つことの重要性については、四人そろって認識するところである。ゴミのデータを調べ、発生源なりを研究し、実態を伝える。たとえその発端が地元の企業や商店ではなくても、一定の啓蒙につながる見込みはある。地域限定的であっても、ゴミの発生抑制策を考えてもらうきっかけが提供できるなら、環境情報センターの役割として決して小さくはない。現場かつ具体的数値、これほど説得力を伴う取り組みもないだろう。櫻が考える探訪も、地域を広く現場とした取り組みと考えればその意義は大きい。実際に足を運んで、目で見て、耳で聞き、手で触れ、五感をフルに使ってそこにある「いいもの」を探す、そしてそれをマップに落とし込む。マップは、



地域の資源を市民が共有する手がかりになる。地域を見る目が変わる、環境への思いやりも増す、人も元気に．．． これは櫻が短冊に託した願いに通じる要素でもある。データカードにしる、グリーンマップにしる、その手法については調査研究領域になるので、センターの本来機能に合う。そして、その手法が研ぎ澄まされることで、得られた情報もより活用度の高い情報となろう。地域に根ざした確たる情報提供が可能になるのである。調査研究と情報提供を両輪として、そこから自ずと普及啓発が導かれると仮定できるなら、この上ないこと。月が眩しく四人の席を照らし出す。正に光明が射してきた。

「地域系情報を集めて発信するシステムも出来上がることだし、その上、自分たちで稼いだ情報が動くとなれば言うことないわぁ。そういうのって、ハコモノとは言わないわよね」

「文花さんは箱入りですが．．．」

「ホホホ」

いつもと違って、食いつきが悪いチーフである。今晚の漫談は不発ということか、いや無意識のうちに振る舞いが事務局長然としてきた、そんなところらしい。

文花は、ボードに部会案を書いた後、漸く自分のポジションが記されていないことに気付いた。**あれこれ思案を廻らせていれば**、櫻の相方をやっているところではない。**不発の理由**がこれでわかった。

「事務局長は、代表理事の隣？ 理事と兼任する場合は理事会の中？」

「意思決定の優先順位がわかるような表現になっていけばいいと思いますけど」

「他の理事が事務局を軽んじることがないように、理事会と事務局がフラットになっているといいですね。代表理事と理事会の間から線を分けて事務局長、その下に事務局とか？」

「ま、あとはこれを硬直化させないように、定款でうまく規定化、いや見直し規定を設けるとか、そんなところでしょか」

中味の濃い時間が流れる。時刻は二十時半近くになっていた。センターは一応開館中ではあったが、世間は給料日、いや月見日和ということもあり、夜の来館者はなし。センターも現場と捉えた場合、来館者が少ないようだと言場としての価値が問われることになる**が**。

「話変わるけど、夜のセンターってこんな感じでいいんですかね。お客さん来ないのに開けとくのって、もったいない気がする」

即席講座などの催しがあればそこそこ人は集まって来る**が**、**毎日という訳にはいかない**。平常時にどれだけ賑やかすか。**これは接客係としても気になっていたことではある**。

「場の有効活用って意味じゃ確かにね」

「部会とあって、つい事業系が中心になっちゃうけど、ハコモノ的要素をどう盛り上げてくか、も部会ネタなんすよね。来客サービスとか相談対応とか人的交流とか．．．」

「ま、さっきの両輪の話、調査研究と情報提供でしたっけ、その成果を公開報告する場を設ける、ってのが早道でしょうね。あとは部会を夜開いて、オープンにするとか」

「お二人さんには頭下がるわぁ。こういう場をオープンにしてもいいかもね。『センター運営協議会』！ ちと硬いか」

餡が良かったのかも知れないが、名月の夜に名案あり、である。さらにいい話が続く。

「法人登記については、本多業平氏が詳しいと思います」

「会計実務は、ルフロンに相談するといいんじゃないスか」

千歳と八広それぞれから、サポーター候補の名が挙がる。若手中心だが、布陣としては悪くない。

「ところで文花さん、お二人に相談料とか、いいんですか？」

「おすみさんは、櫻嬢とのデート権でいいでしょ。宝木さんは．．．」

「お団子いただいていますんで。あと、自分としても今日はいい勉強になったし」

「まっ、お若いのに謙虚なこと。こういう時、謝金とか出せればいいんだけど、NPOはそれがちょっとねえ。あ、規定作ればいいのか」

「いえいえ。そういうのがないから、NPOが成り立つというか。持ちつ持たれつ、お互い様の精神でいいんだと思いますよ。何ちって」

「そうそう、デート権だって、冗談抜きで余りあるくらい。何せ一番人気の櫻さんと、ですから」

「フフ。おだてたって何も出ないわよ」

閉館時間が近づいてきた。文花はデジカメでボードの板書を撮る。八広は窓の外を見ながら、頬杖をつき、ポーズを取る。月をテーマに散文詩でも、といった面持ち。

「そういや、お月見定番のススキがないスね」

「ああ、文花さんがね、またクシャミが止まらなくなるといけないから、止めたんです」

「何よそれ。私、ススキ花粉症じゃないわよ」

「今度、河原に行けばわかると思いますよ。イネ科と共通かも知れないから」

「あら、冗談じゃなかったんだ。自分でも調べてみるわ。ありがと」

先だって干潟を下見した際、ヨシ原界限にはススキも隠れていたのだが、上陸ゴミのビックリと南実のイタズラドッキリとで、花粉どころではなかったようだ。文花の準備品が増えるのは必至か。だが、それはそれ。クリーンアップイベントに向けての全体的な準備の方は着々と進んでいる。冬木お騒がせの情報誌ホームページが不安要因だったが、higata@内での迅速な意見交換の末、必要十分な文面がまとまり、詳細案内としては真っ当なものが粛々と掲載された。それから一週間が経つ。情報誌本体と合わせ、どの程度の人が関心を示し、実際に足を運ぼうと考えているのだろう．．． 開催日まで十日を切った今、ハラハラドキドキが高じてくる。が、現場力という点では少なからず自負はある。メーリングリスト上でエールを交換しつつ、あとはとにかく当日の好天を祈るのみ。

櫻は食器類を片付けている。八広は館内資料を物色する。残る二人は円卓に居る。ふみさんがすみさんに声をかける。いや、今度はちゃんと本名である。

「隅田さん、唐突だけど情報担当理事っていかが？ 非常勤待遇つきで」

「え、本気ですか？」

「本気と書いてマジすよ」

何だか旧いことを仰るが、どうやら本気のような。

「非常勤ですか．．． 僕の都合でよければ」

「週に一度でも構いません。櫻さんと曜日が重なってもOK」

「この話、櫻さんは？」

「サプライズにしたい、でしょ？」

課題論文は一応出してもらうことだけ決めて、委細についてはまた追って、ということ



に。

「当市民じゃなきゃダメとかってことは？」

「別に役所からの委託が百パーセント、ってこともないだろうし。地域といっても、より広域に捉えて、広く人材を募る方が理に適ってると思う．．．」

居住地についての規定を設けるところもあるが、文花の考えでは隣接市区とか荒川流域であればいい、とのこと。それなりに案を練ってきたことが窺える。

アラウンドサーティーともなれば、ONとOFFのコントロール、つかず離れずのバランス感覚、そういった点は大丈夫だろう。二人をこれまで見てきた限り、うまくやってくれそう、という確信がチーフにはあった。いつものお節介という見方もあるが、世話を焼くのが好きなんだから仕方ない。

「文花さん！」 おふみさんとは言わず、こちらも改まっている。

「どったの？ ニコニコして」

「デート休暇、日にち決めました」

千歳は八広と資料の配置云々で話し合っている。休暇交渉が成立した櫻は、彼氏を呼ぶ。

「千歳さん、デート権をお使いいただく日が決まりました」

「え、日にち指定制だったの？」

「十月十二日、終日です」

「八、かしこまりました」

満月は益々空高く、<sup>まばゆ</sup>眩いまでに地上を照らす。四人それぞれの影が離れつつ伸びていく。河原では中秋の風がススキを揺らす。

「ハァ、クシュン」 因果関係は定かではないが、誰かさんがクシャミをしている。

「花粉？ ちょっと肌寒くなってきたから、よね」

今夜は、秋の夜長にふさわしい過ごし方ができた。討議にしろ交渉にしろ、実りが多かったことを振り返る文花。決めなければいけないことは多々あるも、気分的には余裕たっぷり。心は満月の如く、である。

## 十月の巻

### 開会！

天気予報に関しては、「初姉の気まぐれ某」という訳にはいかないもので、とにかく早起きして、天気図や気象情報サイトを見比べながら、荒川流域のお天気を占う初音。「概ね晴れ。微風。クリーンアップOK！」 ケータイメールで短信を打つ。中継役の弥生はこれをもとに、「漂着モノログ」の掲示板（テキスト枠）にアクセスし、ショートメールを流し込み、「予定通り開催」の旨、付け加える。千歳流のプロセス短縮で、弥生に掲示板係を兼ねてもらったため、正に速報が載るに至った。だが、誰が見ても明らかな晴天下にあって、わざわざこのように載せるのもどうかと思う。むしろ雨女さんの動向次第なので、「舞恵さんと雨雲の相関予報とかの方が意味あんじゃん？」と一人毒づいたりしている。一応、higata@にも一筆入れつつ、「九時半には間に合わないかも．．．」とおことわりを

付す。午前八時、姉がせかせかやっている間、弟はようやく起き出して来る。すでにある程度準備はできているので余裕なのだが、ある人を干潟に連れて行くミッションが控えている。遅れそうな理由はその人物と関係ありそうだ。

巡視船ツアーの日、文花と南実がカフェめし店で話し込んでいたのは、この三連休の過ごし方についても含まれていた。文花宅に泊まり込んでいた南実は、今回は電動車ではなく自動車で現場に急行することになる。文花の運転で、九時前にセンターに到着。予め用意しておいた機材やら資料を女性二人でバタバタと運び出している。電池式のアンプスピーカー（ワイヤレスマイク付き）、折り畳みイス、簡単な掲示ができるスタンド等々、重さがある物は全てセンターの備品。今回のクリーンアップの隠れ主催者としてセンターも名を貸すことにして、とにかく使えるものは使おうというチーフならではの計である。あとは櫻が揃えておいた受付台紙、ゴミ袋、救急箱、電卓、文具類、参加者用筆記具（というか景品）等のほか、タイムテーブルと注意書きを拡大コピーした大判巻紙と受付の案内表示紙（タテ長拡大）も。何とこの拡大系、あのお騒がせの冬木からの差し入れなんだとか。お詫びのつもりもあったのかも知れないが、この手の代物は会社で造作なくできてしまうようで、櫻からの原稿ファイルから起こして、さらっと送ってよこしたものである。文花宅からは、南実の荷物のほか、農作業グッズやら大きめのブルーシートが持ち込まれてあって、軽自動車の車中は何となく満室に。

「文花さん、許可証って持ちました？」

「クルマの中にあるはずだけど、念のため予備も持ってこか」

石島課長と話をつけ、この日のためにすっかり河川敷通行許可証なるものを入手していたチーフである。予備はそれをコピーしたもの。なかなか入念で結構なのだが、自分にとって必要なあるものを忘れていた。まずは自身に対して世話を焼く、というのも大事だったりする。

さ「お早う、いや、お遅うなりまして。すみません」

ふ「まあ、千住姉妹。大丈夫よ。だいたい積み終えたから」

あ「あ、小松さん．．．」

み「皆さんにはお世話になってるんで、ね」

南実が最後にデータカードを挟んだクリップボードの袋を持って降りてきたところで、姉妹が現われたという図である。

「蒼葉が画材とか用意するのに手間取っちゃって」

「画材？ あら画板まで」

「いい天気なんで、お絵描き日和だなあって」

画板はクルマで運んでもらうことにして、クルマ組と自転車組はここで一旦別々に。スタッフ集合時間の九時半まであと十五分ある。

同じ頃、発起人はすでに堤防上にいた。出勤は早かったが、いつもの如くノロノロ自転車を走らせる。案内板を出す位置を探りながらなので、尚のこと遅い。片手には百均で仕入れたというミニ黒板を抱え、もう片方の肩にはパンパンのマイバッグ。エディターズバッグなるものが流行っているらしいが、ライターのはライターズバッグという訳では

なく、単なる無地の肩掛け袋である。何でもかんでもすぐに取り出せるのがウリらしい。いったい今日は何を詰め込んでいるのやら？

一方、れっきとしたエディターズバッグをお持ちなのは、曲者 edy さんである。エドで edy かと思ったら、今は情報誌の一編集者ゆえ、editor からエディと名乗っているようだ。本日の干潟一番乗りは、この edy さん率いる「チーム榎戸」ご一行。受付係、ロジ係、撮影係、そして榎戸ご本人の四人様である。陸上ゴミを見ながら議論をしているのはよとして、四人中半分が喫煙者。今もタバコを<sup>くわ</sup>吸っているのが二人いる。ゴミを目の前にポイ捨て、なんてことはないと思うけど . . .

九時二十分、橋の途中で景色を楽しむ姉妹を横目に軽自動車が抜き去った。文花のケータイが珍しく音を立てたのはこの直後。

「南実ちゃん、出てえ！」

「ハイハイ」

電話の主は、<sup>やつひろ</sup>八広君であった。

「あれ、矢ノ倉さん？」

「もしもし？ あ、小松です。文花さん、運転中なんで」

「はあ、そりゃ失礼しました。今、大丈夫ですか？」

スタッフとして予定していた八広と舞恵だが、いわゆるドタキャン発生。その連絡だった。何でも十月の異動で別の業務に廻ることになった舞恵姉さんが「やってらんねえ！」とか言って土曜日は荒れ気味だったんだとか。ワイン呑み放題のイタめし風居酒屋に行っちゃったのがまた良くなかったようで、ヨロヨロになってしまった彼女を本人宅に何とか運んでそのまま介抱する羽目に。彼氏業も大変である。

「て訳で、ルフロンの面倒見てるんで、今日は欠席します。皆さんにヨロシクです」

「お大事に . . . はい、じゃ」

通話を終えた時はすでに堤防道路のゲート前。橋下の駐車場へはそのゲートの脇のスロープを下りてUターンするような感じで進入できるが、堤防下の河川敷道路をクルマで進むには、Uターン地点の先に設けてある別のゲートをクリアしなければいけない。スロープを徐行し、一時停止。文花はクルマを降り、橋下駐車場の係員に掛け合いに行く。通行許可証はまずここで効力を発する。

ハザードを点灯させつつ、軽自動車はノロノロ進む。いつしかその先を姉妹の自転車がスイスイ走っている。ゲートで止まっている間に、堤防上を通過していた、ということらしい。グランド詰所の脇で左折するところで、ミニ黒板が目にとまった。左向き矢印とともに、「干潟クリーンアップ会場(10:00~受付開始)」とチョークで書かれてある。「ハハ、立てかけ黒板か。ないよりはいいかしらね」「でも、地面に置きっ放しだと、ゴミと間違えられるんじゃない？」黒板を設置した本人はすでに干潟に着くところ。そこに姉妹が追いつこうとしている。間もなく九時半になる。

リュックにちょっとした機材を詰めてきたせいで、ペダルが重くなっていた業平が来た頃には、チーム榎戸と higata@メンバーの顔合わせは済んでいた。両チームを取り持つ意

味ではキーパーソンの業平だが、置いてきぼりを喰った格好である。

「あなたが Go Hey さん？」

「実際にお目にかかるの初めてなんですよね。おふみさん、あ、いやチーフ！」

higata@メンバー内で最後に残っていた顔合わせがここでようやく実現した。日数がかかった分、感激もひとしお、かどうかはいざ知らず、この二人、前々からお互い気になっていたフシはある。ちなみに、業平は年上女性も案外好み、文花は長身男性がタイプ、ということは...

チームの別はさておき、**女性が五人に男性五人が揃った**。男女バランスがとれた形になるも、現場慣れた人数比ということ言えば、女性優位というのはいつも通り変わらない。チーム榎戸の撮影係はまたタバコを取り出すが、ただでさえ優位な higata@女性陣から一斉に「あー！」とやられてはもうタジタジである。未点火の一本を落としかけるも、何とかキャッチ。だが、足元には先の吸殻が<sup>くすぶ</sup>焦っている。迂闊な行動で尻尾を出してしまった一員に対し、冬木は淡々とポケット灰皿を差し出す。ポイ捨てしたのを知っていたか否かはさておき、吸殻が接地してしまう前に出してこそ発生抑制（狭義）につながる。いや、そもそも吸わないに超したことはない。つつい一服てのは、広告代理店チックというか、業界関係者ならではなんだろうか。

段取りは概ね打合せ済みだったが、受付の配置や参加者の誘導動線といった立体的なイメージはあまり練っていなかったことに気付く一同。ここは正に現場力が問われるところである。文花のクルマを囲むような空間展開を考え、モノログ見た組の受付はクルマのトランクスペース、情報誌見た組は、その隣でクリップボードを使って書き込んでもらう方式、ということにした。クルマの一空間を使って受付というのも変な話だが、バックドアをオープンにして、折り畳みイスを配置、あとは蒼葉が持って来た画板を借用して台にすれば「即席」の一丁あがり、ということである。何人来るか不明だが、受付と言っても、不慮の事故に大して保険適用するのに必要な最低限の情報を書いてもらうだけなので、それほど大がかりにすることもなからう、とのこと。これは、矢ノ倉女史がご学友に尋ねて得た話。情報通というのは本人が全て知っているということを指すばかりではなく、誰に聞けばいいかを弁えている、というのも大アリなのである。

そのご学友は、弥生と六月とともに、路線バスに揺られていた。

「ホラ、先生あそこ、見える？」

「ええ、何となく人だかりが...」

夏休みの自由研究があまりに上出来だったものだから、クリーンアップイベントに興味津々だった永代先生である。六月から誘われたのと前後して、旧友からも行事保険の件なんかで問合せがあったりで、お導きを得たような感じになった。夏休み最初の日曜日、無料送迎バスの車窓から文花と六月の一行を見かけて不思議に思っていたが、接点が重なったことでその謎は解けた。今日はさらに、少年をひと夏で遅くした謎、つまりその「現場」とやらに何があるのかを見てみよう、そんな飽くなき探究心が彼女を動かしている。旧友との再会も楽しみだが、きっかけはあくまで我が児童、六月にあった。

かつての児童だった小梅は、姉と一緒に現場に向かっていた。大人の皆さんは、着々と準備を進め、ブルーシートを広げたり、拡大コピー紙をクルマの側面に貼り付けたり、ワ

イヤレスマイクのテストをしたりしている。ちょっと気が引ける十代姉妹だったが、higata®のお姉さん方の歓待を受け、すぐに溶け込む。

「ルフロンさんと八宝さん、どうしたんスか？」

初音はまだちょっと浮かない顔で、誰に聞くでもなく問うてみる。

「え、まあ、その．．．」

櫻は答えにくそうにしていたが、直々に連絡を受けた南実がストレートに返す。

「彼女はワインの飲み過ぎで二日酔い。彼氏はそれにつきっきり、ですって」

「あちゃあ。やってもうた、って感じスね」

敬愛するルフロンさんだが、ドジっぼいところは前回織り込み済み。またしても魅力的な一面を知った気がして、初音は驚くも何も、ただ小気味良いのであった。

「それにしてもドタキャンになっちゃうとはねえ。分担どうしよ」と今日は千歳が憂い顔になるも、

「こういうのって、市民活動にはつきものでしょ。あとは現場力次第．．．」とチーフはケロっとしている。

「その『<sup>ばざから</sup>場力』を唱えてた人物がこれじゃ．．．面目ないというか」八広の身元保証人のような千歳としては不本意さが拭えないようである。

九時五十分近く。徒歩組三人がようやく辿り着く。弥生はもともとスタッフ要員だが、ドタキャン二人をカバーして余りある助っ人が加わることになる。一人は先生、一人は児童、「待ってました！」である。

「矢ノ倉、久しぶり！」

「おひささんこそ、お久しぶり．．．へへ」

「何それ？ アンタいつからダジャレ言うようになったの？」

「さあ。ここにいる若手、いや特にアラサーの男女の影響かな？」

「何か転職して変わったわねえ」

文花を苗字で呼び捨てできる人物というだけでも十分インパクトはあったが、その文花の旧友、かつ六月の担任、さらには小梅の元担任と来れば、重量級役者である。ジャケットシャツにピンタックスカートと、装いは極めてシンプルだが、役者は役者。たちどころに皆の注目を集める。

「ほ、堀之内先生、ようこそ」

「石島さん、ホント大きくなったわね」

「先生もすごく元気そう」

「フフ、まあね。二年前は大変だったけど．．．」

恩師と卒業生の間で、初音は深々とお辞儀したりしている。過去に何かあったようだが、そういう話はまた後ほど。ひとまず一同揃ったところで、チーム榎戸の受付係のお姉さんが何かを配り始めた。白色だと一時盛り上がった某バンドになるが、これは藍色。太めのリストバンドである。

「あ、皆さん、それスタッフ証代わりってことで。ちょっと目立たないかも知れないけど、どうぞ」舞恵と八広が不在なため、小梅と六月にもそれは手渡された。ゲストの永代にも予備の一本が渡る。こういう小道具に関してはさすが広告代理店、と言っておこう。

「じゃ、誘導係は弥生ちゃん、お願いします。監視係は本多さん、陸上ゴミは、堀之内先生と若いお二人さん、でいいかしら」

分担の組み替えはこれで何とかまとまった。あとは臨機応変に適宜入れ替わり立ち代わり、である。案内に載せた開始時刻は十時。あと五分で始まる。スタッフ証を付けた人数、総勢十五人。タイムテーブルを見つつ、開始前に簡単なミーティングを行い、参加者を待つ。一般的には開始時刻が記されていれば、その前に何人かは来るのが相場だが、場所が奥まっているせいか、はたまた黒板に受付開始が十時と書かれていたせいか、今のところ一般参加者はここには来ていない。ただ、詰所付近には何となく人垣がチラホラできているので、

「あたし、行って案内してきます。開始時刻ってどうします？」 誘導係は、千歳からチョコクを受け取り、業平のRSBに<sup>またが</sup>跨るところ。

「そっかぁ、受付開始とクリーンアップ開始って特に分けなかったのよね。とにかく受付はOKですよ。十時十五分開会、かな」

「ま、何かあったら．．． 文花さんのケータイ鳴らします」

「聞こえるかどうかわからないけど、アナウンスも入れっかな」

とこんな感じでhigata@メンバー主導で会場は運営されていくのであった。

秋の虫の音、涼やかな微風に揺れるヨシ、ススキ、セイタカアワダチソウ．．． 受付時間中は一転して、爽秋のひとつときが流れる。いや、少々落ち着かない女性が一人いらした。

「ハ、ハクシオン！ うう」

言わずもがな、クシャミの主は文花である。ケータイ越しで一喝された冬木は、櫻以上に文花に恐れをなしていたが、弱点見たりと思ったか、いそいそと近づいて来る。

「矢ノ倉さん、この度はいろいろとお騒がせしまして」

「いえ、こっちも助けてもらいましたから。ハ、ハ．．．」

「矢ノ倉ぁ、大丈夫？ マスクとかないのぉ」

「いやぁ、ちゃんと用意しといたんだけどさ。下駄箱の上に置き放しで来ちゃったのよねえ。まだ若いのに不覚だワ。クシオン！」

冬木はしたり顔で様子を見ていたが、クシャミに気付いてリーダーが飛んで来た。救急箱を開けると、そこには未開封のマスク。

「文花さん、だから言ったのにい」

「へへ、出る直前でうっかり、ね。そういうことあるでしょ？」

「ハイハイ。今日はこれ付けておとなしくしてらっしゃい」

「ホーイ」

永代にもこのコンビの妙味がわかったらしく、吹き出しにかけている。冬木は「やっば、千住さん手強い？」と考えを改めることにした。

十時を過ぎ、チラホラと受付に人が集まり出した。モノログ受付は蒼葉が担当。社会人とご年配が一人ずつ、学生グループ三人といったところ。モデルさんが立っていると目を引くので、皆、彼女の方に流れそうだったが、そこはチーム榎戸。センター備品の簡易掲示板に「情報誌見た！受付」の紙を貼り出し、読者をしっかり専用受付に導いている。こ

っちは流域媒体としての強みあってか、情報誌のターゲット層である三十代・四十代中心で、小学生二人を含め計十人を集めた。業平は気を利かせて、道具類に不備がありそうな人を見つけると、予備の袋や軍手を配って回っている。陸上ゴミ担当になった三人は、その塊を前にして作戦会議をしている模様。八広の代わりにプチ干潟の監視係に回ることにした初音は千歳と通路の確認に出向く。南実はブルーシートに腰掛けて、解説用のフリップの順番をチェック中。そのお隣には、マスクさんがおとなしく荷物番をしている。

「ハイ、あ、弥生さん。どしたの？ クシュン」

「通りがかりだけど参加していいかって？」

「あ、ちょっと待って、ハ．．．」

ちょうど業平が傍に来たので、そのままケータイを渡す。

「クション！ あ、あとお願い」

「？」

「なぁーんだ、本多さん？ エ、まだあるから大丈夫って？」

袋と軍手を高々と掲げている。詰所までやや距離はあるが上背のある業平ゆえ、すぐに確認できた。弥生は手にしていた黒板を置くと、飛び入り参加の若夫婦を引き連れ、会場へ。そろそろ十時十五分になろうとしている。

櫻は、マイクテストを兼ねつつも、その都度気付いたことをアナウンスしていたが、開始時刻になると、一段とトーンアップし、切れが出てきた。

「皆さん、こんにちわっ！ 今日はようこそお越しくございました。情報誌見た！の方、ハイ！ あとはブログ見た、の方々でしょうか。あっ、飛び入り参加も、どうもありがとうございます」 参加者に拳手を促しつつ、巧みに場を盛り上げている。

「申し遅れました。私、千住櫻と言います。進行役を務めさせていただきます。私を含め、このバンドをしているのが今回のクリーンアップのスタッフです。どうぞよろしくお願ひします」

スタッフが頭を下げ、参加者から拍手が起こったその時、もう一人の先生が颯爽とバイクに乗って滑り込んできた。

「はい、演出通り、おじさんライダーがやって来ました。荒川のご意見番、いや守護神、掃部清澄先生です。拍手ーっ！」

ヘルメットを外したら、周りからやたらパチパチと音がするので、面食らっていた先生だったが、櫻からマイクを渡されると、テレながらもいきなり全開。

「掃部でございます。呼ばれなくても、名前がカモンなもんで、こうして来てしまうんですわ。どうぞお手柔らかに」

会場には三十余名がいるので、ちょっとした笑いでどもどよめきになる。隠しマイクを手にしていた櫻は、どよめき止まぬうちにすかさず、

「先生、来て早々何ですが、開会挨拶なんていかがです？」と振る。

「いやぁ、ここにお集まりの皆さんは心がけのいい方ばかりだろうから、別にこれと言って。ただしとつ、ゴミを捨てるのが人間なら、し、ひ、捨てるも人間。他の生き物はゴミは出しません。ここのし潟も私達が片付けられない限りは元通りにはならない。ひ、干潟、ヨシ原、そして川、生き物たち、皆つながって、元気になっていくことで私達も元気に、



ってことです。今日もしろって、しっかり調べましょう！」

「ありがとうございました。先生のご名誉のために付け加えさせていただくなら、し漏は干潟、しろうは拾う、でございます。生粋の江戸っ子、荒川っ子でいらっしゃるので、その辺はひとつ大目に．．．」先生は「いやあ、まいったな」と頭を掻く。

お次は先生の弟子の出番である。業平にフリップを預けると、南実がマイクを握る。

「先生の前でやりにくいんですけど、他の生き物が困っている様子をここで少々お話しさせていただきます」

研究員らしい肅々としたトークとともに、淡々とフリップが繰られていく。レジ袋を誤食して窒息してしまったウミガメ、釣り糸に絡まって息絶えたペリカン、漁網が首に絡み付いて流血しているオットセイ、海面に漂流するプラスチック製品をついばむ海鳥、その海鳥の砂囊の拡大写真には、レジンペレットなどの碎片が．．．さらに、プラスチック系の袋ゴミなどが詰まったイルカの消化器の解剖写真がそれに続く。大人が見ても刺激的な画は子どもにとってはよりショッキングだろう。文花と櫻を除いては、higata@メンバーも初めて見る動物被害実態の数々。参加者の中には、目をそらす者もいたが、しかと心には刻まれたようだ。こうした話は性格的にストレートな面がないと難しい。直球派の南実だからこそ、できるのである。

「これはプラスチック製のリングが嵌<sup>はま</sup>って取れなくなってしまったアザラシです。好奇心旺盛なんでこれで遊んでいたんでしょ。ところがこの通り。自分ではどうすることもできない。ヒトにとってはただのゴミでも、動物には凶器なんです。と、このバンドも．．．」

チーム榎戸の面々はヒヤリとなる。業平も繰っては見入り、その都度目を見開いていたが、この一言でやはりギョッとなっている。スタッフ全員、その凶器を付けているので、話を転じるしかないところだが、

「これはスタッフ証でもありますが、我々人間への戒め、と考えることもできます。スタッフの皆さん、くれぐれも落とさないように気を付けてくださいネ」とさりげなくまとめてみせた。この辺り、南実も十分キレ者である。

「小松さん、本多さん、どうもでした。という訳で、悪さをするとこのバンド、どうかなっちゃうんでしょ、ね？ 榎戸さん」

「八八、勘弁してください」

文花は櫻のトークを愉しみつつ、学びつつ、そして冬木への戒めに喜々としていた。ここからは引き続き櫻ショーである。今日の櫻のいいもの其の一、指示棒を取り出すと、掲出済みの注意書きをビシビシやり始める。higata@での議論の賜物ではあるが、たたき台は櫻の手による。書いた本人ならではの説得力を以って、皆々に伝えられていく。

(1)お子さんだけの干潟入りは避けてもらうこと、(2)船舶が通った後は大人も注意を要すること、(3)ぬかるみ、崖地、深々した草むら．．．足元が覚束ないところは無理して踏み込まないこと、(4)鋭利なゴミは素手では絶対に拾わないこと、(5)悪臭ゴミ、爆発危険ゴミ、その他の危険物や薬品等は拾わないこと(見つけたら干潟スタッフに申告) (6)細長いもの(花火の燃えカス、針金等)は折ってから袋に入れること、等々。クリーンアップの成果も大事だが、こうした安全面が守られさえすれば、行事としては成功同然と言って過言ではない。「無事此れ名馬」の道理である。

「あとですね、放っておけば自然に還るもの、天然素材・自然由来．．． そういうの

は拾わなくていいです。ただ、木でできた家具とか、カマボコの板とか、そういうのは一応回収します」

お手洗いや水分補給は適宜、気分が悪くなったらスタッフに、最後に、

「喫煙される方には申し訳ありませんが、ここは原則禁煙、でお願いします。どうしても吸いたくなったら詰所脇の喫煙コーナーで」と釘を刺す。

千歳はデジカメで要所要所を撮っていたが、チーム榎戸の撮影係は開会からずっと動画モードで記録中。三脚なしで微動だにせず収録するあたり、さすがはプロと千歳は思っていたのだが、この原則禁煙の話が出たところで、手許が狂ったようだ。「ありゃりゃ」とかやっている。これも櫻ならではの機転、いや訓戒が利いたということか。

ここで掃部先生が一声。

「櫻嬢、マムシの話はいいのかな？」

「エ？ マムシですか？」

これを聞いてギクとなっているのは女性教諭である。魚がダメな人の友人だけあって、何となく共通点がある。永代はヘビなど爬虫類が大の苦手。教室で悪ガキに泣かされたのもトカゲが原因だった。過去を知る小梅は恩師を気遣っているが、旧友は素っ気ない。

「皆さん、草叢にはあんまり近づかないことをお勧めします。自然が還って来たと言やあ喜ばしいことなんですが、この時期、こればかりはどうしようもなくてさ」

蒼葉は耳を傾けながらも受付を続けている。情報誌見た組の方も含め、この十数分間の間に、チラホラ参加者がやって来ていて、いつしか全体で四十人近くになっていた。三連休の中日にはしては、よく集まったものである。

クリーンアップ参加経験などを聞きながら、所要時間の見当を付けてみる。進行役は、タイムテーブルを示してはいるが、何時に何々とは言わず、大まかな段取りだけを説明する。

「おかげ様で多くの方に来ていただいたので、拾う作業はすぐに済むと思います。調べるのに時間がかかる訳ですが、それはまた集めてから考えましょう。あとはブログ組、情報誌組、各会場での指示に従ってください。飛び入り参加の方はひとまず陸上をお願いします。皆さん、くれぐれもケガのないよう、ご無理なさらぬよう、安全第一で。では！」

ここまでの櫻の進行、いやマイクパフォーマンスと言うべきか、とにかく一級品であったことは間違いない。どことなく拍手が起こり、千歳も惜しみなく手を叩く。目が合った櫻は俯きながらも一瞬片目をつぶり、彼に合図する。そう、ここからは別々の会場で、それぞれの本分を発揮することになる。彼女なりに緊張感を維持した上での合図、だったのである。

かくして実質的なクリーンアップは十時半スタートとなった。タイムテーブルでは十時二十分見込みだったので、すでにオーバー気味だが、この大人数である。台風後増量を見越して、回収作業は十一時を区切りにしてあったので、それはキープできそう。三十分もあれば大方片付くだろう、との読みである。だが、潮時担当のお嬢さんに云わせると「いやあ、水嵩に追われながらのクリーンアップって、結構シビアかも」とのこと。つまり、時間的に余裕はあっても、水位との勝負は避けられず、いかに短時間で片付けるかがやはり力ギとなる。時間との戦いは変わらない。手製で防流堤（干潟面ゴミキャッチャー）は

作れても、上げ潮を抑える防潮堤のようなものは不可能。現場力はこうして試され、高められていく。

いつもの干潟に展開するブログ（モノログ）チームは、防流堤を完全埋没させる勢いで覆う枯れヨシの大群に刮目<sup>かつまく</sup>していた。その茎の絨毯<sup>じゅうたん</sup>には所々奇妙な形の流木も混ざっていて、回収作業を躊躇<sup>な</sup>させる。櫻は前回に倣い、障害物を除けることを提案。監視係の業平を筆頭に、学生諸君が加わり、せっせと運び始めた。千歳からデジカメを借りて撮影係（兼相談係）をしていた南実は、その絨毯の量から慮って、「調べるクリーンアップ」が過重な作業になる可能性を悟る。

「ねえリーダー。今回は表に出てるゴミをまず拾って、数えるのはその範囲にとどめといた方がいいと思うけど、どうかな？」

「ははあ、小松予測ではこの束除けるととんでもないことになるって、そういうこと？」

「だってすでにペットボトルやら、包装類やら、袋片やら、これだけで十分調べ甲斐あるでしょ．．．」

そんな二人のスニーカーの周りには、骨組みだけになった安物のウチワ、何故かビニール手袋、波に洗われてクタクタになっているDVDの空ケースなんかが転がっている。

「いきなりスクープっぽいが出てくるし．．．」

「そっか、現場押さえなきゃ」

という訳で、大物障害物撤去 めぼしいゴミの撮影 表層ゴミをとにかく袋に入れて搬出 潮の加減を見ながら枯れヨシ絨毯を除去 防流堤の改修、といった作業工程が示し合わされた。潮位に煽られるというのは本意ではないものの、学生諸君なんかにはゲーム感覚で取り組めると映ったようで頗<sup>すご</sup>る好評。よりスピーディーな作業の組み立て、というのがこの時の南実のサゼスチョンによって導き出されることになるろうとは。策士とは斯くあるもの、である。

蒼葉は斜面通路に待機して、干潟表層ゴミでいっぱいになったレジ袋なんかを各人から引き取る作業に励んでいる。軽快に捌いているが、干潟に展開する人数が、多いと十人くらいになるので、分が悪い。草を刈った平面にゴミをばら撒いて、空いた袋を持って戻ると、また次の袋、その繰り返し、である。一段落した業平が見かねて、斜面で足を止め、南実からやや重めの袋を受け取った時、小型巡視船らしき船舶がそれなりのスピードで下流方面に向かって行った。

「やばい！ 引き波、来ますよ。Go Hey さん！」

「そっか。発令しなきゃ。皆さーん、波に注意してくださいっ!!」

学生諸君は手を止め、川面に注意を向けてくれたまではよかったが、「マジ？」「キャッポー！」とかはしゃいでいるから始末が悪い。アラウンド20だろうから、自己責任云々と言えなくもないが、監視係の面目ってものがある。「おいおい！」

「やっば、緊急波浪警報！とかやらないとね」 櫻がなだめるも、

「アイツら、現場をナメおって、フー」 業平は息荒く立ち尽くしたまま。

「いや、彼等が悪いばかりでもないのよ。巡視船のクセに波立てるから．．．」

かつて波にやられた南実にこう言われては監視係も落ち着くしかない。

「さっき小松さん、引き波って言ったけど、それって？」

「船が引いて起こすからそう言うみたいだけど、よくわかんない。ただ、自然保護地区

だかは、波立てないように航行すべしって指定されてるんですって。それが引き波禁止」

「潮が上がって来ているところに、それと逆方向、しかもあのスピードでしょ。まあ、確かにさっきのはヤバかったわね。大波小波に小松南実．．．」

「何か言いました？」

「波のことなら南実さん、かなって。フフ」

櫻は誰でも相方にしてしまうようである。

監視のお役目は辛うじて果たせたものの、袋の引き取り役は果たせずじまい。そんな Go Hey 氏を含むアラサー三人の脇で、蒼葉は黙々と往復していた。波の一件で中断はあったが、そんなこんなで表層ゴミは粗方取り除かれた。

蒼葉様様である。

### ショーの続きと終わり

さて、プチ干潟担当の情報誌チームの方は中途参加組を含め、二十余名の一大グループになっていて、現場力が否応なく問われようとしていた。千歳流プロセスマネジメントは機能するのか、本人にとっては期待半分・不安半分といったところである。掃部先生に随行してもらっているのだから心強いが、元気がいい小学生が数人いるのがちょっと悩ましい。

下流側の干潟を知る先生は向かう途中で何かを思い出したようにバイクに戻ると、見覚えのある機材を片手に早足でやって来た。一行の行く手にはキンエノコロやチガヤが生い茂り、水際に通じる細径を阻んでいる。そのまま行けなくもないのだが、草に足を取られて転ぶ可能性もあるので、刈れるところは刈ってしまおうということらしい。細径の脇には生気の褪せたヨシが群れて斜めになっているので、そっちを重点的に刈りながら進路を拓いていく。子どもたちは親御さんに制されながらも物珍しそうに草刈り機の動きを目で追っている。関心を誘うものがこのようにあれば、キャーキャーやることもない。出来立ての草分け道を行儀よくそろそろと歩いていくばかり。

刈った直後の草の匂いは何とも言えぬ味わいがあり、深呼吸すると不思議と平穏な気分になる。このまま穏やかな感じでクリーンアップが済めばいいのだが．．．

全員が降り立つには干潟は狭い。だが、狭いながらもゴミはそれなりに散在しているので、高密度状態になっている。緩やかな崖地では横倒しヨシがギシギシと音を立て、袋に限らず、ヒモやらハギレやらが絡まっていたりする。どう手分けするか．．． 最初の問いに直面する千歳である。

「お子さんはお父さんお母さんと一緒に、<sup>上流側</sup>あちらの平たい干潟をお願いします。グループ単位でいらっしゃってる他の皆さんは下流側の細長い干潟の方、個人参加の方々はヨシの根元や枝に付いているのを無理のない範囲で、ということで．．．」

初音はいち早く干潟に下り、子どもたちを無難に誘導するも、そこから先の行動までは留意しきれなかった。川に浮かぶような状態で露出していた目先の積石にカルガモが羽を休めているのを少年の一人が目につける。声をかける間もなく少年は駆け出す。だが、思いがけない干潟のぬかるみに足を掬われ、呆気なく転んでしまったではないか。カルガモはその場を離れる。少年は泣き出しこそはしなかったが、その場にうずくまる。あつとい

う間の出来事に他の家族連れもしばし呆然。

少年の母親は、叱るでも案じるでもなく、ハンドタオルを取り出して黙って膝の泥などを払っている。

「大丈夫、ですか？」

初音が丁重に声をかけると、「いつものことなんで。いい薬になったでしょ」と、母親は軽く受け流してくれた。親の出方次第ではひと悶着も有り得なくはなかったが、まずは一件落着。千歳が遅れ馳せながら顔を出す。おなじみのバケツに水を汲んで持って来いたのが、ここで役立った。注意事項の中にはさすがに「干潟で走ってはいけません」というのはなかったの想定外ではあったが、この常備品で何とかカバー。これで擦過傷でも負っていたら、冬木のケータイで文花を呼び出すところだが、それには及ばなかったの何はともあれ、である。

少年のこの転倒は実は大きな意味があった。転んだ際に手をついた目先には、何と注射器が。キャップが付いた状態だったのでまだ良かったが、これで針が露わで、手がそこに伸びていたら．．． 考えただけでゾットする。奇しくもケガの功名、いや、転んでも只是で済まぬ何とやら、となった次第だが、これには母親も驚きを隠せなかった。それでも、「これは確かにクリーンアップしないといけないですね」と努めて冷静に一言。当人はすっかり恐縮しながら手を拭いている。

「よく見つけてくれました。どうかこれに懲りず、引き続きよろしくお願いします」

萎縮されてしまっては元も子もない。転倒の功をさりげなく伝え、少年を元気づけてみるのであった。

こういう時、漂着ゴミというのは有用である。空のペットボトルならいくらかでも転がっている。ラベルが剥がれたボトルを手にする、千歳はその物騒な一本を格納してフタをする。危険ゴミサンプルの出来上がりである。

これが教訓となり、千歳は他に危なっかしいゴミがないかチェックしながらプチ干潟の巡回を始める。チーム榎戸はと言うと、受付係の女性とロジ係の男性が下流側で参加者に交じっているのが救いといった感じで、撮影係は今ひとつ動きが緩慢、チームリーダーの冬木に至っては、デジタルオーディオプレーヤーの録音機能を使って、特に家族参加者に対してインタビューを試みたりしている。もともと自前でクリーンアップをするつもりだったくらいなので、何らかの企画というのがあったのだろう。情報誌においてイベントレポートを掲載するのは至極当然。媒体こそ違えども、その辺の心得は千歳にもあるので、まあ大目に見ることにした。当エリアはあくまで情報誌読者が中心でもあるし。

いや待てよ。読者ととともに創る行事という聞こえはいいが、どうなんだろう。生の声を聞いて悪いことはない。だがそれは、活動に支障をきたさない範囲で、という条件つきであることは心したい。冬木はどこまでわかっているのやら．．． それが心配になる千歳であった。

動画はいいから、とにかくスクープ系のゴミを撮影するよう、緩慢カメラマンに指示を出しながら、参加者に声をかけて回る千歳リーダー。冬木の取材のおかげでクリーンアップに身が入らないご家族参加者の傍らで、比較のおとなしくゴミ拾いに勤しむ子どもたち。初音はバッチリ目を光らせつつ、大波小波にも注意を向けている。空を睨む時と同じような表情なので、冬木はインタビューしたくてもできない様子。さっきから何となく遠巻き



にしている。するとブログチーム会場を騒がせたと同じ巡視船が走り抜けて行った。

「あっ、波が来ますよっ！」

業平が叫んだ時はイマイチ効き目がなかったが、初音のこの喚起はバッチリ。一斉に崖側に退避して、波を見送っている。水位の変化は、少年が転んだ跡を含め、皆々の足跡を波が消してしまったことから明らか。波が収まってからは、俄然拾うスピードが速くなる。これは、取材が中断したから、ばかりではない。干潟面積が徐々に狭くなっていることを実体験したから、である。百見は一実感に如かず、体験は人を変える、というのがよくわかる<sup>くだり</sup>件である。

インタビューー殿もこれでクリーンアップに合流か、と思いきや、今度は先生に話を伺うことを思いつく。ところが、

「ま、話聞いているシマがあったら、クリーンアップなさいよ。ホラ、あのお嬢さんだって、さっきから一人で力仕事してんだし」とあしらわれてしまった。

顎で示した先では、弥生嬢が蒼葉と同じような役回りを実践していた。斜面がなだらかな分、負担は少ないが、ゴミ袋を集積するのに都合のよい平地まで距離があるので、結構な運動量になっている。袋を空け、空になった袋を持って来ると、また新たな満載袋を手にはバサバサ。冬木は「何事も体験」という業平の言葉を思い出し、渋々ながら袋の搬出を手伝うことにした。これでいいレポートが上がれば言うことないが。

掃部先生は草刈り機でもって、横倒しヨシを刈り、吹き溜まりゴミを集めやすくしている最中である。足場が傾いているものの、ここはご自慢の蟹股が奏功し、抜群の安定感を見せる。その斜面には、先の波で何となく避難してきたグループが群を成している。下流側の細長干潟は、引き波でその表面を大きく洗われたものの、高低差と斜面があったので、辛うじて助かった感じ。ヒヤヒヤ続きの千歳だったが、ここで一旦小休止し、避難者に対し、警報の解除を知らせるとともに、次の手順説明に入る。

「おかげ様でだいたい片付いてきたと思います。水位も上がって来たことですし、あとは先生に草刈りしてもらった辺りを重点的にやって引き揚げるとしましょう」

同じ頃、上流側はと言うと、勢いに乗じてヨシの絨毯を撤去する段に入っていた。だが、思ったよりも水位上昇が緩やかと見切った撮影係は、「これぞ、ヨシの原っぱよね。ヨシヨシ」てな感じで悠長に構えている。先刻まで人を焚き付けておいて何だかなあ、である。千と櫻の両想いを焚き付けたりと、**点火系**な役回りの南実ではあるが、ここで実際に火を放ったりしてはシャレにならない。だが、**万**この原っぱに火が走るようなことがあったら... いつになく漂着ライターが多かった今回、これは決して冗談ではないのである。南実はそんな物騒な一品をまた見つけると、「川も例外ならず、いやこっちが発生源...」と溜息交じりにポツリ。海岸に漂着するライターは、川からだったり、他国からだったり、そんなことを思い返してみるのだった。

焼き払う訳にはいけないので、兎にも角にも次はヨシ原っぱの撤収である。前回・前々回に業平と八広のお手盛り工事で作った防流堤は、その効果が過剰<sup>てきめん</sup>な面だったのかどうか、完全に原っぱの下敷きになっていて、姿形が見えない。この手の除去作業は男手中心ということで、業平は防流堤辺りの束をせっせとどかしている。手を休め、ふと左右の崖ヨシに目を向けると驚く<sup>なか</sup>勿れ、大方のヨシが横倒しになっていて、真っ直ぐに伸びている方が

少なくなっている。さらにその横ヨシには袋ゴミが随所に引っかかってたりするから余計に哀れ。表立ったゴミという意味では、この袋類もカウント対象だろう。長身を活かし、時折ジャンプしながらそれらを取り除く業平。着地すると弾力を感じる。防流堤は板材なんかで強化してあるから、そこそこ厚みはある筈だが、その存在を感じさせない程、ヨシ束は厚く堆積していた。こうなると絨毯というよりもマットである。

南実は、撮影係 兼 監視係をしている。ヨシ束の中継役もやっていたが、業平が大小の袋を手を上げて来たので些か拍子抜け。彼はそのまま分別コーナーへ。

「蒼葉さん、これも」

「あれ？ 絨毯の下の方は数えないんじゃない？」

「ヨシに引っかかってたんだな、これが」

「ハハ、何かヨシってフィルターみたいね」

干潟が水のフィルターだとすると、ヨシはゴミのフィルター？ 捕獲装置と言ってもいいかも知れない。

櫻は、運搬途中でこぼれ落ちるゴミを集めながら、除去後に出てきた深層ゴミにも着手し始めていた。ボロボロの袋類、個別包装の小袋、吸殻、そしてプラスチックの粒々など。これらをカウントに加えると、南実の言う通り收拾がつかなくなりそうなので、ぐっと抑えて別枠扱い。収集と收拾の両立を図るのもリーダーの大事なお役目である。

業平が防流堤の内側に滞留していたペットボトル類を拾い上げると、いつしか干潟表面はほぼきれいサッパリに。学生諸君は内輪で盛り上がっている。すると、そんなはしゃぎ声など何食わぬ顔で珍客が飛来。薄汚れた感じのドバトである。何を捕食するつもりか定かでないが、久々に露わになった干潟を嘴で突つきながらチョロチョロしている。間違えてレジンペレットなどを摘まなければいいが、と案じる向きもあるが、この余興鳩に一同が和んだのは言うに及ばず。

所変わればゴミ事情も変わるようだ。プチ干潟では注射器の他、家庭用電球、複数のレンガが繋がったような瓦礫、大きめの観賞用植物、物流用の木製パレットなど、初物がチラホラ見つかった。だが、こんなものでは済まない筈。人数が多かった分、総じて回収も早かったため、スクープ系を撮りこぼしてしまった可能性は大。弥生がバサバサやってくれた中にどれだけ珍品が混ざっているか、妙な期待が高まることになる。

約二十名がぞろぞろと上陸し、初音、千歳の順で干潟を後にしようとした時、櫻のいいもの其の二、ホイッスルが吹かれ、その合図音はマイクを通じて鳴り渡った。

「十一時？ 早っ！」

膝上までのチュニックをひらつかせ、初音は駆け出す。一瞬ギクとなる千歳だが、ちゃんとレギンスなるものを穿いているので、心配はご無用。これぞ初音流のクリーンアップスタイルなのである。そんなヒラヒラと秋風が重なる。詳しい名前は後で先生に聞くとして、複数種類のトンボと蝶がその風の中を泳ぐように飛んでいる。プロセスをあまり意識せずとも、場の流れの中で一定のマネジメントはできた。それよりも何よりも大過なくクリーンアップを終えられたことが何より。安堵感に包まれる千歳にとって、秋風はただただ快かった。



だが、そうも言ってもらえないのが現場である。三つめのエリア担当、陸上ゴミチームが大いに苦戦していたのである。若い二人はスタッフ任命されて張り切っていたのだが、例の塊はまだしも、大物ゴミに手が出せず、あえなく頓挫。一大ネックとなったのはベニヤ板であった。大きいのが何枚か見つかり、その下にいろいろありそうだったが、結局手付かず。ここのチームに加わった飛び入り組は何をしていたかと言えば、崖上の堆積ゴミからカウントできそうなゴミを掘り出すのが関の山だった。飛び入り参加者は少人数だったので、各人の判断で動いてもらえばいいと思っていたのだが、それでは不可<sup>いけ</sup>ない。相応のコーディネートは常に必要なのである。急遽、監督者となった永代だったが、マムシに腰が引けたか、そうしたお役は十分に果たせなかった。近くにいた文花もクシャミが収まるまでに時間がかかり、あまり加勢できない有様。会場全体のコーディネートが不足していた観は否めない。

櫻と千歳は申し訳なさそうに、陸上チーム各員に頭を垂れつつ、若い二人にも<sup>ねぎら</sup>の言葉かける。これはタイムテーブル立て直しか、と雲行きが怪しくなった時、詰所方面から少年野球チームがこちらに向かって行進してくるのが見えた。さらにその後方からはRSBタイプの真新しい自転車に乗って、長身の男性が走ってくる。少年野球ご一行を抜き去ったところで、その人物は判別された。

「須崎さん、やっと来たワ」

文花の嘆声に、櫻と先生がまず反応。今日ここにいるhigata@メンバーも（冬木を除き）一度は顔を合わせているので、「ああ」とか「おお」とか声が出る。リリーフ役と映ったか、タイミング的には絶妙だったようだ。

永代は初顔合わせかと思いきや、

「須崎、って辰巳さんのこと？」

「あら、何でまた？」

「ダンナの学友なんだワ」

こうしてまた新たな再会の場が供されることになる。情報通の文花と云えども、そこまでは存じてなかったもので、自分で招いておきながらもサプライズを食う。

「辰巳さん、お久しぶりね」

「エッ、何で堀之内さんがここに？」

どうもこの二人、過去に何かあったような印象を受ける。文花はちょっと穏やかではない。

一般参加者がいる手前、このまま暫し休憩時間という訳にもいくまい。何しろ「単なるゴミ拾いではない」ことを実証するため、とにかくプログチームと情報誌チームの分だけでもカウント作業に入りたいところである。そんな中、初音は接近して来る父君を避けるように、

「じゃ、お店で待機してますんで。今日は何人いらっしゃいますか？」

今のところハッキリしているのは、女性三人、男性二人か。他はそれぞれ予定がありそうなことをのたまう。そうこうしているうちに、野球チームの監督さんが到着。開口一番、

「おっ初音、これ持ってきてやったゾ」

「いけね、つうか、サンキュね」

河川事務所特製シールである。これがなければどうなっていたことか。姉に代わり、妹が受け取り、「へへ、これが目に入らぬか、って」 六月と小芝居を演っている。

櫻はマイクをとると、

「援軍が駆けつけてくださいました。えっと、チーム名は．．．」 小梅は芝居を止め、恥ずかしそうに小声で伝える。

「へ、トーチャンズ？ 八八、石島監督含め十三人、『トーチャンズ13』の皆さんです。拍手ー！」 どっかの映画か何かで聞いたような名称である。会場が何となく沸く中、進行役の櫻はタイムテーブルを見ながら、

「ちょっと押せ押せになってますが、今から二十分程度で分類とカウントを．．． 一応、これを配りますので、品目を確認しながら数えてみてください」

学生諸君やご家族参加者など、上流側・下流側でそれぞれ二セットずつ、データカード&クリップボードが渡される。

「で、トーチャンズの皆さんは陸上ゴミの続き、で大丈夫？」

六月が手を挙げ、早々と一群を率いて、大物ゴミのある先へ向かった。六年生の貫禄に加え、現場を知る者ならではの威厳すら感じさせる。取り残された監督は隙があったらしく、気が付くと清と南実に挟まれてバツが悪そうな状態。試合は午後からだが、トーチャンのいいとこ見せたらう、ってことで早めにやって来た。助っ人なんだからもっと厚遇されても良さそうだが、何故か肩身が狭い。

この間、文花は後部座席からバスケットを持ち出して来る。

「初音嬢、この野菜、今日でも使って。私はセンターに戻るからお店行けないけど、皆さんに召し上がってもらえれば．．．」

「ありがとうございます！ じゃ、代わりにこれ預かっててもらえますか？」

「あら、いいわね」

デジタル温度計である。只今の気温、二十五度。平年並みだとか。よく晴れていて、お天気お姉さんの表情も実に晴れやか。そんな初姉を拍手で送り出したかった櫻だったが、時すでに遅し。忽然と去って行ってしまった。仕方なく、ここでひと区切り。

「では、十一時半になったらまた合図します。よろしく願いしまーす」

カウント作業の指揮は、上流側は蒼葉、下流側は弥生が執ることになった。データカード上でメモ書きしてもらって、「なぜ、こんなゴミが」とか「どうすればこうならず済むか」とか話し合いながらケータイ画面に打ち込んでいく。実践型社会科学と言えなくもないこの作業。二人の学部生は今そこにある社会問題と向き合いつつ、解決策を模索しているように見える。ケータイによるデータ入力画面はその一助、参加者とのコミュニケーションはそのヒント、といったところか。

少年チーム13人は面白いように大物を運び出してくる。少年野球と言えば、チームワーク。それが機能しているのに加え、六月のコーディネートが冴えている証拠だろう。一人では困難だったベニヤ板も複数男子の手にかかればお手のもの。試合前にクリーンアップでひと汗、というのもアリなのである。

陸上の堆積ゴミについては今のところ分類どまり。そこへ大物の下敷きになっていた各種容器&包装類、スプレー缶、ボトル缶、食品トレイ、プラスチック破片等々がそれぞれ選り分けられ、嵩を増していく。フタもいつの間にやら相当量になっていた。この調子だとカウント作業は間に合いそうにない。担任教諭の前で自由研究テーマの再現を図りたかった六月だったが、文花曰く「今日はさ、この後も時間とれるから、後でゆっくり数えよっ」．．． これで気が楽になった。目に付くフタを手にして、永代先生に解説し出している。

「そうそう、フタを集めてるとこ、見つかったわよ。ちゃんと再生してくれるみたい」

「フタのビフォー・アフターだね」

「そ、アフターケアが大事ってこと」

監督の次女、小梅は正に紅一点。腰を痛めたり、ケガをしたりしないよう、少年達に適宜声を掛けて回っている。多感な小学生諸君は、年長のお姉さんに羨望の眼差しを向けつつも作業に精を出す。小梅は早くもトーチャンズのマドンナの的存在となった。ピッチが上がる訳である。

「昔はあの子、泣き虫だったのに。今はすっかりお姉さんね。見違えちゃったあ」

「永代も前はよく泣き言云ってたじゃない。最近はどうなのよ」

「今はイジメもなくなったし、教室もキレイになったかな」

この話の続きは閉会后に持ち越される。

リリーフ役の辰巳は、師匠の指導のもと、ヨシの束を処理することになった。束を立てて、<sup>きょうぎつぱつ</sup>夾雑物を振り落としてから、先生ご推奨の小道具、小型結束機で締めていく。今回は量が量なので、この場に放置しておくには忍びない。自然物ではあるが、河川事務所関係者がいる手前、一応搬出しやすい形態にしておこうということである。振り落とされた微細ゴミが気になる南実だったが、分類鑑定に付き合っているので、今のところは諦めている。データカード恨めしや、か？

スクープ系を追う千歳は、木製椅子の座面、円筒形容器に入った綿棒セット、某ファストフード店の紙コップ、ジョウロなんかをご愛用のデジカメで撮っている。

「千歳さん、いつもながら入念ねえ」

「他に何か気になるゴミありませんでした？」

「ああ、こんな見つけましたよ」

櫻が透明プラスチックの小箱を開けると、ミミズやらタガメやらを模した、いわゆる疑似餌が正体を現わした。

「櫻さん、よくもまあ。気味悪くない？」

「最初はビックリしたけど、別に動いてる訳じゃないし」

「こっちは、これかな」

ペットボトルを手にして振って見せる。

「えっ？ 注射器、それに錠剤．．．」

両者引き分け、といったところだろうか。そんなお二人の傍では、性懲りもなく冬木が

インタビューを敢行中。撮影係は動画モードでその模様を記録している。当地でのクリーンアップの一つの特徴である、分類&カウントにしっかりスポットを当ててもらえているのなら、良しとしなければなるまい。

業平は、ちゃっかり別行動に移っている。自前ノートPCを起動させると、スキャナをピカピカやり出す。現場で実機検証をしようという魂胆である。数え終わった容器包装系ゴミのバーコードにスキャナを当てると、とりあえず番号部分はPCにうまく記録されていく。蒼葉が不思議そうに覗き込む。

「本多さん、番号だけで何か意味あんのぉ？」と尋ねるのも無理はない。

「これでもちゃんと認識させるのに苦労したんだな。ひとまずデータを蓄積しといてまた考えるよ」

何処で売られたものかがわかったりすると発生源対策につながりそうだが、このバーコードはトレーサビリティ用じゃないので残念ながらそこまでは行かない。

別行動と言えば、この人も同じ。トーチャンズ監督である。お目付け役の師弟男女に挟まれていたところ、まんまと逃れて、かつてない美観を取り戻した干潟を気分よく散策している。だが、どうにも怪しい。脆弱な崖部分とか横倒しヨシとかを眺めながら、「やっぱ、引き波禁止エリアにするよりは、いっそのこと粗朶でも並べて干潟保全した方がいいんじゃないか...」 良さそうなことを言っているが、果たしてどうなのか。higata@メンバーが揃っている今日のような時ほど、協働協議に打ってつけなことはあるまい。課長の器量が問われる場面だが、億劫さの方が先に出る。と、プレジャーボートが猛スピードで上流に向け走って行った。ボートから発したうねりは波を作り、大きく小刻みに干潟を襲ってくる。石島課長への洗礼ともとれるが、実は逆効果だった。これが引き金となり、工事への意を強くさせてしまうことになるうとは...

「この一件は、内々で、と」 ドバトの耳には入っているが、伝書鳩、いや伝聞鳩って訳じゃないから、**広報されようがない**。

一般参加者各位は、さすがに疲労の色も出てきたが、南実の鑑定や櫻のアドバイスが良かったようで、漂流漂着ゴミへの関心を程々に高めてもらえたことが、交わされる会話からもわかった。機に乗じて業平はスキャンしながら[プラ]識別表示の講釈なんかをやっている。

「この表示が付いている以上、何らかの再資源化を考えてほしいもんですね。でも、『可燃でいいや』って自治体が増えてるんだそうで...」 なかなかいい調子だったが、「あれ、バッテリー低下？」 USBスキャナというのは思ったよりもPC本体の電源を喰うようである。やむなくスキャナを停止し、手入力に切り替える業平であった。本人はトホホだが、この程よい哀愁は二十代の女性にはウケてたりする。データ入力&送信を終えた蒼葉と弥生は、嬉々としながら業平に視線を送る。その視線はスキャナほどではないかも知れないが、結構鋭く彼を捉えていた。社会科学的考察の一環、**と今はしておこう**。

再資源化系と危険物の他、電球、電池、ライターも別袋を用意。まだ見えそうな品々も何となく除かしたところで、再びホイッスルが吹かれる。十一時半を回った。本日の櫻のいいもの其三、成果発表&クイズの時間である。

「皆さん、お待たせしました。集計結果がまとまりました。まず情報誌チーム．．．」ケータイ画面でデータ確認モードに戻せばチェックできなくもないのだが、ここは敬意を表してデータカードの出番。ケータイではなくクリップボードを手に弥生が発表する。ワースト5：食品の個別包装（小型袋）／十五、ワースト4：発泡スチロール破片／十八、ワースト2（同数）：フタ・キャップ&プラスチックの袋・破片／各二十八、ワースト1：ペットボトル／三十二、となった。小型袋は、食品の包装・容器に加味していいのだが、あえて分けてカウント。カップめんの容器も五つあったが、それも別にした。雑貨や紙類も具体的品目で分けたりしたため、ワースト6以下は、十個前後の品目がいくつも並ぶことになる。分散化傾向、つまり多種多数という実態がこれで浮き彫りになった。

「では、モノログチーム、行きますよ。カウントダウン！」妹に振ったつもりだったが、逃げられてしまったので、姉がそのままカウントダウン紹介する。

対照的にいつもの干潟では、ワースト5：発泡スチロール破片／三十九、ワースト4：食品の包装・容器／四十、ワースト3：プラスチックの袋・破片／四十六、ワースト2：フタ・キャップ／五十、ワースト1：ペットボトル／五十二、といった具合で、常連ゴミが大勢を占め、偏重傾向が現われた。次点の小型袋は二十三、その次の飲料缶が二十と続く程度で、そこから先は十前後に落ちるのである。表層のみの集計なので、ヨシマットに紛れていた分を加算すると破片類が増えるなど、また違った結果になるのかも知れないが、基調が把握できればひとまずOKだろう。

「素人考えですが、同じ干潟でも向きとか形が違うので、川の流れ方や潮の上げ下げも変わってきて．．．流れ着くゴミも違ってくるのかなあと、どうでしょう？」

「でも、ワースト5は似たり寄ったりだったでしょ？総合的には実情をよく反映していると思いますよ」専門家の見地から南実がフォローする。粒々を数えていないのが痛いところだが、レジンペレットはこれまでも別枠だった。今日拾ったサンプルを示して、

「レジンペレットについては、数よりもまず、こうして漂流・漂着するという実態をわかってもらえれば、と思います。でも、数えるのが好きな方はあとで私と」

南実はモテ系（櫻談）というだけのことあって、これで男子学生数人を助手に付けることに成功。閉会後のオプションイベントは今日も盛り沢山になりそうである。

「という訳で、その粒々は対象外なんですけど、こっちの干潟でこれまで拾って調べてきた数をまとめてみました。今日の結果がヒントです。わかる人！」

クイズのフリップを蒼葉の画板に挟むとややほみ出す感じ。ようやく人前に入る機会を得た千歳だったが、ほみ出たフリップ係ってのもちと冴えない。まあ、ここは進行役に委ねるとしよう。

最初のうちはフリー回答。何番目は何？なんて野暮なことは訊かない。こういうのは子どもたちが得意なので、ドシドシ答えてもらって紙で隠してある品目を明らかにしてもらう。（これを「千と櫻の紙隠しクイズ」というかどうかは不明）

順番はバラバラだが、「ワースト6：袋類／九十六、5：発泡スチロール破片／百四十七、4：飲料用プラボトル／百七十、3：ふた・キャップ／二百二十七、2：プラスチックシートや袋の破片／三百四十一」は子ども（&ファミリー）から答えが出た。残るは七位、一位である。

「ワースト1は四百八個、今日は一位じゃなかったからわからないかな？　じゃ．．．」  
いつの間にやら受付名簿を持って来て、指名し始める。会場は騒然となるも、これも櫻の計算のうち。指されれば何か話したくなるのが人のサガである。

「はぁ、缶でございますか。昔は多かったと聞きますが、最近はねえ．．．　ちなみにワースト九位です。あ、そこのお兄さん！」

こんな調子で、フリップを隠していた紙が外されていく。

「という訳で、七位のタバコの吸殻から、一位の食品の包装・容器まで、よくぞ当ててくださいました。こうして見るとどうですかね。素材で言うとやっぱりプラスチックが多い感じでしょうか。ふだんの生活の中で、これはプラスチックじゃないといけないのか、ってちょっと考えてみるだけでこうした状況も変わっていくような気がします。あ、そうそう、周りにプラスチック依存症の人がいたらひと声かけてあげてくださいネ」

回答した・しないに関わらず、ここで記念品（参加賞）としてボールペンが配られる。

「今は大して珍しくないかも知れませんが、軸はいわゆる再生プラスチックでできてます。食品トレイが原料でしたっけね」　マスクの女性は何か言いたげだったが、小さくコクリ。

十一時五十分近く。十二時を終了予定にしていたので、まだ多少の余裕はある。こうしたボランタリーな行事のペース配分は基本的にスローでいいのだが、適正規模・適正人数だったこともあり、いい感じで進んでいる。すでにタイムテーブル上もアドリブOKの時間帯である。進行役はペースを維持しつつ、アドリブ開始。

「それでは閉会に先立って、情報誌チームを代表して、エドさん、どーぞ」

気負っていた割には、こういうのには気が回っていなかったらしく、明らかに不意を衝かれた様子。だが、女性スタッフがアンケート用紙を差し出すと、我に返ったように話し始める。

「．．．情報誌を生き生きとさせるのと同時に、地域ももっと生き生きと、そのために何が必要か、というのがわかった気がします。今日はインタビューさせてもらったりもしましたが、さらに皆さんの声を聞かせてもらえればと．．．」

欲張りな気もするが、こうした観点はさすがである。冬木を除く higata@ の面々は一本とられたとばかり慨嘆の息を漏らす。この際なので情報誌チームに限らず、参加者全員（家族連れは代表に一枚）に書いてもらって、その場で回収、またはFAXということにしてもらった。思いがけない形で冬木はアドバンテージを得るも、これでやっとお騒がせの失点を回復できたというのが正直なところだろう。イベント慣れこそしているが、彼にとって今回のクリーンアップはいろいろな意味で鍛錬・研鑽の場となったようである。

進行役の櫻は、忘れちゃいけない、小悪魔さんである。愛しの誰かさんを驚かせるのが愉しくて仕方ない。「では、今回のクリーンアップの締めに入りたいと思います。そもそも何でここに皆さんがこうして集まることになったか、それはこの人のせいなんです。ね、隅田さん！」

こういう場面では、そのクールさが前面に出る。驚くどころか至って冷静。千歳はマイクを受け取るとスラスラとトークを始めた。

「漂着モノログをご覧の皆さんはどこかで隅田千歳という名前を見た覚えがあるかと思いますが、ここにいるのが本人でございます。悪友からは千ちゃんと呼ばれりするものですから、ここでクリーンアップしてると『千と千歳のゴミ探し』とか、からかわれることもあります。一人二役はムリな話です。皆さんあっての取り組みでして．．．」

こうも飄々とやられては櫻としては面白くない訳だが、乗じない手はない。もう一本のマイクで軽くツッコミを入れてみる。

「『千と皆でゴミ調べ』ですね」

「へへ、その通り。でもね皆さん、映画の方の主人公は女性でしたけど、ここにいる千は男性だったりします。今日、女性の千歳さんに会いにいらした方には申し訳ありませんでした」

子どもたちの一部はチョロチョロ動いてたりするが、会場は概ね千歳ワールドになりつつあった。自身のワールドを繰り広げる点では一枚上手の掃部先生も半ば脱帽。朗笑するばかり。呆気にとられているのは女性陣である。間合いを押し量りつつ**続ける**。

「千歳さんがダメでも、この干潟に集う女性は美しい方々ばかりですから、よかったですよ。そんな干潟シスターズを、ここをご紹介します」

櫻に言われなくても、わかりきっていたように切り出す千歳。以心伝心、またはそれ以上？

「現場研究員かつアスリート、小松南実さん、データ入力システムの開発者、桑川弥生さん、今日は弟の六月君も一緒です。あ、シスターズ+1でこと。へへ。彼は銘柄研究家という顔も持ってます。で、そんな彼の自由研究仲間、石島小梅さん、今やトーチャンズの姉御ですね」 拍手がその都度起きるも、間はとらず、次々と振っていく。こういう時はいつものスローでいいような気もするが。

「ご紹介して、よろしいでしょうか、ね？」 とここへ来て一息。視線の先は堀之内先生である。櫻が気を利かせて、マイクを持って歩み寄る。

「あ、今日は大してお役に立てなくて．．． 六月君の現担任、小梅さんの元担任、堀之内です。二人の成長ぶりがここに来てよくわかりました。どうも．．．」

ご自身でここまで喋ってもらえれば御の字である。そのお隣には、マスクを着けたままのシスターズ一女さん。櫻はニコニコしながら一女にマイクを向けるも、マスク越しでは喋りたくても喋れない。ここぞとばかりに櫻はいつもの冷やかしを入れる。

「ありがとうございました。初登場ながら助っ人を引き受けていただいて。大助かりでした。もう一度拍手を。で、隣にいらっしゃるのが、堀之内先生の古くからのご友人、そして今回の影の主催者でもあります、矢ノ倉文花さん。人呼んで『おふみさん』です。拍手ー！」

笑顔のようなのだが、どことなく引きつっているような．．． マスクというのも良し悪し。

「そして、正真正銘のシスターズを紹介します。画家であり、モデル、もとい、モデル系の千住蒼葉さんと、看板娘、我らがリーダー、千住櫻さんです！ 大きな拍手を」

一大拍手が起こる中、リーダーがポツリ。

「ふだんは黙々と拾って&調べてをやってる千さんですけど、今日はどうしちゃったんでしょうねえ。川の神様のせいかしら？」



心なしか、目が潤んでいるようだが、気のせいかな。

「十月は神無月ですからねえ。神様お留守ですよ」

「はいはい。もうツッコミませんから。閉会の辞、行っちゃってください」

櫻と目を合わせ、ひと呼吸。ここからはいつものスローな千歳に戻る。

「毎月のように拾って参りましたが、おそらく今日ほど片付いたのは初めてのことだと思います。台風通過後は凄まじいことになってましたが、その傷も癒えました。干潟もヨシもまた元気になったことでしょう。自然の元気は人の元気につながります。今日お集まりの皆さんはもともと元気な方ばかりだと思いますが、どうですかね、益々元気になられたんじゃないでしょうかね？ 僕もその一人。どうかしっちゃった、というよりも元気になっただけです。ハハ」

言葉を選びながら真顔で、時に笑顔で話す千歳。櫻はボーッととなってきた。

「御礼というのも何ですが、ボールペンの他にも何か記念に、という方は、そこに『もったいないゴミ』とか、人によってはお宝ゴミなんかもありますから、どうぞお持ち帰りください。大丈夫ですよ。石島さん？」

河川事務所課長殿は、拾得物やら遺失物やらの定義を思い出そうとしていたが、よくわからんといった感じで結局「お任せします」とだけ答える。実際のところはどうかだろうか？

「じゃ、櫻さん、振ったついでで、男性陣の紹介、お願いします」

「へ？ あ、そっか。石島さん、掃部先生、それに先生のかつての弟子、須崎さんです」

拍手が疎らになったところで、蒼葉と弥生は、待ちぼうけを食ったような顔した、ある三十男を指差す。何だかんだ言いながらも、今日これだけの人数が集まったのはこのつなぎ役がいたからこそ。

「最後になりましたが、重要人物を紹介します。モノログと情報誌の橋渡し役とっていいでしょう。発明家の本多業平さん、Mr. Go Hey!です」

いつものノリならマイクを受け取って何らかのパフォーマンスをしそうなところだが、今日はパス。思いがけない紹介、そして少なからぬ拍手に感無量だったようである。

ダブル司会者は、間合いをとりながら、小声で示し合わせる。

「じゃ、せーので」

「あ、ハイ」

正午ちょうど、千歳と櫻は声をそろえ、

「今日はありがとうございました！」

四月一日から約半年。舞台はこうしてオープンになり、プライベートビーチだ何だとは言えなくなってしまったが、干潟や川に対する二人いや一同の想いがより多くの人に伝わるなら、この上ないことである。遊びに来るもよし、個人的に拾いに来るもよし、ここは今や地域の財産。少なくとも、今回の参加者に当地をぞんざいに利用する人はいないだろう。盛大な拍手がそれを裏付けていると言っていい。

そして正午を過ぎ

仕分けされた大小様々なゴミを前に並べて、ここで記念撮影。撮影拒否される方も特に

なく、撮影は快調と思いきや、おふみとおひさのご両人が何やら身だしなみを整えたりするもんだから、少々ペースが崩れる。それでも、チーム榎戸の撮影係はここぞとばかりに張り切って、ひたすら連写モードで撮る撮る。

「ちょっと待ったぁ」 冴えてる千歳はここで自身のデジカメを手渡しつつ、ひと仕切り。「では皆さん、Go Hey! ってやりますから、可能な方は Hey のところで拳を挙げてくださいね」

傑作が撮れたところで本日の予定行事は終了。ここからはオプションである。

「そうそう、ちょっと水位が上がってますが、干潟でもぜひ記念写真撮っていただきたいね。スタッフがお撮りしますので」 櫻の掛け声に応答するように参加者の何人が、干潟シスターズ、干潟ブラザーズ(?)が向かう。いや、六月は途中でトーチャンズの少年らと漂着硬球の品定めをし始めてしまったので、シスターズ+2(おまけ)である。

何故か人気者の業平が撮影係を務めている間、南実は干潟を見て一言。

「これでリセット完了ね」

「エ? リセットって?」 聞き慣れない用語に櫻が素早く反応。

「調査型クリーンアップの場合、決められたエリアを重点的に片付けて、一定期間を空けては調べ、というのを繰り返す手法があるんです。それがリセットクリーンアップ。今日はその記念日、かな」

ここで永代が口を挟む。

「こうやってリセットされると、ここにゴミを捨てようって、普通なら思わないでしょね... あ、漂着して来るゴミが溜まる場所かぁ、**ここは**」

「いえいえ、ここだってわかりませんから。捨てさせないためには片付ける、って、大いにアリでしょう」

「調査してきてどうよ、櫻姉?」

「そうねえ、今日見つけたハクサイとかソーセージとかはここか、この近くかもね」

「すでに散らかっていると連鎖反応でつい捨てちゃう、か。でも食べ物をそんな風に捨てるのって、アンビリバボーかも」 弥生はちょっと義憤に駆られている。だが、かつての学校はもっと unbelievable だった。堀之内先生は経験談をもとに静かに話し始める。

「荒川も学校も同じ。本来の状態にできるだけ早く戻すことで荒れを防ぐってことよ。割れた窓ガラスを放っておくとドンドン荒れちゃうから、とにかくすぐ直す。ゴミも早く回収できれば生き物の被害も防げる、そういうことよね」

現役教諭ならではの発言に、シスターズはフムフムと頷く。いわゆる割れ窓理論は、干潟をはじめ、地域や流域にも大いに当てはまるのである。ただ、ここでの予防論、つまり発生抑制策は比較的狭義に当たる。より上流、即ち消費 購入 販売と遡及していく中でゴミ要因を抑えていくこと、それがより広義の予防と言えるだろう。(割れた窓をどうこうではなく、そもそも窓を割らせないようにする、という道理) ゴミではなく資源という意識付けと同時に、ゴミにならない素材利用が促されないことには、クリーンアップはいつまで経っても後手の対策でしかないのである。

撮影係を終えた業平は、「干潟端会議」を聞いていた千歳の肩を叩くと、

「千ちゃん、今日はグッジョブだったねえ。モテる男は違うなあって思ったよ」

「何を仰いますやら。Go Hey 人気の方が上だよ。ホラ、シスターズが手振ってるよ」

どうやら干潟をバックに写真を撮れ、ということらしい。

「なァーんだ、女性だけでってか」

だが、そうでもなかったらしく、次の写真は男子も交えて、と相成った。

「じゃ、アタシは新米だから。撮影係しますワ」

永代が撮った一枚は、中央に千歳と業平、それぞれの隣には櫻と蒼葉と並び、両翼には文花と南実、小梅と弥生が固める構図。撮影者はシャッターボタンを押すところで、すでに感極まっていた。「何か、Beautiful う」

その後はケータイをとっかえひっかえで、思い思いに写真を撮っているご一同。六月が加われば、ヨシ束の一部をバイクに載せ終えたもう一人の先生もやって来たりで、ワイワイが続く。この間、チームを散開させた冬木は、辰巳と名刺交換しながら談笑中。トーチャンズの野手は、使えそうな硬球を洗い終え、乾かしがてら学生諸君とキャッチボールなどしている。

「あ、彼等待たせてたんだった」 南実は小走りで外野へ。掃部先生は、外野の周りで駆け回っている子どもたちを見ながら、妙なことを仰る。

「いやァ、やっぱバッタは地場のに限るね。活がいいんだよな」

「あら、センセ。バッタに地場とか外様とかあるんですか？」

「なーに、どっかの区がさ、子どもたちにバッタ捕りさせるんだとか云って、何すんだと思ったらよォ．．．」

話によると、わざわざエリアを区切った上に、どっかからバッタを持って来て放して捕まえさせたんだとか。バッタとしてはいい迷惑である。

「野放しにすると、放流ならぬ放虫問題になっちゃうから、区としても配慮したつもりなんだろけど、まァ不自然だわな。バッタも慣れない土地だから、どう跳んでいいかわかんなかったんじゃねえの。ドツタバッタってヤツさ」

相変わらず絶好調の清先生である。何食わぬ顔しているが、細めた目の先には、バッタを捕まえたばかりの例のやんちゃ少年の姿が。先生は一同を引き連れ、少年の元へ。

「トザマ、じゃねえ、トノサマバッタか。観察したら放しておやり」

ここで千歳は思い出したように先生にトンボやチョウの種類を尋ねる。「アキアカネとかツマグロヒョウモンとか．．．」 飛び交う傍から名前を明かしていく。乗じて小梅も途中で見かけた可憐な黄色の小花について質問。「コマツヨイグサ？ まだ咲いてるってのもなァ．．．」 気温は高めではあるが、花は九月までなんだそう。これも温暖化と関係があるのだろうか。いい意味で温暖な青空のもと、小教室が開かれるのであった。

コマツが出たところで、南実嬢はと言うと、微細ゴミのことはそっちのけで、何故かピッチャーマウンドにいる。勧誘したと思しき男子学生がキャッチャーに回り、ウォーミングアップを始めたところである。アスリートだけあって、疲れ知らず。楽々肩慣らししている。

投手は打席に六月を立たせ、漂着硬球の感触を確かめると、ゆっくりと投げ込んだ。スローボールだったが、六月はあえなく空振り。一球目、ストライク。始球式、もとい「試球式」の図である。

小技志向の六月はバントヒットを狙うも、南実の軽快なフィールディングであっさりア

ウト。投手はすかさず二番打者を指名する。「あ、ちょうどよかった。隅田さん、どう？」  
トークは冴え渡っていた千歳だったが、バッティングについてはどうだろう。本人も全く予測がつかない。打席に意識を集中する間もなく、ズバッと直球が走って行った。

「ちょっと小松さん、一番バッターの時と全然違うじゃんさあ」

「手加減しませんから。打てるもんなら打ってみ？」

いつもの焚き付けが始まった。こういうのは心理戦でもある。挑発に乗せられた方の負け。南実も昔のことを思い出しながら、その想いを球に込める。打席に立っている人物は在りし日の．．．重なって見えてくる分、想いはひとしお。

「やったあ、三振！ バッターアウト！」

二球目は辛うじてファウルしたものの、三球目は空を切った。つまりストレートの三振である。「あーあ、千さんお気の毒。ま、相手が悪かったわね」 蒼葉に慰められる始末である。櫻は一見したところ笑みを浮かべているが、内心はあまり愉快でない。「小松さんたらあ」これは彼を思っていることが、それとも南実の何らかの策謀に気付いていることが、波が起こりそうなことだけは確かである。

「よっしゃ、ここは業平君に任せなさい」

三番は志願バッターの登場である。南実も余裕でストライクを取りに行き、業平も余裕で見送る。簡単に2ストライクになるも、これは様子見しただけのこと。選球する必要がないことを悟ったバッターは、次もストレートと読んでこれがズバリの中する。三球目も球は走っていたが、「Go Hey!!」で振り抜いた瞬間、大飛球が舞い上がった。彼の中で何かがフツ切れた瞬間でもある。

「ひえー、やられたあ」

悔しがる南実を横目に、まったりとベースを回る Go Hey 君である。ブラザーズでハイタッチとかやっているが、シスターズの方は至って冷淡。

「本多さん、どうすんの？ また漂流ボールになっちゃうじゃん」

「あ、いけね．．．」

弥生のツッコミにまたしてもタジタジ。打のヒーローは一転して、返り討ちに遭う。「干潟何周してもらおっか」「まずは拾いに行ってもらわなきゃね」 **千住姉妹からもこの調子**。人気者とはこういうものである。

打たれてスカッとしたか、ピッチャー南実も学生連中を従え、にこやかに現場に戻る。だが、微細ゴミにはまだ手が回らない。集合写真を撮ったその場には、分別されたゴミ袋の他に、ベニヤ板、大物プラスチック製品、敷き布団、観葉植物、物流系パレット、ビールケース、塗料缶、タイヤなどの粗大な品々がまだ残っている。一般参加者は大方帰ったので、今は小梅と南実が中心になってステッカー貼りなどをする傍ら、学生諸君が搬出可能な分について詰所脇に持ち運ぶことになる。流木とヨシ束は石島課長のご指示により、ひとまず放任となった。

もったいないゴミも何となく片付いたようだ。その代表格である疑似餌セットは先生の手元。いつものように釣具も持って来ているので、チョイと太公望と行きたかったが、今日のところはお預け。

「じゃ、センセ。これお願いします」

「続きは土曜日でもいいのかな？」

「ハイ」

文花が手渡したのは、理事選考用（トライアル）のレポートのコピー。匿名で六人分、お題は「巡視船紀行」（流域考察）である。これは先生にとっても好材料。目が笑っているのがその証し。

そこへ「文花さん、この重たいヤツ、クルマで運んでももらいたいんだけど．．．」南実が頼ってきた。

「はぁ、そういう使い道もあったとは」

「ブルーシートの上だったら平気ですよ」

と、トランクを開けた際、農作業道具を出し忘れていたことに気付く研究員コンビ。粒々を拾うのにスコップが、粒と破片類を分けるのにはザルが、それぞれ役に立ちそうだ。

「さすが、先輩」

「もしかして埋没物調査とかやるのに使えるかなって思っただけ．．．」

蒼葉に画材を引き渡したら、あとはとにかく積み込むばかり。資器材も積載しているが、文花の軽自動車は今やゴミ運搬車である。うっかりしていたが、十三時から野球の試合が始まってしまうので、早めに移動しておいたに越したことはない。タイムテーブル設定外の時間帯ゆえ、こうしたドタバタはむしろ当たり前。臨機応変に対応できるかどうか、これも現場力のうちなのである。

文花はハンドルを握るとそれなりにサマになるものの、今はマスクをしているので何とも言えない。ノロノロとトーチャンズが練習するグラウンドの横を掠めて行った。練習の模様を眺めていた冬木と辰巳だったが、文花のマスク姿に触発されたか、この時ばかりははっきりリリースに向かった。

業平はチーム南実に紛れてカウント作業を手伝っている。弥生、六月、小梅、永代は、問題の陸上ゴミの調査中。清はいつもの巡回散策に出ている。本日大役を務めたお二人はようやくひと息．．． いや息を抜き過ぎたか。

「千歳さん」

櫻はもたれかかろうとしたつもりが、倒れそうになり、彼氏に抱きかかえられる。

「大丈夫？ 櫻姫」

「八八、ちょっと飛ばしちゃったかな」

甘え上手な姫である。

「頑張ったもんね、櫻さん。楽勝に見えたけど、そうでもなかった？」

ちょっと間を置いて、

「だって、私の笑顔、好きなんでしょ？」

情報筋は小梅である。櫻にはちゃっかり教えていたようだ。でも、そのために無理して？

「小梅嬢、僕には教えてくれなかったのになぁ」

「フフ、誕生日に教えてあげる」

笑顔が似合う小悪魔さんであった。千歳は一寸だけ安心する。

球音が聞こえなくなったと思ったら、トーチャンズはすでにランチタイムに入っている。十二時四十五分。集積所への積み出しを終えたところで、冬木は一服しかけるもぐっと思いとどまり、こんな提案を口にする。

「矢ノ倉さん、皆さんで打上げとかはやられないんですか？」

「打上げ？ そういうのってアリなんだ」

「例の商業施設の中に打ってつけのスペースがあるんですよ。カラオケでもやりながら、どうですかね？」

「弥生嬢に聞いてみるワ」

陸上ゴミのデータを入力している最中にケータイが入る。重低音着信はいつも通り。だが、その着信音が響いたか、入力画面がクリアされてしまった。「え？ そんなぁ．．． ったく誰じゃ」 データ入力システムに思わぬ欠陥あり。それが見つかったのは良しとしたい。

「あ、弥生さん？」

「なァーんだ、おふみさんか。着信したらおじゃんですよ。せっかく入力してたのに」

「ごめんごめん。カラオケでもどうだ？って、edyさんが言うからね。皆、どうかなァと思っテ」

「カラオケ？ あ、行く行く！」

お若いだけあって、こういうのは結構お得意だったりする。かくして、ノリノリの弥生の声かけにより、打上げ企画が成立。だが、初音を待たせていることもあるし、今からすぐにカラオケってのも気が引ける。

お互いに姿は見えているのだが、再度ケータイで連絡を取り合う。

「あ、ハイ。三時半にそこの受付に行けばいいんですね」

繁盛しているらしく、すぐには入店できないことが判明。かえって都合がいいというもんだ。

六月と永代は、陸上ゴミの入った袋を持って、文花のクルマへ。センターを經由した後、三人でお昼を共にするんだとか。蒼葉と小梅は、干潟の見える場所でピクニックランチ。女流画家は、「皆さんの想い、その想いできれいになった干潟．．． 息づかいというか呼吸感というか、とにかく描き留めてみます」と熱い。画家見習いの小梅にとっては、またとない機会だったが、食べ終わったら塾、というから世智辛い。

師弟ディスカッションが尽きない清と辰巳だったが、さすがに空腹になったか、程なく会場を後にした。冬木は撮影係から呼び出しを受け、商業施設のフードコートへ行くそう。あそこならいくらでも時間は潰せる。打上げ企画の言いだしっぺである手前、早めに会場入りしておいて悪いことはない。

スタッフ証を付けた面々での閉会式の如きものはあったようななかったような感じではあったが、打上げもあることだし、彼等にはメーリングリストという頼みの綱がある。流れ解散が可能なのは、相応の結束があるからこそ。本日のイベントを以って、その結束が少なからず強まった観はある。次回は十一月四日というのもすでに打合せ済み。リセットクリーンアップー巡目、というのがまた昂揚感を高めてくれる。

「あ、初音さん？ ウン、今から行く。え？ 遅いから全メニュー品切れ？ アハハ」  
午後一時、一人徒歩の弥生は店に連絡を入れる。櫻、千歳、業平は、再資源化関係をひ

と袋つつ自転車に乗せ、押して歩く。カラスが時折喧しいのを除いては、実に穏やかな秋の午后早々。四人の足取りは軽やかだが、スローである。

当店初登場の弥生を筆頭に、常連さんがやって来た。

さ「じゃあ今日は飲み物だけかな？」

は「いえいえ、ちゃんとありますよ。いただいたお野菜もアレンジしてもらいました。でも四人じゃ多いですかね？」

大皿には秋野菜がたっぷり、そこに流域地産のコマツナがちりばめられている。

ご「あとで、豪腕ピッチャーも来るはずだから、ちょうどいいと思う」

は「豪腕？ 誰スか、それ？」

さ「ああ、コマツナ南実さんよ、ね、空振りバッターさん？」

ち「あんな本気で投げられたら、敵わんですよ」

は「見たかったなあ」

粒々入りの袋やら、文花から借りた道具やらを持って、早足で堤防上を歩く南実嬢。

「ハ、ハ．．． うう、ススキ花粉症、うつっちゃったかしら？」 出そうで出ないクシャミほど愉快でないものはない。

噂のアスリートが入ってきた時には、議論もたけなわ。

さ「ちょっとねえ、三会場全部を見渡せる人が必要だったかなあ、ってのはある」

や「品目の確認、特に初めての人は戸惑ってたみたい」

ご「重たいかそうでないかてのは見ただけじゃわからないから、まずは複数でチェックしてからの方がいいかもね」

などとポンポン出てくる。「あ、小松さん．．．」 重量ゴミをいとわない豪腕女性がタイミングよく四人の前に現われた。

み「クリーンアップする前に筋トレすりゃいいのよ」

ち「ハハ、それは思いつかなかった。クリーンアップが即ちエクササイズかなって思ってたくらいだから」

や「今日はバッティング、いや素振りまでして、よく動いたことだし」

さ「筋肉痛にならなきゃいいけど、ね？」

「櫻と弥生」の思わぬ口撃に今度は千歳がタジタジ。先刻までイベントのふりかえりをしてきたはずが、脱線モード。ピッチャーとホームランバッターは、投打のふりかえりをしている。

「そうそう、小松さん、トースト来る前に文花農園のサラダ、どう？」

櫻は何気なく勧めたのだったが、南実は蒼然となる。

「この緑のってもしかして．．．」

「コマツナ、美味しいわよ」

「ム、ムリかも．．．」

人は見かけによらないというか、思いもよらない弱点があるものである。「ハウレンソ



ウはいいんだけど、これはねえ。コマツちゃうんだなあ」

千歳の飴嫌いとは接点がありそうな話である。好き嫌いどころというよりは、名前がもとでトラウマ食品になってしまった、そんなところらしい。

「喜ぶと思ってとっといたんだけど、ね。じゃ四人で先にいただくから、他のお野菜どーぞ」

してやったりの櫻。無然とする南実。二人の間に小波が立ったが、今はすぐに収まった。そんなこんなで、食べ物話題になり、漂着食品または投棄食品の話で盛り上がる。初音が全粒粉トーストを持って来てても注文主はあまり気付いていない。

「小松さん、それって粒入り？」

「あ、いつの間に？ 初音さんが勧めるから今日はこれにしたんだけど、確かにそうね。ツブツブ．．．」 オススメの甲斐あって、やっぱり嬉しそうである。

本日の反省なり成果なりは、higata@に各自一筆入れるということにして、ふりかえりは収束方向に。

「でも、櫻さんも隅田さんも達者ね。当意即妙っていうか．．． 何かやってたんですか？」

南実の解説ショーも鮮やかだったが、アドリブ性という点では二人が上手だったのは間違いない。

「昔ね、ステージでその．．．」

「何かね、マイクの前に立ったり、マイク持ったりすると、不思議と．．． へへ」

打って変わって今は滑舌さが消え、ただ言いよどむご兩人。業平は千歳のステージ慣れについては了知するも、櫻のステージというのが引かかる。千歳も詳しいところは聞いていない。

「へえ、ピアノ弾きながら、歌？」

「学生の頃だから、結構前の話だけど．．． 私はいいのよ、現役って意味じゃ弥生ちゃんよ」

「そう来ますか。あたしのは下手の横好き。チョッパーできないし」

重低音好きな理由がこれで少しわかった。彼女はベーシスト志向があったのである。

「楽器屋でね、時間がある時に手ほどき受けてたりしたんだけど、最近はPCでリアルなのが作れちゃうから、あんまし．．．」

こうなると、何かやってくれそうな南実に注目が集まる。

「実は形見の楽器があって．．． 河原で練習したりもしたけど、吹いてるとどうしても切なくなっちゃうから。干潟に顔出すようになってからは全然ですね」

新事実が明らかになるも、形見というのがネックになり、膠着気味。インタビュアー千の出番ではあるが、こういう時は本人に委ねるのがベターだろう。

「あ、いや、そんなシリアスな話でもないですから。文花さんにでもそのうち聞いてやってください」

そう言いつつも、南実らしからぬ愁いを秘めた気色が浮かぶ。千歳と櫻はそれを見逃さなかった。

初音がお代わりサービスにやって来た頃にはすっかり音楽談議に花が咲いていた。

や「この後、カラオケですから。そこでまた趣向がわかりますかね」

ご「でも歌はなあ．．．」

さ「そうそう初音さん、今日お店何時まで？」

は「ティータイムは外せなくなっちゃったから、五時まではいます。皆さん、カラオケですか。いいなあ．．．」

十月からは「初姉のパンケーキ」が始まっている。初日の昨日はそこそこ好評だったので、今日はさらにブラッシュアップして定着させたいところ。晴天時の初音はいつもなら朗らかだが、今はやや緊張した面持ち。そろそろ厨房にこもらないといけない。

「春までおいそがしいかな？ ま、どっかで打上げしましょうね」

頭を下げて店員は席を離れる。すでに十四時を回った。パンケーキの注文がチラホラ入り始める。

アイスカフェオレを一気に吸い込んで、小さく溜息。いつものピピとはちょっと違う。

さ「どったの？ 弥生ちゃん」

や「あ、別に。ハさんとルフロンさん、どうしてるかなって？」

ち「そっか、忘れてた」

や「酔いが醒めたら出て来れるんじゃないかなって、ふと」

千歳は二人がリズムセクションだったことを思い出す。カラオケに集ってもらえば、リズム感なり、音楽の志向なりもわかるだろう。業平も思うところがあったようで、

「八宝クンにかけてみっか」

外に出て行った。

「三時半てことは、駅を通る例のバス、三時五分くらいでしたっけ？ 千歳さん」

「三時前に皆で出ればいいんじゃないでしょか」

「じゃ、あたし、蒼葉ちゃんに確認してきます」

業平と入れ替わりで弥生が店外へ。

「いやあ、電話越しにルフロン嬢が出て来てさ、大はしゃぎだったよ」

「まだ酔いが抜けてない、とか？」

冷やかし気味に千歳が問うと、業平は真面目顔でサラリ。

「皆に会いたいんだって」

漂着モノログ、さくらブログには今日の出来事がどう載るんだとか話しているうちに、

「ナヌ、掃部先生のブログ、ですって？」

弟子としては誠に耳寄りな情報が飛び込む。南実は早速URLを控えるが、「まあ、当面は千歳さんと先生がセンターで落ち合う時が更新タイミング、かしらね」と櫻に実情を聞かされトーンダウン。それでも内心は「しめしめ」。しっかりコメント投稿すれば、いずれ先生も認めてくださるだろうし、次の著作で採り上げてくれることだって出てくるだろう。したたかさを内に秘める南実研究員である。

三時のおやつが用意されつつあった。初音は五人を引き止める代わりに、文花から預かったバスケットに包み込んだパンケーキを収め、弥生に渡す。

「お客様に出す時は、二枚重ねのパンケーキを二組。二×二なんで、初姉の『ニコニコ

パンケーキ』ってことにしました。今、五人分で十枚、取り急ぎご用意したんですが、よろしければお土産に、ってことで」

「ニコニコねえ。お一人様二枚だと『ニコパンケーキ』？」

「そっかぁ、選べるようにすればいいんだ」

櫻の小洒落は、ちょっとしたヒントを与えたようである。初姉はニコリ。

「あ、そうだ。文花さんから預かってたんだ。これ初音さんにとって」

お泊りだったため、バッグは大きめ。南実はそのからあるものを取り出した。

「何度まで行きました？ 今日」

「二十六度だったかな」

できたてのパンケーキからは程よく湯気が立ち上り、デジタル温度計をあわてさせる。

「あらら、三十度超えちゃった」

「ありがとね、初姉！」

今回はテイクアウト品のモニターをお願いしたので、またしてもサービスである。五人衆は素直にニコニコしながら店を後にする。ネーミングの妙味ここにあり、か。

十月の巻（打上げ編）

課題曲 & 自由曲

三時ちょうど、停留所まで来た五人はここから二手に分かれる。自転車組三人と送迎バス組二人。

さ「弥生ちゃんと小松さんて、組合せとしては異色ネ」

ご「研究熱心って点では共通するよ」

ち「意外と音楽の趣味とかも似てたりして」

アラサーの三人はお気楽なことを言い合ってるが、当の異色コンビはと言うと、

「はぁ、八十年代、ニューミュージック？」

「弥生さんが生まれた年？ それ以降かな。とにかくその頃に流行った曲とか・・・」

「でも、小松さんだって、小学校低学年くらいでしょ？」

「兄貴がよく聴いてたんだ」

「お兄さん？」

「あ、とりあえず内緒ね」

バス車中の限られた時間ではあったが、聞き捨てならぬ会話を交わしていたのであった。

「榎戸さん、一人？」

「ええ、情報誌チームを代表して・・・」

開場十分前、南実と弥生がまず打上げ会場に到着。この時、駐輪場では、

ま「ヤッホー！ 櫻さん、と、二枚目コンビさん」

ご「何だ、全然元気じゃん。本当に二日酔いだったの？」

八「へへ、見ての通り。こっちはグッタリっすけど」

櫻は舞恵の頭をなでながら微笑みかける。「つらかったら櫻姉が相手してあげるから。

お酒に頼っちゃダメよ」 十数秒前は元気そのものだった舞恵だが、今は半泣きになっている。カウンター係ならぬ、カウンセラー櫻の思いつき療法、大したものである。彼女の如才なさを再認識しつつも、舞恵をちょっと羨ましく思う千歳であった。

そして三時半、文花と蒼葉を除く、higata@メンバーが集結する。珍しく男女バランスがとれているが、紅白歌合戦なんて陳腐な設定は無用。とにかく歌いたい人がお好きなように、でいいのである。

ところがここでの進行役、冬木は面白い提案を持ち出した。

「この部屋、ドリンクバーが付いてるんで、各自ご自由にどうぞ。アルコールは個別にご注文ください。で、飲み物を揃えてる間に、この機械か本で選曲してもらって、このボードに番号のご記入を。あとは僕が順不同で入れてくんで．．．」

「あ、それならも一つ提案！」

カラオケ大好きの弥生ならではの妙案が飛び出す。

「課題曲と自由曲の二部構成って、いかが？」

「へえ、課題曲ねえ。例えば？」

ツッコミどころではあったが、業平は優しく聞き返す。

「千住姉妹に敬意を表して『さくら』または『あお』に関する曲を課題曲。それが一巡りしたら、あとはご自由に、そんなとこです」

すると、うまい具合に「あおば」さんが入ってきた。

あ「あれ、まだ誰も？ よかったあ」

や「遅いじゃん、蒼葉ちゃん」

あ「画板持って自転車こぐの大変だったんだからあ」

さ「そうだ、描けた？ 見せて」

姉がさりげなく促す。

「駄作ですけど．．．」

一同は一樣に「おお」となる。鉛筆で強く描かれた全景描写の上に、淡い青が走る。今回も川の水で彩色しようとしたが、水面に無数の草屑が浮いて来て、筆を溶く気にならなかったんだそう。

「ひとまず、青だけなぞってみただけど、皆の想いを表現できてるかって言えば、まーだまだ。また明日にでも続き描きます」

これで「青」や「蒼」がすっかり印象付いてしまったようで、課題曲は「あお」関係がメインに。何がどう出て来るかはこの後のお楽しみである。番号入力を始めた冬木に弥生が尋ねる。

「ここって、持ち込みOKですか？」

「飲み物はダメだけど、食べる方がいいんじゃないかな」

さすがに湯気は引っ込んでしまったが、仄かに暖かさ残るパンケーキが顔を覗かせる。

「そんじゃこれ、あ、どうやって食べよ．．．」

「ハハア、初姉ったらテイクアウトグッズ、入れ忘れちゃったんだ。まっお手拭きあるし、一人一枚だから、つまんで食べましょ」

折るとバターとハチミツが混ざって出てくる小型パックなんかはちゃんと入っていたので、もうちょい、といったところ。それでもニコニコな一品であることは変わらない。

入室してから十分以上経っている。二曲分もったいなかったかな、と思われるが、人が歌っている間に選曲する煩わしさや失礼もないし、曲と曲の間が間延びすることもない。自由曲を入れる際は、またひと休みすればいいだけの話なので、この段取り結構イイかも、である。（千歳マネージャー的にも高評価？）

ハモンドオルガンと乾いたドラムで始まる曲がかかる。このイントロ、ドラム部分だけ聴くと八広君のケータイ着信音そのものである。宝木君と奥宮さんが会話するきっかけを与えた名曲、「A Whiter Shade Of Pale」（邦題：青い影）である。早巻きで歌わないとつい字余りになってしまう曲だが、歌う時もいつものせかせか調が出るので結果オーライ。サビが少々苦しげだが、まあまあだろう。

ディスコチューンで何か一曲とやれば、英語曲つながりで流れもよかったかも知れないが、苦し紛れの業平が選んだのは何と「青葉城恋唄」。

「あら、『蒼葉嬢恋唄』だって、蒼葉ちゃん、さすがモテモテ」

イントロが悠長な分、弥生のツッコミを許してしまった。これで調子が狂った業平君は、キーがずれたまま、されど朗々と唄うハメになる。当の蒼葉嬢はどこか楽しげ。

次も「あお」系統かと思いきや、蒼の当人がリクエストしたのは、「桜色舞うころ」。姉に気を遣ってのことかどうかは不明だが、桜と来てこの曲を選択するセンス、なかなかである。

曲は再び七十年代へ。「ブルースカイブルー」を歌うのは打上げ担当の冬木。場を盛り上げるつもりなら、「ヤングマン」とか演<sup>演</sup>ってもいいはずだが、課題曲という制約上、ちょっと意味深なこの曲になった。歌の世界とは裏腹に本人の薬指にはすでにリングが光っていたりするからなお悩ましい。

アルコール類については酔いから醒めたばかりの女性への配慮からか、特に注文はしてなかったものの、冬木が気を回してピッチャー入りの生ビール（&カラオケ店にありがちな惣菜盛り合わせ類）を頼んであった。ちょうど曲と曲の間で店員が持ってくる。「あ、これ僕におごらせてください」

「ピッチャー ピッチャー、どっちだっけ？」抑揚がよくわかっていない弥生がそんなことを口走っていたら、ピッチャーさんの番になった。奇遇？ それとも予定調和？

「文花さんも好きなのよ、松田聖子。さすが後輩」と櫻は言うが、自身もこの曲はお気に入り。何となく声を合わせている。南実の選曲は「チェリーブラッサム」だった。「貴方へと続いてるー」と歌いつつ、視線を誰かに送っているが、どうも気付いてもらえていない。

お互いに感想を言い合っている隙<sup>と</sup>がないのが、このシステムのネックだろうか。

「今のって、弥生ちゃんが生まれる前に出た曲なのよねえ・・・」

ここにいる女性陣の中では最年長の櫻。年長らしい(?)一言がしみじみと語られる程度である。

今度は八十年代つながりで、千歳が得意とするニューミュージックが流れてきた。

「よっ、千ちゃん、待ってました！」

原曲キーで大瀧詠一を詠うとはいい度胸である。曲は「ペパーミント・ブルー」。八広の制止も聞かず、生ビールに手を伸ばしていた舞恵だったが、千歳の何とも清涼感ある歌声に思わず自制。歌詞も爽やかだから、自然とそう聴こえるんだろうけど、そればかりではないようだ。

南実は思い出すものがあつたらしく、いつしか目元が潤んでいた。ルームはやや暗めだが、視力のいい蒼葉はそれをしかと目に留める。

「千さん、何よ。愛しの櫻さんに捧げるんだったら、やっぱり桜関係でしょ？」

システム発案者としては不満だつたらしく、歌の良し悪しとは違うツッコミを入れてくれたりする。エンディングが長いことによる不覚。

「一応、ラブソングだったんだけど」

「じゃあちゃんと櫻姉の顔見て歌わなきゃ」

そもそも桜関係と言っても、ここ数年の間に流行っているさくらシリーズ曲はどれも「散る」「舞い落ちる」がつきものなので、歌にくいのが正直なところ。彼女の心証をわざわざ悪くすることもあるまい。だが、こうした弁解をしようにも余地が、ない。

「あ、あたしだ」

まだまだツッコミが続きそうだったので助かった。弥生嬢は BONNIE PINK さんの「You Are Blue, So Am I」と来た。ピンクにブルー？と変なところに引っかかっているオーバー30の男性諸氏だが、弥生のチャーミングな歌声にだんだん惹き込まれていって、しまいには「ブラボー！」てなことに。九十年代ガールポップ、おそるべしである。

そんな盛り上がりを一気に静めるバラードが流れる。短いイントロに続き、櫻が囁くように歌い始める。「君の隣で、笑っていたい．．．」目が合った千歳はこのワンフレーズでダウン寸前。選曲の妙もあるが、何よりその美声にすっかり酔ってしまった。蒼葉と弥生は承知済みだが、初めて聴く他の六人にとってこれは事件だった。

ルフロンが入れた曲の番号がどうもエラーだったようで、次に行かない。余韻に浸っていたかたところ、好都合だったと言ったら失礼か。

「八八、さくら系で無難なのって、この『桜の木の下で』なんですヨ」

歌姫は恥ずかしげにコメントするも、聴衆は意に介していない様子。ただパチパチと喝采を送るばかり。「何か歌いにくくなっちゃったんすけど．．．」舞恵は平素の無愛想モードになりかけていたが、そこは八広がカバーする。機械から直接番号転送してリスタートである。

「え？ こんな曲まで入ってるの？ オドロキ」夏女(?)南実にとって、リゾート系かつダンサブルなニューミュージック、しかも八十年代と来ればこれしかない。杏里、曲は「青」系統で「Dancin Blue」である。

「千ちゃん、これ角松の曲じゃん」

「やっぱ、路線的に近いものを感じるねえ」

シンガー&ソングエンジニアの二人はヒソヒソ話。

「自由曲はその辺りで行ってみますか」

「自分で歌う用じゃなくて、歌える人を探す用に番号入れてみるってのもアリ？」

業平は妙なことを思いつく。この間、同じようなことを弥生は考えていて「まつだ．．．あ、あったあった」 課題曲の続きを勝手に入力し出していた。

踊りながら歌っていたルフロンがマイクを高々と上げると、その曲はいきなりブレイク。本来ならここで正にブレイクとなる筈が、軽やかなリズムギターとコーラス、そして重厚なベル音、どこか懐かしいイントロが流れてきた。

「えっ『ブルージュの鐘』って．．．」

「弥生ちゃん、ブルージュってベルギーの町のことよ」

「まあ、いいじゃないですか。誰か歌って 」

とんだブルー違いだが、弥生はイントロの重低音に早速聞き惚れている。自分が生まれる前のアイドル歌謡曲（今で言うガールポップに通じる？）、特に一世を風靡した歌手の曲にすっかり関心を持ったようで、取り急ぎブルーで行き当たったのがこの一曲。「当たり」だったことは間違いない。

文花がいれば、問題なかったんだろうけど、ここは代わりに後輩がフォロー。マウンドでバシバシ硬球を投げ込んでいた時とは打って変わって、しとやかに歌っている。櫻がモテ系と評したのはこうした要素を含めてのことだったか．．．今は千歳が南実を見遣っている。

すっかりご満悦の弥生嬢は、「青い珊瑚礁」「蒼いフォトグラフ」等のリクエストを入れることはなかった。時すでに四時半を回る。

「では皆さん、ここでひと休み。自由曲、考えといてくださいね」

喫煙者エドさんは、そう言い残すととっとと退室。一服しに行ったか。舞恵はタバコの代わりにビールを飲み干す。

「あーあ、ルフロンたら」

「皆がいるから大丈夫、うい」

今は「やってらんねえ」酒ではなく、歓喜の一杯。その上機嫌ぶりには櫻も止めようがなく、二人して改めて「乾杯！」とかやっている。何故こうも仲が良いのかは実は本人達もよくわかっていない。

何はともあれ、舞恵に遠慮する必要はなくなった(?)。俄かにアルコール解禁ムードになる。弥生はペパーミントブルー系のカクテル、蒼葉はやっぱりワイン。ルフロンとの酒づきあいが浅薄、即ち下戸な八広君はウーロンソーラーがいいところ。自転車で来ている都合上、飲酒運転レベルならないようにしたい業平、千歳、櫻の三人は、正体不明、無添加健康ソーラーで一致する。戻って来た冬木は引き続きビールを注ぐ。南実は意外にもアルコールNGということで、

「せっかくドリンクバーあるんですから、ここはアイスコーヒーで」

これにて晴れて全員で「カンパイ！」 やっと打上げらしくなってきた。

今は正気のルフロンは、「今日は舞恵のせいで、八クンともどもドタキャンになっちゃって、申し訳なかったです。お詫びに、デザートが何か一品ずつ、ご馳走しますワ」

気前のいい舞恵さんなのであった。



冬木は皆の分を入れながら、ちゃっかり自分の十八番も挟み込んでいる。業平と千歳も戦略的にお試し曲の番号を書いておいた。はてさて何がどう出るか、ハラハラドキドキのフリープログラム（第二部）である。

いわゆるシブヤ系だが、フランスモードの楽曲が多いので鼻屑にしている。ワイン片手に蒼葉が歌うは、ピチカート・ファイヴ「キャットウォーク」。姉と比べてはいけませんが、妹も十分、佳い声艶をしている。詞の世界同様、何とも艶麗。冬木は蒼葉とは今日が初対面だったが、通販大好き人間だけあって、カタログに出てくるモデルさんについてもある程度頭に入っていたりするもんだから、見覚えがあった（ことに気付いた）。他の男子は歌声に聴き入って（または容姿に見入って？）たりするが、冬木はちょっと違うことを考えている。話すきっかけは掴んでいる。あとはいつ話しかけるか……。姉の櫻の手前、何となく自重しているだけ。どうにも油断がならない。

お次は、南実嬢による、今井美樹「<sup>ルトゥール</sup>retour」。タイトルからして、これもフランスモードではあるが、いわゆる J-POP である。弥生が生まれて以降の曲ではあるが、彼女にとっては接点がなかったらしく、重厚なドラム&ベースに調子を合わせながらじっと耳を傾けている。

「小松さん、さっきは『チェリーブラッサム』で、今は『ルトゥール』って、何か曲のテーマが再生とか再出発なんだけど、意図あり？」 長めのエンディング中に櫻が問いかける。

「え、まあ、今日のクリーンアップでリセットできたから。干潟に想いを込めて、かな」歌とその殊勝なお言葉に対して大きな拍手が送られる。自らに対しても少なからずそういう想いはある筈だが、どうなんだろう。

小気味良いパーカッションにドラムが重なる。あまり聞き覚えのないイントロが流れ出すと、八広と舞恵が立ち上がった。

ご「何？ デュエット曲？」

や「へえー」

何だかんだ言って、さすがは恋仲のお二人さん。その曲は、DOUBLE & HIRO「Let's Get Together」(Groove That Soul Mix)である。時折顔を合わせながら「We can be lover . . .」とか歌っているが、この二人に関してはすでにそういう仲なので、何を今更？と冷やかしても入る。いやいや未だ恋愛状況が明確でないアラサーカップルに対する応援歌のつもり、なのかも知れない。ともかくこのノリのいい一曲は、リズムセクションとしての二人の器量を量る上でも絶品だった。業平と千歳はこと盛大に手を叩く。

行儀よく一礼する八広と舞恵を<sup>ビックリ</sup>吃驚させたのは他でもない。その曲はプラスとドラムの一大音響で始まる。短いイントロの間に、今度は千歳が立ち位置へ。

「あ、この曲 . . .」 櫻はどこで聴いたのやら。だが、聴いたことのある曲とわかれば歌う方も気楽なものだし、同時に気合いも入る。

千歳にとっては<sup>おはこ</sup>十八番の部類なので、気分良く歌唱していたのだが、間奏になるや否や、「まだ打ち明けてなかったのぉ？ キャハハ」との声。ルフロンに突っ込まれては立つ瀬なし、である。この「YOKOHAMA TWILIGHT TIME」は、サクスがまた泣かせる。弥生にどうこう云われぬように、櫻に捧げるつもりで選曲したのだが、どうも違う女性の琴線に

響いてしまったらしい。その潤んだ目線に今度ばかりは気付かない訳に行かない千歳だった。

サクスに続くリードギターのフレーズに冬木は陶醉する。八広はドラム、弥生はベースにそれぞれ肩を揺らす。歌が二の次というのがシャクではあるが、千住姉妹はちゃんと清聴してくれているようなので、それで十分。

「いつ打ち明けてくれるんだろうね？」

「私から切り出さないとダメかもね」

姉妹は歌声よりも歌詞に関心を寄せていただけだったか。いやはや。

バラード風のイントロが聴こえてきた。メドレーではないが、角松敏生つながりである。

「誰？ 『花瓶』て？」

「入れ間違いかしら。でも、ここは私が」

お試し曲の一である。櫻がこの系統の曲をご存じかどうか、あわよくばそれをどう歌うか、が知りたかったようだ。千歳の自作曲二編については、特に難色を示した訳ではなかったの、音楽的な素地に大きな開きがないことはわかっていた。だが、曲をお渡ししたのは、ピアノでのアレンジとちょっとした詞、というのを期待したまでのこと。ピアノに歌、という櫻の新たな一面がわかったことで、その期待は違う形で膨らんでいった。この『花瓶』はピアノ弾き語りに向きそうな佳品．．． そう、この線で処遇しない手はないのである。業平と千歳のソングエンジニアコンビは僭越ながら審査用（課題曲）の心算でこの曲をリクエスト。「これは佳い」とか唸りながら、何かを確信する男性二氏であった。

「ありがとうございます」 歌姫はお辞儀して一言。いやいやそれは男性二氏側の台詞だろう。

弥生のケータイが鳴ったのかと思いきや、オケの方だった。エコーが利いている分、より重低音が響く。

「この曲、だったんだあ」

櫻と千歳は何度か耳にしているの、リアクションも速かった。その曲とは、ROUND TABLE (Feat.NINO)「パズル」(extre hot mix)。弥生のガーリッシュな声がよく通る。キーが変わるところも上手く歌いつないで、満面の笑み。男性陣は再び騒然。ルフロンはハクンをどついている。

まとめて入力したせいかどうか定かではないが、オケの方が勝手に小休止していて、次に移るのに少々間が空く。

や「ひきこもり青春アニメの主題歌です」

さ・ち「え？ ひきこもり？」

得意作業の性質上、放っておくとひきこもり状態になってしまうのはわかるが、まさか当人がかつては実際にそういうことになっていた、というのを知る者はここにはいない。毒もチャームポイントのうちだが、好きで舌鋒が鋭くなった訳でもなさそうである。そのアニメ、どういう心境で観ていたんだろうか。

櫻の自選曲がやっとかかった。審査員二氏はまたしてもヒソヒソ話。

「カラオケで古内東子って、初めて遭遇したかも」

「アレンジャーとか、近そうだね」

その曲は「あいたくなったら」。詞を真に受けるとドキリとなるところだが、当の彼氏はどう思っているのやら。「私の気持ちがあなたのよりも1グラム多いだけで不安．．．」二人の想いのバランスを保つのも時には必要。だが、それに気を遣うのが恋愛なのかどうなのか。少なくとも直情型の櫻にそれを求めてはいけない気がする。それでも自分ではいつしかそんな器用さを身に付けつつあって、余計に詞の世界がしっくり来ているようだ。問題はそんな彼女の気持ち（歌に乗せた想い）が届いていないであろうこと。スローなのはいいが、その鈍さ加減の方が櫻にとっては不安要素かも知れない。千歳はただ、「ミディアムテンポの曲もバッチリ．．．」とあくまで歌唱の方に感服している最中である。

巧みに紛れ込ませていたはずが、順番的には結局ラスト。冬木の番になり、今度はSING LIKE TALKING に来た。この後は、ルフロンのクリスタル・ケイ、業平の和製ディスコ系などなど。系譜としてはダンスブルな感じなので、聴衆はBGM感覚でそこそこのノッている。

当初二時間の予定だったが、そんなこんなですでに時間延長の域に入っていた。一巡以上したところで、ようやくブレイクになる。

「あれ、送迎バスの最終便って何時でしたっけ？」

「確か六時だから．．． あら、そろそろ出ないと」

櫻は時計を気にするも、弥生嬢はギリギリまで粘る作戦に出る。

「じゃこの曲歌ったら」

この手の機械に強い弥生は、サラッと検索すると、そのまま転送。ディスコーションのかかったエレキギターが鳴り出す。My Little Lover「YES」である。詞は少なめだが、重い。実体験と重ね合わせるような思わせぶりの歌い方がまたいい。

「えっと、おいくらでしょか？」

「歌も良かったし、二部構成の発案も good だったし、無料無料！」

業界人(?)冬木はさすが大盤振る舞いである。

再び男女バランスがとれ、年齢層も固まってきたところで、もうひと盛り上がりで行きたかったが、あの人が歌うと次は嗚咽してしまうかも、と悟った南実が席を立つ。

「え、小松さん、お帰り？」

冬木としては予想外の展開だったようだ。

「では、女性二千元、男性二千五百円、あとは奥宮さんと僕で．．．」

三時間で何となく飲み放題付き、このお値段ならリーズナブルか。higata@の皆さんは案外ちゃっかりしている。

「ありがとうございますーす」 で軽く済ませてしまった。

打上げ担当が集金している間、弥生流に機械操作で検索&転送を試みる男女六人。そうこうしているうちに六時をとうに回り、終演が近づいてきた。お試し曲の二はあいにくお預け。

蒼葉のラストは、南実に聴かせるつもりもあったのか、竹内まりや「プラスチック・ラブ」である。(注...ここでのプラスチックはあくまで造形的な恋模様をたとえたもので、プラスチック賛歌ではない。) そのまま達郎つながりで「硝子の少年」へ。これは

千歳と業平の「欣喜キッズ？」が唄う。振付がつかないのが三十代男性の泣き所か。

中山美穂を歌ったついでで、櫻が思いついたのは「Mellow」。前半はしっとりめが続いたが先の古内の曲でテンポが少し上がったため、ラストはまたちょっと軽快に．．．というこらししい。サビのところでは軽く振付もあったりして、男衆にとっては正にメロウ。

「動画サイト見てたら、本人映像とか出てきたんですよ。それでちょっと覚えたの。YOKOHAMA～とかもそれで」「へえ．．．」 歌い終えて、櫻は千歳に耳打ちするも、メロウを超えてメロメロになっているので、話にならない。「また行き過ぎちゃった、かな？」

こういう場でのトリはやっぱり Go Hey 君に限る。ラストはズバリ、「WAになっておどろう」！ 「イレアイエー」とか「ランラァランラァラー」とか見事合唱モードに。皆さんよくご存じで。

こうして盛況裡に打上げは終わるも、真面目な面々はここでもふりかえりに余念がない。EdyさんとLe frontさんが会計している間、五人はロビーで語り合っている。

八「それにしても、ここ最近の曲って出なかったスね」

ご「女性チームも、流行の歌姫系とか一切なかったし」

さ「そうねえ。姫ってのもどうかと思うけど、とにかく歌い上げるのとか、チャラチャラしたのって苦手なのよね」

あ「歌ってて肩凝っちゃう感じのって、聴く方にしてもおんなじでしょ。歌い流せて、でも奥行きがあって、ってそんな曲がいいなあ」

ち「それは言える。流す．．．ね。でも、時代に流されちゃう音楽ってのは考え物。近年のチャート事情見ると、とんでもないなあって。思わない？」

ご「よくわからんけど、初登場一位の曲が翌週には十位とか圏外とか、って聞くね、確かに」

八「要するに音楽も使い捨て、ってことスか」

さ「もともと流行り廃りとは言うけど、最近は特に消耗品みたいになってるのかも、ね」

あ「漂流・漂着して、そのままになってる音楽もあるってこと？」

そういう面は無きにしも非ず。音楽をゴミ化してしまっていていい道理はない。では、消耗されない音楽とは？ 自分で聴きたい曲を自分で創って大事にする、そういうこととも関わってきそうだ。

「今日は本当にゴメンナサイ。でも舞恵が行かなかったおかげで、天気だったんだから好かったっしょ？」

「初音嬢とか六月君とか淋しそうにしてたワよお。大変だったんだからあ」

櫻がからかい気味に応じるもんだから、へこんでしまったナイーブ舞恵さんである。ここは蒼葉が優しくフォロー。

「まあまあ。どんな状況だったかは追々。higata@で意見交換することになってるし、おなじみモノログに、姉さんのラブラブログにも詳報が出ることでしょうし、あ、あと情報誌も。ですよね、ムシュエディさん？」

蒼葉に話しかけようと思いつつ、つい失念していた冬木だったが、先にこう振られてしまっっては、自嘲するしかない。

「あ、ええ。今度はフライングしないように気を付けますので、皆さん予定稿のチェック頼みます。八八、八．．．」

この打上げまでがオプショナルイベントだったとすると、ほんと盛り沢山な一日である。散会の挨拶等を交わして外を見ると、とうに暗くなっている。だが、帰宅するにはまだ早いと見る向きもある。

「明日休みだし。もうちょっと八クンにつきあってもらう」

リズムセクションの二人は商業施設内でショッピング etc. と相成った。業平と冬木はアルコール抜き、されど一服ができる場所ということで某カフェへ行く。つきあいとはいえ、これでまた禁煙中断か。試練の喫煙席は店の外。

「ところで、隅田さんと千住さん、てカップルですか？」 この質問、前にも聞いたような．．．

「はぁ、今はそうですね」 何とか吸わずに済んでいる業平が短く返す。

「僕はてっきり小松さんがお相手なのかと思ったら、途中で帰っちゃったから、あれ？って」

「八八、彼女はガード堅そうですから。それでいて直球派ってのがまたスゴイところ」

冬木は一回吸ったきりで話に夢中。点火された一本は灰皿でただ短小になっていくばかり。

「実は．．．ってことないですか？ 少なくとも彼女は隅田さんに気があると思う」

そう見られるんだとしたら、南実もちょっとした演技派ということになる。だが、実際のところは本人に聞いてみないことには何とも、というのが業平の本音。昨日のこのように思えるが、その南実嬢からホームランを打ったのは本日午後。清々したばかりだけに、そういう話はちとツライ。洗面になるのも無理はない。

「そう見えるだけじゃないかなあ。千歳君と櫻さんは higata@内では公認ですからね。もしそうだとするなら、何か別の理由があるんだと思いますよ。だいたい榎戸さんが気にすることでもないでしょが」

冬木の読み、決して違っていた訳ではない。業平の推察もいい線行っている。その理由とは．．． それはいずれ、然るべき情報筋から聞き知ることになるだろう。

業平から冬木へのアフィリエイトの支払い、情報誌サイトへのリンク、そして、

「ところでソーシャルビジネスの件ですけどね．．．」 前置きが長くなっていたが、ここからが本題。流域ベンチャーと提携する上での話ならコミュニティビジネスと行きそうだが、あえてソーシャルと切り出す冬木。何をどうするおつもりか、相変わらず曲者臭を漂わす社会的起業担当者殿なのであった。

ちょうど三ヶ月前と同様、スーパーで買い物を済ませた二人。前回と違うのは妹君が随行していること。三人とも空腹ではないので、どこかでわざわざ食事するでもない。小腹が空いた時に備えて軽く買い込んだ程度である。

七時を過ぎているが、蒼葉は得意のピチカート・ファイヴで、「東京は夜の七時．．．

」とか口ずさんでいる。歌のテンポに反して、三台の自転車は、基本的にはスローモードで進む。が、画板が時に煽られてヒヤリとする場面があるため、そのモードはさらに低

速になる。見かねた千歳は、

「橋を超える時とか危ないでしょ。僕、預かるよ」

「じゃあ千さん、明日引き取りに伺いますわ」

「いやぁそれは．．． 橋のところでお渡しますよ。朝十時でいいですか？」

危うく蒼葉の大胆行動にしてやられるところだったが、櫻の無言の圧力もあって回避。

そう、拙宅にお招きするのはまず姉君から、である。

「枕元に飾っておくと、きっといい夢見れますよ」

櫻は至ってにこやか。

「そうそう、それでまたキャッシュカードが見つかったら、新たなストーリー再び．．．  
何ちゃって」

「蒼葉ったら、フフ」

送迎バスが通る大通り。舞恵の勤務先である銀行付近で姉妹とはお別れとなる。

「モノログが先か、メーリングリストが先か．．．」 そんな思案をしつつ、蒼葉の下絵をPCの前に立てかけてみる。風や波の音をなぞるように青が配されている。絵からその微音が聴こえてくるようだ。千歳の一日はまだまだ続く。

十月の巻 おまけ

千秋一日

待ちに待ったデート休暇当日。櫻は半袖のエlegant系ワンピース（千鳥格子）に大きめのリボンベルトを当て、白のジャケットを着用。

「いいねえ、櫻姉。ま、しっかりやんなよ」

「プレッシャーかけないでよお。今日の主演はあくまで千歳さん。私は彼に合わせるだけ」

とは言うものの、本日のデートコースは櫻の全面コーディネートである。いったい何を合わせるおつもりなんだろうか。

こちらは、パーカ風のシャツの上に洗いざらし系のジャケット、スラックスも洗いざらし風という出で立ち。今日で櫻さんとは同い年ではなくなる訳だが、格好からしてあんまりそういう緊張感を感じさせない。いつも通りの千さんである。お約束の十一時よりもかなり前に原宿駅に到着。今は神宮橋の上から山手線やら湘南新宿ラインを見送りながら佇んでいる。同じく少々前にやって来た櫻嬢は、そんな彼氏を首尾よく見つけて、背後から声をかける。

「お客さん、何か落とし物ですかぁ？」

「あ、実はキャッシュカードを．．．」

「もう、千歳さんまでえ」

よく晴れた金曜日。気温も程々。ジャケットを着るには及ばなかったかも知れないが、三十路の秋の装いとは斯くあるもの。表参道を闊歩するにも丁度いい。

神宮前交差点までは下り坂なので楽なのだが、そこから先は緩やかな上り。

「自転車タクシーに乗れば楽なんでしょうけど．．．」

「この辺じゃ最近見かけないねえ。六本木ヒルズ周辺にシフトしちゃったとか」

「まあ、徒歩が何よりもエコよ、ね？」

とか言いながら、彼氏の腕につかまっちゃう彼女である。ただでさえスローな千歳は、これでさらに歩速が鈍くなる。だが櫻はちゃんと歩調を合わせている。合わせるってのはこのことだったか？

「初姉のお店に似てるんだけど、主菜、副菜が充実してるって言うか、その場で見て選べるところがあるの。ご案内します」

表参道ヒルズに寄るでもない。アニヴェルセルにも御用はなく、その手前で右折。寄り道と言えば、クレヨンハウスの地階で旬の野菜をチェックするくらい。櫻のこの精神的にスローな感じが千歳には心地良かった。

ランチをいただくお店が開くまでのちょっとした時間調整のつもりだったが、

「八八、また迷っちゃった。失礼」

目的地に着いたのは、十一時半をとっくに過ぎてから。だが、それほど行列はできていない。この待機時間中に品定めするのが通なんだとか。一人三種類選べるので、二人だと最大六種類の小皿が並ぶことになる。どれが主でどれが副だかが結果的にわからなくなってしまったが、二つのプレートには、五目あんかけ豆腐、ポークとキノコの何とか、ペンネ&マリネ、オニオン&根菜、ジャーマンポテト、磯辺揚げといった品々で満たされる。これにおかわり可能なごはん、スープ、ドリンクが付く。さすがは青山、ランチ店の層が厚い。

「そっか、千歳さんお箸持ってないんだ」

「そういう意識はあるんだけど、いざとなるとね。面目ない」

「いいのよ。私だって別にマイ箸の方がありがたく食事ができそうな気がするから持ってるだけ。環境保護どうこうって云うつもりないし」

会計時にこういう会話が交わされるのは、最近では珍しくもないか。彼女の方は割り箸を辞退しつつ、財布を取り出す。

「千住さん家は富裕層じゃございませんので、千円ランチで恐縮ですが、お誕生日祝いネ」

「ご馳走様です。ありがとう」

誕生日席という訳ではないのだが、えらく深々したソファ席でいただく。食べる時は逆に前屈みになってしまう。

「二人で違うのを取ると、ちょっとした品数になるでしょ？ それもポイント」

「櫻さん、いい店ご存じで。青山よく来るんですか？」

「センターの資料配置とか考える時に、文花さんとここの近くの施設に見学に来たんです。その時、連れて来てもらったのが最初。その後も蒼葉と来てみたり、ですね。別に青山にしょっちゅう、ってことはないけど、来たら寄る、そんなところ」

話しながら、箸を伸ばしてくる。「千歳さんもどうぞ。好き嫌い、ないでしょ？」 前屈姿勢なので、お互いの品をシェアしやすいのは事実。箸とソファは使い様である。

同じ種類であれば何杯でもおかわりできるってのは、毎度おなじみカフェめし店と共通する。だが、ここでドリンク片手に延々と話し込んでいるよりは、あちこち動き回りたいというのが探訪好きな二人のお望み。お出かけ日和でもある。一時間ほどで店を出て、青



山通りへ。

「さて、これから六本木へ向かう訳ですが、骨董通り経由だと遠回り。されど、墓地を  
通って、てのもねえ．．．」

「ま、時差券持ってますから。一駅分だけ、メトロで」

「賛成！ 駅の中のお店、見てみたかったし」

てな訳で、乃木坂に着いたのは一時過ぎ。車両後方の階段を上ると、国立新美術館直  
結の真新しい出口に通じる。

「はい、これは妹からプレゼント」

「え、蒼葉さんが？」

「あの娘、一応その筋の関係者だから、こういうのに入れやすいみたい」

櫻が取り出したのは、「フェルメール『牛乳を注ぐ女』～」展の招待券二枚。本日のプ  
ランは概ね聞かされていたので、自己負担範囲も想定はしていた。古楽器の展示もあると  
いうので、千歳としても観覧したかった同展である。当日券でもよかったところ、ご招待  
扱いとは、嬉しい想定外。姉妹のご厚情に感謝感激、なのである。

風俗画、工芸品と観てきたところ、弦楽器などが置かれた一室が出てきた。

「あれってチェンバロ？」

「ええと、ヴァージナル、ですって」

「へえ．．．」

鍵盤と来ればやはり櫻。中世の器楽曲、そのヴァージナルの打鍵音、想像を働かせてい  
るのが何となくわかる。芸術の秋、音楽の秋、である。そして次のコーナー、版画と素描  
へ。

「フフ、『パンケーキを焼く女』ですって。初音さん、どうしてるかしら？」

「明日に備えてるんじゃ．．． あ、授業中か」

明日に備えないといけないのは何を隠そう、千歳君の方である。センターご出勤初日を  
控えている割には、実に悠長。彼にとっては音楽の～というよりは、お気楽の秋、だろう。

櫻が図録を繰っている間、千歳はポストカードを何枚か買い求める。カードとは言え青  
は青。購入後もその色に魅入っていたので、十月の空の青がありふれて見えてしまうので  
あった。

美術館後の行き先については選択肢があるが、コーディネーターさんはハッキリしてい  
た。

「ヒルズはヤダ。ミッドタウン！」

直方体の建物を前方右手に見ながら星条旗通りを歩くこと数分。その直方体が二人を迎  
える。

「千歳さん、私、眼鏡買い替えようと思ってるんですよ。どんなのがいいか、選んで  
ほしいの」

「ミッドタウンで眼鏡？ 櫻さん実はセレブなんじゃ．．．」

「あ、いえ、デザインだけ。買う時はそれを参考に、巷で流行の五千円前後のに．．．」  
当地にはハイセンス眼鏡店が複数ある。どちらから行こうか、と思索していたが、櫻は

もっと大事なことを思い出す。

「と、その前に確認事項がありました。どうしょ．．． とりあえず公園」

ガレリアをそのまま直進し、<sup>ひのきちよう</sup>檜町公園へ。まだ三時にはなっていないので、おやつタイムには早い。テイクアウト類なしで、とりあえずベンチに腰掛ける二人。ちょっと間を置いてから櫻が訊ねる。

「正直なところ、眼鏡の櫻さんてどうですか？」

「美人だと思いますが」

「いや、そうじゃなくて．．．」

千歳は十分わかっていたが、ちょっとはぐらかしてみたかっただけ。決して鈍いという訳ではない。櫻は俯き加減。

「眼鏡をしててもしてなくても、櫻さんは櫻さん。大好きな女性であることに変わりはありません」

急に顔を上げて聞き返す。

「え？ 今なんて？」

「言わなくてもわかってる、って、それじゃダメなんだよね」

こういう時、その感情を目に見える形で示すというよりは、その言葉一つが何より大事だったりする。だが、その言葉を早く伝えたかったのはむしろ彼女の方だった。

「そうそう、私も教えて差し上げないと．．． 千歳さんのそういう素直なところかな。一番好きなの」

千歳はもう一度きちんと声に出そうと思ったが、こう来られたら言葉を呑み込むしかない。彼氏は的外れなことを聞く。動揺ありあり。

「って小梅嬢に言ったの？」

「つい調子に乗っている喋っちゃったからなあ。どれがその一その二ってわかんなくなっちゃった」

彼に合わせる、それはつまり親愛の情を言葉にするタイミング、を主に指していたようだ。合わせなきゃ、という意識先行でここまでセーブ気味だった櫻だが、もう合わせるのはおしまい。肩に寄りかかってみる。「千歳、さん．．．」言葉に出すと、その感情はとめどなく<sup>ひろ</sup>展がっていくものである。秋の空は澄んでいて、どこまでも高い。言葉は風に乗って青空に溶けて行く。

どこからか三時を告げる鐘が鳴る。

「櫻さんの素顔をお見せする時が来たようです。千歳さん、今の心境は？」

「いやあもう．．． ドキドキです」

「そうですかあ。櫻さんもドキドキして来たようですよ」

「ここは東京、ミッドタウン、ですもんねえ」

「何だかなあ」

名物三人娘も定評あるが、「千と櫻」のコンビもなかなか笑わせてくれる。七日のマイクパフォーマンスでその片鱗は見せていたが、この調子ならいつでもOK？ ステージさえ設ければ何かやってくれそうである。

高級店に入ればただでさえ緊張するところ、異なる緊張感がさらに輪をかけてくる。

「細めレンズが流行ってるみたいだけど、櫻さんはやっぱり丸眼鏡の方がチャーミングかな」

「じゃ、は、外しますよ」

「おお、櫻、姫．．．」

「エヘヘ」

六月に横川駅で撮ってもらったツーショット写真は手帳に忍ばせてあって、時々眼鏡なしの櫻さんを眺めては唸っていた千歳君だったが、間近で見るのは今日、この時が初めて。ドキドキを通り越して、名状し難い心理状態になっている。

「どう？」

「あ、そっか。いいんじゃないスか。フレームレスは？」

店員が近づいて来ない間が勝負である。ここで何色が似合う？とかやり出すと、收拾つかなくなりそうなので、そそくさと引き揚げる。さっきからドキドキし通しである。

「ハハハ、ドキドキしてたらノド渴いちゃった」

「それじゃ今度は僕が」

カフェ&スイーツ店が目白押しなのはいいが、客の入りも押し気味。オープンな感じのベーカリー店を通りがかったら、折りよく空席ができた。談話するには丁度いい、適度なソファ席。

「櫻さん、眼鏡に関してはいろいろとエピソードがありそうだけど、よかったら教えてもらえませんか？」

「はあ、何からお話ししたらいいものか．．．」

久々に櫻へのインタビューを試みる千歳である。振り返ってみると、素顔を見せてもらえるまでの筋立てが実に凝っていたというか、外そうとすれば蒼葉が止めてみたりといった演出もあったし、**まるで**ウズウズさせるように仕向けられていたかの如く、である。

「ステージの話はこの間しましたよね。その頃はまだ近視じゃなかったんで、眼鏡もかけてませんでした。ま、自分で言うのも何ですが、ピアノ弾きながら歌って、歌姫さんだった訳ですよ」

今は彼女に合わせている彼。黙って話を聞いている。

「当時おつきあいしてた人もちょっとしたボーカリストで、デュエットしたり、一緒に曲作ったり、いい感じだったんです。でもホラ、私、つい夢中になっちゃうから．．．」

話がまだよく見えない。千歳はカフェオレをゆっくり口に含み、ただ待つ。

「千歳さんのお誕生日だったのに、私ったら何喋ってんだろ。ごめんなさい」

「いやいや。話した方が気が晴れることもあるから。お続けください」

櫻のカフェモカに乗っていたクリームが何となく縮んできているが、話を聞いてもらうのが優先。

「その人の曲をピアノで採譜したり練習したり。暗い中でやってたのがいけなかったんでしょうね。視力落ちてきちゃって。それで眼鏡をかけた。そしたらね」

櫻の愁い顔を見るのは何日ぶりだろうか。千歳はマズイと思ったが、ここで止めては不可ない。櫻のカップからはクリームが見えなくなってしまった。何かを呑み込むように彼女は話を継ぐ。

「眼鏡は嫌だ、ですって。私の歌とか演奏とか、いや、そもそも人となり？ そういうの全然関心外だった、それがわかったんです。顔<sup>かお</sup>貌<sup>かたち</sup>でしか見てなかったのねって... 大ショック」

蒼葉が以前強い口調で話していた姉の失恋事件、その真相がおぼろげながら見えてきた。

「男性不信になっちゃった、とか？」

「そりゃあもう。こうなったら眼鏡で通してやる、って思いましたよ」

「でも、あるがままの櫻さんを見てくれる人もいたでしょ？」

「いた、かも知れませんが。でも二千年以降は恋愛らしい恋愛はしてませんでした」

「そう、だったんだ...」

本来ならまるやかな筈のカフェオレが苦く感じてしまうのは気のせいだろうか。セットのプチタルトにもまだ手が伸びない。櫻は深呼吸してから、その想いを口にした。

「でも、四月一日に私の中で何かが変わりました。エイプリルフールじゃないですよ。この人ならもしかして、って...」

「櫻さん、あの日そんな風に？」

蒼葉の言っていた通りなのだが、あえて問い直してみる千歳。

「そう。でもね、年のせいだか何だかよくわからないんだけど、自然と抑えが効くもんだから、昔みたいにダーって感じにならなかった。ブログの存在も大きいかな。書き綴ることで気持ちを静める、みたいな。プレーキかけながら千歳さんと接してた気がします。変な言い方だけど...」

「僕は僕で櫻さんに合わせてた、というかむしろ引っ張ってもらってた気がするなあ」

「そっか、ちょうどよかったんだ。それは何となく気付いてたかも。バランスとってたってことかしら、ネ？」

1グラム多いか少ないかってのは大げさだろうけど、お互いのペースを尊重して(いやペースに委ねて)きた結果、絶妙なバランスで両想いが成り立っていた... 決して過言ではないだろう。

「それはそれで心地良かったんだけど、素顔を見せられないのってのは苦しいものです。旧七夕デートの時にね、解禁したかったんです。本当は。でも、あるがままの私でいいってのをその、もっと確証が持てるようになってからでもいいかなって」

「そんな葛藤が...」

「いや、葛藤ってほどでもないんだけど、蒼葉が言うんです。その日が来るまでとっとけて。で、今日の佳き日が来た。もうね、私から言っちゃおって思ってたの。それで千歳さんも返してくれればもうそれでいいや、素顔をお見せしよう。だから、大好きな女性って言ってくれてすごく、嬉しくて、うう...」

今日からはもう彼の前で眼鏡を外せる。彼女にはそれがまた嬉しい。素顔だが、すっかり泣き顔になっていて、自分でもどうしていいかわからない。

「あ、いけない、笑顔笑顔...」

「櫻さん、ずっと我慢してたんでしょ。いいんだよ、泣いたって」

「そんなこと言ったら、もっと泣けちゃうじゃん。意地悪う、うう...」

うれし泣き、それとも泣き笑い？ 千歳は櫻が愛おしくて仕方なくなってきた。

「あーあ、せっかくのクリームが．．． 溶けちゃったあ」

涙を拭くでもない。そのまま乾くのを楽しんでいる感じ。それでもって、この呑気なこと。どうやらその溶け加減が彼女の今の心理状態を表しているようで、これ快哉<sup>かいさい</sup>、としている。素顔かつ笑顔。千歳の方も目が潤んできた。

そんな彼の目を、彼女は目を細めて見つめる。そして問う。

「そう言えば、千歳さんて視力いいの？」

「コンタクトレンズです」

「そうだったんだ。私もそうしょっかな」

「そしたら世の男性諸氏が．．． あ、いや櫻さんの魅力は、その．．．」

千歳のこのドキマギ調が櫻にとってはまたたまらない。ついからかいたくもなる。

「心配？ なら、傍についててもらわないと、ねえ」

午後の陽射しが弱まってきた。二人が話し込んでいたテーブルの上には、空のプレート、底が白くなったカップが二つ残され、鈍く光を放つ。

タウン内のツアーに参加するのも良かったが、時間も時間だし、思い思いに歩き回ることにした。ライフスタイル提案型ショップや「グッドデザイン展」などで時間を割く二人。気付いたら、西日がすっかり傾いている。

「そうそう、プレゼントをね、いろいろ考えてたんだけど、何かご希望があれば先にお伺いした方がいいかなって、どう？」

「素顔の櫻さん、それが何よりのプレゼント」

「また姫を泣かせるつもり？ その素顔にさせていただいた御礼がしたいんです。あ、そっか！」

只今ガレリアの三階を歩行中。いいタイミングでいいものに出くわす。

「筆記具とかマイバッグとか、いいの扱ってる店さっき見つけたけど、やっぱりこれよこれ」

各地の銘木などを使い、職人の手によって創り出された箸の数々。各種麺類や豆腐の専用箸もある。

「簡易包装でいいわよね。こっちが千歳さん、私はこれ。いつも携帯するように。フフ」  
ペアの竹箸、その一膳が誕生日プレゼントとなった。

「大事に使わせていただきます。ありがと」

「何々箸って言いますし、ね」

「飯田橋に水道橋？」

この後、彼女にバシッとやられたかどうかは定かではない。

「ミッドタウン周辺で、老舗ナチュラルレストラン、いやナチュラル居酒屋かな、ま、そういうのがいくつかあるんだけど、今晚は我が家へぜひ！ いいでしょ？」

「いいんですか？」

「貴方、彼氏でしょ？」

「櫻姫の大ファンでもあります」

暮れかかる空、紅く染まる．．．

「外苑東通りー 八八字余り？」

二人の「乃木坂 TWILIGHT TIME」だそう。もう誰かさんに、打ち明けてないのぉ？とか冷やかされることもないだろう。寄り添う影が舗道に伸びて行く。ワンピースが千鳥格子だから、という訳ではないだろうけど、その影は時に止まってみたり時には斜めに動いたりとも安定しない。「今日のこと、ブログに載せちゃおっかな．．． 咲く LOVE x 2、だもんね。おととと」

眼鏡を外しているとどうにも危なっかしい。そんな櫻の手を引き、通りを北上する千歳。左折してしばらく歩くと、赤坂図書館近くにあるバス停に到着した。ここからは新宿行きの都バスに乗る。

「絵を観て、デザイン鑑賞して、正に芸術の秋でございました」

「私は恋愛の秋かな．．．」

千歳の肩は寄りかかりやすいようだ。車窓左は神宮外苑、右には赤坂御用地。街路樹は秋色。その色を映していた陽が落ちると、機を合わせるように、櫻は遅い午睡に入る。

「櫻さん家が先になっちゃいましたねえ」

「千歳さんのお住まいはずいぶん前に教えてもらったのにね。さ、着きましたよ」

センターからは徒歩でも楽な距離だが、駅からとなると少々労を要する。妹君もお待ちかねということで、早足で歩かざるを得なかった分、ちと堪えた。年はとりたくないってか？

「ただいまぁ」

「あれ、千さんは？」

スローな彼が扉の影から顔を出す。「どうも、おじゃまします」

「櫻姉、やるじゃん」

「千歳さんがどーしても来たい、って言うから」

「櫻さんたら。ま、いっか」

今日は蒼葉が食事当番。早くに自宅に戻り、三人分を用意してくれていた。パースディナーという程のことはないかも知れないが、前菜の盛り合わせあり、文花農園の秋野菜サラダあり、オランダ風俗画で観てきたニシン、それにシソをまぶした一品も。（これは蒼葉の気まぐれ惣菜。弥生と入った渋谷のパスタ店で注文した一皿に似ている？）

あ「あいにく主菜ってのがございませんで、このお惣菜関係と、あとはバケットで」

軽く年令以上の品数を今日は口に運ぶことになる。そのありがたさもさることながら、姉妹にこうしてもてなしてもらえるのが何よりもありがたい。加えて、グラスワインなんぞで、

さ「ではでは、千歳さん、お誕生日おめでとうございまーす！ 乾杯」

なんてやられたら、そりゃあもう、である。

「櫻さん、蒼葉さん、ありがとう．．．」

年甲斐なく涙目になってきた。センチな千さんは、言葉少な。

姉妹はオランダ風俗画の議論を交わし始める。

「ねえ、千歳さん、展覧会で観た中で、これ！ってのありました？」

「修道院の少女、とか．．． あ、そうだ」

その少女のポストカードはないものの、展覧会の主題画、本展外のフェルメール作品、人物描写が小さな風俗画など複数のカードがテーブルに並べられる。

「あら、いつの間に」

「蒼葉さんの画風とは違うかも知れないけど、お気に召すのがあればどうぞ。招待券の御礼です」

「そりゃどうも。じゃあこれを」

彼女が手にしたのは、「真珠の耳飾りの少女」。瞳が似てるなあ、と思ってつい買ったものだが、本人も自覚しているのか、同じような角度でポーズをとって魅せている。気付いたら、千歳のグラスは空っぽ。

「あ、お注意しなきゃ」

きちんと席を立て、デキャンタから白ワインを注ぐ蒼葉。その様は正に「ワインを注ぐ女」である。カードと見比べる千歳だが、さすがにその洒落は口にしなかった。

「なーに見とれてんの、千さん。姉さん妬くとコワイんだから」

「何か言った？ ワインを注ぐ女さん」

彼の言いたいことはしっかり彼女に伝わっている。千歳はあわてて、

「この絵のポイントは、遠近法とラピスラズリの青とパンの粒々描写と．．．」

覚えたての解説を復唱して誤魔化してみる。

「粒々、かぁ。小松さんは粒々を調べる女かな。ホホ」

「弥生ちゃんはケータイを操る女」

「蒼葉は干潟をうろつく女、ね」

「そういう櫻姉は何よ？」

「ただの恋する女」

こうなると、千歳も手に負えない。櫻は眼鏡を少し外して「グラスを落としそうになる男」に熱い視線を送る。金曜の夜、宴もたけなわである。

パンケーキを焼く女の話が出たところでひと休み。千歳は干潟で絵を描く女さんに話を振る。

「蒼葉さん、その後、絵の方は？」

「おかげ様で月曜中に描き終えました。今、持って来ますね」

画板に付いたままの一枚、そこには流れるようなグラデーションで表現した川の青を基調に、空と風の青、ヨシの薄緑、干潟の白が写実的な中にも幻想的に描かれている。次はこれをもとに油絵を描くんだとか。「実は早くも漂着がチラホラあったんですけど、リセット直後の気分を思い出しながら描きました。皆さんの想いは青で表現したつもり」

「これはね、私も感動した。で、higata@の皆様にもお見せしたらって言ったんだけど」

「ま、考えときますワ。自分としてはまだ何かしっくり来ないところがあって、その．．．」

よくよく観察すると、青の間にグレーが紛れていて、どこか不穏なものを感じさせる。社会批評的な側面を投影させようとする、どうしても翳が伴う。それが本来の川の姿で



あるなら、なおのことそれは忠実に表現したいところ。だが、環境を感じて興じてというのを優先させるなら、ネガティブな面はできれば出したいくない。皆の笑顔を想うと、グレーな部分は打ち出しにくいのである。青の眩さとは裏腹に、そんな<sup>コンフリクト</sup>葛藤がこの水彩画には込められていた。

食事もほぼ済んだ。次はバースデイケーキ、となりそうなところだが、

「とりあえず、キャンドルだけ。申し訳ない」

「まあ、よっぽど舞い上がってたのね、櫻姉」

「本当はミッドタウンのどこかで買って帰ろうと思ってたんだけど、ね、千歳さん？」

ロングインタビューとか、泣き笑いハプニングとか、いろいろあったので致し方ないところではある。

「そんな、今日だけでいったいいくつお祝いしてもらったかわからないくらいなんだから。もう十分でございます」

と、恐縮する彼の眼前には、見覚えのあるキャンドルが。

「この日のためにとっておいたのよ。フフ」

夏至の夜に引き取り忘れて、櫻が預かっていた蜜蝋キャンドルである。益々恐縮する千歳だったが、何とか吹き消せた。

にこやかなお二人を見て、蒼葉は思う。

「姉さん、どこまで仕掛けたんだろ。宅に連れて来たくらいだから、きっと．．．」

眼鏡の一件は秘密にしておこうというのは二人の暗黙の了解。だが、勘のいい蒼葉は何となくわかっている。「んじゃ、どうもおじゃましました。私は引っ込んでますんで、ごゆっくり」 毎度のことながら、よくできた愛妹である。

お祝いはまだまだ続く。別棟ではお約束の発表会が執り行われるところ。

「まずは、この間カラオケで流れた曲のレビューです」

櫻はピアノに向かい、千歳は画家が使う丸椅子に腰掛ける。一曲目は、「キャットウォーク」の櫻流バラードバージョンである。原曲はリズムカルだが、櫻のは正しく弾き語り調。ピアノが切なく響く部分を巧みに強調し、清艶な一曲に仕立てている。時に囁くように歌う櫻だが、歌いながらキャットウォークを歩く、そんなシーンを思い描いているかのように背筋はしゃんとなっている。キャットと聞くと猫背になりそうだが、千歳も真にいい姿勢で聴き入る。

二曲目、「花瓶」。カラオケで聞くのとはまた違う趣でしっとり歌い、奏でる。間奏ではピアノが強めに入るところがあるが、そこはより情熱的に、しかもアドリブで長めに伸ばして弾きこなす。櫻が只者ではないことがこれでよくわかった。姿勢を保ちつつも前後にスイングしてみる千歳である。

「千歳さん、いいわねえ。歌姫の生演奏聴けて」

「こういうのを贅沢かつ至福の時間で言うんでしょうね」

「フフ、聴いてくれる人がいるから成り立つのよ、ね。じゃ、新曲行きますよ。『届けたい．．．』です」

千歳自作の曲が櫻のピアノで再現される。よりメロディアス、よりメリハリが利いた感じ。「降り注ぐ<sup>ひかり</sup> 陽光集め 目覚めてく 動いてく 街．．．」 櫻らしい思いあふれる歌い出し。早くも傑作の予感。だが、歌詞は未完成だったようで、途中からはカンタービレ状態。歌を乗せられる曲であることがハッキリただけでも成果は大である。

「お粗末様でした」

「いや、素晴らしい！の一言です。歌詞はまあ、ゆっくり考えましょう。ン？」

「千歳、さん．．．」

櫻はゆっくり眼鏡に手をかける。．．．眼鏡を外すと何かが起こる、これは本日の一大教訓である。いいムードなのは多分にわかっているが、今日これ以上の進展はさすがにちょっと、と彼は左ペダル状態。プロセス管理というのは大げさとしても、この抑え加減が千歳らしいところ。それでも半年前に比べれば随分と進歩したものである。

「さ、櫻さん、せっかくだからもう一回、サビのとこ行ってみよう！」

「何？ ピアノレッスンですかぁ？」

自室で何となく聞き耳を立てていた蒼葉は、

「あれ？ 鳴り止んじゃった。まあ、あんまり遅くまで弾けないもんね．．．」

と、トボけたことを云う。だが、心の中ではハラハラドキドキ。別棟<sup>はなれ</sup>が気になって仕方ない。程なく新曲のフレーズが鳴り出し、妙に安心したりしている。

「もう、ほんとにクールなんだからぁ」

愉しそうに弾いているが、内心は穏やかでない。夜遅い時分、少しは左のペダルを踏んだ方がいいのだが、抑えを外したい心理が勝り、むしろ右を踏んでしまう櫻である。千歳には彼女のそんな想いが十分過ぎるほど伝わっているのだから、とにかく鍵盤に向かわせようとムキになっている。せっかくの「届けたい．．．」がこれじゃ空回り、か。

恋愛の秋とはよく言ったものだが、その形は多種多様。こんな過ごし方があってもいいだろう。二人が待ち合わせした時刻から、十時間超が経っている。千歳の秋の長い一日、略して「<sup>せんしゅういちじつ</sup>千秋一日」、これにてひとまず完（これぞ千秋楽？）。

## 新しい私

ちょっと冴えない面相で櫻は郵便受けを開ける。

「文花さんたら、昨日郵便物取り込まなかったんだ」 各団体からのニュースレターや役所からの通知などをガサゴソと取り出す。これはまあ、いつものこと。だが、

「[親展] 隅田千歳様？ へ？」

階段を上がりながらチェックしていたら、一通の不思議な封書に当たった。差出人名が書かれていないので、益々不可解。

「あ、櫻さん、おはよっ。素適な一日、過ごせましたか？」

「ええ、おかげ様で。ところで、何で此処に千歳さん宛の封書が届いたんでしょ？」

上機嫌で出てくることを想定していたので、このいま一つパツとしない返事、おまけに妙な質問と来て、櫻の顔をまじまじと見るしかなかった。

「誰から？」

「女性の字みたいなんだけど、差出人がわかんなくて。親展扱いだから開封する訳にもいかないし．．．」

チーフには思い当たるフシがあった。自分で蒔いた種だけに、下手に明かせないのがツライところ。種蒔きは自家農園にとどめてほしいものだが、そうはいかないのが我らがチーフ。いつの間に情報を蒔いたのやら、その封書の中味は、隅田氏のセンター出勤を祝うメッセージレター、差出人は、十月になってもなお燃える想いのあの人、である。

昨晩は櫻の自転車を借り、メロメロ（もとい、ノロノロ）状態で帰宅した千歳君。本日のセンター初出勤は、その自転車を返しがてら、ということで都合はいいのだが、どうもボーっとなっていて不可ない。それでも定刻の十時にはちゃんと到着。階下からどこか頼りなげな足音が近づく。

「いらっしゃ．．． あれ、千歳さん！」

「おはようございます。櫻先輩、文花チーフ」

「何よ、先輩って。年とおかしくなっちゃった？」

「隅田さん、彼女に言ってなかったの？ サプライズって冗談のつもりだったのに」

「いつもビックリさせられ放しなんで、たまには」

「？」

「土曜日に非常勤で入ることになりました。隅田千歳と申します。よろしく願います」

「エーッ!!」

この櫻の絶叫は、歓喜というよりは驚嘆。それほど嬉しくもなさそうなので、千歳もまじまじと櫻の顔を覗き込んでみる。

「てゆーか、何で私が知らなくて、この差出人は知ってる訳？ 信じらんない！」

本当は嬉しい、でも昨日のことがちょっと許せない、そもそも一緒に職場って何それ？ クリーンアップどうなっちゃうの？ そんでもってこの封書何？ 櫻は一度にいろいろな感情や疑問が湧いてきて、どう処していいのかわからなくなっている。

「まあまあ、櫻さん落ち着いて。急な話で悪かったけど、これも櫻さんのこと考えてなの．．．」

「えっ？」

「前に須崎さんから聞いてね、櫻さん一途だから適度にリラックスしてもらえる工夫があるといいんじゃないか、って」

「八八、そりゃどうも。今はそれほどでもないと思いますけど」

「そうね、誰かさんが現れてからは、何か緩やかな感じになってきたとは思うけど、これからひと山ありそうだし。ま、予防ってとこかな」

櫻も千歳もどことなくズルッと来ているが、口を挟んだりもしない。言い聞かせるように文花は続ける。

「でね、土曜日くらいは息抜きしながら勤務ってのもいいんじゃない？って思ったの。これはNPO的ワークスタイルの模索も兼ねてるけど、情報系は彼氏に任せて、櫻さんには地域ネタ探しに行ってもらう、そんな前提。どう？」

「それで千歳さん、土曜日に？ここに？」

「ちょうどシステムも動き出すことなので」

「あ、勿論一緒にいたければそれでいいわよ。お二人なら弁えもあることだし、こっちは見て楽しいし」

「文花さん．．．」

櫻は眼鏡を外し、目頭を押さえている。昨日からどうも涙腺が脆くなっているようだが、本人はお構いなし。

「ホラ、隅田さん、先輩泣かせたままでいいの？」

「そんなあ、矢ノ倉さんがグッと来るようなこと言うからでしょ」

「違うわよ、好きな人と働けるのがうれしくて泣いてるのよ、ねえ？」

小泣き程度だったので、すぐに顔を出せたが、千歳がまたしてもドキッとなったのは言うまでもない。不機嫌そうな素顔は今日が初めて。これまた女優級である。

「もう！二人で盛り上がっちゃってえ。出かけちゃいますよ」

「あら、そしたら彼氏が泣いちゃうわよ。いいの？」

正直なことを言えば、複雑な気持ちの方が強い。せっかくブレーキをかけなくてもいいところまできたのに、毎週土曜日はブレーキをかけないと仕事にならなくなる可能性が出てきてしまった訳である。一緒にいられるのはいいとしても、甘えられないのは厳しい。

ひとまず深く息をして気持ちを整えつつ、お騒がせの封書を本人に手渡す。

「はい、千歳さん。何せ[親展]ですからね。さっさとどうぞ」

「はあ、誰からだろ？」

櫻は気晴らしするように、先だっけの一般参加型クリーンアップのデータの再集計なんぞを始める。千歳はかつて弥生が使っていた机に座り、封を開ける。

クリーンアップ中、いつもの干潟の方をデジカメでいろいろと撮ってもらえたのはよかったが、その中で本人写真(プロマイド?)がさりげなく入っていたことを思い出す千歳。画像ファイルを送るかどうしようか迷っていたが、そのご本人から「お手数かけますが、どこかでプリントして同封の返信用封筒で送ってもらえないでしょうか」と来たのである。これはほんの方便なのかどうなのか。続けて彼女の想いなどが綴ってある。「歌声を拝聴し、目覚めるものがありました。私が歌ったのはそんな気持ちの表れ．．．」とか「直球勝負、お許してください。でもあの投球も思うところがありまして．．．」とか。どうやらこっちが本旨のようである。そして、

誕生日の翌日、新しいスタートを当環境情報センターで切った彼にとってはビビッと来る一文が文末に付されてあった。「この度はご着任、おめでとうございます。同じ環境つながり、今後ともよろしく願います。Sincerely, Minami」

着任したとあらば、何らかのオリエンテーションとかがあっても良さそうだが、封書の件が気になって仕方がない櫻先輩は、そっちに気が回らない。パタパタと数字を入れながら、時折、彼の様子を窺うばかり。

「ダメだ、集中できない。千歳さん、封筒の中味、教えてよ」

「何故か、着任祝いの一通でした」

「もしかして知らなかったのって私だけとか？ あ、わかった。文花さんでしょ。リークしたんだ、きっと」

その情報屋さんは、舌を出して、薄ら笑い。昨晚、さらなる進展があれば、ここまでヤキモキすることもなかったかも知れない。愛情表現という意味では今のところ言葉どまり。確証としてはそれで十分と思っていた筈なのだが、いつしかその次を期待してしまう自分がいることに気付く。ここで再び大きく息を吐く。

「まあ、ラブレターとかじゃないんならいいや。でも今日はいきなりマイナス1,000点ね」（参考...これで累計63,000点）

櫻を妬かせるとコワイ、とは蒼葉の弁。ちょっとヒヤヒヤ... クールにならざるを得ない千さんであった。

「じゃあ文花さん、打合せしましょうよ。分担とか」

「そりゃそうだ。でも、基本的には櫻さんのアシスタント 兼 相談役ってところでしょうから、ひとまずお好きなように」

「へえ、そうなんだあ。じゃキーボード打って手が凝っちゃったから、ハンドマッサージでもしてもらおっかな？」

これには文花も千歳も声をそろえて、「櫻さん、あのねえ」となる。

打合せは午後、ということで、とりあえず簡単なオリエンテーション方々、机上整理など。その次はPC環境。弥生がインターン期間中に使っていた予備のノートPCを起動させてみる。そこそこメンテしながら使っていたようで、動きとしてはまあまあ。システムはこれで動かせそうだ。

先週はクリーンアップの準備等で、思うに任せなかったが、リリース案内を含むインデックスページを載せ替えて、センターのホームページからリンクを張れば済むところまでは来ていた。名称とロゴも設定済み。それは環境情報ナビゲーションサイト、略して「KanNa」である。

「十月リリースってのがまたポイント。何しろ神無月、ですもんね」

「八八、そう言えば」

「千歳さんが言ってたんじゃない」

「くれぐれも、このシステムいかなあ、とか言われないようにしないとね」

南実発の封書で一時は波立ったが、今は想定通りの光景に落ち着き、チーフとしてもひと安心。PC系作業に関しては兎角手際がいい千歳は、十一時半には大方のリリース準備を終え、文花のGOサインを待つばかり。あとは、センターのトップページ（新着情報）を書き換えつつ、kanNaのロゴを貼り付ける程度。イベント&トピックス系情報を載せるための掲示板機能についても動作確認済み。

ち「では、これを以って納品、ということでよろしいでしょうか」

ふ「どうもありがとうございました。これで私と櫻さんが考えてた環境情報のベースができた感じね。あとはご近所情報と全国情報の連携、かな」

さ「そうそう、ここに載ってる団体の皆さんに案内メール出さなきゃ」

ち「じゃ、一斉メール出しますか。団体個別ページの案内付き」

さ「エッ？ そんな器用なこと．．．」

ふ「さすがは隅田さんネ」

さ「隅に置けないけど、フフ」

一斉メールはいいけれど、文案はまだ。櫻が案内メール本文の下書きを進める間、千歳はお膳立て作業に着手する。データベースから必要な個別データをエクスポートしたら、あとはメールソフトの特殊機能の出番。宛先団体名、団体ページのURL、確認用の連絡先などをメール文中の指定箇所に自動表示されるように組み込んだりしている。間もなく正午。

「そうそう隅田さん、報酬は振込でいい？」

「報酬？ カッコイイ！」

「システム管理費ってことで、半期一括。今日は試用勤務みたいなどこあるけど、今後は、出張サポート＝出勤、てことにしてもらったの」

「その方がお互い楽ですし」

「フーン」

いつの間にそんな話を進めていたんだか。ちょっと面白くない櫻だったが、

「振り込まれたらちゃんと彼女にご馳走しないとネ」

さすがは事務局長にならんとする人物である。またまたグッと来ることを仰る。

「はい、そのつもりです。昨日もすっかり．．． あ、今日はどうしよ」

火曜から金曜は二人で交代交代、お昼をとっているが、土曜日は一緒に自家製弁当を持ってくるんだとか。

「お箸は持ってきたんだけどなあ」

「だからこういう大事なことはこの櫻さんにちゃんと言わないといけないのよお」

「面目ないです」

気が済んだか、今度は櫻がグッと来るお言葉を述べられる。

「いいわ。来週から千歳さんの分も作って来てあげる。ま、今日のところは駅周辺でも行ってらっしゃいな」

プラの容器包装類は、当市ではちゃんと再資源化されるので、その筋の弁当を買って来るのも悪くない。だが、誕生日翌日のランチが弁当ってのも．．．

「では、自転車お借りします」

昨日と比べると幾分涼しいが、意気揚々としている分、バランスがとれて過ごしやすい。心も空も秋晴れ。ペダルを漕ぐ勢いが加速する。いつもの彼の速度ではない。こりゃ心配だ。

無事に帰って来た彼に続き、本日のスペシャルゲストがお見えになる。

「あ、清さん。いらっしゃいませ」

早くも櫻流儀のお迎え挨拶を会得している千歳である。先生は目を丸くするしかない。

「おや、隅田氏。接客担当にでもなったんかい？」

「今日はお試し出勤です」

「ははあ、貴君もまんまと矢ノ倉女史に担がれちゃった、てか」

掃部訓の五カンには「勘」も含まれるんだろう。いいカンである。

「センセがいらしたんで、打合せはあとでね」

「はい。千歳さんとさっきの続きやってまーす。どうぞごゆっくり」

櫻もすっかり晴れやかになっている。眼鏡越しだが、目がキラキラして見えるのは気のせいかな。

「ま、半分合格ってとこじゃねえかな」

六篇のレポートをガサガサと拵けてから、合格と称す三つを取り出す選考委員長である。

「ちなみに首席とか次席とかってありますか？」

「そうさな、やっぱこの、し瀉の役割を説いたヤツが出色かな。船から眺めててよくここまで思い廻らせたもんだ、って。いや、現場経験が少しはあるってことか．．．」

首席レポートは、干瀉理論をもとにゴミの発生抑制論を説いているのが特長。身近なレベルからより広域なレベルへのアプローチ、即ち、地域が地域を大事にする、そんな想いの連鎖によって良好な環境が保たれていく、そんなまとめもまたインパクトがあった。

次席は、その逆のアプローチ。まず地球規模での変異や危機を弁えた上で、次は自分の目や足で検証する、というもの。情報を得たら、それを咀嚼し、自ら現場に出て確かめ、それをまた新たな情報として広め、共有する。地域には地球環境を考えるための素材があふれている。まずは荒川へ行こう。なかなかの力説である。

「地域から地球を見るか、地球から地域を見るか、ってな」

「センセ、それ『Think Globally, Act Locally』に通じる話ですね。その逆もあるんだとか。ご存じだとは思いますが」

「ま、俺の場合は、東京ローカルだから．．． しっかり窮めりゃ、自ずと見えて来るものもあるんだろうけど。まだまだかな」

「またまたご謙遜を」

「とにかくよ、対照的なのがこうやってそろってえのは大したもんだよ。バランスがとれる訳さ。木だけでも森だけでもダメ。ただし、しとりで二つとは言わない。役員は複数。お互いカバーすりゃいい、そんなとこだろ」

文花は、得意とするレポートで千歳にリードされたことが少しばかり悔しく思われた。だが、この清の御説に大いに励まされると同時に、千歳を抜擢した自身の目利きの確かさに惚れ惚れ。

「あ、コーヒーお持ちしますね」

清は笑顔の文花を見送りながら思う。コーヒーを飲みに来るだけでもいいから、当所に定期的に顔を出すのは悪くない、と。だが、秀作レポートの主がここにいることを知ったことで、俄然前向きになっている。

「ところでセンセ、この間は肝心のお返事聞き損なっちゃいましたが、いかがでしょ？ お引き受けの程．．．」

「ああ、彼、隅田君が加わるってことだったら」

「ええ、了解はとれてます」

「じゃ決まり。こっちも張り合い出るしな。ま、よろしく頼むよ」

法人化に向け、大きな一歩が踏み出された。



この後は、不合格判定の役員候補各位に対し、合格レポートを読んでもらい、法人理事候補として名乗りを上げるか否かの意思を確認。立候補する場合は、公募式でかける候補者募集に応募してもらおうが、一次選考に当たる課題論文審査には審査員として加わってもらうことでアドバンテージを付す。課題論文上位者には二次選考として、自身の論文要旨等をプレゼン発表してもらい、相互に評価を交し合って絞り込む。可能であれば監事についてもこれと並行して互選にて選出するが、詳細はの段階で候補者が固まったところで定款案を検討してから詰める。．．． 敏腕チーフは実にここまでプロセスを考え出していた。

カウンターに櫻を残し、三人は円卓に。形としては「鼎談」なのだが、文花のプランを聞く会、そんな印象である。

「いきなり、全面公募っていうのも不自然なんですってね。前身を担ってきた人材をベースにしつつも、新たな人材に加わってもらう機会も保障する、そんなイメージでいいみたい」

「あとは定款で、新陳代謝的な面を規定する、ってことでしょうか」

「そうねえ、思い入れがあると固執しなくなっちゃうのって、何かわかる気がするけど、ちょっとねえ。定款はそういうのを防ぐためにあるんでしょうね。ま、当所はそこんところがいい意味で曖昧だから、あまり気にしなくてもいいかも知れないけど」

ちなみに、櫻は身分上まだ公務員のため、理事等の役員兼任はできない。年度が改まる、即ち法人化が実現した折りには、櫻の処遇が変わる可能性は高いが、出向を妨げるものでもない。文花なりにすでにその辺りも思い描いているようである。

「出向＝役所から、ってばかりじゃないのよ。地元企業から応援に来てもらうなんてのも大アリだし、インターンとか実習とか、いろんな関わり方があると思うのよね」

「自然もしと（人）も多様な方が磐石ってな、もっともだ」

「働き方のモデルもここで提示しようってことですか？」

「提示するのは結果論でしょうね。まずはその人自身がここで何かを模索してもらえばいいんじゃない？」

文花なりの労働観のようなものが語られる。六月と小梅が生き生きしているのを目の当たりにしたこと、クリーンアップを通して「現場力」の重みや意義を実体験したこと、などから、センターを自発型の「学びの現場」にしよう、と思い至ったようである。千歳が考える「スローワーク」モデルに通じるものもありそうだ。

十四時近くになる。三者協議はそろそろお開き。

「で、ですね。掃部先生につきましても、レポートを一筆お願いしたいんでございます。ブログからの引用でも構いません」

「お題はなんだい？」

「『地域を元気にするハコモノのあり方』ってのを考えてたんですが、どうでしょう？」

「あえてハコモノってか。逆説的でいいねえ。気に入った」

**職場での彼氏との**接し方を何となくつかんできた櫻が、カウンターから声をかける。肩

の力が抜けた感じで朗らか。

「千歳さん、準備できましたよお」

「はい、ただいま」

円卓にいる二人はコーヒーを飲み干して語らいモード。

「いいね、あの二人」

「干潟でもそうですけど、見てると和むっていうか」

「そういうおふみさんは、和むお相手はいないんかい？」

「私、恋多き女でして、決められないんですよ。ホホホ」

当たらずも遠からずか。いやいや、本当のところは役員候補よりもお相手の方を募集したい、そんな気持ちの方が強いかも？

KanNa の一斉案内メールの発信に立ち会っていると、次は「カモン」ブログ教室である。円卓では今、清と千歳があっだこうだとやっている。

「おお、これがこの間の写真．．．」

「お書きになる記事に合わせて画像を選んでもらえれば、今アップしますよ」

「おや、小松のお嬢さんのアップもあるねえ」

「ええ、ご自分で撮ったようで」

櫻は「小松」と聞いて、ピピとなっている。その本人写真を見てみたい気持ちもあるが、我慢我慢。この調子じゃやっぱり集中できない、か。

清が選んだのは、辰巳が結束させたヨシの束を撮ったものだった。

「せっかく固めたのによ、放ったらかしたもんな。ブログを通して、活用法でも問いかけてみるさ」

お年は召しているが、ブロガーとしては新米の先生。円卓に残り、PCと睨めっこ、である。文花は何を思ったか、「新しい、私」とか口ずさむ。十月だけ「チェリーブラッサム」。今ここにいる四人、皆一様にそんな気分であることは間違いない。

オリエンテーションを兼ねた打合せも三十分ほどで済んだ。櫻が来館者対応をしている間、千歳はメールのエラーチェックやら、館内資料の確認やら。文花は流域考察レポート「巡視船紀行」の事後処理と今後の役員選考に向けた案内広報づくりを進めている。こんな感じで、緩やかながらも時は確実に過ぎ、すでに午後六時。土曜日は早番も遅番もなく、今この刻を以って閉館となる。

試用勤務とは名ばかりで、早々に即戦力的な働きをこなした千歳に、文花は最敬礼しつつ、

「そんじゃ、来週にでも履歴書と職歴書持って来てね」

「え？ 矢ノ倉さんに情報渡したら筒抜けになっちゃうじゃないですか」

「あら、私そんなに信用なくて？」

冗談のつもりで軽く受け答えした文花だが、千歳はそうでもなかったらしく、少々息巻いている。

「また可愛い後輩さんに、とか。今日から非常勤に入る話だって」(ブツブツ)

「南実ちゃん、あれこれ聞いてくるから、つい。隅田さんのこと慕ってるのよ。わかるでしょ？」

「もしそうだとしたら、その理由も矢ノ倉さんなら。何かご存じなんじゃ？」

「あ、ハハハ。そう来たか。多分そうだろうな、というのはある。来週教えましょう」

昼休みにデジカメプリントを済ませてきた千歳だったが、南実にそれを送るのは来週に先延ばし、ということになる。理由の如何によっては、添え書きの内容も変えなきゃならないからだ。

「私ったら何やってんだか。三角形作ってどうすんのよねえ・・・」

自分のお節介ぶりにちょっぴり呆れて溜息モード。櫻も南実も妹みたいなものだから、良かれと思ってつつい。しかし、そのおかげで千歳が振り回されているところはある。

「文花さん、記念写真撮ってくださいよ」

千歳のデジカメを自分のもののように手にして、チーフを撮影係に指名する櫻。館内点検を終えて戻って来たところである。

「はいはい。記念日ですもんね。何をバックに撮りますか？」

清が帰った後の円卓では、スタンバイモードのPCが出番を待っている。

「写らないかも知れないけど、一応、KanNaちゃんを表示させて、と」

PC画面を挟んで千歳と櫻が並ぶ。櫻はしっかり眼鏡を外して得意の笑顔。文花は再び溜息。「やっぱりご両人、絵になるわ」 深呼吸してシャッターを押す。記念日写真、一丁上がり。

「じゃ、千歳さん、今度持って来てくださいね。多少大きめがいいかな」

「大きめ？ どっかに飾るってこと？」

「あ、携帯用も欲しいかも。とにかく2パターンくださいな」

微笑み交わす二人。時間外なので別に構わないのだが、さすがの文花もやきもきしてきた。だが、さっきの自省を思い出して、ぐっところえてみる。忍耐強さも事務局長に求められる資質のうちなのである。

秋の夕闇が拡がり、彼と彼女の時間が流れ始める。蒼葉は弥生とお出かけ中につき、夕飯の支度は無用という。

「どこかで食事しましょうか？」

「じゃ今日は僕が」

「振り込まれてから、じゃなくていいの？」

「昨日の御礼、と言っては何だけど、ひとまず」

自転車を押して歩く櫻と、ちょっと遅れて歩く千歳。昼間、自転車で通ったのとはまた違って見える街路。徐々に暗さが増す中、気が付けば駅前。禁煙席のある洋風居酒屋が目にと留まる。ここは、櫻のオススメの一店。

「どうですか？ そのお箸」

「ええ、おかげ様で、どんなお料理も美味しくいただけそう」

「では、わたくしめも。これでおそろいね」

洋風居酒屋なので、オムレツとかナポリタンとかロールキャベツ（ひと口サイズ）とかが並ぶ訳だが、どれも箸で対応している。二人とも箸使い、というだけでも十分だが、おそろいというのがまた好い。櫻はニコニコしながら、千住桜木ツアーの話を持ちかける。

「二十一日ってのはいいんだけど、千歳さんとの待合せはどうしょ。九時半じゃ早いかなあ？」

「店の中で待ってればいいでしょ。ドリンクバーもあることだし。あ、でも他の皆は？」

「バスが限られてるから、何時何分発のって指定します」

「集合場所はバスの中、って訳かあ。面白いね」

筋肉痛よもやま話、コンタクトレンズQ & A、来週からの弁当プラン、櫻アレンジ曲のレコーディングスケジュールなどなど、話は尽きない。今日のお騒がせ親展封書の件も話題に乗せたい気持ちもあったが、何となく特定できてきたのであえて口にはしない。いずれ千歳から話してくれるだろう、櫻はそう信じることにした。

「ねえねえ、生年月日を証明できるものって今お持ち？」

「ええ、免許証でよければ」

「まあ、ゴールド．．．」

「都内じゃまず自分で動かすこともないから、持ち腐れです。運転しなきゃ自ずと優良になりますよね。ちなみに櫻さんは？」

「私も同じ金帯付き。たまに文花さんに借りて動かす程度です」 そう言いつつ、席を立つ。「じゃ、ちょっとお借りしますね」

何のことかと思っていたら、しばらくしてワッフル状のホットケーキが運ばれて来た。たっぷりのホイップクリームとミニキャンドル付き。

「では、昨夜かなわなかったバースデーケーキによるお祝いを」

「いやはや、さすが櫻さん。でも今日は当日じゃないですよ」

「フフ、前後三日間有効なのです。いいでしょ、このお店」

店員さんがその場で<sup>とも</sup>点してくれた火を吹き消す。当然のことながら、細々と<sup>ひとすじ</sup>一条の煙が上がる。

「あ、ここ禁煙席でした。すみません」

櫻の話芸は場所を問わない。店員さんも結構ウケている。千歳は感涙していたが、「八八、煙が目にしみる」なんて、よくわからないことを言って誤魔化している。

昨日のリベンジとかで、クリームは櫻に大方とられてしまったが、これはもともとサービス品。彼女に全部食べてもらってもいいくらいである。

「食べないのお？ それとも、『はい、お口開けて』ってやってほしいとか？ フフ」

それはさすがに辞退したが、お口の方は正直なもので何となくポカンと開いている。よくよく考えると櫻と二日続けて顔を合わせたのは今回が初めて。この調子でお会いする機会が増えると、そのポカン、つまり心ここに在らず状態に拍車がかかりそうである。だが、櫻の方も期するところがあるようで、「小松さん、油断ならないから、何としても射止めねば．．．」というのが偽らざる想い。苦手としていた領域だが、「新しい私」効果か、攻めの姿勢が出てきた。新たな情念が沸き起こっていたのである。

眼鏡を外して、彼に問いかける。

「千歳さん、私のこと好き？」

半ば放心状態の彼にこの質問は酷だったか。返事の一言までに数十秒かかることになる。

「え、ええ、そりゃあもう．．． まいったな。ハハ」

この日は、駅前から路線バスに乗ってのご帰宅。優雅でいいのだが、乗車間に彼女に抱きつかれた時の感触が背中にまだ残っていて、深く腰掛けられずにいる。外はすっかり涼しいのに、体はポカポカ、口は相変わらずポカン、そんな一人の男がバスに揺られている。隅田千歳、誕生日翌日の夜が更けてゆく。

### グリーンマップはブルー

一つ年を重ねたら、いろいろな動きが活発になってきた。冬木の情報誌に掲載される予定稿は、彼自身に現場経験が加味されたことでなかなかの出来となり、higata@メンバーも概ね納得。冬木レポート本文の他に、参加者の声なんかも流してもらったことで、メーリングリストはかつてない盛り上がり。管理人冥利に尽きる一事である。

打上げカラオケでメンバーの音楽的な傾向が掴めたことで、ちょっとしたプランを考え付いた千歳だが、実行に移すには共同発案者の業平の存在が欠かせない。バンドを組んだと仮定して、どういう楽曲が行けそうか、MIDIデータのやりとりが始まったのも同じ週のことである。

そして、櫻とのメールのやりとり。二人してケータイを持っていないので、日常的に声が聴けない。その分、思いが募り、ついメールしちゃうことになる。平日夜のお楽しみが増えたのもこの週。

ライター系、webデザイン系の仕事はこれまで通り。KanNaの管理費は、今月中には振り込まれる見通し。千歳は充実の秋を送っている。

一日一千ポイントが七万点に達した、十月二十日。節目でもあるので何かありそうな予感のアラサーご両人だったが、翌日に千住桜木デート(?)が控えていることもあり、自分達でも不思議なくらい冷静だった。驚いたのは午後、業平が現われたことくらいか。

「まさか、本多さんがいらっしゃるとはねえ」

「彼も『千ちゃん、何で?』とかって驚いてはいたけどね。まあ痛み分けかな」

「でも、登記の話って、そんなに前もってしないと駄目なのかしら？」

「いやあ、登記関係だけじゃなかったような気がするけど」

「そうね。帰り際に『今度は私の記念写真も』とか言って、ツーショットですもんね。

文花さん、気があるのかなあ」

王子神谷のとあるファミレスで、モーニングメニューをいただきながら、昨日の出来事を語り合う櫻と千歳。十時を回ったところだが、指定のバスに乗る時間まではまだ一時間余りある。

「それにしても千歳さんの履歴書見た時の反応、おかしかったですね。『あら、先週の

金曜が誕生日だったの？ 櫻さんも意地悪ねえ』ですって。どっちが意地悪よって、こっちも言いたかったけど、フフ」

「さすがのチーフもそういう個人情報まではご存じなかった訳で。でももうバレちゃったからなあ」

時間があるのをいいことに、我らが上司をネタにドリンク片手でこの調子。ススキが近くになくとも、きっと当人はクシャミ連発でお困りのことだろう。

バスに乗るのは十一時二十分頃。付近を少々散歩しようということになって、十一時前に店を出る。団地や商店街の一角をウロウロした後、余裕を持って停留所に戻って来る。だが、どうもおかしい。「あれ？ 北千住行きって出てないんだけど．．．」

地図はお得意の櫻だが、バスの路線図は少々読み損なっていたようだ。間違いに気付き、北本通りを王子方面に戻る途中、そのバスは右折のウィンカを点けて、車線変更したところで停車。「あっちだ、王子五丁目」「キャー」

ドジな二人が横断歩道を走る姿をいち早く見つけた六月少年は、運転手に声をかける。

「すみません、あの二人、乗せてあげてください」

信号が変わっても直進車がすぐに来ればこのバスはまだ発進することはなかったのだが、こういう時に限って反対車線はガラガラ。スムーズに右折してくれちゃうもんだから、さあ大変。だが、六月が気付いてくれたおかげで、バスはゆっくり二人のランナーを抜き去ると、停留所でしばらく待機。滑り込んで来たお二人はハァハァやりながらも、めでたしめでたし、となる。

「ピッピー、駆け込み乗車はご遠慮くださーい」

「あ、六月君．．．」

櫻がICカードをピピとやると、少年は咳払いした上で、「運転手さんに御礼言わなきゃ」と説諭する。

「あ、ありがとうございます」

「六さんも、ありがとね」 バスカードを通しながら、千歳は苦笑い。

とりあえず、バス車内集合でよかった。危うく乗り損なうところである。後方では、小梅嬢がニコニコしながら座っている。

「いったい、どしたんですかあ」

「いやあ、この辺て不慣れなもんだから、乗り場を間違えちゃって、そのお」

「ちゃんと彼氏がリードしなきゃ」

「は、ごもつとも．．．」

「六月君はその点、大丈夫よ、ね？」

またしても小梅にからかわれている千歳さんである。こうなると彼女も黙ってはいない。

「ちょっと、小梅さん、千歳さんへコませないでよお」

「だって楽しいんだもん。櫻さんだって、よくやってるじゃん」

「ま、まあそうだけど．．．（苦笑）」

駆け込み乗車の分際でどうにも分が悪い。落ち着かない二人に揺さぶりをかけるように、バスは豊島七丁目界限のクランク状の曲がり角を縫い進んでいく。

「えっ、こんな路地をバスが．．．」 と櫻がおののく一方で、

「へへ、楽しい」と少年ははしゃぐ。鉄道好きは重々承知だったが、バスも宜しいようで。

隅田川を越えると、巨大建造物が現われる。

「ハートアイランド？」

「ああ、船からも見たじゃない。新田リバーステーションの近く」

「漂流ゴミに気取られてて。気が付かなかつたんだな、きっと」

後ろから若い二人が割り込んでくる。

こ「ねえ、櫻さん、今日は結局、蒼葉さん来れないの？」

さ「そうねえ、今、油絵の方、描き始めててね。どうもハマっちゃったみたいなのよ」

む「そっかあ」

さ「地元でやる時にはさ、ぜひ四姉妹そろって、でどう？ 平日でも土曜でも」

こ「お姉ちゃん次第かなあ・・・」

パンケーキご好評につき、初音は日曜が動きにくくなってきて、今日は不参加。だが、それも限度がある。志望校を絞り込まないといけないし、受験勉強も本格化させないと... そんな姉を思い、ちょっと曇りがちになる妹。櫻はそんな小梅に、蒼葉と重なるものを見たような気がした。

十一時半過ぎ、ここからがこのバスの目玉である。荒川の土手を走るコース、その距離約四 km。左に荒川、右に隅田川、リバーフロントバスと呼ぶに相応しい。

小梅と六月は「わぁー」と歓声を上げている。窓越しに見る荒川は、濃い青を蓄えつつ、降り注ぐ陽光をその青に溶け込ませ、程よい輝きを放っている。進行方向左側の席は特等席である。その光景を鑑賞している間、四人に言葉は要らない。土手上と名の付く停留所に近づくとアップ、過ぎるとダウン。その上り下りが予想外ではあったが、荒川が見え隠れするのがまた妙味。櫻と千歳は「おぉ」と唸っている。

「あの黄色いのって、セイタカアワダチソウでしたっけ？」

「はあ、よくご存じで。土手上から見るとセイタカな感じしないけどね」

「遠くから眺める分にはまだいいんでしょうけど、近くで見るときつとスゴイんでしょうね」

「観賞に向く植物とは言えないのは確か、かな」

河川敷を黄色に埋め尽くすその帰化植物は、明らかに荒川の青とは一線を画している。自然界にも色彩の不調和とあることを示していると言えそうだ。特に扇大橋の下の茫洋とした黄には脅威すら覚える。その黄帯を縫うように、走る人、人。ランナーの列が下流に向かって続いているのが目に入る。

バスは再び土手下の道路を走る。小台から目的地の千住桜木までは何とこのまま。左側の車窓は、ずっと土手の緑である。川岸が望めない以上、南実が話していた自然再生工事の現況も視察不能。下車して橋に出て、上流側を遠望するしかなさそうだ。

「着きましたねえ、千住桜木。皆さん、ようこそ！って感じ」

「船から見るのと違って、何か賑やかというか、パーって。広がりをを感じる」



第一印象は良好なようである。六月は早速地図を見つけて、バスが通ってきたルートを確認している。

「櫻さん、イラストマップ用の紙は？」

「あ、そうそう、ちょっと待って」

櫻は予め千住桜木界限と西新井橋を中心とした白地図を用意してあった。これにイラストを描き込み、必要に応じてアイコンシールを貼る、という手筈である。今日は「千住桜木グリーンマップ」のトライアル。目の前にある周辺地図と、その白地図を見比べる四人。

「お化け煙突って、この町にあったんだ。知らなかった」

「お化け？」

六月は地図に書かれてある解説を見て、合点が行ったような行かないような顔をしている。

「四本の煙突の配置が絶妙だったらしくて、見る場所によって、一本から三本まで見え方が違ったんですって。人によって証言が違うから化け物呼ばわり。別にお化けが出た訳じゃないのにね」

小梅はアイコンシールを見ながら、何か考えている。

「ってことは、そういうのってどのシール貼ればいいの？」

「今も残ってれば、[アートスポット]かもね」

千歳がとぼけたことを言うので、櫻はあわてて訂正する。シールは貼り直しが利かない。ここは確実に行きたい。

「ま、ひとまず[歴史あり]ってところじゃない？」

「オイラ的には[悲しい場所]かも。親しまれてたのに解体されちゃったんでしょ？」

六月は時々ジーンと来ることを言う。姉の影響なのかも知れないが、そのセンスは独特である。白地図の下の方、隅田川沿いに「涙する目」シールがこうして貼られることになる。

一行は、西新井橋の歩道へ。

「どの辺が歩けるか、まずは下見しないとね」

「下を見るから、下見？」

またまた彼氏がつまらないことを言うので、彼女は少年少女を連れて、そそくさと橋の中央へ。

「さ、千歳お兄さんは放っておいて、行こ行こ．．．」

「あー、そんなあ」と言いつつ、お兄さんは実際に下を見してみる。人が歩けるような水際はなく、ヨシが覆うばかり。干潟状になっている僅かばかりの砂地には、漂着ゴミが少々、そして白く濁る泡・泡。これでは現場踏査は難しそうだ。

中央部にいる三人は、上流側の川景色を鑑賞中。小梅は、予備の白紙をクリップボードに挟むと、フリーハンドでアウトラインをスケッチし始める。

「左側のあの木の橋桁みたいの何ですか？」

「ああ、何て言ってたっけな．．． あ、お兄さんに聞いてみよう。千歳さーん！」

浮かぬ顔で千歳兄がやって来た。受け答えも今ひとつパツとしない。

「粗朶<sup>そだ</sup>とかって聞いたような。枝を組み合わせせて枠を作って、その中にまた廃材とか木

切れを入れて。石を入れて沈めると、粗朶<sup>ちんしゅう</sup>沈床？ 漢字で書かないとわからないかな」

「とにかく、ソダなんだそーだ」

お兄さんがつまらんことを言うもんだから、若いのもこうなってしまう。女性二人は意気消沈。

正午を過ぎたところで、簡単なスケッチが仕上がった。

「左はヨシ原と木々、で、ソダの辺りが自然再生工事関係。右には首都高速、川には漂流するプラスチック容器、と。小梅さん、さすがね」

千歳は念のため、デジカメで同じ景色を撮影する。だが、スケッチを見た後でファインダーを覗くとどこことなく違和感が漂う。全体をそのまま写し取るにはカメラが手っ取り早いのは言うまでもないが、どの辺にどんな目印があるかを瞬時に伝えるにはスケッチの方が有効。小梅の視点はまた格別である。とてもデジカメでは再現できない。

「特徴を捉える目をそのまま地図に持ち込むと、グリーンマップが出来上がる、そういうことか．．．」 さすがは首席レポートの筆者、もっともらしいことを云う。

「上流側は水辺に出れそうにないわねえ。ソダのところも見たかったけど．．．」

「下流側も下見しましょうぜ、櫻さん」

「上を見ても下見、下を見ても下見？ なぜ？」

今度は彼女がこの調子。彼氏はここぞとばかりに、

「さ、櫻姉さんは放っておいて、行こうか」

少女と少年は櫻姉の味方だった。小梅は一言、

「じゃあね」

千歳は「クーッ」となる。前にも似たようなシーンがあったような．．． **珍道中は続く。**

ここまでは割と順調だった四人だが、反対側の歩道から「下見」をした途端、事態は急変する。

「えっ、マジ？」 櫻は目を疑い、

「ひ、悲惨だぁ」 小梅は目を見開く。

男子二人は言葉が出ない。セイタカの黄色い一帯の周りには、大きい物では洗濯機にベッドのマットレス、細かいものに至っては、これまで higata@他の皆々で集めてきた半年分の総量に匹敵、いやそれ以上のゴミがこれでもかと散らばっている。それも一箇所集中ではなく、いくつかの集積地に分散して漂着(?)しているから凄まじい。

「とにかく近くに行ってみよう」

今回ばかりは千歳の掛け声に従って、一行は移動を始める。と、サイレンとともに救急車が河川敷道路に入って来た。マラソンランナーで急患が出たことに伴うものだろう。だが、四人にはそのサイレンがゴミから発せられる悲鳴と重なって聞こえて仕方がない。救急車には構うことなく、ランナーは途切れなく走り続ける。もし彼等にゴミの声が届いたとしたら？ 足を止めることも有り得るかも知れない。

ランナーの合間を抜けて、何とか現場近くに辿り着いた四人は、橋脚の下で途轍もないものに遭遇する。

さ「あちゃー、これっていわゆるホームレスの．．．」

こ「でも、誰もいないみたい」

ち「主<sup>あるじ</sup>がいなければそれこそホームレス、いや失敬」

推論し得るのは、例の台風増水でここいらも浸水して、家財等が台無しになり、手放さざるを得なくなったのではないか、ということ。その証拠に、テントから積荷から何もかも泥漬けのまま、散らかったまま、なのである。

橋の上から散見された数々のゴミ袋やら段ボールやら各種容器類やらは、漂着したのではなく、住居から近いことから、かつての主が生活していた際の名残だったことがわかってきた。

「ルフロンが言ってたこと、合ってた訳か．．．」

櫻はうなだれるようにしてポツン。生活ゴミが流されて漂流、そして漂着．．．ここは水際から多少距離があるので、イコール漂流とはならないかも知れないが、荒川下流域のあちこちでは、水辺に近い場所で暮らす人々が<sup>たいせい</sup>大勢の筈。ゴミの発生抑制を突き詰めると、CSRがどうこうと言う以上に、格差とか社会構造とか、そういう根源的な話も出てくるんじゃないか．．．益々足取りが重くなる櫻であった。

「ま、今日はマップのお試し調査で来てるんだから。ここの惨状はひとまず記録しておくとして、また考えよう。櫻さん」

「ええ、でも．．．」

河川事務所関係者のお嬢さんが今ここにいることを忘れてはいけない。小梅は力強くお兄さんお姉さんを励ます。

「石島課長に談判します。せっかく白地図があるんだもん。しっかり描いて、シール貼って．．．あと、デジカメでしっかり撮ってもらえれば」

「小梅さん．．．」

悲喜こもごもの櫻は[悲しい場所]のシールのような状態になっているが、泣いてちゃ話は進まない。ゴミ関係のアイコンシールがあいにく見当たらないので、とにかくこの涙目シールを貼ってしまおう。これで涙ともお別れである。六月はさらに[リユース]のシールを橋の下付近に貼り足して、「これで少しは救われるかなあ」

またまたいいことを言ってくれたりする。

生活ゴミが堆積していると、不法投棄の温床になる可能性がある。これは<sup>ひきよ</sup>永代先生が言っていた割れ窓理論に通じる話。だが、そこに暮らす人が「それはゴミじゃない」と言い張れば、行政側も迂闊に手が出せなくなる。不法占有者と言ってしまえばおしまいだ、河川敷などを広義の公共空間と考え、そこで寝泊りする行為を河川利用の一環と見做すと、排除の論理は必ずしも成り立たなくなるだろう。目の前の惨状は、そんな現実の裏返しと言えなくもない。

そこへ増水に伴う漂着ゴミが押し寄せてきた。そうなるともう区別がつかない。仮に、漂着は手出しできるが、放置は手が出せない、といった理屈で処理が膠着してるんだとしたら考え物。ここはやはり市民の出番なのか。

若い二人は、お疲れ気味の二人を引率するように歩き出す。淀んだ気分を浄化してもら

うには水辺が一番。上流側は千歳が下見した通り、道はなし。だが、下流側はしっかり水際に出られるルートがある。

ゴミにすっかり気を取られていたが、こっちの水辺では河川補修工事ってのと、水面清掃作業とやらをやっていた。ルートが確保されていたのは工事現場があるが故、だろう。補修の方は何をどう、というのがハッキリしないものの、清掃の方は窺い知ることができた。囲いの外から垣間見えるは、想像を絶する粗大ゴミ（産廃？）の山々。

「え、水面清掃なのに？」

「いやぁ、不法投棄を集積しただけじゃ？」

これでベニシジミとかコサギとかがいなかったら、グリーンマップどころじゃなくてグレイマップになってしまうところ。ネガティブになりそうな気持ちをとどめてくれるのが、生き物の存在であり、アイコンシールなのである。

シートを眺めていた六月は、蝶と鳥のシールを剥がしかけたが、小梅がすでに両方のイラストを描き入れていたので、手を止める。

「ありゃ、両生類のシールがある。うひゃあ」

担任の先生は爬虫類がダメ、文花はまだまだ魚類が苦手。その二つの類はシール化されていないのに、よりによって[両生類]である。東急の青ガエルはいいのだが．．．できればこのシールは貼らずに済ませたいと少年は思う。

工事現場と西新井橋の間くらいに、水際に出られそうな小径が見つかった。おそろおそろ歩き進んでみると、まるで異世界である。干潟面が少ない．．．というのも、干潟を形成するための川の働きを阻害するような無粋な工作物が設置してあるから、である。ヨシを保全するためとも思えない、丸太の堰、積石、さらには瓦礫様の石をゴロゴロとネットでくるんだもの。

「自然再生って、これのこと？」

「ここは一つ小梅さんのトーチャンに聞いてみるか、ね？」

頷きながらも唇をかみしめ、黙々とその物体を描いていく小梅。先を進む六月は野球の試合経過を掲示するボードの断片を発見して興奮する。「見て見て！」

さ「8・9・10・R．．． そっかぁ」

ち「これも監督さんに報告した方がいいかねえ」

こ「えっと、生活ゴミとヘンテコな物体とこのボードと．．． やっぱ写真も見せた方がいいですね」

そんな四人を冷やかすように、ジェットスキーが波を立てて上流方向へ。

「てことは．．．」

「でも、逃げ場がない？」

三十代ともなればいい大人だが、思わず足が竦んでしまう。だが、ヘンテコな堰とかのおかげで、波は消され、彼等の足元は至って穏やか。波消しの効果をまざまざと見せ付けられる格好になる。

このまま橋の下を進んで行けば、千歳が見下ろした泡々と濁々の近くには出られる。陸伝いではムリでも、川伝いなら踏査できるのである。だが、現場主義にも自ずと限界がある。また引き波が来たら、いやいや滑って怪我でもしたらそれこそ一大事。しっかり者の二人ではあるが、まだまだ十代前半の子どもたち。危ない目に遭わせる訳にはいかない。

という訳で、千住桜木地区の水辺調査はここでひと区切り。橋の下の水際一帯には、一応[ 湿原・干潟 ]の小シールが貼られ、大波小波が描き加えられる。[ こどもにやさしい ]シールは残念ながら見送り。少しは水辺で安らぐことはできた？ いや、まだ穏やかならない。

「パッと見はきれいそうだったのに、よく見るとやっぱり流れ着いてるのね」

「堰とか石とかで漂着しにくいはずなのにね」

特大サイズのカップめん容器、古新聞、スリッパ、灯油缶、あとは毎度お馴染み袋類に各種飲料容器等々が転がっている。

「ゴミも必死なんですよ、きっと。拾ってほしくて上陸して来るんじゃないかなあ . . .」

「六月君たら」

またしても少年の心憎い一言。「それって、クリーンアップの指針になるね。ゴミの気持ちを考えれば、その通りかも」 追って千歳も佳いことを述べる。櫻はようやく[ 安らぎの場 ]シールのような表情に落ち着いてきた。

アイコンシールは、地元にある「いいもの」を探り出すための手がかりである。橋の上には[ すばらしいながめ ]を貼ることができたのはいい。だが、橋の下に貼った[ 悲しい場所 ]の涙目にどうしても引きずられてしまう。もっと希望の持てるアイコンを考え出して、そのシールで満たしたい。秋風に吹かれながら、櫻は思う。

元祖はグリーンマップだが、櫻が今回考えていたのは川周辺に特化した「ブルーマップ」。エリア的には満足したものの、千住桜木の良さが今ひとつ見つけられなかったのが心残り。違う意味でブルーになってしまった。

こ「今度の土曜日、持って来ます。それまでにもうちょっと埋めてみますね」

さ「あ、ありがと。お待ちしております」

笑みが失せている、というか、今日はいつになく浮き沈みが激しい櫻である。小梅は承知しているが、このままでいいとは思っていない。

「櫻さん、ホラこれ見て！」

マップの片隅にスマイルマークを描いて見せる。「これをアイコンにすればいいんですよ。ね？」

「もう、また泣かせる気？」

「エへへ、泣くなら彼氏のところでどーぞ！」

おませな小梅嬢であった。

若いお二人は、十二時四十分過ぎのバスで再び王子方面に戻ると言う。

「<sup>おだい</sup>小台土手近くで下車して、日暮里・舎人ライナーを見物しながら熊野前へ。そこからは都電で帰ります」

「はあ、さすがは六さんだね」

「オイラまだ子ども料金でOKだから、半額のうちにいろいろ乗っておこうと」

「それじゃ小梅さん、分が悪いわねえ」

「わたしは引率者ですから、いいんです。ね？ 六月くん」

引率というか、ナビ担当は六月のような気もするが、ま、いいか。

本日も大活躍の少女と少年を乗せたバスは、ゆっくりと土手脇の道路を上り進んで行った。

「そーいや、あの二人、お昼どうすんだろ？」

「そっか、うっかりしてた。ま、都電に乗るって言ってたから、東池袋～サンシャインシティとか、かな」

かく言う二人も昼食のことは後回し。どうも千住桜木ショックが尾を引いているようである。

「あーあ、千住櫻さんにご縁がありそうな地がこんなじゃ．．．」

「ま、ま、ま。今日もおかげでよく晴れたんだし。ハレ女さんが曇り顔じゃ町も曇っちゃう」

「じゃ、少しでも良さそうなシールを貼れることを願いつつ、まち歩きしますか」

田端方面に出るバスは本数が増えるので、時間をあまり気にせずに散策できる。[みんなの森][みんなの公園]などを貼りながら、二人は尾竹橋にやって来た。

「あら、隅田川ってガチガチねえ」

「典型的な垂直護岸。川沿いを歩けるようになっているのが救いかな」

「シールネタ．．． ウーン。このままじゃ[悲しい場所]どまりね」

お化け煙突があったと思われる場所を眺めながら櫻は静かに溜息をつく。今日はどうやってもブルーマップ状態から抜け出せない。十三時半近く、ようやく帰りのバスに乗り込んでホッとするお疲れ男女である。

「フフ、今日はいいいんだ。ランチしたら、千歳宅へGO！だもんね」

「本当はもっと早くお招きできればよかったんだけど、面と向かってなかなか言えるもんじゃないからねえ。へへ」

「いいのいいの。スローラブ、いや Sustainable Love でしょ？」

熊野前交差点で左折した際の揺れを活かし、櫻は彼の肩に頭を乗せてみる。千歳は満更でもないのだが、ふと昨日のシリアスな話を思い出してしまう。それは文花から聞いたこんな哀話．．．。

「これはあくまで私の推測。南実ちゃんが隅田さんに特別な感情を抱く理由、それは．．．あ、驚かないで聞いてね」

櫻と業平は階下の図書館に行っていて不在。来客もこの時はなし。カウンターでヒソヒソ、そんな状態である。

「隅田さんの風貌がね、南実ちゃんのお兄さんに似てるの」

「はあ、でもそれじゃ理由としてはちょっと」

「ええ、あんまり言わない方がいいのかも知れないけど．．．でも形見がどうのって話したんですってね。つまりね、彼女にはお兄さんがいたんだけど、今はいない。北太平洋のどこかで潜って調査してた時に、離岸流が何かにさらわれて、行方、不明．．．あ、ちょっと喋り、過ぎたかな」

文花はいつしか目を赤くしている。それでもなお言葉を続ける。



「南実ちゃん、お兄ちゃん子だったの。だから、隅田さんと出会った時に衝撃受けてたみたい。慕いたくもなるし、一緒にいたいとも思うだろうし。私にはわかるんだ。でも、そう云われても隅田さんは困っちゃうわよね」

「いえいえ。これまでどことなく解せないものを感じていたんですけど、今のお話で解きました。さぞご愁傷だったことでしょうね。でも、僕はどうすればいいんでしょう？」

「お兄さんの代わりなんてできないものね．．． あ、いけない。あくまで推測よ推測。本人とよく相談した方がいいんじゃない？」

「相談、ですか．．．」

本人と相談てのも妙な話である。櫻に聞くのもアリかも知れないが、やはり有り得ない。恋仲の女性に、他の女性との接し方を尋ねるなんて話、聞いたことがあるだろうか。その話が真実なら、素直に事情だけでも話したいところだが、それもどうかと思ひ直す。口にしたらしたで、**不信感を持たれる**可能性だってある。バスは五差路を右折すると、ウネウネと走って行く。千歳の胸中にもその曲がりくねった感じが入り込んできて、苦しい。

何となく寝入っていた櫻は降りる間際になって千歳の異変に気付く。

「千歳さん？ 大丈夫ですかあ？ 緊張してきた、とか？」

「エ？ あ、降りなきゃ！」

田端でドタバタとはよく言ったものである。

「おじゃましまーす」

「いらっしゃいませ、櫻姫」

いきなり彼氏に抱きつきそうになる姫だったが、「あの私、今日は飛ばし過ぎないようにしますので、どうか追い出したりしないでくださいネ」と自分でクギを刺して、收拾を図る。直後の彼氏は「？」状態だったが、一寸置いてからまたしてもクールな千さんが顔を出す。

「では、櫻さま、お約束のレコーディングの方、ひとつよろしく願いいたします」

「あーあ、これって千歳さんのトリック？ 人使うの上手なんだから」

「いえ、御礼は必ず。何か考えておいてくださいな」

「御礼？ あ、それなら十一月十一日、空けといてください。終日！」

「7.7 9.9 に続く第三弾？」

「フフフ、そういうこと」

リビングには、PCとつながった七十鍵ほどのシンセサイザーが置いてある。部屋を見渡したり、調度品を鑑賞したり、ゆっくりお茶したり、そんな前振りも何もなく、櫻は鍵盤に向かうことになる。

「そっかあ、千歳さん、PC相手の時はスローじゃなくなるんだった」

「あ、いや別に。つい気が急いちゃって」

PCには音源モジュールが内蔵されていて、ドラムやベースの音も出せる。音量を絞る必要はあるが、スピーカーから聴こえる音でモニターしながら鍵盤を叩けば、その音はPCに取り込まれ、オーディオファイルとして融通が利くようになる。



「何度でも録り直しできるんですよね」

「ええ。でも、櫻さん version にした方が弾きやすいですよね」

「原曲を少しゆっくりめで流してくれれば平気ですよ」

二人は一応恋人ということになっているが、今はどうやら趣味人同士の間柄。時の経つのも忘れて、録ったり消したり、PC画面上の五線紙に音符を置いたり動かしたり、そんなことを繰り返している。

「コピー＆ペーストで楽譜が作れちゃうとはねえ．．．」

「あとは、業平君に重厚なアレンジをしてもらえばOK」

記念すべき二人の合作第一号「届けたい．．．」。ひとまずカラオケで流れる程度には仕上がった。櫻は昔のことを思い出しながらも、心境の変化をひしひしと感じていた。一途な想いをぶつけるだけじゃ駄目、ペースを合わせるところは合わせなきゃ．．． 曲のタイトルに「．．．」が入っているのは、「届けたい、されど」と一定の抑制がかかっていることを暗示していた。奏者はその抑制感と心地良さに身を委ねている。外はずでに黒々としてきているが、櫻は鍵盤の前から離れようとしめない。まだまだ帰りたくない、そんな気持ちもあるようだ。千歳は南実への返事を急ぎたい気持ちもあったが、愛しの櫻姫には敵わない。この際なので、業平と交換したばかりの曲なんかもデモで流しつつ、アレンジの可否をチェックしてもらうことにした。

夕食がピザになってしまったのは、招く側としては不覚だったが、客の方は喜んで頬張っている。

「四ヶ月前はセンターでピザ食べましたねえ。覚えてます？」

あの当時、四月<sup>よっき</sup>後に二人がこういうことになっているとは誰が予想し得ただろう？

「私は予感ありましたよ。だからあの時、メッセージカード書いたんです。千歳さんなら応えてくれるだろう、ってね。何か懐かしいなあ．．．」

この日の櫻は、宣言通り飛ばし過ぎることなく、最終バスに間に合うように粛々と帰宅した。次にお目にかかるのは、土曜日。この緩やかな感じが、アラウンドサーティーによる Sustainable ~ なのである。

## 十一月の巻

### 視野広がる時

返信用封筒には自分の写真と添え書きが入っていた。「今度のクリーンアップの際、よければお兄さんの話、聞かせてもらえませんか．．．」 前後の文章は目に入らない。この一文が心に深く刻まれ、ここ十日ばかり落ち着かない日々を過ごしていた南実。今日もご自慢の電動車を駆ってやって来たが、気が付いたら十時までまだ十五分もある。よほど気がはやっていたんだらう。

「隅田さん、早く来ないかな」

前回リセットを完了した干潟だが、パッと見は良好な感じがするものの、崖側を覗くと案の定、ゴミ箱をひっくり返したような状態に逆戻りしている。時節柄、ヨシもその勢いを失い、朽ちたところを大物ゴミが押し寄せ、自然物が人工物に食われている、そんな有様である。南実には、リセット経過を確かめたかった、という以上に、千歳と早く話をし

たい、という思いが強く、干潟の嘆きも届いていない様子。

到着が早かった分、潮は**まだ**浅く、普段お目にかからない線まで干潟が広がっている。水際スレスレの処には波が描いたらしい<sup>ひだ</sup>襞状の模様が残る。南実の心にもおそらくその襞が映っているのだろう。今はただ、佇んでいる。

昨日は祝日だったため、千歳と会うのは八日ぶりになる。こちらも自転車をすっ飛ばしての現場入り。いつもと視界が異なるため、変な気分ではあったが、よく晴れた空、凜とした空気、柔らかな日射、そうした要素を視野いっぱいに取り込めることがただ嬉しかった。

「千歳さん、どんな顔するかな」

十分前に着いた櫻は、思いがけない先客に一寸戸惑いを感じるも、むしろ好機と考えた。

「小松さん！ おはよっ」

物憂げな顔のまま振り向く南実。だが、そんな顔をしている場合ではない。

「エッ？ さ、櫻さん？」

主導権を握った櫻は、強気に攻める。

「千歳さんにアドバイスもらって、コンタクトにしたの。どう？」

「てゆーか、何で今まで眼鏡だったんですか？」

「ま、モテ過ぎちゃっても困るから、かな。ハハ」

南実は何となく身構えている。攻守逆転とはこのことか。櫻の眼の鋭さにたじろぐばかり。ここで追い討ちをかけるべく、親展封書のことも問い質してやろうと思ったその時、前回ドタキャンの二人が現われた。

「大家好！ っても二人の場合は大家じゃないか」

「櫻さん、小松さん、元気い？」

干潟が穏やかなのとは対照的に、女性二人には波が立ちかけていたが、こう来られては収めるしかない。

「奥宮さん」

「ルフロンでいいわよ、こまっつあん」

今まではストレートパーマだったが、今日は髪がクルクルしていてちょっぴりファンキーなルフロン嬢。いつになくニコニコしながら、そのクルクルを指でいじっていたが、思わず手が止まる。

「って、そこにいるの本当に櫻さん？」

八広はすでにのぼせ上がっている。いつものならそんな彼を小突くところだが、舞恵はただ目をパチクリ。櫻に釘付けになりながらそろそろと下りてくる。

「ヤダ、チョー美人じゃん」

「あら、そう？ ルフロンもイイ感じよ」

定刻の十時になった。今日は集まりが良くない。

「そーいや、彼氏はどうしたのよ」

「さあ、昨日は久々に土曜日お休みだったから、調子狂っちゃったんじゃないの？」

「こういう時、ケータイがあればねえ」

「フフ、別に。なくても平気よ。以心伝心だし」

「まあ結構なこと。隅田さんもこんな美人が彼女だなんて、ねえ？」

仲良しの二人が会話してる間、南実と八広は飄然とゴミの散らかり具合を眺めていた。

八広はひと呼吸遅れて、「あ、そうよね、へへ」とはにかむ。

「何よ、デレデレしちゃってえ。舞恵はどうなのよ？」

「ルフロンは美人というより、美の女神．．．」

旨いことを言っても言わなくても、どつかれてしまう八クンであった。

クシャミをしながらせかせかと堤防上を歩く男性がいる。お噂の通り、調子が狂ってしまっている千歳は、自転車の点検を怠ったばかりにこの体たらく。十月最後の土曜日、つまり三度目のセンター出勤日のこと。台風が近づく中、自身の自転車で何とか漕ぎつけたのは良かったが、舞恵と八広のご来館、というのが今考えると事態の伏線だったことに気付く。八広はともかくも、雨女、いやこの時は嵐女さんが来たばかりに、雨風は益々激しさを増し、悪天候の中を自転車で帰ることになった訳である。台風を甘く見てはいけない。そのツケは彼の自転車に災いをもたらした。今朝、八日ぶりに走らせようと思ったら、後輪がペタンコ！ 空気を入れてもNGだったので、仕方なく徒歩と相成った。正にトホホである。

そんな彼の遙か前方では、石島姉妹が先行中。逆に後方からは何やら大きなバッグを担いだ女性が付いて来る。

「千さーん！」

目がいい画家さんは、遠くから千歳を見つけて呼び止める。

「あ、蒼葉さん」

「へへ、ちょうど良かった。これ持ってくださいる？」

画布を立てかける三脚である。こんな大荷物じゃバスに乗って来るしかあるまい。「想像じゃ限界があるんですよ。今日はちゃんと原色を見極めようと．．．」 その熱心さに胸打たれる千歳である。さっきまで早足だったが、ペースが落ちている。

「はあ、やっと着いたあ」

「あ、ルフロンさん！」

十代姉妹が着いた時、四人は分担を決めたばかり。まだ始まっていないことがわかり、姉妹はゆっくり干潟入りする。

「初姉、小梅嬢、ご来場！」

「久しぶりですね。今日は大丈夫なんですか？」

「見ての通りよ」

「でも、髪の毛が．．．」

「いいでしょ。特にこの辺のウェーブがポイント。干潟に来る波を表現してみたんよ」

「この間の台風でクルクルになっちゃったのかと思った」

「まあこの娘ったら」

初音を小突く舞恵。この二人、十月に一度顔を合わせたきり。三週間ぶりの再会なのだが、実に息が合っている。

河原の桜は、十一月に入ってもなお緑を保っている。ここのところ、すっかり見落とし  
ていたが、画家と歩いているとさすがいろいろなものに目が行くようになる。

「七ヶ月前は満開を過ぎたくらいだったかな」

「千さんと姉さんは今が満開？」

「いやいや、咲き始めじゃない？」

「そうなんだ．．． ま、三十路の恋は遅咲きってことね」

「蒼葉嬢は？ まゝ聞くまでもないだろうけど．．．」

「私のこと聞いてどうするの？ 櫻さんに怒られちゃうわよ」

実はフランスにいて、最近は何音不通なんて話をしたところで、どうにかなるものでも  
ない。今は姉の恋を応援するのみ、である。

櫻の眼鏡レス事件はまだ尾を引いていて、肝心のクリーンアップがなかなか始まらない。  
千歳と蒼葉が現れても、

こ「ね、言った通りでしょ？」

は「蒼葉さんのお姉さんだから、ひょっとすると、とは思ってたけど、溜息出ちゃう．．．」

さ「初姉まで、ヤダなあ。干潟とか川をよーく見ようと思って、そうしたの」

ま「うそうそ、彼氏をバキューンてやるためよ。ホラ噂をすれば．．．」

「あ、櫻姉！ な、何で？」

櫻がそそくさと出て行ってしまったので、何か怪しい？と思っていた蒼葉だったが、こ  
の展開にはさすがに驚かない訳にはいかない。

ち「遅くなりましたあ、あ、櫻さん。ついにコンタクトデビューですか」

ま「何か張り合いないなあ」

さ「いいのよ。素顔の櫻さん、慣れっこなんだから」

視線で照準を合わせれば、それでイチコロ．．． な訳ないか。

南実はずっと複雑な顔をしていたが、千歳が近づいて来るとすまし顔に。目を合わせる  
ようなそうでないような。待たされた分、余計に歯痒い。「あっ、隅．．．」と言いか  
けて、「すみません」になってしまうのだった。

十時十五分、ようやくリーダーが点呼をとり始める。

「えっと、今日はこれで全員、でしょうか？」

ち「Mr. Go Hey は、バーコードスキャナの研究で手が放せない、とのことですよ」

あ「弥生嬢はその業平さんから楽曲データだかをもらって、おこもり中」

こ「六月クンは、大宮で鉄道三昧中、だと思いまーす」

文花は連休を使って行楽ドライブ。冬木からは higata@ に律儀に連絡があった。

「では、八人ですね。今回はリセット 2 回目、よろしくお願いします」

「ねえねえ櫻さん、今日はマイクパフォーマンスやんないの？」

「この前はオープンイベントだったから、ちょっと司会やっただけで、そんな．．．」

「なあんだ、楽しみにしてたのになあ」

higata@でもすっかり評判になっていたのだから、舞恵はその再現を大いに期待していたのだ

ったが。先月ここに来られなかったことを改めて悔いてみる。

「それにしても、やられたあって感じだね」 千歳は抜かりなく撮影を開始する。

「先週の台風の仕業かしら？」 櫻は視野の全てを使い、現場を目に焼き付ける。

その台風通過中の日、センターには小梅も遊びに来てくれていた。幸い、嵐女さんが来る前だったので、まだ雨風が弱い時分のこと。濡れずに済んだ「千住桜木ブルーマップ」には、代表的なゴミがしっかり描き足してあった。櫻がブルーになっているのを見て発奮したか？ いや、そればかりではない。小梅は現実を直視していたからこそ、描けたのである。ゴミをネガティブに捉えることなく、そこから何かを見出そうとする気概... それは手がかりやツールとしてのマップではなく、地域に勇気を与える表現媒体そのものになっていた。小梅からもらった鋭気をそのままに、今、目の前に散らばるゴミと対峙する櫻と千歳。何も言わなくても、気持ちは一つである。

もう一人の表現者、蒼葉は邪魔にならないようにと、干潟を見下ろす位置に三脚と折り畳み式ベンチをセットする。このまま、画業に勤しむもよし、見張り役を務めるもよし。だが、蒼葉は迷う。果たして片付ける前を描くべきか、それとも後か。どちらも現実であり、メッセージを有する点で変わらない。「いや、題材はあくまで『自然本来の姿』。とにかくもう一度リセットしよう」 蒼葉は未完成の油絵を取り出しかけて、また戻す。クリーンアップ参加者は多い方がいい。

慣例に従い、エリアごとに班分けなどをしても良かったのだが、手慣れたメンバーが集まったからにはその必要はなし。それぞれに役割を考えながら、今は品目別分担で動いている。最初から手分けすれば、再分類する手間が省けるといもの。回を重ねるごとに進化しているのが窺える。

ルフロン嬢は、缶やらプラボトルやらを専門に集めている。今日は特に少数派になっている男性二人は、大型シートやポリタンクや作業服など、大きめ系を担当。これまで干潟中央に打ち寄せてきたゴミが逆流するのを止めてきた、通称「防流堤」は今や完全に埋没し、その役目に終止符が打たれた。その堤があったらしい場所にはヨシの束が覆いかぶさっている。南実はそこでいつもの作業を励行。束を除けると出るわ出るわ。個別包装関係、吸殻、硬質プラスチック破片、そして粒々。喜々としてスコップで拾っていた研究員だが、思わず息を呑む。「ありゃりゃ、発泡スチレン粒だぁ」

前回拾い損なった発泡スチロール破片がさらに微細化して散々な状態になっているのである。ヨシが絡め取っているからまだいいと言えなくもないが、それにしても...。とにかく袋に放り込んで、バケツ水を使った選別は後回し、である。南実のこうした一連の所作を何気なく見ていた千歳だが、何かを払拭したい一心が彼女を動かしているんじゃないか、そんな意を強くしている。

千住&石島姉妹は、その他もろもろを一気に掻き集めている。大小硬軟様々の袋類、破片類、容器類。あと目立つのはフタ&キャップ。飛ばされやすい、浮きやすい、そういう性質のゴミが漂着し易いことを現場は語りかけてくる。

「あれ、何スカねえ？」

「何かのシートのようにも見えるけど」

回収作業は、干潟面から斜面に移っていく。男衆の視線は今は水平である。と、横倒しになったヨシ、その隣に本日最大級の大物が打ち上がっているのを見つける。

「ゴムボート？ な、なんでまた？」

「ま、とりあえず証拠写真スね」

「正に漂着ってか」

女性陣が見守る中、千歳と八広はそのクタクタのボートを陸上へ引き揚げることに成功。除けたらいい塩梅で道が拓けた。いつもの通路とは別に一本。それは湾奥の近傍に当たるため、仮に干潟の中央でゴミを集積した場合、この新ルートを使えば搬出し易くなる。台風増水でヨシが弱っていたところに、漂着ボートが被さり、草分け道のようになったという顛末。

十時半を過ぎた。ここまで快調なペースで来ていた八人だったが、さすがに遅々としてきた。全体的に弱った感じのヨシ群は、その密集度を下げていて、「拾ってくれ」と言わんばかり。前回隠れていたと思われる飲料容器や細々した袋片が露見している。こういう時は、ひと呼吸おいて態勢を整え直すに限る。すると、そんな状況を見計らったかのように、意外な男女が近づいてきた。

「皆さんどうも」

「おっ、二人ともやってるな。大丈夫か」

新ルートを伝って下りてきたのは、何と石島夫妻である。

「珍しいわねえ、二人して。そっちこそ大丈夫かあ」

長女は早速からんでいるが、次女は弁えたもんで、

「母の京みやこです。蒼葉さん、初めてですよね？」

と顔つなぎ。この立ち居振る舞い、櫻に近いものを感じる。見よう見まねもあるが、おそらくこれが小梅の素性なんだろう。

それにしても何の躊躇もなく、拓けた道から現われた、というのが引っかかる。夫妻が通った後を注意深く見てみると、マーキングした杭が。これが何らかの標しるべだとすると、この通路も実は人為的に整備されたものか．．． じゃいったい何をしようって？ ちょっとした推理を働かせてみる千歳である。

石島のトーチャンは、一人いそいそと下流側へ歩き出す。過日、父とひと悶着やった次女はここぞとばかりについて行く。今日は決戦である。

「な、小梅、波を防ぐの造らないとこうなっちゃう訳さ」

思い起こすのは、夏休みの自由研究のあの日。六月がヨシを引っ張って崩してしまった崖部分である。一旦は増水時に運ばれてきた土砂やらで修復したように見えたのだが、ヨシともども軟弱になっていたためか、えぐりとられるような地形になっている。

「でも、それじゃ波と一緒にゴミもブロックしちゃうじゃん」

「ゴミは所詮ゴミさ。水に流すって言うだろ。昔は川に捨てるのなんて当たり前だったんだし」

「ダメなの！ ゴミにも心。拾ってあげなきゃかわいそう。海に流れてっちゃったら、



大変なんだし」

南実先生の話が頭に入っている分、言うことが違う。父、いや河川事務所課長は、職務上、ムキになってくる。

「ヨシとかカニとかのためにも、ゴミは来ない方がいいんだろ？ それにお前達だって、捨てる手間が省けるってもんだ」

崖崩れはあっても、カニの巣穴は健在。だが、その穴には容器片が吸い込まれている。これ見よがしで勢いづく課長。

「この目で見たんだもん。あんな変なの置いたら干潟がなくなっちゃうよ。ヤダヤダ！」

そっちが課長なら、こっちは河川利用者である。小梅も負けちゃいけない。畳み掛けるように「これ見てみ？」。

ポシットから取り出したのは、西新井橋下流右岸、丸太堰やら瓦礫ネットやらと、それらの効なく打ち寄せられた漂着ゴミの数々。ブルーマップを見せに行った際、千歳から預かった証拠写真である。

「あ．．．」

長女に罵られるのは日常茶飯だが、可愛い次女にもこの通りやり込められたら父権も何もあったものではない。掃部先生がその場に居ない分、まだ助かっている。

同じ頃、当の先生は別の現場にいた。ただし、単独巡回中ではなく、かつてのお仲間と一緒に。

「なあ、金森氏」

「．．．」

「返事ぐらいしろよ」

「ああ、何だ」

濃いめのサングラス、髭はボウボウ。人相がハッキリしない上に寡黙なこの男。名は金森旭（かなもり・あきら）、生まれは下町某所。清とは同業だったが、リストラだか何だか、とにかく辛酸を舐めることになり、野宿生活を余儀なくされた時期もあったそう。だが、不法投棄ゴミを元手に、家内製静脈産業を打ち立てるに至り、今では零細ながらも一工場の主となった。ゴミともども自分自身も再生させてしまった武勇伝的な人物である。「この世にゴミはない」とまでは言い切っていないと思うが、廃品を循環させるのが得意技。今日は清に連れられて、西新井橋の下にブツの物色に来たという訳。（千歳のモノログ「千住桜木編」をチェックして来たというから、先生も侮れない。）

「どうだ、何とかならねえか？」

「こうも泥がぶってちゃあな。洗濯機なんかはバラせばいいから汚れててもどうってことねえけど、オレっちの領分じゃねえから．．．」

「他の電気製品もだが、よっぽどうまくやらねえ限り、骨折り損だもんな」

「中国じゃパソコンやらゲーム機やらの基板をよ、硫酸で溶かして金属取り出してるっていうじゃねえか。危なっかしくて聞いてらんねえよ」

「それにゃ日本製も含まれてるって聞かぜ」

「ま、前みてえに筐体だかボロ布だか、単純で扱いやすいのがいいな。ここに散らばっ



てるのは今日のところは願ひ下げ。昔はそんなことも言っただけでな。ワハハ」  
本業の話となると饒舌になる旭であった。

「それにしても、家主はどこ行っちゃったんだろな」

四人が当地を訪れてから二週間が経っているが、どうやらテントに変化はない。推察の通り、廃屋になってしまっているようだ。

先生はいなくても、代弁者はちゃんという。小梅に代わって、課長を囲むは、アラサーのお三方である。巡視船ツアー中に質問してきたのと同じ顔ぶれ。石島湊、崖崩れよりもまず己れを案ずるのが先だったか。

「いえ、皆さんその．．． まずは下調べ、ということでこの間、踏み込んだまでです」

「いいも悪いも、話を聞かないことには何とも。説明会のようなものはあるんでしょうか？」 千歳もちょっとカリカリ来ている。

「それもそうなんだけど、引き波禁止にすれば済む話じゃないんですか？」 と南実はツアー中の質問の延長で提案する。

「それがその、自然再生する場合、何らかの緩衝物を設ける必要が出てしまうもので、それだけじゃ」

「そもそもここがどうして対象なのか、対象になろうとしているのか、過程が不透明な気がしますねえ」

「勝手に対象にして、余計な工事されちゃ、川が気の毒ですよ」

河川事務所の所管に当たるのかも知れないが、課長も知っての通り、ここは皆の干潟である。千歳と南実の相次ぐ攻勢に、表情が虚ろになってきた湊である。

「こうしましょうよ。河川事務所のお考えを聞く会をとにかく設ける。場所は中立性を考えて、当センターで。推進派とそうでない派に分かれる可能性はありますが、あえて両方の立場を強調してぶつけることで、一致点を見出す、そんなやり方．．． どうです？」

櫻がコーディネーターらしい仕切りで、ピンチの課長にひと息ついてもらう。

「そうだねえ。でも対立構図を作っちゃうと、両者譲らず、最後はお流れ～ってリスクも出てくるよ」

「その辺りはコーディネーター次第じゃないですか？ 千歳さん．．．」

「え、僕が？」

「発起人なりのお考えで、まとめちゃえばいいんですよ、ね？」

櫻と話していたら、流れでそういうことになってしまった。だが、コーディネートは未知数ながら、プロセスマネジメント手法で、ということなら策はある。議論もプロセスありき、しっかり流れを整えさえすれば。論点をハッキリさせながらも、対立を煽らず、合意点を探る、そんな組み立ては十分可能な筈だ。

あとは、公務員どうして具体的に段取りを決めてもらえばいい。手間がかかりそうな書状関係も心配は要らないだろう。確実な線を狙うなら、文花と辰巳のラインで河川事務所に登壇依頼を出せばOK。

「でも、文花さん、いそがしいだろうしな」

役員選考が一段落した辺りに設けるか。だが、後手に回ると工事が既定路線に乗ってし

まう虞<sup>おそれ</sup>もある。課長職にどれほどの権限があるのかは不明だが、ここは何とか凍結の旨、確約がほしい。が、湊はすでにその場を離れ、消えつつある水際の襞模様を観察している。ちょっと淋しげではあるが、家族がそろってる手前、気丈に振る舞わないといけない。トーチャンはツライ。

そんな父には目もくれず、姉妹はさっきからしりとりをしていた。再生工事 潤滑油 指サック 靴下 と続いている。

「た、タバコの吸殻」

「何で、らにするのよ。こで止めなさいよお」

「ら、あるじゃん、ホレそこ」

「ははあ、ラーメン、の袋」

「せっかく、んで引っかけようと思ったのに。ろ？ 労働者、じゃダメか」

しりとりにかけては、千住姉妹も名人だが、石島姉妹もいい線行ってる。梱包用のストラップバンドは落ちているが、今日はロープが見当たらなかった。小梅がつなぐのに窮するのも仕方ない。

さて、他の労働者各位は、と言うと、石島夫人と蒼葉は、拾い終えた品々をより細かく分類している最中。舞恵と八広は、しりとりの合間を縫って、さっきの続き。ヨシが発するSOS要請に係るゴミを可能な限り引っ張り出している。前回トタキャンの無念を晴らすような気合いの入れよう。舞恵は無意識のうちに無表情になっていた。

「ルフロン、顔が怖いよお」

「女神さまに向かって、そりゃないでしょ！」

「うへえ、益々コワイ」

女神さんは、ニリットル級のプラボトルを手にするると、隣人の<sup>でん</sup>臀部に一発。

「あら、いい音」

きつとご加護があることだろう。

十一月四日、十一時四分。余裕の進行と思っていたが、お騒がせトーチャンの一件もあり、そうでもなかった。11.4 11:04 . . . 「いいよ、いいよ」と誰かが云ったような、そんな気がした。

### 原色または素顔

「ヨシは減り、ゴミの露出は増え . . . 拾えども拾えども我らが干潟は何とやら、じっと . . .」 遠くを見つめる櫻であった。

今日は近くも遠くもなく、全方位がよく見えるので、脱力感も大きい。気が緩むのは当然の<sup>ことわり</sup>理。

大型ペットボトルが川の中央を漂流しているのがわかる。そして、それを避けようとした水上スキーヤーがジャンプに失敗したのもしかと見届けた。その瞬間である。風圧でも来たのか、デビュー初日のコンタクトレンズ(本日の「いいもの」)が片方落ちてしまった。

「へ？ な、なんで？」

櫻の異変に周囲は気付くも、こういう事態だと下手に動けなかつたりする。

「櫻さん、動かないで。そのまま」

片目では探しにくい。本人もできれば動かない方が無難である。たまたま近くにいた南実は、的確なアドバイスを送りつつ、レンズの搜索態勢に入る。

幸い大方の片付けが済んでいた上、水位の上昇も緩やか。大騒ぎするには及ばないのだが、水際で落としてしまったのがいけなかった。波が襲って来たら、と思うと気が気ではない櫻である。露出面積が広いのはいいが、普段は水没している辺りは軟弱で、足が沈む感じ。慎重に足を運びながら、研究員は目を利かす。

その場でおとなしくしていないといけないのが、いたたまれない。見つかるまで五分足らずだったのだが、随分と長く感じられた。

「はい、見つかりましたよ」

「助かりましたぁ」

この時、ギャラリーは千歳、八広、舞恵、石島姉妹の五人。動作はストップモーション気味。暫時、黙視していたが、今はパチパチと手を叩いている。絵になるワンシーンである。

「レンズって飛ぶんですね。よくぞ見つけてくださいました」

「仕事柄、探し当てるの得意なんですよ。凸レンズ状のペレットもありますし」  
遅ればせながら、そろそろと彼氏が近寄ってきた。

「大丈夫、ですか？」

「あ、そうだ。バケツ貸して」

「それが忘れて来ちゃったみたいで」

「うう」

ここで再び南実が名乗りを上げる。

「今日まだ使ってないから。私の使って」

今回は自前のバケツ持参だった。いやバケツではなくステンレス製のペールと呼ぶのが正しい。レンズを<sup>すす</sup>漱ぐには丁度良さそう。櫻は一人洗い場へ急ぐ。

「ホレ、そこの彼氏、これがないとダメっしょ」

親切的なルフロンさんは、手のひら大の鏡を取り出すと、千歳に手渡した。

「さすが女神さん。ありがとう！」

舞恵は笑顔、南実はちょっと無愛想になる。

櫻と千歳が中座している間は、蒼葉が進行役代理を務める。分類が済んだゴミのカウンタに着手する旨、号令がかかる。櫻はいつものカウンタを持って来ていたが、ルフロンが居れば何のその。得意の目計算でバシバシ数え上げていく。

手持ち無沙汰の南実は、二人が気になることもあったが、一旦洗い場に向かうことにした。途中、目をキラキラさせた櫻、一步遅れて千歳とすれ違う。

「あ、水汲んどきましたよ」

「ども」

文花が云うところの三角形の三人。外野の一隅で無言の時間が流れ出す。ペールに満たされた水が鏡のように静止している。三人は一樣に唇をかんだままである。数十秒程度だったが、彼等には分単位の重み。南実は口を開きかけたが、会釈して先に現場に戻って行った。

十一時半近く、目計算の結果がまとまる。ワースト1(5)：発泡スチロール破片/七十一、ワースト2(3)：プラスチックの袋・破片/五十七、ワースト3(1)：ペットボトル/五十三、ワースト4(2)：フタ・キャップ/三十七、ワースト5(4)：食品の包装・容器類/二十九(\*カッコ内は、十月の回、当干潟での順位)。次点は、タバコの吸殻等と小型袋が各二十八。雑貨も各種そろっているが、弁当やカップめんの容器、その他のプラスチック系容器類がとにかく目に付く。目的別で分類するなら、「容器&包装」がトップに立つのは間違いないだろう。気になるレジンペレットなどの粒々関係は、南実研究員が別働で調査しているが、「ダメだ。発泡スチレンにしてやられた」

集めた破片をペールに浮かべると、その水面は、すぐに白い球粒で覆われてしまう。いつも以上の収量があったので、サンプリングで済ませようとしたが、これじゃ<sup>ラチ</sup>埒が明かない。「二十対一くらいかな？」南実もパチパチと目で数えようとするも、この通りアバウト状態。精彩を欠いているのはやはりあの人のせいだろうか。

石島夫妻は目の前で繰り広げられている集計作業を黙って見ている。いや、感じるころは<sup>あまた</sup>数多あるものの、それを声に出していないだけ、という風である。

「衣料品とか履物とか、相変わらず多いのねえ... サングルとかまだ履けそう」とか、

「布団は察しがつくが、ゴムボートってのは見当つかんな。この調子で大物が大量に出てくるとなると、うちの負担もバカにならんぞ」とか。

感想と言うよりは単なる見立てと**いったところ**か。

両親とは対照的に娘二人はよく動いている。再資源化可能と思しき品々をまとめると、率先して洗いに行ってしまった。蒼葉はケータイ画面で計数入力中。その傍らで、千歳は例の如くスクープ系を撮り始める。レジ袋に入った雑多ゴミはこれまで何度となく見てきたが、このパターンは初お目見え。クイックメニュー業態店のテイクアウト容器の詰め合わせ袋である。それとセットという訳ではないだろうけど、ウエットティッシュの箱本体、水筒、歯間ブラシと続く。ストーリーとしては、手を拭いて、弁当をたいらげ、水筒に入ったお茶か何かを飲み、最後は歯のブラッシング。そこで使ったものは全てポイ、でこうなったとか。しりとりも頭を使うが、遺留品から物語を組み立てるのも悪くない。

「千歳さん、どしたの？ 思い出し笑い？」

「へ？ いやいや、ゴミにもドラマがあるんだなあって」

「このDVDのこと？」

櫻が指差した先には、何かいかがわしそうなタイトルのAV系ディスクが転がっている。

「八八、これもスクープ系？」

「やぁね、そんなの記録しなくていいわよ」

ディスクには真昼に近づく日射が当たって煌いている。

ま「それにしても、今日もよく晴れたこと。またしてもハレ女さんの完勝ね」

さ「皆の心がけがいいからよ。お天道様が味方してくれてるだけ」

あ「ところで初音さん、気温は？」

ケータイは忘れても、デジタル温度計は常時携帯している。さすがはお天気姉さん。

「二十 度ね。でも体感温度はもっと行ってるかも」

十一月でこの気温。数字を聞いたら余計に暑くなってくるから不思議だ。R25のカップル二組は、せっせと可燃・不燃の別で袋に入れ始める。[プラ]の識別表示付きの品々と、舞恵が集めたボトル&缶関係は、その二十 度の熱で微かに蒸気を立ち上らせている。

「よーし、リセット、いや再リセット完了！ 皆さん、おつかれ様でした」

一同礼、そして軽く拍手。石島夫妻も気が付くと手を合わせていた。南実も少し離れたところから頭を下げている。

広々とした干潟はいつ見ても気持ちのいいものである。動機はどうあれ、新たに拓かれたルートからの眺めはなかなかの絶景。一羽のダイサギが優雅に現われ、情景を盛り立てる。だが、着地はせず、そのまま上流方向へ飛び去って行ってしまった。

八「こりゃ縁起のいいことで」

ち「どうせなら寄り道してけばいいのにねえ」

ま「人が十人もいたら、ムリっしょ」

あ「馴れてもらえばいいのよ。また戻って来るまで私、残るから」

正午を過ぎた。石島ファミリーが動き出す。

「今日は皆さんおそろいで、どうもありがとうございました。お父様にはまた別途ご連絡を・・・」

「八八、そうでした」

「この後はどちらへ？」

千歳の問いに、<sup>みやこ</sup>京が答える。

「皆さんおなじみのショッピングセンターへ」

湊と初音は以前よりはいがみあうこともなくなった。今日は家族そろってのお出かけデー。初姉の受験応援食事会なんだとか。

「それでご両親もここへ」

「現地集合でもよかったんですけどね。主人が寄ってこうって」

「本当？ ママが引っ張ってきたんじゃないのぉ、心配だわあって」

「ステキなお姉さんとお兄さんと一緒なんだから、別に心配なんかしないわよ」

そんな素適な一人、見目麗しい画家さんが、おもむろに画布を出してきた。三脚に取り付けると、描きかけ<sup>作</sup>ながら印象派チックな川景色が広がる。小梅は真っ先に駆け寄っていく。その後を家族三人も追う。

「まぁ、絵描きさんだったなんて」

油絵がセレブ感覚にマッチするのか、京は色めき立っている。

「ここの本来の姿ってどんななんだろうって、描きながら考えてるんです。少なくともゴミとか余分な人工物がない状態でしょうから、今のうちと思って」

蒼葉としては他意なく、正直に話をしたまでだが、湊にはグサと来るものがあった。

「本来の姿．．．か」

小梅と京はそのまま覗き込んでいる。湊は我に返ったように、傍にいた千歳にステッカーを渡す。

「これだけあればしばらく足りますかね」

「あ、ありがとうございます。でもこれは姉妹のご担当じゃ？」

「小梅はまたお世話になるでしょうけど、初音はしばらくお休みって、あ、まだ聞いてませんでしたか？」

「はあ．．．」

その初音は舞恵につかまっている。

「何？ 初音嬢、日曜休業？」

「ええ、今日の食事会は景気付けです。以後、日曜日は勉強に専念します。お店は土曜日のパンケーキタイムだけ。受験が終わるまで、ここにもしばらく来れないかも」

「そっかあ、じゃ土曜日に顔出すようにするワ」

「ルフロンさん、ちっとも来てくれないんだもん」

「すまんすまん、十月は干物みたいになっててさ。こないだの台風の日にセンターに行ってやっと復活した感じよ。ま、お詫びつつうのも何だけど、わからないことあったら教えたいし。英語とか」

「じゃあ、午後五時前後に。売れ残ったパンケーキでおもてなししますんで」

「売れ残りい？」

課長の粋な計らいで、大物ゴミは陸揚げした地点に置いておけばOKということになった。下手に貸しを作られるのは御免だが、少なからず改心する部分もあったようで、イイ顔で手を振っている。表情は嘘をつかない。これは初音が言っていたことでもある。

可燃と不燃が計四袋、再資源化関係は二袋。これを六人で運び出せば今回は終了。だが、文化の日の翌日と来れば、「芸術の秋」を堪能しない手はない。昼食は二の次である。

蒼葉はピクニックランチのことも忘れて、ひたすら原色を追究している。

「川はグレーが基調？ でも空の青を映して、大きく呼吸してる感じ。それって何色？」

元々の姿を描くなら、限りなく透明感のある色になるだろう。絵筆は画家の思惟を乗せ、理想と現実の間を彷徨<sup>さまよ</sup>っている。

自称アーティストの舞恵嬢は、前回から置き去りにになっていた変形流木を発見する。

「こういうことなら、工作キット持って来りゃよかった」

その流木の枝に、缶やペットボトルを括りつければ、ちょっとした打楽器になると踏んでいるのである。仮にこれら飲料容器をリサイクルする場合、材質はそのままだが、形状の変化を伴うため、何らかのエネルギーが発生する。缶にしるペットボトルにしる、その原形をとどめたまま使ってもらえるなら、それは即ち、リユース（再使用）。エネルギー使用が抑えられることから、リサイクル（再利用）よりも環境配慮に適うとされる。舞恵は特段そうした意識を持っている訳ではないが、「リユースアーティスト」になれる素地

はある。

「今日のところは良品を頂戴して、と。流木も持って帰る」

かくして、いつもならリサイクル扱いの飲料容器は、余生を授かることとなり、純粋なリサイクル系は、隣市へ持って行く容器包装プラ関係のみとなった。

文芸の秋、という人達もいる。櫻と八広は干潟端会議で、歌詞について話し合っている。

「その千歳さん作の二曲目ってのがね、メロディーラインは何とか弾けても、何を歌にすればいいのかが思いつかなくて．．．」

「詞がつけば、情景が浮かんで来て、もっとイイ感じで弾けるんじゃないスカ？」

「そうなの、だから詞が先でもいいんじゃないかって、言ってるんだけど」

「櫻さんが鍵盤で入れたテイクができると、本多さんのところで加工されて、カラオケ仕様になるんですね。それを聴いてから考えましょっか」

「今、ここで聴いてもらえたら話早いのにね」

チャラチャラが減ったルフロンだが、所持品は多彩である。今は耳がスッポリ収まるヘッドホンをして、首からはメモリオーディオをぶら下げている。モンキチョウとモンシロチョウの演舞に合わせて、軽やかにステップを踏む。舞恵さんだけに、舞いもお得意のようだ。

「おーい！ ルフローン！」

八広が手招きすると、彼女はバツタを散らしながらもミディアムスローな調子でやって来る。

「それって、メモリ差し替え式だよな」

「そっだよ。今日はボサノヴァセレクションさ」

「てことは、楽曲データをこれに入れればすぐに聴けるってこと？」

「ファイル形式が合ってればネ」

二曲目、そのダンサブルなナンバーも、遅かれ早かれ二人の耳に入ることになりそうだ。

芸術モードではない二人が残っている。こっちは至ってシリアスである。南実は試料をジッパー袋に詰め終わり、研究用具の片付けをしていたが、いいタイミングで千歳がステッカーを貼り終えてウロチョロ出したので、すかさず呼び止める。

「隅田さん、ちょっと」

「あ、ハイ」

四人は陸地にいるので、干潟に下りると目が届きにくくなる。引き揚げたゴムボートの横を通って、二人は今、湾奥に居る。

「兄のこと、文花さんから、ですよな」

「ええ、お悔やみ、いや、何と申し上げたらいいのやら、ですが」

「消息がわからないのが逆に救いではあるんですが、事故は事故ですから。ただ、これもお聞きになったかも知れませんが、隅田さん見ると、何だか兄が戻って来たいな、そんな気がして．．．」

言葉が途切れてくる南実。快活なアスリートという一面は全く見られない。その<sup>たお</sup>媚やかで愁いを含んだ眉目に、千歳は息を呑み、そして溜息。



「自分でもよくわかんないんです。きっと隅田さんのことが好き、でも何でそう思うのか．．． 兄への慕情が転じて、だとは思うんですけどね」

「小松さん．．．」

「ごめんなさい。隅田さんには櫻さんがいるから、こういう話はするまいって思ってたんです。でも、ダメでした。打席に立ってもらったり、歌声聴いてたら、益々重なってきちゃって」

「あれ、そういや千歳さんどこ行っちゃったんだろ？」

「こまっつあんもないよ」

「何かイヤな予感．．．」

「この辺にいないとなると、干潟スかね」

南実は泣き出したいのをこらえて、話を続ける。

「川に一と書いて、せんいちと言います。だから『せんちゃん』なんて聞くと、泣けてきて」

当の千ちゃんはひと呼吸おいてから、**輪**をかけるように泣けることを云う。

「その川一さんの代わりはできないけど、何か力になれるんなら」

「あ、いえ、別に今まで通りで。ここでお会いした時に、ちょっとだけ甘えたいかな、ってのはありますけど。片想いっていうのも変だけど、何となく慕わせて、ください」  
そう言い残すと、さっさと斜面を駆け上がって行ってしまった。

「あ、小松さん、千歳さんは？」

「ああ、潮の上がり具合を眺めてて。まだいますよ。私はこれで。ルフロンさんも、またね」

去り方がちと怪しかったが、普段通りのハキハキした感じだったので、詮索するも何もない。櫻はむしろ御礼を言わないといけないくらい。「あーあ、何かスッキリしないし」南実も同じようなことを思う。「櫻さんには誤解がないようにしておきたいなあ。何かまだつかかえてる感じ．．．」

独り南実が帰り、次は二人、ルフロンと八クンが帰途に。

「じゃあお二人さん、今度は二十四日ね」

センターとしては、法人会計を固めていく必要上、専門家として舞恵に来ていただくことになっている。八広は彼女の付き人のようなところがあるが、NGO/NPOの事情通である以上、それはそれで心強い。二人とも無償で構わないと云うが、舞恵は櫻のカウンセリングが受けられるのが特典。八広は千歳と情報交換するのに好都合。無償に足る理由がある訳だ。

「奥宮さん、今度は雨とか連れてこないでね」

「さあね、そればかりは。天気の話は初姉に聞かないと．．． あ、そうだ！」

初音は受験勉強に専念するため、干潟にはしばらく来られないとの件、舞恵が申し伝える。

「で、皆さんによろしく、と」

「てことは、クリーンアップ後のカフェめしランチもしばらくお預け？」

「初姉がいなくても別にいいじゃない」

「だって、ニコニコパンケーキもお休みなんでしょ」

「ウン」

悩める女性二人にとって、これがお導きとなればご喝采である。八広が提案する。

「今からルフロンとお店探してきますよ。ちょうど自転車だから、あちこちと」

職場の近所はよくご存じなのだが、「平日はランチやってても、日曜となるとね」と舞恵も同調。そして、付け加える。「あ、そうそう、さっき言った楽曲ファイル、お早めにね。待ってるから」

今、干潟を見下ろす場所には、腰掛ける女流画家と、その脇に立つ男女が居る。蒼葉はいつの間にか一人ランチを済ませていて、ひたすら画業に集中。だが、段々と気が散ってきた。

「あのさ、見ててもいいんだけどさ、お昼がどうこうとかここで相談すんの、止めてくれない？」

「あ、ごめんごめん。少しはサンドイッチとか残ってるかと思ったら、全部食べちゃってんだもん」

「早く二人仲良く行ってらっしゃいよ．．．と思ったけど、そうだそうだ」

素顔の姉を見て、いいことを思いつく妹。

「千さま、カメラ貸して」

「あ、はいはい」

二人をリセット後干潟に並ばせて構える。

「今日は櫻姉の素顔復活記念日。はい、撮るわよー。あぁ、咲き始めのお二人さん、ホラもっとくっついて！」

「何？ 咲き始めって？」

「さぁ」

一枚目は顔を見合わせるような感じになってしまったので、その後、何枚か追加で撮影。続いては、

「じゃ、姉妹の写真も」

川も風も空も、そして姉妹の瞳も、皆キラキラ光って見える。千歳はその光にクラクラしながらも何とかシャッターを押す。

「サギに会ったら、よろしくね」

「D'accord, Bonne journée!」

「A ce soir...」

この姉妹、フランス語で会話したりすると、より美しく見える。

「千歳さん？ Comment ça va?」

「え？ Oui, merci...」

「あぁ、そういう時は、Ça va bien, merci.かな」

「サバですか」

「そう、サバイバル会話です。どう？ってのを聞く時は、Ça va?でOK！」

ゴミ袋四つを所定の場所に置きつつ、フランス語ワンポイントレッスンに興じている。やってる作業はお世辞にも洗練されたものとは言い難いが、会話の方はエレガントである。

この後はいつもならカフェめし店、ただし今日に限っては千歳宅である。前カゴに容器包装プラの専用袋を載せ、櫻は自転車を押して歩く。至って身軽なのだが、とにかくノロノロ。横を徒歩<sup>かちある</sup>く千歳よりも遅いくらいだから相当なものである。

「ねえ、千歳さん、小松さんのことだけど」

櫻は思い切って尋ねてみることにした。千歳は前のめりになって足を止める。

「弥生ちゃんからちょっと聞いたんだ。彼女、お兄さんがいるんですって？」

干潟での一件を訊かれると思い、ヒヤリとしたが、この質問も十分冷や汗ものである。

「僕も文花さんから聞きました。で、さっき本人からも」

「なーんかありそうね。推理してもいいんだけど、差し支えなければ教えてくださいませんか？」

櫻は南実、その兄、そして千歳の三者の間に何かある、というところまでは察しはついていたが、**問い詰めた**ところで、千歳が喜ぶでもないだろうし、むしろ気を悪くすると承知していたので、質問形式に転じることにした。そして、それが幸いした。

「え、そんなことって．．．」

「当人はシリアスでもないって言ってたけど、どうしてどうして、なんですよ」

「彼女、ズバツと来る時と、慎ましい時とあって、陰陽って言うのかな、そういうところ感じてただけど、そのせいだったの、かしら」

「何て云うか、本当は切ないのに、それを隠すように振る舞ってる、そんな風に思うと、こっちもちょっとね。今まで通り、顔を合わせて、話をして、それでいい、って、そんな言い方してたけど．．．」

「私、ちょっとヤキモキしてたんだ。恋愛感情じゃないなとは思ってたけど、千歳さんとられちゃうんじゃないかって、一時はマジで気がかりでした。だから今日もビシって、ね。でも、そういうことならなあ。ちと度が過ぎちゃった。あーあ」

櫻は親展封書のことにはもう聞かなかった。その代わり、

「てことはあ、小松さんと千歳さんと、顔似てるってことじゃん」

「そ、そうなの、かな？」

推理という程でもないかも知れないが、これは当の二人ですら思いも寄らなかったことである。さすが、と言うしかないが、櫻は何食わぬ顔。

「モテ系だもんね、いいんじゃない？」

急に自分の顔が気になる千歳なのであった。

駅前のベーカリーで、午後一の焼き立てから少々時間が経った惣菜パンなんかを買い込んで、彼の宅へ。珈琲片手にゆっくり、と行きたいところだが、ソングライターさんはハイペースである。

「じゃ櫻さん、今日は例の二曲目。あとで一丁お願いしますね」

「あの曲やっぱり難しいんですけど．．．」

「業平氏とやりとりして、何パターンか用意してみましたので。Ça va?」

「う、Oui, monsieur.」(苦笑)

これが二人にとっての芸術の、音楽の秋。夕方には櫻 version が業平のもとに届くことになる。めでたしめでたし?

「いいんだ、来週はちゃんと甘えさせてもらうから」

「そうそう櫻さん、この廃プラ、そっちで出してもらえるとありがたいんだけど。これでも減量努力したつもり」

「まあ、彼女よりも先に甘えちゃってえ。そんなにちゃんと出したいなら、時にはウチに来なさいよ」

素顔の櫻は、どこまでも強気である。次に二人が会うのは十日の土曜日。どうなりますやら...

十一月の巻 おまけ

11.11

矢ノ倉事務局長の采配で、法人役員の選考プロセスは着々と進んでいて、十月第四週には公募開始、その二週間後が締切、第二土曜日は掃部<sup>かもん</sup>先生の定期顔合せ日になったので、十日に一次選考と相成った。論文審査には、先生を筆頭に、文花、千歳、もう一人のレポート合格者の四人。残念ながら合格とならなかった、これまでの役員(世話人)の何人かは、合格者のレポートや、先生書き下ろしの模範論文などを見て気が引けたか、公募に応じることはなかった。地域振興の系譜で世話好きの方々に集まってもらっていた世話人会だったが、これで事実上の解散となる。年内いっぱいはまだお世話になるが、十二月からは法人シフトも並行する。意思決定等、徐々に理事会に移行していこう、という目算である。

十七日は、業平が来る。その際、役員就任に必要な書類等を再度確認する予定。これは翌週の二次選考が済んだら、すぐにでも所定の手続きに入った方がいいだろう、という文花なりの読みに基づく段取り。その二次選考日は、祝日の翌日に当たる。一次合格者はプレゼン等の最終準備など念入りにできる訳で、こうした配慮も文花流。なかなかの日程配分で結構ではあるのだが、櫻の言う通り、しばらくいそがしくなりそう、な十一月である。石島課長の話を聞く会開催はいつになるやら。言うだけ言ってみた感じの櫻に対し、むしろ乗り気な文花だった。

「あら、ちょうどいいわよ。新しい理事さん達にも入ってもらえれば、プレゼンとかで頭使った延長でいい意見も出てきそうだし。十二月一日でどう? で、翌日はクリーンアップ&現場視察。現場志向イベントのトライアル、ってね」

「ということで、一日だったら、千歳さんも出勤日だからちょうどいいでしょ? 先生も大丈夫だって言ってたし」

「開催案内って、明後日には出すんですよね」

「当の石島トーチャンは先週中に調整とれましたしね。開催案内と要請文書が同時になりそうだけど、ま、大丈夫かと」

十一月十一日、十一時発の送迎バスの車中で合流した二人は、デートだったのに、この通り仕事の話中。気が付くと、もう商業施設に着いている。

「あ、一並びの瞬間、見損なっちゃった」

「まあ、2001年じゃないんだし、それほどのことは」

「01.11.11 11:11 11秒．．． 1が十一って。八八」

「今日はちなみに、細長いものの日。棒状のスナック、もやし、煙突．．．」

「ま、1が四つ並べばそう見えなくはないけど、煙突四本ってのもね。ああ、例のお化け煙突か。でも、煙突の日って何するの？」

スーパー店内はその 日にちなんで、遅しくやっているだろうけど、そういうのは後回し。今日はまずシネマコンプレックスである。ネットで事前予約すれば話は早いのだが、招待券を持っているばかりに、席の予約は劇場で当日、となる。

「帰りのバスに何とか間に合う。十五時半の回で、と。席はここね」

「先月に続き、今回もご招待扱いで。毎度ありがとうございます」

「へへ、これね、共通券だから他にもいろいろ観れたんだけど。とっついてよかった」

大衆娯楽系とか、お涙頂戴系とかも鑑賞できる券だったが、櫻が選んだのは昭和三十四年を舞台にしたあの名作映画である。本日のメインイベント、映画鑑賞会は後ほど。

混雑する前にランチにしよう、ということで、二人が入ったのは屋内イベント広場に面するシーフードレストラン。「あ、この店．．．」 花の日に、当日お誕生日のあの女性と来た<sup>いわ</sup>白く付きの店である。まごつく千歳だったが、悟られてはいけない。

「どったの？ 千歳さん」

「今日って、鮭の日にチーズの日？ それで、サーモン増量のクリームソースパスタにチーズたっぷり召し上がれって？」

「ホリデーランチセットで1,100円？ 八八八」

11.11 限定メニューのおかげで、ボロが出なくて済んだ。ところで、チーズの日は歴史的由来がありそうだからいいのだが、鮭ってのはまた何で？

「ホラ、土って十と一でできてるでしょ。それが二つ重なってるから、11.11。圭の字を当て込んだだけだと思う」

「そしたら、桂の日、蛙の日も良さそだね」

「あーら、崖だって蛙だって、あとは何たって街でしょ」

「へへえ、おそりいりました」

「ご褒美にちょっと頂戴」

櫻は鮭の限定メニューをクルクルやっていたが、千歳の皿をちゃっかり隣に置くと、そっちをクルクルやり始めた。八月の時とは若干内容が変わっている。その桜エビの和風パスタに載っているのは、もやし、大葉、メカブ等々。今日はもやしの日だが、あいにく増量にはなっていない。その分、セットで900円とお手頃。

「しかしまた、健康的というか、お手軽メニューなことで。あとでお腹空いても知らないから」

「桜エビ、好きなんですよ」

「フーン、桜エビねえ。本当はさくらがつく誰かさんを食べちゃいたいんじゃないの？」

「う．．．」

メカブのネバネバが発声を遮っているのは確かだが、正直なところ二の句が出ない彼氏である。眼鏡をかけなくなった櫻は、小悪魔ぶりにさらに磨きがかかったような気がする。

窓側の席なので、広場のデコレーションが目に入る。食事を終えてやっこさ、恋仲風の会話になってくる。

「ありゃりゃ、もうクリスマスの飾りが付いてる」

「てことは、夜は夜でイルミネーション？」

「十一月からこれが始まるようになって、一年が早くなった気がする。それとも単に年のせいかしら？」

「何を仰いますやら。お若いのに」

「冗談ヌキでね、今年は特にそう思うの。多分目の前にいる人のせいね」

「へ？ 僕そんなに櫻さんの時間とっちゃいました？」

「そうねえ、鍵盤に向かわせっ放しとかね。フフ」

彼氏をからかうのは愉快である。だが、それじゃいつもと同じ。7.7 9.9に続く展開をここらで軽く入れておかないと。

「あ、それだけ充実してたってことですよ。感謝してます。千歳さま」

頬が桜エビみたいな色になっているのは気のせいかな。「それは僕も同じ。Merci beaucoup. 櫻姫」

ここで姫様は予定通り、甘えちゃう作戦に入る。

「ところで千歳さん、十二月二十四日は、誰と過ごされるんですか？」

「今、目の前にいらっしゃる美しい方と、過ごせたらいいなあって」

「そう．．． どうしよっかなあ。まだ先だしな」

つついからかいたくなくなってしまうのは何故なんだろう。おかげで彼氏はもやしみたいになってしまった。ヤレヤレ。

「二人とももともと休みだしね。振替休日ってのが面白くないけど、まあ、ありきたりじゃないとこ行きましょ」

セットのドリンクはバイキングスタイルなので、その気になれば上映時間前までいられる訳だが、一時過ぎには店を出る。じっとしてられないのはお二人の共通点。

「では今日も調査しますか？ 隅田クン」

「ハイ、先輩．．．って、僕はアシスタントですかっ」

「相棒かしら、ね．．． あ、いいもん見つけ！」

スーパーでは、チーズと細長いスナック菓子に関してはコーナーが特設されていたが、七五三が近いとあらば、これに力を入れるのが本道だろう。

「千歳飴だ、キャハハ」

「櫻さん、あのねえ」

「貴君が飴嫌いな理由ってこれでしょ？ さんざからかわれたってヤツ」

「齧<sup>かじ</sup>ってたら歯がとれちゃったってのもあります」

この場にいると、千と櫻の何とかショーになりそうだったので、エスカレーターで三階へ急ぐことにした。「て、千歳飴も細長いじゃん。今日記念日だあ。ハハハ、ハ、笑えるう」

お茶目な姫様の相手は大変である。

「はいはい、櫻姫、着きましたよ」

「ここどこ？」

「先週撮った写真、今からお出ししますから」

「あ、見せて見せて」

蒼葉に撮ってもらったツーショット写真、千歳が撮った姉妹の写真、どちらもよく撮れている。

「よかったわねえ、千歳さん。手帳に入れる写真増えて」

七月一日の四姉妹の写真、七夕に撮った「ヨシと織姫」、九月九日、六月君に撮ってもらった一枚、十月の回の集合写真、千歳のセンター出勤初日の記念写真．．．手帳の脇にはすでに五枚のフォトプリントが挟んであるが、とっておきの一枚が今回加わり、新たに見開きを飾ることになる。

「これはこれで貴重だけど、櫻さんのポートレートに勝るものなし、かな」

「なあって、千歳さんも結局、私の顔に惚れちゃったってか。要するに見た目主義？」

「櫻さんはね、心がまず美しいから、それがお顔に表れて益々．．．」

今日も素直な彼氏は、ちゃんとボーナスポイントを稼ぐことになる。いいものが待っている十万点まではあと十日だったが、縮まる可能性がこれで出てきた。

まだ時間があるので、打上げ時にお世話になったカラオケ店に行くという選択肢もあったが、文系、いやカルチャー系の二人は、本、CD/DVD、楽器の各店舗を巡っていれば事足りる。かれこれ三時近く。彼氏はここでふと、あることに気付く。

「櫻さん、洋服とか小物とか、そういうのは？」

「はあ、千住さん家はファッションコーディネーターがちゃんとしてまして、ご存じの通り、お上がりなんかもいただけるもんですから、こういうところでは別に。それとも、おねだりすると買ってもらえるとか？ 悪いなあ」

迂闊な質問をしてしまったものである。だが、

「私ね、衣食住よりは、住食衣って感じだから、どうぞご心配なく。こんな服がいいとか、もしお好みがあればそれだけ教えてください。蒼葉を通じて入手しますんで」

衣料品売場では、通販カタログと同じものを扱っているため、カタログに載っているものから指定する、という手もある。

「あの子、出てたっけかな？」

「あ、これ！」

「ハハ、テーラードジャケット、タックフレアスカート、で編み上げのショートブーツかあ、やるなあ」

「これって、そのまま櫻さんにも当てはまるんじゃない？」

「ま、姉妹ですからね」

店頭で同じものを見つけるも、櫻曰く、

「ここで試着しちゃ、つまんないもんね。いつになるかわかんないけど、どっかでお披露目します。ひとつお楽しみに」



千歳は、櫻も十分モデルとして通用するのでは？なんて考えてもみたが、モデルであれ何であれ、まずは彼だけの櫻さんであってほしい、という想いが占めている。

「さ、櫻さん．．．」

「ん？」

「いえ、何でも」

「あ、そろそろ行きますか」

何を言おうとしたのか、少々気になる櫻だったが、作戦が上々であることを確信していたので、あえて尋ねなかった。

「千歳さんもブレーキ解除になってきたかな、フフ」 その通りである。

空模様が冴えない日は映画に限る。

「で、千歳さん、前作はどなたと？」

「一人で観て泣いてました」

「おお、それはそれは。今日も泣いちゃったりする？」

「さあ、櫻さんと映画に来れたってだけで、すでに涙モノですが．．．」

冗句のようにも聞こえるが、偽らざるところ。今やすっかり口達者になっている。

続編は続編で見せ場はあった。多少展開が読めてしまうところが引かかるも、純粋にその世界に浸っている間は、心動かされること大。

「夕日が目に沁みるって、さ」

「ハハ、レンズ外れそうになっちゃった。こういう映画は眼鏡じゃないとダメねえ」

大笑いしたり大泣きしたり、浮き沈みというより哀楽が激しい本日の櫻である。素颜になった分、ありのままが出るようになった、というのも考えられるが、千歳の前ではそれが尚更。感情を素直に出せるようになっていた、という訳である。

立冬を過ぎただけあって、暗くなると肌寒い時節である。映画のように夕日が出ていれば劇的だったんだろうけど、すでに日没後。クリスマス向けの屋外イルミネーションもどこか寒々しい。送迎バスを外で待っている間、櫻は手をこすり合わせる。ジャンパースカートにステンカラーコート、ちょっと軽装だったか。

「パーカーとか着て来ればよかったかなあ」

「寒い？ 平気？」

「櫻さんは春女だから、ちと弱いかも。千歳さんは秋男．．．あっ」

11.11 は千歳が仕掛ける番だったようだ。バス待ち最後尾で、人目に付かないのをいいことに、彼は彼女の手をとる。そして離す。次の瞬間、気が付いたら抱き寄せてしまっていた、というくだり。

「ありがとう．．．」

櫻の眸<sup>ひとみ</sup>には熱いものが溢れんばかりになっていた。だが、ここでこらえないとレンズがまたどうかなってしまいそう。僅か数秒のシーンだったが、眼を閉じていた櫻には、数十秒にも数分にも感じられるのであった。季節外れの遠雷の音が、聴こえる。

鮭でも街でもない。十一月十一日は、二人にとっては「佳<sup>よろし</sup>」き日、ただそれだけである。

## 四者会談

雨に降られる前だったのは良かったのかそうでなかったのか。十一日はそれぞれの停留所で下車し、それぞれの居宅に帰って行った二人。櫻は何が起こったのかよくわからないような感覚にずっと捉われていて、早くもあり遅くもありの十一月第三週を過ごしていた。机には蒼葉に撮ってもらったツーショット写真が立てかけてあって、一見しては小さく息を吐いてみたり。土曜日も朝からこの調子である。

「櫻さん、おはよう」

彼の声に驚いて立ち上がる彼女。

「あっ、お、おはようございます」

「日曜日はありがとうございました」

「い、いえ、こちらこそ」

どうも櫻の様子が変わるので、案じつつも、からかってみたくなる千歳である。

「櫻さん、どこか具合でも？ そっか、今週寒かったから。春女さんには厳しかった、とか？」

「今朝も寒かったし．．．。また誰彼さんに暖めてほしいな」

あっさり返り討ちに遭ってしまう誰彼さんである。だが、櫻は結構本気。紅潮させながらも、千歳を熟視している。コンタクトレンズ越しではあるが、裸眼で見つめ合っていると互いに惹き込まれてしまいそうになる。珈琲を持って文花が来なければどうなったとか。

そんな場の空気に一瞬たじろぐも、そこは事務局長である。

「はいはい、お二人さん、ここはドラマの舞台じゃございませんから、ほどほどにね。櫻さんはコーヒー飲んで、さっさと目覚めるべし！」

「なあって、いいとこだったのに」

「だからそういうのは就業時間後！ 隅田さんも何か言っただけ」

こういう場合、どっちについたらいいんだろう。ここは仕方なく、文花の言うことを聞く。

「あ、ええ。時間後にまた、ゆっくり。でも、今日は業平氏に来るからなあ」

櫻は一転、険しい顔つきになっている。

「いいわよいいわよ。私、午後出かけるし。千歳さんは、本多さんでも KanNa ちゃんでも、どうぞ好きなようにお相手してれば」

ご機嫌斜めの櫻は、昼食を済ますと、クリップボードにどこかの白地図を挟んだものを持って、そそくさと出て行った。

「何時に戻れるかわかりませんが、本多さんと行き違いになっちゃったら、よろしく伝えといてくださいな」

午前中は冷え冷えしていたが、午後は陽射しが出てきて、まゝまゝの暖かさ。地元探訪するには好都合である。四姉妹で廻るマップツアーを控え、今日はその下見。不機嫌面で

飛び出してきたが、それで良かった。本音を云えば、千歳と一緒に訪ね歩きたい、だがそれでは同行予定の三人娘（蒼葉・初音・小梅）に申し訳ない。櫻は自分なりに訣然たる思いを以ってマップ作りに臨もうとしていたのである。

十六時近くになると、早くも日が翳ってきて、薄ら寒くなってくる。まだまだ巡回したかった櫻だったが、寒いのは御免。風を切ると凍えそうになるので、ペダルも弱めになる。センターめざしてノロノロ運転。誰彼さんもきっとこんな速さ、か。

「千歳さん、今帰るから．．．」 はやる気持ちを抑えるように走る。時に厳しく吹く風が恨めしい。

同じ頃、センターにはすでに業平が来ていて、法人登記に関するあれこれを文花と話し合っていた。

「印章もそろそろ作っておいた方が．．．」

「はぁ、特定非営利活動法人って入れるパターンかぁ。ただでさえ団体名長くなりそうなのに。全部入りきるかしら？」

「じゃまず名称ですね。理事会で早く確定した方がいいでしょう」

こういう話をしている時は、業平もビジネスマンチックである。文花としてはもっとフランクに行きたいところだったが、釣られて何となく硬くなっている。そんな時は、空気を変える人が現われるのが一番。いいタイミングで櫻が帰って来た。

「あ、本多さんいたんだ。こんちは！」

「あ、ども。って、どちら様？」

遠くからだだったので、よくわからなかったようだが、程なく気付く。千歳は案の定の展開に苦笑い。

「さ、櫻さんなの？ こりやてえへんだぁ！」

いつもの業平節になって来た。街の空気を吸ってすっかりご機嫌の櫻だったが、このリアクションで一層陽気になる。

「へへ、眼鏡外すとこの通りですの。これ、千歳さんの仕業」

「仕業って？ 千ちゃん、どういうこと？」

「はい？ 何か人聞き悪いなぁ。話せば長くなるけど．．．」

そんなこんなで、円卓には四人が集まり、よもやま話になる。

「そっかぁ、眼鏡の有無で人を見ないってのがハッキリするまでは、ってことだったか」

「もう何か合わなくなって来てたし、タイミング的に絶妙だったんですよ。仕業っていうか、やっぱりおかげ、かな。ね、千歳さん」

「今となっては、眼鏡の櫻さんが懐かしい．．．」

「眼鏡ってそういう使い方ができたのね。私は、着けたり外したりだから、今更素顔がどうこうってんでもないし」

眼鏡着用中の文花は、フレームをちょっとずらして業平に視線を送ってみる。業平はドキとなるも、動揺を隠すように別の話題を振る。

「で、皆さんお集まりのところで、ちょいと相談なんですけど、今、いいですか？」

業平はホワイトボードに、相談事を三点、書き始める。其の一、流域情報誌の取材ネタ、

其の二、ケータイ入力画面の今後の展開、其の三、次回クリーンアップでの実機試験。

「まず最初の件ですが、十一月号はクリーンアップ実践レポートで万々歳、でも十二月号はどうすんだ、て話です。榎戸さんとしては掃部先生に取材して起業ネタか何かを探りたかったみたいなんだけど、十月の回の際は応じてもらえなかったし、先生のブログを見つけたまではよかったものの、本人と連絡がつかない、ってんで困ってまして．．．」

「ああ、その話。先週、センセも言ってたわ。で、それならここでも紹介してやれって、お仲間の再生工場の連絡先教えてくれたの。榎戸さんにはその日のうちに伝えといたけど、その後、どうなったかは不明」

「じゃ、とりあえず心配無用ってことですかね」

「確認とってみたら？ 広告代理店の人間が工場行ったってろくな取材できないでしょうから、もしまだだったら、本多さん同行すりゃいいのよ。実機に強い人が付いてた方がいいんじゃない？」

「はあ、そりゃそうですね。あとでケータイかけてみます。あ、ケータイ．．．」

相談其の一がサラッと終わってしまった勢いそのまま、其の二へ。が、一と二は実はセットだった。

「いやその、ネタ切れに備えて、じゃ例の入力画面を紹介するのはどう？って話もあったんですよ」

「まあ確かによく出来てるし、その後も弥生ちゃん、テンプレート増やしたり、改良に余念なかったから。でもオープンにしちゃっていいのかな？」

「なもんで、ご相談て訳です。ここは一つ起業的に提案させていただきますね」

業平はボードにまた三つほど案を書き込んでいく。1．センターのサイトまたはモノログからリンク。規定を設け、その同意を求める。あとは自由に利用可。(ID + P W、送信先アドレスの設定は必要) / 2．主に情報誌サイトからリンク。会員登録を求め、会員限定で利用可とする。登録は無料だが、入力画面にアフィリエイト設定を加え、そのアクセス等によって収益が得られるようにする。情報誌からの協賛金も付加される。 / 3．業平の会社サイトの一部として運営。定額制とし、分析サービスなども提供。

「こりゃまた話が大きくなったもんで」 千歳は目を丸くするも、すかさず「PC画面でもちゃんと見れるようにしといた方がいいね」と乗り気なご様子。

「開発者とか関係者にペイするような仕掛けだったら、私はいいと思う。でもそんなにニーズってあるのかなあ？」 櫻は少々疑心暗鬼。

「仮に収入が入るとしても、受け皿ってどうすんの？ こういう非営利なネタで分配を考えないといけないのって、難しいかも」 文花も首を捻る。

よもやま話から、いつしかセンターの事業に近い話になっている。ああだこうだやっているうちに見えてきたのは次のような設定。

「運営主体は当センター、管理者は隅田さん、メンテはバイト待遇で桑川さん、情報誌サイトとのやりとりは本多さん。試験的に開放して、ひとまず協賛金、ま、手付金かしらね。それはセンターが預かることにして、クリーンアップを業務の一環として行う時に備える。そんなとこかしら？」

「弥生ちゃんにも聞いとかないと」

「higata@に流しますか？」 千歳のこの発案に対し、

「そうね。桑川さんには、higata@上で直々に説明すればいいと思う」 文花が取り次ぎ、  
「じゃ、言いだしっぺであるわたくしめが」 業平が引き取る。

「情報誌のネタにするかどうかは、メンバーで議論してからね」 このまとめを以って  
集約。冬木と業平が密談していたソーシャルビジネスの一端が少し見えてきたような...  
この話は後日、メーリングリスト上で明らかになっていく。

窓の外は夕闇が拡がっているが、四者会談はまだ続く。会談中は、センター来館者もゼ  
口のまま。

「で、三つ目のご相談。次回はちょっとした機材を持ち込もうと思ってるんですが、運  
搬する手段があいにくとないもので...」

「自宅兼自社は、せっかくリバーサイドにあんだから、ボートで遡上して来るのが筋じ  
ゃない？」

「千ちゃん、そいつは冗談キツイよ。仮にボートがあっても、漕ぎ着ける自信が、ない」  
眼鏡をずらして、目配せ気味。クルマ所有者が申し出る。

「しょうがないわね。私が承りましょ。助手も同伴させますから、機材の一つや二つ。  
どうぞご遠慮なく」

「へへえ、さすがチーフ」

「やぁね、名前で呼んでよ」

「はい、おふみさん。ところで助手って？」

「さぁ？ そっちこそ機材って何よ」

「それはその、お楽しみってことで」

「じゃ、おあいこ」

外は冷え込んでいるかも知れないが、センター内はこの通り。ほんわかとした感じにな  
っている。業平の相談事、これにてクリア。櫻も今はにこやかである。

閉館時間を過ぎて早々、文花と業平はとりあえず一緒にセンターを出て行った。館内に  
残るは二人。時間後になるのを待っていた訳だが、ここはあくまで職場。

「ねえ、千歳さん、例の十万点プレゼントなんですけどね、予定繰上げで明日お渡しし  
たいの。いい？」

「え、もうそんな。あ、パーベキュー広場に行った日から、そっか、ほぼ三ヶ月ですも  
んね」

「ま、ポイント増えたり減ったりしましたけど、一応ね。だから、今日はもうこれで。  
明日はそうだなあ、お昼頃って来れますか？」

最近の千歳は、探訪とかwebいじりとかは控えめ。DTM<sup>desk top music</sup>作業が復活してはいるが、  
いつでも彼女のお相手ができるように日・月は概ね空けてある。

「かしこまりました。姫様」

「フフ、早く明日になーれ。じゃねっ！」

姫様は何とか我慢して、彼とは逆の方向へ自転車に向けた。寒風の中だったが、とにかく  
加速。今は速度を上げるごとに暖まる感覚が心地良い。身も心も何とやら、どこ吹く風  
の櫻である。

「ちゃんと時間決めておくんだっとなぁ．．． じれったい！」

朝は冷え込んだが、徐々に気温は上がり、二十度近くまで行っている。そうとは知らない櫻は、ドキドキ感とイライラ感が交錯して熱を帯びてるんだろう、てな推考をしながら佇んでいる。ここは橋の袂<sup>たもと</sup>。余程のことがない限り、彼はここを通る筈である。奇襲ならぬ待ち伏せ作戦。以前はセンターのカウンターでドッキリ作戦を試みたこともあった。眼鏡がとれても、茶目っ気は相変わらず、いや version up している。

そんな作戦が張られていることなど関知しようもない彼氏は、いつものスローモードで安閑と橋を渡ってくる。視野が広がり、よく見えるようになった櫻は、その鈍足自転車を橋の真ん中辺りで捉えた。だが、「あれ、千歳さん、止まっちゃった」 心憎い彼は、「空は澄んでるし、空気も凜としてるし、いいねえ」 小休止して、下流側の景観をのんびり眺めている。作戦を見通すには及ばないながら、どうやらはぐらかす術は心得ているようである。

「あ、櫻さん、どしたんですか？」

「不審な自転車の侵入を防ごうと思って。特に廃プラ積載車は要注意。あっやっぱり」  
前カゴにはプラ容器類が入ったレジ袋一つ。「ダメかなあ？」

「彼女ん家来るのに、何よお。ったく」

「あ、こういうのもちゃんと持って来ましたから」

「フン、ご機嫌とろうたってそうはいきませんからね。私、ずっと待ってたんだから」  
ドキドキとかイライラとか、どうでもよくなっていた櫻だが、千歳の手土産がちょっと気になる。

「これ買うのに時間がかっちゃって。でも、十一時半でも早いかなって」

「あ、別に怒ってないから。待ちきれなくて飛び出して来ちゃっただけ。異性に待ち伏せされて悪い気しないでしょ？ 行こ行こ」

「こんにちは。あれ、今日は櫻さんだけ？」

「ええ、蒼葉は例の油絵出品しに出かけました」

「完成したんだ。持って行く前に見たかったな」

「姉貴にも見せないくらいだから。よほどの傑作か、その逆か．．．」

実質的な制作日数はひと月ほどか。習作に当たる水彩画は拝見したものの、油絵の方は四日以降、お目にかかっていない。本来の姿、本来の色．．． ある意味、楽しみではある。

「じゃ、千歳さん、おかけになってお待ちください」

「何か手伝いましょうか？」

「いえいえ。お客様にそんな。あ、廃プラ、まとめといてもらえれば」

「こっちは冷蔵庫に、お願いします」

「あ、ありがとうございます。何ですか？」

「いいもの、です」

予め用意しただけあって、手際よく配膳されていく。メインは、文花からの差し入れ。季節の野菜をできるだけ素に近い状態でサラダ仕立てにした一鉢である。カボチャ、ニンジン、大根をそれぞれスライスしたものにブロッコリーが転がる。

「レタスは下敷きになっちゃってるけど、ま、掘り出してください」

あとはおなじみの櫻風デリをスライスしたバケットに載せていただく。デリはいつもちょっとした惣菜級の出来になっているが、業務用食品店でベースになるパテ状の品々（クリームチーズ、ポテトサラダ etc.）やペースト缶（例...サーモン、クラブ、ポーク）を買い込んでおくのがコツなんだとか。コーン、豆類、マッシュルーム、ツナ、アンチョビ、貝柱、ビーフ等、ネタとなる食材は主に缶詰から。開けたら小瓶に移し変えて、いろいろな組合せができるように備えておいてあるそう。ピクルス、オリーブなどの通常の瓶詰品も含め、その数、十数種類。冷蔵庫内には、それら瓶専用の段があって、姉妹で補充し合っていると。言う。

「夕飯の時はこれだけじゃ何なので、生鮮食品とか日配品も買ってくるんです。当番制って言っても、買い物してお膳立てするくらい。至ってシンプルな姉妹の食卓でございます。今日はサラダがいつもより豪華かな。さ、いただきますよ。Bon Appetit!」

「いただきまーす！ 十万点プレゼント、ありがとうございます」

「あら、これはほんの前座よ。ちゃんと後で出しますから」

「土曜のお弁当に、今日の食事に、先月だって、これいただいちゃったり、さらにですか？ 何だか悪いなあ」

マイ箸を<sup>うやうや</sup>恭しく取り出しながら、恐縮頻りの千歳。櫻はここぞとばかりに、甘い言葉をかけてみる。

「フフ、いいんですのよ。櫻さんのラブラブブログとか、お写真とか、最近はピアノレッスンまでしていただいていることだし、お安いものだワ」

「レッスン、てか。ハハ...」（平謝り）

「おかげで、一曲ちゃんと出来たことだし。あ、あれって、バックで流しながら生演奏をかぶせるとかって、どうなの？」

「歌は生でOKでしょうけど、演奏となるとねえ。まあ、リズム系とベースラインとお飾りだけ流して、キーボードとギターに当たる部分は止めるって感じかな。できなくはないですね」

「そのうち、弥生ちゃんとか、行ってみますか？」

「え？ 彼女の家、スタジオでも？」

「いやいや、バイト先の楽器店にある貸スタジオ」

何気ない千歳の自作作曲が思いがけない展開を迎えつつあった。その一曲とはズバリ「届けたい・・・」である。櫻 version が業平アレンジによりパワーアップし、歌を入れればデモでも何でも、というところまで来ていたのである。自作作曲の二曲目の方は、舞恵と八広のリズムセッションの耳にはすでに入っていて、今は詞が上がるのを待っている状態。ドラマーライター氏のお手並みやいかに？ である。



他の曲も業平・千歳ラインで肉付けされつつあったが、一部は弥生のもとにも流れていて、また違うアレンジが試みられていた。業平に任せておくと、ノリ先行で荒削りな感じになるところ、弥生流のプログラミングが加わったことで、よりしなやかな出来になるうとしている。重低音のグルーブはそのまま、というのがまた素晴らしい。その何曲かについては、鍵盤による弾き直しは特に必要なかったので、櫻には今のところ負担をかけずに済んでいる。

特にBGMとかをかけている訳ではないのだが、気分的には音楽が二人を包んでいるような状況である。櫻の歌世界、千歳の曲背景、それに街や川や空が重ね合わさって行く。情景を思い描きつつ抒情を語る、そんな会話である。

「話し込んだら、ノド渇いちゃった。何か飲み物．．． あ、そうだそうだ」

「？」

「千歳さんのお土産は三時にとつといて、と。食後のフルーツ出しますね。飲み物も後で」

櫻は冷蔵庫から本日のいいものを運んできた。それは、

「奮発しました。上物です」

1ダース分の大粒イチゴである。透明皿に瑞々しく盛ってあって美味しそう。食事中は向かい合っていた櫻だが、彼の斜め隣りに腰掛けてみる。千歳は単にお互い食べやすいように席を移ったんだなくらいにしか考えていなかったが、とんだ見間違いだった。櫻は大きめの一粒を手にとると、それを唇に押し当ててから、彼の口へ運ぶ。

「はい、どうぞ。より甘くしてみました」

「あ、八八。ありがと」

十万点プレゼントって、もしかして．．．

「千歳さんだったら、『本気でオンリーユー』って曲、知ってるでしょ。”Sweeten your coffee with my kiss.”を真似てみたの。どう？」

極端なことを言えば、イチゴ並みに赤くなっている彼氏であったが、それを乗り越えて、放心状態である。甘いというより、甘酸っぱく感じる。プレゼントにしては度が過ぎたか。

「櫻さん、こりゃ百万点級だよ。どうリアクションすればいいんだか．．． 倒れそう」

「倒れちゃったら、起こして差し上げるだけよ。はい、も一つどうぞ」

彼女はさらに長めに口をつけた苺を彼の目の前へ。と、あっさり自分の口に収めてしまった。ずっとポカンとしていた千歳だったが、この時ばかりはその開いた口がどうにも塞がらない。そのままテーブルに伏せてしまった。ある意味、倒してしまったことになる。

「八八、またやり過ぎちゃった。ごめんね、千歳さま」

いいものを進呈などと言ってしまった手前、何か手の込んだことを一つ、と企図していたものの、先週の不意のラブシーンのせいで、調子が狂ってしまった櫻である。このSweeten Strawberry 作戦、実は土壇場での思いつき。見事な機転だったが、確かにこれは利き過ぎ。

「だって、本気でオンリーユーなんだもの．．．」

目で訴える彼女だが、彼氏は今ひとつピンと来ていない模様。苺はまだ残っているが、**作戦は中断。**

甘くて赤いプレゼントは二つを残して冷蔵庫に帰って行った。千歳はホッとしたような、もの寂しいような、複雑な心持ちで皿を見送る。

「ま、蒼葉ちゃんにもおすそ分けしないと、ね」

「そういや、蒼葉さん、お戻りは何時なの？」

「なーに、妹に逢いたって？」

「いや、おやつの時間に戻って来るんなら、一緒がいいかなあって」

櫻はちょっぴり首を傾げて、

「ははあ、二人きりだと櫻さんがまた何かしでかすから、予防線張ろうって訳？」

千歳はあわてて、

「あ、いや別に。櫻さんのそういう仕掛け、大歓迎だけど．．．」

「フフ、次はどうしよっかなあ。十万点ごとのものねえ。まあ、とにかくよくおつきあいました。ポイントとか言っちゃって、実は私なりの目安でもあったんです。この点数になった時にどこまで進展してるかって、ね」

「で、それは予想通り？」

「まあまあ．．． いやいや、上出来です！」

正直なところ、今回の思いつき作戦の意図を汲んでくれれば、もうちょっと先に行くんじゃないか、と櫻は踏んでいて、内心はかなりドキドキものだった。蒼葉もいないことだし、好機だった筈。だが、一粒二粒で倒れられちゃ「こりゃ、まだ先だあね」と諦めるしかない。もどかしさも妙味である。シチュエーション的にはやはり十二月二十四日、だろうか。

文花直伝の有機珈琲を呑みながら、おやつタイムを待つ二人。外は強めの風。冷たそうな音を立てて通り過ぎていく。

「おそらくまだ帰って来ないでしょうから、先にいただきましょ、ネ？」

櫻は彼の返事を聞く前にさっさと冷蔵庫へ。

「ほへえ、何？ この特大サイズ！」

千歳が買って来たのは、ジャンボシュークリームと呼ばれる代物である。箱狭しとばかりの三個入り。

「櫻さん、白クリーム好きでしょ。ギッシリ入れてもらったから」

「そんな特注できるの？」

「そりゃ、姫様のためですから」

「グッとくるなあ」

中を割ると、ホイップ状のクリームが溢れ出てきそう。「苺と一緒に食べればよかったかなあ．．．」とか云いつつも、目が輝いている。かぶりつくと、「まいったなあ、美味しいなあ、食べるのもったいない！」

悦ぶ櫻を見て、ご満悦の千歳だったが、口の周りにさりげなくクリームを塗っちゃうあたりが役者である。櫻はそんな彼を見て、ある仕掛けを思いつく。

「千歳さんたら、白いの付けちゃってえ、美味しそうね」

「ハハ、大入りだから、その」

と彼が手を当てた時には、彼女の顔はすぐそこ。

「拭いちゃダメ、もったいないじゃん」

「！」

「ただいまぁ！ おーい！」

ドラマなどでありがちな展開は、櫻と千歳にも容赦なく降りかかるのであった。櫻はあまりのタイミングの良さに、「ハ、ハハ。やられたぁ．．．」千歳はあわてて白いのを舐めて取り繕う。

「あ、千さま、いらっしやいませ」

「風、大丈夫だった？」

「これって木枯らしでしょ。今日のスカート、フレアだったから、ちょっとヤバかった」

「あ、そのご衣装．．．」

「ん？」

蒼葉と千歳のやりとりを黙って聞いていた櫻だったが、衣装の話題になって「そうだ！」と喊声かんせいいつせい一声。

「蒼葉、その新作、貸して」

「なになに、いつ？」

「今！」

「ここで着替えるって？」

「何言ってるの。そんなことしたら、千歳さんまたおかしくなっちゃうじゃん」

「私はマズイだろうけど、姉さんはもう平気でしょ？」

「ホレ、さっさと別室！」

姉妹で揃って仕掛けられては、ひとたまりもない。向かいの席には食べかけのシュークリーム。白いのがとろけ出している。

「食べてからでもよかったのに」と他人事のようにクリームを見つめているが、内心、実はかなりトロトロな状態。そこへ、衣装替えして櫻が登場する。

「おお、櫻姫」

「お色直ししちゃった。どう？」

フレアスカートの裾をちょいと摘つまんで、会釈する櫻。千歳はすっかりとろけているが、頬杖をついて何とか倒れずにいる。

「さすが、よくお似合いで。秋だけど『萌え』ちゃいそう」

スカートはチャコールグレー、ジャケットはオフホワイトなので、別に萌え系でも何でも無いのだが、彼なりにときめいている心情を表現したかったようだ。

「蒼葉は後でいいって言ってるから、さっきの続きしましょうか？」

「え、続きって？」

「あら、クリームどしたの？ 舐めちゃった、かな？」

櫻はいったい何をするつもりだったのか。わかったようなそうでないような。千さんだけにこういうチャンスは千載一遇ってことも有り得る。何かの機会を逸した、**それ**だけは言えそうだ。

「ま、いいや。櫻さんの的には今日は上の上出来だから。これ以上、彼氏を倒しちゃマズイもんね」

ほんの手土産のつもりだったシュークリームだったが、随分と盛り上げてくれたものである。今は櫻の口の周りが真っ白。舐めずにいるのが何とも滑稽ではあるが、どこか思わせぶりでもある。二人とも静かにドキドキしていたが、その大きなおやつがなくなると不思議と収まっていた。

十六時近く。木枯らしは愈々その強さを増し、窓を叩く勢いになっている。

「じゃ、暗くなる前に、おいとましますね。この後もっと寒くなりそうだし」

「え、帰っちゃうの？」

「僕としても上々の上くらい、素適な時間を過ごさせてもらいましたから。新着の装いも見せていただいたし、今日は十分でございまして」

「そう、だよ。Sustainable だもんね」

淋しそうではあったが、一転、いつもの笑顔になると、「蒼葉あ、千歳さん帰るって」

姉と衣装チェンジした妹が別室から出てきた。千歳はどっちがどっちだか判然としなくなっていて、

「じゃ、櫻、間違えた、蒼葉さん、また。シュークリームは苺と一緒に食べるといいみたい」

蒼葉はにこやかに手を振るも、櫻はしかめっ面。千歳を引きずり出すように玄関を出る。

「やあねえ、何で間違えるのよお」

「へへ、白クリームのせいですとポーツとなつて、つい。すみマ、千さんでした」

「そんなポーとなつてんじゃ心配ねえ。おまけに、この寒さ・・・」

千歳も手をこすり合わせている。好機と見るや、櫻は一週間前の再現を仕掛ける。今回は彼の両手を彼女が包んで放す。そして、

「少しは暖まるでしょ」

木枯らしがまた吹き抜けていく。フレアが多少広がろうが、レンズが多少ずれようが、問題ではない。ここは自宅玄関先、人通りもない。ただ暖かい、それだけ。

西日に向かって、風と共に去る彼であった。残された彼女の台詞はこれしかない。

「夕日が目に沁、みるう・・・」

その日の夜、姉妹の食卓では次のような会話が交わされることとなる。

「私、これでも気い遣って遅めに帰って来たんだけど、早かった？」

「いいとこ、ではあった」

「え？」

「あのタイミングは妹ながら天晴。よくぞ邪魔してくれた、って感じ」

素顔の櫻姉は迫力がある。蒼葉に一閃の眼光を放つと、バケツにクリームチーズを塗りたくる。その動作の凄みと云ったら。

「アハハ、ビミョーにコワイんですけど」

「いいってこと。晴れて出品できて、一段落でしょ。今度の祝日、ちゃんとお絵描きの先生してもらおうから」

「はいはい。でも本当に千さんヌキでいいの？」

「グリーンマップじゃなくて、違う色のマップになっちゃうから。いいの」

クリームチーズを口の周縁に付けて姉はニヤリ。そのどことなく冷めた笑みに妹はヒヤリ。白い唇というのは何かとお騒がせなものである。

## スマイル

祝日明け、十一月最後の土曜日は朝からバタバタしていたが、十六時を回り、新たな理事候補と運営委員候補が退場したところで、ようやくいつものスローな雰囲気に戻ってきた。会議スペースに残っているのは、文花、清、八広、そしてプロジェクタ等を片付け中の千歳の四人である。

「チーフ、いや事実上、事務局長、ですね。今日はおつかれ様でした」

「ハハ、どもども。顔ぶれが揃ったところで、あとは役の振り方。そういう意味じゃ、早めに事務局長を仰せつかった方が話は進めやすいですもんね。何かまだじっくり来ないけど」

「それにしても、今日の六人はどなたもいいプレゼンだったスね。ハコモノ一つの解釈でも六者六様。強いて言えば、地域のあらゆる資源を連動させてハコにしておいてのと、今ここにあるハコ、つまりセンターを拠点に展開して面にしようってのと、大まかに二つの方向性に分けられる、ってとこスかねえ」

「いい読みねえ。それって、森から木、木から森、の話に通じそう」

「ま、女性一、男性二が新理事、同じ割合で運営委員が三人。六人全員、何らかの形で関わってくれることになった訳だから、その森と木のバランスもとれるってもんだ。なかなかの人選だったあな」

代表候補の清先生は、言葉にはしなかったものの、顔は「ヨシヨシ」とでも言いたげな表情になっている。三十代から五十代まで、流域在住、年数の長短は問わないが何らかのNGO/NPO経験を有する、そんな限られた条件ながら、文花のママな連絡網（<sup>まさ</sup>正しくネットワーク？）が機能したらしく、公募には十二名が応じた。書類選考でさらに絞り込んだ六名は、女性二人に男性四人。本日十三時半から行われた法人役員候補の二次選考会は、その方々が主役となった。一人十五分の持ち時間で、課題論文テーマ「地域を元気にするハコモノ」についてプレゼンしてもらおう。五人はプレゼン用のソフトを使い、PC＋プロジェクタで。一人は大判カラーコピーをフリップ形式にして臨んだ。八広の言うように、甲乙付け難いところだったが、このプレゼンタイム、センター主催の講座扱いになっていて、聴講者、これ即ち、投票者が同席していた。聴衆の皆さんには、より秀逸なプレゼンの一位・二位に票を投じてもらったところで、講座は終了。その後、十五時過ぎからは六人の間で相互評価を兼ねた協議が行われ、途中から先行候補四人のうち、清、文花、千歳の三人（一人は欠席、代わりに八広が傍聴）を交え、さらに先の票数を加味した選考を経る。かくして、お互い納得の上で理事候補が選出された、という次第である。ただ、文花としては、六人が決まった段階で、この際全員関わってもらおう、という腹積もりが

あったので、今日の二次選考は実質的には役員か委員かの割り振りがメイン。副次的だが、センター行事としてハコモノ論の討究ができる、ということも大きかった。

内にも外にも意義のある行事をさりげなく設定してしまう、文花の手腕あつての今回の会であった。

「取り急ぎ、理事就任にあたって必要と思われる書類も渡したし、理事会の日程調整も済んだし、あとは定款考えながら組織体制？ 事業計画？」

「会員制度もですね」

「あぁ、ファンクラブの話、か」

「ファン倶楽部だぁ？」

とまぁ、和やかにやっている。ファンクラブ云々のジョークを発した当人、さくらコースの櫻は、午後は専らカウンター係。今は聞き耳を立てながら、クスクスやっている。会議スペースの様子はカウンターからも見える。なので、プレゼンもひととおりは拝聴済み。カウンター係は、配付資料に書き込みしながら唸っていた。途中、辰巳がやって来たり、舞恵から電話があつたりしたが、聴講者以外の来館者は少なく、程よい位置で程よい時間を過ごす。だが、講座終了後は協議に加わるでもないのので少々退屈気味。KanNa 上の当館イベント情報を書き換えたりしていたが、正直持て余していた。舞恵が予定通り十五時に来てくれれば、カウンセリングでもしながら凌げたのだが、遅くなるってことじゃ仕方ない。間が持ったのは、帰った筈の辰巳が戻って来てくれたおかげである。

「いやはや、千住さん、最初わからなくてさ。下で頭冷やして、確かめに来たよ」

地域振興部署時代、櫻と言えば眼鏡、が定着していたので、来た時も出た時も認識できなかった、ということらしい。

「そっか、課長にも見せてなかったんですね」

「でも、どうしてまた？」

「実は彼氏、あ、いや、ある方からコンタクトレンズのアドバイスをいただいて、それで」

「彼？ あぁ、成る程」

higata@では公認かも知れないが、元上司、現事業委託主、そんな立場の辰巳には易々と彼氏がどうこうてな話は憚られる。だが、櫻のそんな心配りがかえって辰巳にはやるせない。

「お見通し、でしたか？」

「先月のクリーンアップで二人の息ピッタリだったから。ちょっとショックではあったけど、ハハ」

「須崎課長．．．」

間を持たせるどころではない。深く重い間が生じることになる。何も言えなくて幾年月いくとしつき。ずっと独り身でいたのは、意中の女性がいたから、ということだったのか。

六人が帰る何分か前、辰巳は一人、センターを後にした。寂しげな高い背中を見送っていたら、ちょっぴりキュンとなってしまった櫻である。四人の談笑が聞こえ、我に返った、そんな感じ。

会議スペースの片付けが済み、その四人一行はカウンターへ。

「櫻さん、お待たせ。カウンター番、交代するわよ」  
「あ、はい。って、今日は奥宮さんとはいいんですか？」  
「そう言えば．．．」  
「あーあ、ルフロン、可哀想。でもまだ来てなかったんスね」  
「誰だい、そのフロンさんて？」  
「センセ、それじゃオゾン層壊しちゃう」

階下から、リズムカルな足音が近づいてきた。

「ヤッホー！ 皆さーん」

今日は雨も風も連れて来なかったが、風雨に遭ったようなクルクル髪で、ル・フロンさんが現われた。かつてのツンデレラが嘘のように晴れやかな参上ぶり。

「先生、彼女がルフロン、ス」

「ハクン、この方、だぁーれ？ 先生って？」

「掃部清澄先生。お名前はメーリングリスト上なんかでご存じでしょ？」

higata@のメンバー十人中、清と面識がなかった最後の一人がここで漸く対面を果たす。

「あぁ、舞恵は行けなかったけど、十月の回の集合写真でお顔は。蟹股だったんで、よく覚えてますワ」

「マエさんてか、そんじゃ、丁寧に呼ぶとお前さん、だな、ハハ」

「何か、おじさん、イイ感じ。ヨロシクです」

名だたる先生をおじさん呼ばわりとはいい度胸である。だが、清としてはそんなくだけた接し方がむしろお好み。ルフロンの登場で、先生、いや、おじさんとの距離感がまたぐっと縮まったのは確か。ネイルアート（ご職柄、週末限定）が気になるが、握手を求める舞恵に清は気安く応じる。イイ感じな二人である。

ルフロンは、やはりフロントにいと落ち着くようで、カウンターで文花と打合せに入る。が、それも束の間、櫻の席に移動すると、今度は会計ソフトを動かしながら、仕訳の極意を伝授し始めた。

「やっぱ、最初にきちっと事業に見合った費目を立てるに限りますわね」

「法人化するとなると、監査もちゃんとやらないといけないしね」

「NPO法人の会計ってのは多少緩やかなんでしょうけど、逆を言えば、これがきちっとできることがその団体の信用につながるんだって、ハクンも言っとりました。ま、とにかく次年度からスね」

「今日で理事は固まってきたけど、監事よねえ。その辺の事情がわかる人だとベターなんだろうけど」

「今日は決まらなかったんで？」

「一気に選考しようとも思ってたけど、監事はやっぱ別格かなあってことになって」

「そう、だったら．．．」

じらすように言葉をためる舞恵。文花はハラハラドキドキ。

「実は当行にそういうサポートできる人材バンクがござんして」

「はぁ、さすがはバンクね」



「でも、今年は退職者が多くて。そのバンク、バンクしやしないかって、人材の皆さんは気が気じゃないみたいで。ホホ」

そういうことならぜひご協力いただきたいものである。交通費程度の謝金で都度請け負ってもらえるらしい。銀行にもCSRが波及していることを示す話である。

いつもの円卓では、PCに向かうおじさんと、それを囲むジュニア世代三人。Comeonブログの定期更新日ではないのだが、千歳、櫻、八広が揃い踏みしている以上、今この機会を逃す手はない。あいにく画像はないのだが、伝えたいことは山とある。文章でいかに画を描いて、臨場感を持たせるか、これが掃部流の奥義。三人にとっては、視覚的・立体的な詞世界のあり方を探る上で大いに参考になる。おじさんブロガーの方は、打ち込んでいる記事に対して、その場ですぐに若手の反応が得られるというのが頗る励みになっている。ブログの特性の一つに双方向性がある。が、それはネット上に限らない。同じ場所に居ながらも双方向。距離は近い程いい。

ルフロンはカウンターを離れ、八クンを呼びに来る。

「そろそろ行くかい？」

「いつの間にか外、暗くなっちゃったねえ」

「あ、お二人さん、初姉のどこ？」

櫻はクリアファイルに入れたカラーコピーを持って来て、舞恵に手渡す。

「あーら、可愛い地図ネ」

「石島&千住の四姉妹で探訪調査した成果なんだ。シンプル系でも良かったんだけどね、白地図そのままじゃ無粋だから、できるだけデコ入れて、シール貼って、小梅嬢に描き足してもらったの」

「達者なイラストねえ。スマイルマークもステキ」

クルクル髪をいじりながら、そのスマイルを真似てみる舞恵。千歳と八広は、離れたところから、笑顔の女性二人を見入っている。当然のことながら、男二人もスマイル中。以心伝心ならぬ、以笑伝笑の図である。

「今日は特にお話お聞きしなかったけど、その笑顔なら大丈夫そうね。お仕事、慣れましたか？」

「舞恵は前に居て何ぼ、だからなあ。対面業務じゃないと面白くないかも。でもね、融資の企画業務に回ったからには、それを活かさない手はないって思うようになったさ。そんでもって彼とか文花さんと話してるうちに、これだーって、ネ。いいこと思いついたところ」

八広と舞恵は、土曜日のお約束、アフターデザートタイムに合わせて、カフェめし店に向かう。そろそろ十七時である。

「んじゃ、また。カモンのおじさんも元気でネ」

「あいよ、フロン嬢もな」

「だからセンセ、ルを付けないと．．．」

この際、定冠詞が付こうが付くまいが関係ない。オゾン層を破壊されちゃマズイが、突破力があることには違いない。そんなフロンさんに手を振るカモンおじさん。新たなコン

ビ誕生の予感？

昨日午後のお絵描き探索はいい気分転換になったようで、今日一日ご機嫌だった初音嬢。お約束の客が多少遅れて来ても悠揚としている。

「あ、いらっしやいませ」

すでに私服に着替えてあって、今は一般客と同じなのだが、しっかり接客。奥の予約席から声をかける。テーブル上には店に似つかわしくない容器がデンと置かれ、プレートや食器がそれを囲む。

「あん？ 今日釜飯かいな？ 初姉の気まぐれシリーズてか」

「当店はカフェめしはお出ししますが、あいにく釜飯はございませんで」

「だってこれ、あの峠の．．．」

八広も不思議がっている。そう、この容器、峠の某である。六月から小梅、小梅から初音と渡ってきて、満を持してこの日、リユースデビューとなった。

「パンケーキ容れるのに丁度よかったんスよ」

フタをとると、ほんのりと湯気が上がる。さすが保温性はバッチリ。使える釜である。

「これって、お客様に？」

「まさか、お二人専用ですよ」

「でも、これで出したら結構ウケるんじゃない？」

「開けてビックリ、パン！ケーキ、とか」

舞恵が八広を小突いてる際に、初音は三人分のサービスドリンクを取りに行く。ドリンクが並んだらそれからは、体当たり英会話教室の始まり始まり。

「あ、その前に。櫻姉からこれ預かってたんだ。Please, make them sure.」

「How wonderful! ちゃんと二枚ある」

「じゃ、初姉、その地図の趣旨と、おすすめスポットなんかを英語でどうぞ」

「ひょえー、いきなりスか？」

「コレ、ハチ！ 何、他人事みたいに笑ってんの。アンタも生徒でしょ」

「对不起、じゃねえや、Excuse me.」

「たく。あ、そっか、せっかくだから生徒さんどうし、Q & A式でやってみっか」

舞恵は、それなりにお嬢さん育ち。ただ、ダンスミュージック好きが高じて、米国のノリのイイ街にショートステイしてた時期があったため、些かブロークンになってしまった。英会話をマスターしたのは良かったが、訛り英語のおまけ付き。それでも、基本はしっかり弁えている。

「要はさ、相手と話がしたい、あれを聞きたい、これを伝えたい、ってのがあればいいんよ。passion ありき、てことかな。話す意欲がなきゃ、どんな言語も話せませんワ」

初音は昨日のことを思い出しながら、ぎこちない英語で話し始める。八広は時々ヘンテコなフレーズで相槌を入れながら question を担当。そんなんでも、やりとりしてれば変わるもの。徐々にペースが上がってきた。

「ま、そもそもそのグリーンマップとやらは、米国発祥な訳だから、オリジナルの資料見りゃ、いろいろ書いてあんだろけどさ。自分で実際にやってみてどうだった、てのは自分の言葉じゃないと語れないっしょ？ そこでこう、情熱っていうかさ、話したい！」

て気になりやしめたもんヨ」

「蒼葉さんにも、即席デッサン教わったんすよ。それがまた良くて。小梅のイラストもそのせいか、大人っぽくなった感じ」

「へえ、そうなんだあ。その気持ち、訳せる？」

「Sister Aoba taught us how to draw still-objects instantly, I was very moved, and...」

「hum...あとは、表情よね。顔の筋肉使って多少大げさにやると、言葉が勝手に付いてくる、かな？」

「ルフロンさん、前は愛想良くなかったじゃないすか。そう言われても説得力が...」

「顔の筋肉使い過ぎて疲労気味だったから、あんまり表情作らないようにしてただけ」

「You re so kidding.」

「Ha ha, now you know!」

八広は何のこっちゃ、という顔をしているが、彼氏も本当のところはよくわからない。地がそうなんだ、という程度である。ま、ここは無愛想だった理由を探るよりも、愛想が良くなった理由を考えた方が早そう。一つ確実に言えるのは、干潟つながりで知り合った皆のおかげ、ということ。そんな舞恵が愛想良く question する。

「Why did you mark smile one on this area?」

「ああ、それは... It s hard to explain for me. へへ」

それは千住姉妹宅付近である。櫻がニコニコしながら貼ったのだが、単に自宅だからという訳ではなく、誰彼さんといいことがあった何日か後だった、というのがスマイルの理由なもんだから、どうしようもない。十代の初音に説明を求めるにはムリがある。まして、英語でなんて。

他にも、鎮守の森、とある民家の砂利道、ゴミ一つない路地裏、子どもが遊べる空き地、夕日がよく見える歩道橋、といった辺にアイコンシールともどもスマイルは付されてあった。

「フーン、面白いわね」

「ウチはこのエリアからは外れてるんですけど、今回のとこ遠くないから時々また様子見ようって、思いました」

「自分ちの近所も、でしょ」

「小梅は早速ウロウロし出したみたい。でも、だんだん寒くなってきたから、今月までスかね」

三人は引き続き、アイコンの絵を見ながらそれを英語に置き換えたりしていたが、

「この涙目は何？ Joy or sorrow?」

「もともとは[悲しい場所]ってことらしいんすけど。あ、ここ風が吹き抜けるんですよ。で、櫻さんたら『目にゴミが入っちゃった、うう』とか言いながら、それで」

「いかにも櫻姉らしい発想ね。本人的にはそりゃ sorrow だわ」

「あんまり貼りたくないって、貼るならうれし涙の方がいいって、そんなことも言ってたような」

「ま、要するに、いろいろな感情表現ができるマップでもある訳だ」

「あら、八クン、黙って聞いてたと思ったら、いいこと言うじゃん。レッスンのには、そう、アイコン見ながらそれに合わせた表情作って声に出す、てのも良さそうネ」

「I agree, teacher.」

「そういう時はね、I'll drink to that.て言い方も有効よ」

「はぁ、ドリンク？」 八広はグラスに目を向ける。

「あ、いけね、お代わりお持ちしますね」 初音はそのグラスを手に立ち上がる。

時刻は十八時。センターの長い一日も終わろうとしていた。来週の土曜日は、もっと長い一日が待っている。

(十二月の巻へ続く)

© monologger